

---

# 臆病者も恋をする

紫猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

臆病者も恋をする

### 【Nコード】

N8857U

### 【作者名】

紫猫

### 【あらすじ】

ナニワのお嬢様が、普通のサラリーマンに恋をした。  
臆病なのはどっち？

「大切なヒト」のスピノフです。  
読まなくても大丈夫なんですが、ざざつと読んで頂けると、さらに楽しんで頂けると思います。

ブーケは誰の手に？（前書き）

はじめまして & お久しぶりでございます。

「大切なヒト」の最後の場面から始まります。

ブーケは誰の手に？

結婚式を終えたばかりの、幸せいっぱいのカップルが、式場となったレストランの両開きの扉から現れた。

おーーと歓声が一斉にあがる。

（はあ。キレイだなあ。ウエディングドレス姿の曜子ちゃん。）

透き通るような白い肌、長いまつげ。

つやつやの明るい茶色の髪は今日はすっきりとアップスタイルにして、ほっそりと長い首筋を強調している。

まるで、昔のヨーロッパ映画に出てくるお姫様のようだ。

新郎新婦の一年先輩である、山田良太は、ぼーっと口を半開きにしたまま、夢見心地で美しすぎる花嫁に見とれていた。

生まれて初めて買ったスーツを着るのが、憧れの君の結婚式だなんて・・・笑えないな。

いかつい顔と体格には似合わない繊細なハートの奥がキュンと痛みを覚え、思わず奥歯をかみ締めた。

レストランのエントランス扉からは五段ほどの緩やかな階段があり、

その下はレンガ敷きのちょっとした広場になっている。

式の出席者達は、そこで談笑しながら新婚カップルを待ち構えていたのだ。

階段の上から、につこり笑った曜子がくるつと背を向けたと思うと、ぽーんとオレンジ色のものが綺麗な放物線を描いて飛んできたので、良太はとっさにぱつと手を伸ばしてナイスキャッチした。

その瞬間、お祭り騒ぎだった場の雰囲気、しーーーーんと静まり返った。

誰？

えっ？

なんで？

華やかに着飾った女性達が、皆一斉に良太を羨ましそうに見つめる。

（んん？？ なにやら女性陣からの熱い視線がっ。 ま、まさか、まさかのモテ期到来か？）

そうか、やっと時代が俺に追いついたか……。

良太はとまどいながらも、両手でオレンジ色のブーケを抱えたまま、その場に立ち尽くしていた。

階段の上で、花婿の裕史と並んで立っている曜子を見上げると、ビツクリしているのか、ただでさえ大きな目をさらに大きくして、両手を口に当ててこちらを見ている。

そのとき、

ドゴッ！……！！

バッキーンッ！……！！

うう……。この衝撃と痛みは俺の人生の中で、何度も味わっているものだ。

妹の真琴が、手加減無しの腹蹴りの後、間髪入れずに手刀で兄の後頭部を直撃したのだ。

手にあつたブーケをさつと奪い取られ、良太は薄れ行く意識の中で、最強の妹が吐き捨てたセリフを聞いた。

「おめ、いつまでもぼけーっと人の嫁に見とれてんじゃねーよ。てか、テメエがブーケキャッチしてどーすんだよつ。」今日はめでたい日だから、命だけは許してやる。

真琴は地面に伸びている兄の耳に低い声でそう囁いて去っていった。

「はい、これは福島先輩に。」

思わずうつとりするような男前スマイルとともに、真琴は兄から取り上げたブーケを、福島女史に差し出した。

「へっ？ワタシ？そそそそ、そんなんつ。いゝよ。いゝよ。ワタシなんか……。」「庭の目立たないところで、ひっそりこの騒ぎを見ていた（というよりも、かなり楽しんでいた）福島女史は、慌てて断った。

ワタシなんか、色恋偏差値はゼロに限りなく等しいんだもん。せっかくのブーケも、無駄になっちゃうよ。

「なーーに言ってんすかつ。福島先輩、東京でがっしがし磨かれて、さらにいい女になって、悪さしまくって下さいよ。ほら、いいから、早く受け取って下さいよ。」

遠慮しまくっている相手の手をとって、無理矢理ブーケを握らせる。

「真琴君……。ほんとにいいのかな。あ、ありがとう……。。」  
「そうだね。今日の寺島さん、もとい、高宮曜子さんの幸せにあやか  
つちやおつかな。そう言っつて、幸せ色のブーケにそつと顔をうずめ  
た。」

それから3年の月日が経ち……。。



ブーケは誰の手に？（後書き）

完結まで頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ラブコメ目指していますが、どうなることやら……。

木下の報告(前書き)

## 木下の報告

「やまだりよった山田良太 22歳 今年3月に大学を卒業し、4月から地元の設定会社勤務 施工管理部に配属される。空手有段者。公務員の父親と、専業主婦の母親、それに 大学生の妹の4人家族。就職を機に実家から独立し、現在は1人暮らし。現在女性との交際は確認されず、彼女いない暦22年を誇ると思われる。」

生年月日、血液型、詳しい勤務先、現住所等は全てこのレポートに記載しております。

（なーにが”誇る”や。真面目な報告書に”彼女いない暦”とか書かれてるわけ無いやん。）

詩織は眉をひそめた。

「最後にしれっと辛口批評付け加える癖、やめたらば？・・・悪いけど、全然おもんないし。」

辛らつな言葉も、詩織のはんなりおっとりした話し方のおかげで、言われた方は不思議ときつく感じない。

向かいの席に座る木下に、ちくちく言い返ししながら、詩織はテーブルの上のアイステイーをストローでかき回した。

（そうか、あのひと、今フリーなんや。）思わず頬がゆるむ。

「山田さんの事、調べてくれて、おおきにありがとう。助かりました。でも、もうこれからは、うち1人で何とかするから。」

口元をきゅっと引き締めて、木下をじっと見つめる。暗に”いらんことしなや”という意味を込めて。

「詩織様、お言葉ですが、あの山田という男はどうにも相応しいお相手とは思えません。失礼を承知であえて申し上げますが、何のとりえも無い、ただガタイが良いだけの、安月給のサラリーマン以外の何者でもございません。特に社内においても、将来有望という感じでも無いようですし。……考え直して頂くよう、この私からもお願いいたします。」

口調はかなりへりくだったものだが、実際はあからさまな侮辱と反対圧力以外の何物でもなかった。

詩織の瞳が、挑戦的な光を帯びる。

「なんやの？その言い方。……失礼通り越してる。」

木下は間違ってるわ。彼がわたしに相応しいかじゃなくて、わたしが彼に相応しいかが問題やねんで。

「そんなことより、うちみたいな何のとりえも無い女の子……山田さん、好きになってくれはるやるか。木下どう思う？」

恥ずかしそうに頬を染めて、俯いてゆっくりとアイステイーを口に含む。

長年詩織の父親の個人秘書を勤めている木下は、子供の頃から詩織のよき相談相手でもあった。だが、恋の相談をするのはこれが始めて。

「詩織様……」ですから、詩織様にはあのゴリラもどきは相応しくないです。

「ちよっ！ゴリラで……。はあく。もうええわ。もう木下には何も言わへん。」

17年間生きてきて初めて人を好きになった。

これが恋ってもんやねんな。

頭の中で突然どかんと音がして、周りの世界が急にピンク色に染まっただんやもん。

## 木下のため息

詩織は、隣の椅子においてあった学校規定のカバンを取り上げて、丁寧に木下から渡されたレポートをしまいこんだ。

駅前ロータリーに面した喫茶店の窓から空を見上げると、少し雲が出始めている。

(今日は傘持ってきてなかったな・・・)

「そろそろトキコ姉ちゃんが心配するから帰ります。ご馳走様でした。」そう言って席を立つ。

「車でお送りしますから。」木下もすぐに荷物を纏め、テーブルの上の伝票を掴んだ。

「ええねん。今からトキコ姉ちゃんに頼まれたもん買って帰るだけやし。そしたら、お父さんによるしく〜。」幼いときから変わらないうい、いたずらっぽい笑顔を見せて、木下に背を向けた。

「は〜。」意気揚々と喫茶店を後にする詩織を見送りながら、木下はそつとため息をついた。

詩織は大阪に本社がある老舗薬品メーカーの社長令嬢である。

詩織の父親である倉田社長の秘書になった時、木下はまだ20代半ば、詩織は7歳だった。

あれから10年。

高校二年の終わりごろ、突然父親が決めてきた意に沿わない相手との婚約話を嫌がり、詩織は半ば家出同然に大阪を離れ、倉田一族のハミダシ者である叔母のトキコの元へと身を寄せた。

幼稚園から通っていたエスカレーター式の大阪の有名私立お嬢様学校から、トキコの住む街にある、これまた超お嬢様学校に、セレブ間のコネを最大限に活用して、無理を通して転校するほど、彼女の意思は固かった。

結局、一人娘の頑固さに負け、婚約話はすったもんだの挙句、破棄されたが、その後も詩織が大阪に戻ることは無かった。

好きな男が出来たのだ。

それも、あんな。

残念な感じの。

どう見ても、どこから見ても、どの角度から見ても、人間というよりむしろ、ちょっと賢そうなゴリラみたいじゃないか。

メールで送られてきた報告書に添付された写真を見る限り、妹のほうがよく男前のようなのである。こっちはほんにロックオンしたなら理解は出来るが。

前々から、詩織の美的感覚はおかしいのではと感じてはいたが・

これほどまでとは。

木下は頭を抱えた。

小学生の頃、ペットショップでも若干もてあまし気味の、とびきり不細工なフレンチブルドックをいたく気に入り、それはそれは可愛がっていた。中学生のとき、その犬が病気で死んだときは、すっかり打ちひしがれ、声が噎れ、目が腫れ上がるほど泣いて、それ以来、詩織は二度とペットを飼っていない。

破棄になった婚約話のお相手は、すらつとして、モデルのような、今時の女の子が喜びそうな文句なしの美形だったのに、詩織は1ミリたりとも心を動かされたようには見えなかった。

娘がもう家に戻る気が無いという事実を、しぶしぶながらも、とうとう受け入れた倉田社長に頼まれて、木下は定期的にこの街に出向いて、詩織の様子を確認している。

倉田社長の年の離れた妹であるトキコは、木下の目から見てもエキセントリック過ぎて、大事な倉田家の一人娘の保護者として相応しいとは言えないのだ。

さてどうしたものか。先日、詩織に好きな人が出来たと打ち明けられ、すぐに山田良太の事を調べさせた。そして、特記すべき点も無い、どちらかというとさえない内容の報告書を読んでも詩織の心は揺らぐことは無かった。

(なんだろう。この心の中が空っぽになったような寂しさは。)



木下は自嘲気味に笑った。

本人は、何の魅力もないと思っているようだが、詩織は綺麗な女の子だ。

人目を引くような派手な美しさではなく、内側からにじみ出る清潔で上品な美しさではあるが。

素直で天真爛漫で、コロコロと表情がめまぐるしく変わるところも魅力的だ。

生まれつき心臓の病気を抱えているが、両親や友達の前では、心配かけないように、常に明るく元気いっぱい振舞っている。

世の中の綺麗な面しか映したことのないような、切れ長の澄んだ瞳と、生意気を言っているときでさえも、思わず食べたくなるような、さくらんぼ色の唇、つんととがった顎。

背は高いほうではないが、いつも背をぴんと伸ばして、姿勢が良いので、そんなに小さくは見えない。

手入れの行き届いた、真っ直ぐでつやのある黒い髪は、肩より少し長いくらいで、詩織はそれをいつもポニーテールにしている。

そんな詩織様も、もう17歳。

好きな男のひとりやふたり、出来たって当然のこと。

むしろ遅すぎるくらいだ。

さてと。今からすぐに新幹線に乗れば、9時すぎには会社に戻れるだろう。

イライラしながら木下の報告を待つ社長の顔が目には浮かぶ。

（そろそろ俺も真面目に付き合う相手を見つけようかな。今まで結婚なんて考えたことなかったけど。）

そんなことを考えながら、木下も足早に店を後にした。

木下のため息（後書き）

結構ゆったり話を進めさせてもらっています。

今回はこんな感じです。

## 2人の出会い 1

木下と別れた後、書店に寄って、目当ての雑誌を購入すると、詩織はお世話になっている叔母の家に帰った。

突然強引に婚約話を進めようとした父親と大喧嘩の末、家を飛び出してから、父の一番下の妹であるトキコに泣きついて、一緒に住ませて貰っている。

トキコは、長年のロマンス本好きが高じて、自らも恋愛小説を書き始め、去年発表した処女作が好評でなにやら結構有名な賞まで取ったらしい。次の作品は大手出版社から声が掛かっている。

「トキコ姉ちゃん、ただいま帰りました。」光沢のある塗装が施された白い木造の玄関扉は、美しいステンドグラスと真鍮で飾られている。

駅からバスで15分。山の手にある、高級住宅地の一角に、トキコと夫の家がある。

表札も白いパネルと真鍮でできていて、細川と書かれている。

歯科医をしているトキコの夫は、インパクトのあるキャラクターのトキコとは正反対の真面目で温厚な人柄だ。

夫婦には子供が無く、詩織は2人から実の娘のように可愛がられている。

手を洗って着替えを済ませ、キッチンに入ると、トキコがタバコを吸いながらぼんやりとキッチンの窓から庭を眺めていた。

執筆に行き詰ると、普段は吸わないタバコが欲しくなるようだ。

もう5月も終わりにさしかかり、庭のあちこちに植えられたアジサイも濃いピンク、淡いピンク、水色、淡い藤色と少しずつ色づき始めている。

「おかえりー、今日は遅かったね。冷蔵庫に鞠子ちゃん特製のレモンパイが入ってるよ」トキコが振り向いて笑顔で迎えてくれた。

料理教室で知り合ったというトキコの友人は、ふわっとした雰囲気  
の可愛らしい女性だ。

「今日は木下が大阪から来てたから、駅前の喫茶店で会っててん。  
あ、雑誌買って来た。」本屋の袋を渡す。

夕食作りは詩織が是非にと言って申し出た。

料理が好きだし、少しでも2人にお返ししたかったから。

大阪の実家にいた頃は、昔からいる料理人が、毎日美味しいご飯を作ってくれた。詩織は小さな頃から料理人に甘えて、台所に入り浸っていたので、いつしか見よう見まねで料理が出来るようになっていたのだ。

みんな元気かな……。留守がちだった両親よりも、小さい頃から可愛がってくれた使用人達のほうが懐かしいのだ。

父も母も、仕事で忙しく、娘と過ごす時間はあまりなかった。特に、日本画家の母親は、創作活動の事で頭がいっぱいで、自分のアトリエから出ることは殆ど無かった。

父親は昔から、年の離れた和風美人の代表のような母に滅法甘い。

そして、妻に良く似た一人娘である、詩織の事が可愛くて仕方が無いようだ。

詩織も、母親よりも、たまに会うと煩いほどあれこれ世話を焼いてくれる父親のほうが好きだった。

でも、それも、いきなり婚約しろと命令されるまでの話。

突然婚約者だと連れてこられた男を見て、詩織は首を横に振るしかなかった。

詩織の萌えポイントをことごとく外していた元婚約者の男。

いけ好かないにやけ顔。どこの御曹司だと言っていたけど。

名前……。なんやったっけ？もう覚えて無いわ。

いつになく意地を通して、大好きな故郷を離れるようなことまでしてしまった。

でも、後悔はしていない。

（でも、そのおかげで山田さんに会えたし。）

ジャガイモの皮を丁寧にもきながら、いけ好かない元婚約者の顔を  
脳裏から消し去る代わりに、山田との出会いに思いをさせた。

## 2人の出会い 1（後書き）

詩織ちゃんは、恋愛番長の細川さん（注：前作「大切なヒト」）にてくる曜子ちゃんの母親である、鞠子の友人）の姪っ子なんです。



## 2人の出会い 2

彼に初めて出会ったのは、この街に引っ越して、1ヶ月ほど経ってから。

その日はすっかり寝坊してしまい、通学電車に乗り遅れそうになった。

そして、いつもなら決してしないことをしてしまった。

長い駅の階段を、一気に駆け上ったのだ。

普段使っているエレベーターを待ってたら、いつもの電車に乗り遅れてしまう。

転校早々遅刻なんてしたくない。つい意地になってしまった。

大阪では、木下が毎日車で学校へ送迎してくれていたが、この街に引っ越してからは、卒業までの一年間、電車通学すると決めたのだ。

なんとか間に合って、駆け込み乗車した時には、息が上がって、目の前がちりちりとゆがんで見えた。

冷たい汗が背中を流れる。

( ) どうしよう。満員電車で倒れるなんてカッコ悪いこと……。( )

重い体を引きずり、満員の乗客をかき分けるようにして、奥のほうに進む。座席は全部埋まっているが、つり革につかまって、息苦しさがおさまるまで何とかしのごうと思ったのだ。

必死の思いでつり革につかまり、目を閉じた。

ガタンガタン電車の振動が、破裂しそうな心臓の鼓動と重なって、耳鳴りがしてくる。

（次の駅で降りて、ベンチに座って休もう。それまでなんとか耐えないと……）そう自分に言い聞かせていた時、頭上から声が降ってきた。

「大丈夫か？」

見上げると、心配そうな若い男の人の顔。サラリーマンなのだろう、スーツにネクタイ。白いワイシャツ姿。

「は……い……。急に動悸が激しくなっちゃって、苦しくて。」

「すみません、この人、具合が悪いようなので、席譲っていただけませんか？」

そのサラリーマン風の若い男は、詩織の細い腕をすくうように支えると、目の前の座席に座っている、50代くらいの男性に声をかけた。声をかけられた人もすぐに席を立って、詩織に座るように促した。

「お嬢さん、どうぞ。」

「すみません。ありがとうございます。」詩織がお礼を言う前に、隣の人物が席を譲ってくれた男性に深々と頭を下げた。

詩織も慌ててもごもごとお礼を言った。

座席に座らせてもらって、ただじつと息をすることだけに集中する。冷や汗も少しずつつ引いてきて、呼吸も穏やかになってきた。

次の駅につく頃には、何とか立ち上がって歩けるようになっていた。声をかけてくれた男の人にもどうにかお礼を言って、ふらふらしながら電車を降りる。

ホームのベンチにすがりつくように座り込むと、また目を閉じて、体力が回復するのを待った。

「どうする？ 駅員さん呼ぼうか？」

目を開けると、先ほどの男の人だ。詩織の事がほっとけなかったのだろう。一緒に電車を降りて見守っていてくれたらしい。

驚いた詩織は、力無くベンチに寄りかかっていた背筋を、すぐにぴんと真っ直ぐにして座りなおした。

「は、はい。もう大丈夫です。あの、先ほどは本当にありがとうございます。ごさいました。」もう少して満員電車の中で倒れそうだったんです。

そう言つて、ぺこりと頭を下げた。

「そんなこと……。それより、顔色がまだ少し悪いようだけど、ちゃんと朝飯喰つたのか？」眉をひそめて訊いてくる。

「いつもはしっかり食べるんですけど、今日は寝坊しちゃつて……」

詩織が恥ずかしそうに俯くと、男は黙つて詩織の隣に座つた。

肩にかけていたアウトドアブランドのリュックを膝に乗せ、ファスナーを開ける。

「はい。これ。」そう言つて手に載せてくれたのは、まだほんのり温かいオニギリだった。ラップにくるまれて、ごま塩がふられたオニギリは、詩織の小さな手のひらには大きすぎ、ずっしりと重かつた。

「へっ？」詩織がきよとんとして、オニギリを持ったまま、男をじつと見つめていると、男は少し恥ずかしそうに微笑んだ。

小さな目がさらに細くなる。

「朝ごはん。ちなみに具は鮭とおかかと梅干。」

にかつと笑った前歯が少し欠けていた。

きゅん。

どっかん。

詩織が恋に落ちた瞬間だった。

## 2人の出会い 2（後書き）

前歯がちょっと欠けてるヒーローが出てくるロマ本あるんですが、それ、どれかわかった人は、ロマ本マスターの称号をお送りいたします！

## 2人の出会い 3

呆然としている詩織を横目に、男はさつと立ち上がった。

「俺、もう会社行かないと。落ち着いたら家族に電話するかして、迎えに来てもらいなよ。」

そう言い残すと、リュックを肩に担いで歩き出した。

「あ、あのあのあの！ま、待ってくださいっ。」

「え？」男が振り向いた。

「お名前を。お名前教えていただけませんか？」

「・・・山田。山田良太。」

「山田さん、色々ありがとうございます。せつかくの朝ごはんまで・・・なんとお礼申し上げたらいいか。」

「お礼なんて。でも、まだ具合悪そうだし、ちゃんと病院で見てもらったほうがいいよ。」

そう言って、ちょうど目の前に滑り込んできた電車に飛び乗った。

扉のガラス戸ごしに、ちらっと目があった、お互い軽く会釈しあつた。

ホームに残った詩織は、手のひらにずっしりと重たいオニギリを載せたまま、山田が乗った電車を見送った。

（優しい人やわ〜。山田良太さんやて。そんでもって、めっちゃ好みのタイプやったわ。）

ごつごつした男らしい顔立ち、頼りがいのありそうな、大きな身体。

これぞニッポンの男代表で感じて。

そのくせ手作りのオニギリくれはった。優しい人。

細くてちっこい目がすごい可愛かったし。

坊主頭に近い、短い髪も。

全部ツボ。全部ツボやわ。

あ〜〜どないしよ。

あの人ええわあ。

早速、ホームにある自動販売機で、お茶を買ってきて、駅のベンチに座って、もくもくと大きなオニギリを食べ始めた。

ほんのり温かいオニギリの中には、親指ほどの大きさの鮭の切り身



と、醤油をまぶしたおかかと、種を抜いた梅干が入っていた。

（美味しかった。はあく。心までほんのりあったかい。）

優しい風が、駅のホームを吹きぬける。

なぜか目頭が熱くなって、くすんと鼻をすすった。

生まれ育った故郷を飛び出して、叔母以外知り合いが1人も居ないこの街に引っ越してきた。

自分で決めたこととはいえ、ずっと心細かったし、寂しかった。

でも、そんなときに、あんな素敵な人に出会えるなんて。

運命や。

運命やわ。そうやる？神様。

それしか考えられへんわ。

その日は、一時間遅れて登校したが、詩織の病気の事は入学前に説明を受けているので、担任は無理しないようにと言っただけであった。

授業中もただぼんやりと、窓の外を眺めながらも山田の事を考える。

連絡先、訊けなかった。そこまで根性なかった。あかんな、わたし。案外へたれやわ。

でも、あの電車に毎朝乗ってれば、また会えるよね。

今度会えたら、そのときは、勇気を出して話しかけてみよう。

そう思うと、わくわくしてきて、体中に元気がみなぎる気がした。

しかしながら、詩織の予想はあっさり外れ、通学の電車内で山田に出会うことは無かった。

それから一ヶ月あまり。

どれだけ駅で時間をつぶしても、乗り込む車両や電車の時間を前後に変えてみても、お目当ての人を見つけれなくて、詩織は途方に暮れた。

にっちもさっちも行かなくなって、仕方なく、木下に相談することにしたのだ。

過干渉気味の木下にだけは（そして父親にだけは）知られたくなかったのに。

案の定、2日後には、木下は山田良太に関する完璧な報告書を詩織に渡してくれた。

それにしても、ゴリラで。

失礼な。

木下は、すれ違ふ人が思わず振り返るくらいの男前である。

決して真剣な相手を作らず、そのかわりいつでも複数付き合っている女がいると、父親が言っていた。

詩織には、過保護なくらい優しい兄のような存在の木下は、その裏ではとんでもない女たらしなのだ。

木下に泣かされた女は数知れず。

幼い頃から、そんな木下の噂話を、使用人達の噂話や父親から漏れ聞いていた。

木下の事は、家族同然に、心の底から慕っている。

でも、それはそれ、これはこれ。女を泣かすような男は最低や。

こうして、詩織は男の外見には一切惑わされることのない、手ごわい女の子に育ってしまったのだ。

今日の夕飯は、簡単なハムサラダと、焼き魚、大根おろし、豆腐のお味噌汁、それに肉じゃがだ。もうすぐトキコのダーリンが帰って

くる。

いつも3人揃って夕飯を囲むのだ。

子供の頃から、ひとりで食事をするが多かった詩織にとっては、笑い声溢れる楽しい時間であった。

夕食後、二階の自室で、木下から渡されたレポートを前に、あれこれ考える。

勝手に一目ぼれして、いきなり恋人になってくださいなんて言っただけで、山田さんだって、好みってもんがあるやろっし。

でもせめて、もう一度会って、ちゃんとお礼が言いたい。

とりあえずは、それが目標。

明日、学校が終わったら、早速山田さんの会社まで行ってみよう。

ここでうじうじ悩んだって仕方ないもん。行動あるのみや。

(どづか、この恋がうまくいきますように!!)

詩織は目を瞑って、夜空の星に向かってお祈りした。



「はあ？」忘れてた”ってどういうことだよ。週明けの定例のとき、監督に直接指示されてただろーが！」良太の先輩社員である、日置ひおきの怒鳴り声が、深夜の現場事務所に響き渡る。

ここは、良太にとって初仕事となるマンション建設の工事現場である。

月曜日の朝行われる、定例会議の際に、今週金曜日の朝一番に生コンの手配を任されていた。

いつものように元気良く返事したものの、何をどうすればよいか見当もつかず、後で先輩に訊こうと思っていたのだ。

だがその直後、現場監督に呼び出され、その日の作業内容と注意事項を申し渡されているうちに、すっかり頭から外れてしまっていた。

「す、すみません！」頭の中は、このところおなじみになってしまった、真っ白のパニック状態である。自分がしでかしたことで、また工事が遅れる事になったら……。まずいなんてもんじゃない。

「ったく、どうするんだよ。あんな賢い大学出てて、こんな簡単なことも出来ないのかよ。」

日置は、何かあるとすぐに良太の出身大学の事を揶揄する。

「……………」良太はただ黙って唇をかみ締める。工程表を持つ手が震える。

「日置、もういい。山田、明日の朝に業者に電話して、なんとか午前中に搬入してもらえるように頼んでみる。無理なら他の業者をあたるとしかない。」松永主任が間に入ってきた。

「はいっ。申し訳ありませんでしたっ！」元気すぎる返事は、今の事務所内の雰囲気には全くそぐわない。逆に周りをイラつかせてしまっている。

日置は、目の前の身体は人一倍大きいが、なんとも出来の悪い後輩を睨みつけたままだ。

「お前、手配の仕方わかってるのか？」松永は相変わらず淡々と山田に話しかける。良太にとっては怒鳴られるより、そのほうが怖い。

夜もふけて、現場事務所には、良太と日置、松永主任と現場監督だけが残っている。

「も、申し訳ありません。全くわかりません！」

生まれてこのかた、生コン手配なんてしたこと無い。そもそもここに来てからというものの、やることなすこと全てが初めての経験なのだ。

「……。わからない業務を指示されたら、その場で質問しないと。みんなは、お前はわかっているもんだって判断するんだぞ。」電卓と図面集持って来い。

「は、はい！」良太は急いで、事務所の真ん中にある大きな作業テーブルに必要なものを用意して、自分用のノートを持ってきた。

ぶつきらばうで底意地の悪い日置と違って、松永主任の説明は丁寧でわかりやすい。

「主任、ありがとうございます。早速、明日の朝業者に電話して交渉してみます。」主任のおかげで明日は自信を持って業者に電話できそうだ。良太は主任に頭を下げた。

「明日も早い。お前ももう帰れ。」

周りを見ると、いつの間にか日置と監督の姿は無かった。

戸締りを終えて、2人は可動式の塀で囲まれた現場を後にする。

良太は現場近くに住んでいるので、自転車通勤だ。

主任は車通勤なので会社が近所に駐車場を借りている。

途中まで同じ方向なので、良太は自転車を押しながら松永主任と並んで歩いていった。

「日置の事は気にするな。新人の頃は皆こんなもんだ。」

「主任……。」やる気ばかりが空回りして、逆に効率の悪いことになってる気がする。もう少し落ち着けばよいのだが、トラブルが起きると頭に血が上ってしまい、さらにミスを連発してしまう。

「俺も、入社したての頃は、監督や先輩に怒鳴られすぎて、最後のほうは感覚が麻痺してわけわからなくなったよ。」思い出し笑いをしているのか、松永主任の頬がゆるんでいる。



へこんでいる良太を励まそうとしてくれる、そんな主任の気持ち嬉しかった。

「一度した失敗は、二度としなきゃいいんだ。」

「はぁ……。」それが出来たらどれだけ良いか。この一ヶ月何度同じことしかして、怒られたか。今では仕事で誰かに話しかけられるだけで、怒鳴られると勘違いして身構えてしまっぐらいだ。

「コピー用紙の裏紙にでも、毎日大きく、その日の業務内容と気になる点を全部箇条書きにして、終わったら消していくとか、自分にりに工夫してみる。これからは、わからないことがあれば、悩む前に俺に訊け。」主任はそう言って車の鍵を開けた。

それなら出来る。ていうか、最初からそうしろよ、俺！

「はい！ありがとうございます。明日からまたがんばりますので、よろしく願います！」良太はもう一度頭を下げた。

そして、主任の車が見えなくなるまで、ずっと見送った。

## 良太の日常 2

現場から自転車で10分程の、古い住宅街の中に、良太の2LDKの城がある。

古い賃貸マンションだが、身体の大きい良太にとっては広さ優先で探した物件だ。

楽しいはずの一人暮らしも、仕事が大変すぎて、帰って寝るだけの味気ないものになってしまっている。

真つ暗な部屋に戻り、洗濯機に作業服を突っ込んでまわしている間に、シャワーを浴びる。晩御飯は7時になったら希望者には弁当を頼むので今日はもう済ませた。どちらにしろ、疲れすぎていて食欲は無い。

冷蔵庫から缶ビールを出して、テレビのニュース番組を見ながら洗濯が終わるのを待つ。洗濯物を干して、歯を磨く。その頃にはもう、半分眠った状態である。

ベットに倒れこんだら、次の朝目覚まし時計が鳴るまで泥のように眠り込むだけ。

でも、今日は何だかイライラして落ち着かない。

入社後、一ヶ月の新入社員研修期間は、まだ半分学生気分で、毎日新鮮で楽しかった。

その頃は、慣れないながらも簡単な自炊もしていた。

この不況の中、希望の業種で、しかも地元の安定企業に就職できて、本当にラッキーだと思ったし、この会社に骨をうずめようと本気で思った。

（俺、本当にこの仕事向いてるんだろうか……。）一人ぼっちの暗い部屋の中で、ベットに横たわると、弱気な自分が顔を出す。

普通に働いて、毎月給料を貰う。それがこんなに大変なことだとは社会の厳しさは、良太の想像をはるかに超えていた。

先輩社員を見ていると、ひとつの事を問題なくこなしながら、次の次ぐくらいまでの段取りを組んでいるように見える。自分の仕事をしながらも、さりげなく同僚達の仕事内容も把握していて、常にお互いが効率を上げるために協力し合い、支えあっている。

逆にそうでないと仕事が回らないのだ。

でも、新入社員の良太にとっては、ひとつの事をミスなくこなすだけで大仕事なのである。

現場に回されて一ヶ月近く、殆ど休み無く、早朝から夜遅くまで働いている。

体力のほうは自信があるが、こつ毎日怒鳴られっぱなしでは、精神的に厳しい。

(でも、言い訳は出来ない。自分が悪いんだから。)

いつの日か、松永主任のように仕事が出来る男になりたい。どんなに現場がトラブっても、主任が間に入ると不思議といつの間にか解決している。あんなふう現場で頼れる男になりたい。

(明日はもう金曜日・・・)

毎週金曜日の夕方には、本社に出向き、その週の日報と、経費の精算書類を提出することになっている。

(そういえば、あの子、大丈夫だったのかな・・・)

通勤電車に乗るたびに、気がつく目と目で探している存在。

地元の有名私立の女子高の制服を着ていた。

清楚な雰囲気でもいかにもお育ちの良さそうな女の子。

新入社員研修の最終日、朝の通勤ラッシュの中、青い顔して電車に乗り込んできて、あまりにも具合が悪そうだったので、乗客に座席を譲ってもらった。

その子は次の駅でふらふらしながら降りていったが、ぱったり倒れるんじゃないかと心配になって一緒に電車を降りてしまった。

ベンチに座っているとところに声をかけたら、驚いたのか、ぱっと背中を真っ直ぐにして、目をまん丸にして良太を見た。

その顔が、良太の子供の頃の愛読書、ガス・ウィリアムスの「しろいうさぎとくるいうさぎ」という絵本に出ている、しろいうさぎにそっくりだった。

世の中の美しいものしか映したことの無いような、真っ直ぐな澄んだ瞳。

駅のベンチに行儀良く座る姿は、体調が悪いにもかかわらず、凜としていた。

ほっとけなくて、世話を焼きたくなって、最後には何故か自分で作った不恰好なオニギリまで渡していた。

彼女は素直に受け取ってくれて、心からお礼を言ってくれて、良太も嬉しかった。

多分もう会うこともないだろうけど、元気でいてほしいと思う。

まあ、俺には縁のない世界に住んでるんだろうけど、なんと行っても無邪気な笑顔が可愛かったな……。

(真琴アイツには絶対内緒だけど、あんな妹が居たら最高だろうな)

その夜、良太は久しぶりに幸せな夢を見た。



## 再会 1

(えらい立派なビルやわ……。)

金曜日の放課後、詩織は山田の勤める会社の前に来ている。

ここで待ってれば、退社途中の山田をつかまえられるかとも思ったのだ。

淡いピンクの御影石の敷地には、つや消しの黒っぽいタイル張りの14階建ての重厚なビルがそびえている。

他にも何社かテナントが入っているようだが、山田の勤め先の本社ビルだ。

このあたりは、金融機関や公的機関などが立ち並び、整然とした雰囲気のおフィス街である。

可愛い制服姿の、女子高生がぼつんと独り、歩道にたたずんでいると、どうにも場違いな感じが否めない。

忙しそうに行きかうスーツ姿の大人達のいぶかしげな視線をざくざく感じる。

ビルの入り口に近づいて、強化ガラス張りのエントランス扉の奥をのぞくと、グレーの制服姿の受付嬢が座っているのが見えた。

エントランス扉の外側には、怖い顔のガードマンがモアイ像のように直立不動の体勢で立っている。

その目は、先ほどから、明らかに挙動不審の詩織を、無表情のままじっと追っている。

(どないしよう・・・)(こじでずっと待ってたら、山田さん出てきはるやろか。

何時までお仕事しはるんやろ。

当初は会えるまで何時間でも待つつもりでいたが、さっきからガードマンにうさんくさげに睨まれて、膨らんでいた勇気が少しずつしぼんでいく。

(また、出直してこようかな・・・)(へたれな自分が今日はもう帰れ帰れと促す。

(アカンやんか！山田さんに会いたいんやろ?) 諦めの悪い自分が粘る。

どうしてよいかわからなくなって、詩織はカバンを抱きしめたまま、じいっとガラスのエントランス扉を見つめていた。

「このビルに御用ですか？」

「ふえ？」詩織が驚いて振り向くと、グレーの制服を着た綺麗な女性立っていた。

首から提げているIDカードを見ると、山田と同じ会社である。



「い、いいえっ。あ！いいえじゃなくて、はいです！」詩織は慌てて返事をした。

目の前の人はくすつと笑って、「うちの会社に？」と聞いてくれた。

詩織が元気良くなずくと、「どうぞ。」と言いながら、ガードマンにIDカードを見せて、エントランス扉を開けて詩織をビルの中に入れてくれた。

軽くウエーブのかかった茶色の長い髪を紺色のバレッタでひとつにまとめている。

細いヒールのパンプスと桜色のネイル。

左手の薬指に光る細い指輪。

詩織はぼーっと優しい笑顔に見とれている。

吹き抜けのエントランスホールを抜けて、エレベータの前で2人は立ち止まった。

「で、どこの部署かしら。」お父様に会いに来られたんでしょ？

「っは！いいえっ。すす、すみません！」あの、わたし、違うんです。。。

われに返った詩織は、激しく慌て始めた。

突然山田さんの職場に現れるなんて、そんな大胆なこと無理！っていうか、超迷惑やないの！

「え？お父様に会いにいらっしやっただんじゃなかったの？」

「ち、違っんです。あの、わ、わたし、実は、施工管理部の山田さんに……。でも、彼は私の事は知らなくて。」最後のほうは、蚊の鳴くような消え入りそうな声。

「え？山田さん？」あ、わたし、知ってるかも。施工部の新人君でしょ？

「山田さんをご存知なんですか？」

「……。ええ。で、あなた、彼女かなにか？」

「ままま、まさかつ！そんな、ち、違いますっ！」慌てて頭がちぎれるほど左右に振って、一瞬クラッとめまいがした。

「クスッ……。出先から戻ってきたところで、ちょうどお茶にしようかなって思ったの。」綺麗なお姉さんは、そう言っつて、エレベータホールの奥にある、休憩コーナーに詩織を連れて行った。

そこは、パーテーションが置かれていて、人目につきにくくなっている。

「さてと……。わたしは経理部の吉井です。」休憩コーナーの自動販売機で買った紙コップのアイスティーを自分と詩織の前に置く。

「倉田詩織と申しますっ。お仕事中に申し訳ありません。それに飲み物までご馳走になってしまって……。」あまりのずうずうしさに、我ながら身が縮まる思いだ。

「いーのいーの。今日の仕事はあらかた片付いてて、夕方まで書類待ちの状態だから。」お昼過ぎて暇な時って眠気との戦いなものよ。だからさつき、散歩がてら銀行に記帳に行ってたの。そう言って、アイステイーを一口飲んだ。

「……で、山田さんとは……?」吉井さんが興味津々の顔をして、詩織を見つめている。

詩織は、山田との出会いと、ちゃんとお礼がしたくて、自分の知り合いに頼んで調べてもらって、やっとここまで来たということを手短かに説明した。

山田に一目ぼれした事は、照れくさくて言えなかった。

「マア、そういう事情なのね。じゃ、倉田さん、ラッキーかも！今日はちょうど金曜日だから、彼、そろそろ入社するわよ。」普段は現場に直行直帰だから、会社には来ないんだけど。

そして、腕時計を見ながら、五時までには来るはずだから、多分あと3、40分くらいで来ると思うわよと教えてくれた。

「わわわ、そそ、そうなんですか……。」

詩織は急に落ち着かなくなる。とうとう捜し求めていた相手に再会

出来るのだ。

嬉しさと、照れくささ、そして何だかわからないけど、なじみの無い期待感が心の中で渦を巻く。

顔を真っ赤に染めて、制服のチェック柄のプリーツスカートを両手でぎゅっと握り締めた。

「私はこれから事務所に戻るけど、倉田さんどうする？ここで山田さんを待つてる？」

「へっ？い、いいんですか？」

「受付の人には、うちの社員の娘さんが、お父様との待ち合わせで来られてるって言うておくわ。」で、山田さんが出社したら、すぐにここに送り込むから。吉井さんは、少しいたずらっぽい笑顔を浮かべた。

「吉井さん……。」詩織は感激のあまり、涙ぐんでしまった。

「ありがとうございます。あの、わ、私、実は山田さんの事がっ。」

「好きなんでしょ？」

「……っは……！」詩織は思わず吉井さんの顔をぱっと見上げた。

（しっかりばれてる！）思いつきり。

「ふふつ。だって倉田さん一生懸命なんだもん。わかりやすく、凄くかわいい。」山田さんたら、真面目な顔して、ったく隅に置けないんだから！

「倉田さんを見てたら、私も昔はそんな時期があったのになって・・・。」そう呟いて、急に少し眉を寄せて苦しそうな顔になった。

「・・・吉井さん？」

「さてと、じゃ、もう行かなきゃ。トイレは、エレベーターの逆側の奥にあるから。ここでしばらく待っててね。」空になった紙コップを持って、さっと立ち上がる。

「あの、何から何まで・・・。ありがとうございます。」詩織は深々と頭を下げた。

いーのいーのと小さく手を振ると、吉井さんはコツコツとビールの音を響かせて去っていった。

## 再会 2

(えらいことやわ。もうすぐ山田さんがここにっ。)

会いたくてここまで押しかけてきたくせに、いざ会えるとなると、気後れしている自分がいる。

緊張で冷たくなってしまった手で、アイステイのカップを持ち上げ、一気に飲み干す。

冷たくてほんのり甘い液体が喉を通っていった。

吉井さんに教えてもらった、エレベーターの反対側にある女性用のトイレに行き、鏡の前で、薄いピンク色のグロスを取り出して、丁寧な手つきで唇に塗りなおす。

そして、休憩コーナーに戻り、椅子に座って彼が現れるのを待った。

また会えたときにと、用意していたネクタイのプレゼントの包みは、学生かばんの中に納まっている。

時間の経過とともに詩織の弱っちい心臓が、ばくばくと暴走し始める。

落ち着け、落ち着け。 落ち着け、ワタシ。

膝の上でぎゅっと手を握り締めて、目を閉じた。

そして、彼に会えたら、伝えようと思っていた言葉を、ゆっくりと心の中で繰り返し始めた。

\*\*\*\*\*

「すみません！これ、精算の書類です、よろしくお願いします。」  
いつものように、良太は書類入れの箱の中にクリアホルダーに纏めた書類を入れた。

（やっと来たよ！コノ幸せヤロウが！）吉井<sup>よしみお</sup>澂は、獲物を捕らえる肉食獣のような目を何も知らない新入社員に向けた。

「山田君？ちょっと良いかな。」そう言ってデスクから立ち上がり、ついて来いという風に、人差し指をくいくいつと曲げた。

「は？っはい！何でしょう……。」吉井さんが、俺に何の用だろう。先週の精算書の書き方が、間違ってたとか？領収書に不備があったとか？

經理の吉井さんは、良太より入社が7年先輩である。

美人で仕事も出来ると評判で、良太にもいつも気さくに接してくれる。

「悪いけど、ちょっと……。」そう言って、さっさとオフィスの

外の廊下に出た。

良太もいぶかしがりながらも、おとなしく後を着いて行く。

人気の無い廊下の端まで行くと、吉井さんはくるつと良太のほうに振り向いた。

良太の脳味噌はこの時点でフル回転だ。

(うーん。この展開……。ももも、もしや？俺、吉井さんのハート射止めちゃったとか？)

「山田君、いきなりごめんなさいね。ちょっとプライベートなこと訊いてもいいかな？」 澁は、昨夜塗ったばかりの桜色のネイルを念入りにチェックしながら、良太に尋ねた。

「へっ？……。プライベート？」 所謂アフターファイブの事だよいわゆるな？

(まじかよ？入社早々めくるめく魅惑のオフィスラブか？) いけない妄想がどんどん膨らんでいく。

「今、付き合ってる人いるの？」 じつと長いまつげの間から、良太を見上げる。

「え？俺すか？ い、いませんですけど……。」

(もう間違いないぞ!!! えー！。マイクテスト、マイクテストただいまマイクのテスト中。山田良太、本日をもちまして、暗黒の歴史にサヨナラします!!!)(



「ふうくん……。だとは思っただけど……。一応確認しとこうかって。」そう言っただけでこり微笑んだ。

「はい！ですから、どうぞ遠慮なく召し上がって下さいませ！！！」

良太のテンションは急上昇中だ。心の中で、何度もガッツポーズをする。

(綺麗なお姉さんは好きですか？ はい。好きです！大好きです！)

「……………は？」 吉井さんが急に真顔に戻る。

「何を食べてるって？」

「お、俺をで……………す！……………あ、あれ？」

「……………」

気まずい空気が流れる。

「あの、山田君、わたし……………」 吉井さんが瞳を揺らして困惑の表情を浮かべる。

「わわ、なんてことっ!!!俺、てつきり……。」「良太は顔を真っ赤にしたまま、コメツキバッタのように、深々と頭を下げた。

まずいぞ俺！来週から経理部に行きづらくなっただじやないか。

「い、いいのよ!!!私の訊き方が悪かったの。」「それより、もう退社出来るんでしょう？

「は、はい！今日はもう監督から直帰していいと言われてます。」「

「じゃ、一階の休憩コーナーに行ってみて。あなたに会いたいって人が待ってるわよ。」「

急いであげてね。吉井さんはそう言って、きびきびとオフィスに戻っていった。

## 再会 2 (後書き)

次、やっと会えます。引つ張りすぎて、しめんなさい。

### 再会 3

良太は、急いで自分の所属部署のフロアーに戻り、デスクの上を片付け、椅子に載せていたリュックを取り上げた。

（俺に会いに？一体誰だ？） 何度考えても、妹の真琴ぐらいしか思い当たらない。友達が、わざわざ会社に来て来ることはないだろうし。

真琴は、今大学3年生だ。ますますその男前ぶりに磨きがかかり、ライブの度に女の子のファンが押し寄せるほどの人気ベーシストだ。高校卒業後、ギターのナオがスペインに留学した後も、残ったメンバーは地元で細々とはあるが、バンド活動を続けている。良太の永遠のアイドルである、曜子ちゃんがボーカルをしているので、良太も必ずライブには出かけていくのだ。

妹とは、良太が一人暮らしを始めてからは、お互い忙しいこともあり、一度も会っていないかった。もしかして、両親のどちらかに何かあったとか？

そんな考えが頭をよぎり、不安になった。

初めての給料で食事に招待したら、感激のあまり涙ぐんでいた優しい父と母。

社会人になって、これからどんどん親孝行していこうと決めていたのに。

エレベーターで一階に下りると、すぐ左に曲がり、足早にパーティーシヨンの奥へ向かった。

「真琴・・・か？」

その声で、ぴよんと跳ねるように立ち上がった女の子を見て、良太は小さな目をぱちくりさせた。

「!!!!!!!!!!!!!!」なんて、なんでここに居るんだ？

「山田さん。」詩織の声は、緊張のあまり少しかすれていた。

あの電車の彼女が、うつすらと頬をピンク色に染めて目の前に立っている。

「え？ ええ？・・・。」これ、ドッキリかなんか？ カメラ回ってる？

「突然ごめんなさい！あのときの事、どうしてもちゃんとお礼したくて。」会社にまで押しかけちゃって・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」良太はまだ言葉が出ない。

「・・・・・・・・あの、もう、お仕事終わられたんですか？」

（やっぱり、ご迷惑だったみたいやわ。山田さん、困ってはるわ・・・。）山田の態度を見て、再会の喜びと興奮がどんどん醒めていく。

「ん？あ、ああ。今日はもう終わり。」

「そうなんですか……。」

ぎこちない空気が流れる。

山田のだんまりに、詩織の心は凍えてしまつて、今はただ俯くだけ。

沈黙が辛くて、鼻の奥がつんと痛くなつて涙がじわじわこみ上げてきた。

（今泣いたら、余計迷惑やんか！泣いたらアカン！）必死に涙をこらえる。

しかし、良太もあいかわらず足に根が生えたように固まつたまま……。

そのとき、エレベーターが一階に止まる音が響いて、華やいだ話した声とともに、そろそろと定時退社する社員達の足音が聞こえてきた。

「と、とりあえず、外、出ようか。」良太が恐る恐る声をかける。

何が何だかまだ良くわかっていないのだ。

「はい！」詩織はホツとしながら、学生カバンを取り上げた。

二人並んで、会社の外に出たとき、同期の社員が何人か興味深げな目で良太達を見ていたが、気付かないふりをして、そのまま歩き続けた。

夜というには早い時間である。空にはまだ、午後の青空が残っている。

「……あの、やっぱりご迷惑だったんじゃ。」無言で歩き続ける良太の歩幅に合わせると、詩織は少し小走りになる。

「え？いや、そんなことないけど。」ぼーっと考え事をしていた良太はぴたっと足を止め、隣の女の子をじっと見下ろした。

(オニギリあげた時よりも、ずいぶんと元気そうだな。)

「あれからずっと、心配だったんだ。ちゃんと病院行ったのかなって。」

「はい。お蔭様で……。あの時はちょっと無理しちゃったから。」

「あの、倉田詩織と申します。先日は名乗らないまま、失礼しました。」そう言ってぺこりと頭を下げた。

「詩織ちゃん……か。」

好きな人に名前を呼ばれて、詩織は嬉しくなった。

今日の山田は薄いブルーのワイシャツ姿だ。

袖の部分は肘まで折り曲げていて、紺色とカラシ色のストライプのネクタイ、濃紺のスーツの下だけはいている。

上着は着ていない。首にかかったままのIDカード。

(山田さんてば、やっぱり素敵やわ……。) 詩織はうつとりしてしまふ。

「経理の吉井さんと知り合い？」

「い、いえ！さつき会社の前に立ってたら、声をかけて下さって、山田さんの事ご存知だったので、それで。」

「そうなんだ……。なんか申し訳ない。わざわざこんなところまで来てもらって。」

「いいえ！勝手なこととしてごめんなさい。もう一度お会いしたかったです。……。どうしても。」言った後で、顔が熱くなり、慌ててうつむく。

(わ！どないしよう)。自分でも大胆発言！恥ずかしすぎ！)でも、ホントの事やねんもん。

「そそ、そうなのか。」詩織が勇気を出して見上げると、良太も耳まで真っ赤になっている。

またしても沈黙が続き、お互い耐えられないと思った。

「あの、良かったら。」同時に口を開いた。

「山田さん？」

「え？詩織ちゃん、からどつごぞ。」



「いえいえ！山田さんからどうぞ。」

「そうか……。あの、良かったらお茶でもどうかなんて。」この近くに、昔からある喫茶店があつて、確かケーキも美味しいって聞いた事あるんだ。

「はい！喜んで。」最高の笑顔で答えた後、詩織は思わずスキップしたくなつたが、隣の人の目を意識して、ぐっと我慢した。

## ため息 1

「はあく。」詩織の口から今日何度目かのため息が漏れる。

授業が終わって真っ直ぐに、トキコの家に戻り、夕飯の後、翌日の授業の準備をしながら、ひたすら山田からのメールを待っている。

山田との再会の後、一緒にお茶を飲んで、帰り際にメアドと携帯の番号を交換した。

（まあ、確かにあの時は、えらい盛り上がったわけでもなくて……）

お互いたどたどしくも簡単な自己紹介をして（殆ど詩織にとっては既に知っていることだったが）、美味しい（はずの）ケーキを頂いて。実際は、緊張のあまり、味なんてわからなかったが。

勇気を出して、メアドを教えて欲しいと切り出したのは、詩織からだった。

山田は、少し戸惑っているような様子だったが、快く教えてくれた。

（やっぱり、私みたいなおこちゃまは、対象外なのかな。）

あれから、5日経つが、山田からのメールは無い。詩織も何となく気後れしてしまって、自分から連絡取れないでいる。

（お仕事、大変やって言うてはったから……）

しつこくして、嫌われたくないし。でも、このまま二度と会えないなんて嫌だし。

もう一度ため息をつくとき、気分転換に冷たいものでも飲もうと、キッチンに降りていった。

冷蔵庫からジュースを取り出していると、トキコもふらふらとキッチンに入ってきたので、2人分のグラスを用意した。

「詩織・・・なんかあったの？最近元気ないけど。」

「え？わたし？」

「なんか、ぼーっとして、ため息ついたりして。」

「実は・・・。トキコ姉ちゃんに、相談しようかと思っててんけどな。」好きな人が出来て、やっとその人とメアド交換出来てんけど、全然連絡ないねん。

「それって、やっぱり脈は無いって事・・・やんなあ。」自分で言いながらしょんぼりする。

「うーん・・・。詩織みたいな可愛い子を何日も放置プレー出来るほど、肝の座ったDSのツンデレヤロウか、ただの草食系の根性無しなのか、実際会ってみないことには良くわからないわねえ。でも気になるなら、自分からメールしてみればいいじゃん？」なんでそこでストップするわけ？意味わかんないし。

行動あるのみよ！倉田家の女は、少々の事じゃあ、へこたれないものよ！

「そ、そうやんな……。このままフェードアウトするのだけは嫌やねん……。ありがとう、トキコ姉ちゃん。やっぱり勇気出して、私からメールしてみるわ。」

ホツとしたような笑顔を見せる姪に、トキコの頬もゆるむ。

「何でも相談して頂戴。自称恋愛番長のワタクシがついてるんだから。まあ、大船に乗ったつもりで。」

「ホンマ心強いわ。ありがとう。」さすがロマンス小説家やわ。相談して良かった！

「で、お相手は、どんな人なの？」好きな人いるなんて、聞いてなかつたし。

「う、うん。学生さんじゃなくて、社会人やねん。身体は大きくて優しく、男らしくて、ほんま素敵な人やねん。」ほんのり頬をピンクに染めて、詩織は嬉しそうに山田の事を話し出す。

「よかつたじゃないの。素敵な人に出会えて！ねえ、また今度、うちにも連れていらっしやいよ。」わたしも、会ってみたいし。上手く行くと良いね。

「うん。わかつた。」じゃ、早速メール送ってみる！ そう言って、詩織は自室に戻っていった。



## ため息 2

同じように、良太のほうも、詩織からメールが来ないことを気にしていた。

仕事のほうは、日置ではなく松永主任に直接いろいろ教わるようになってから、落ち着いて仕事に取り組めるようになり、大きな失敗もなくなっていた。

それに、今までは担当指導員だった日置に遠慮して、良太に関わろうとしなかった同僚達が、松永主任にならって、気軽に声をかけたリアドバイスをくれるようになった。

今では、現場に行つて、色々なことを学んで吸収するのが楽しくて仕方が無い。

詩織が会社に会いに来てくれた日、喫茶店でお茶を飲んだは良いが、実際のところ、向かいの席から可愛い女子高生にずっと微笑みかけられて、すっかり舞い上がってしまった、まともに話も出来なかった。

最後まで会話ははずむことはなく、帰り際に詩織からメアドと携帯番号を教えて欲しいと言われた時は、正直びっくりした。

帰宅後、渡されたプレゼントを開けると、良太でさえも名前を知っているような超高級ブランドのネクタイだった。普通的女子高生が気軽に買えるようなものではないのは確かだ。

卑屈になるつもりは無いが、やはり2人の住んでいる世界の歴然とした違いを見せ付けられたような気がした。

悶々としながら、ピクリともしない携帯を開く。

テーブルの上の缶ビールはすっかりぬるくなり、テレビのニュースの内容さえ頭に入っていない。

（無理だ。俺から詩織ちゃんにメールするなんて……）

それも、あんなお嬢様オーラ全開の女子高生に。

”会いたい”なんてメールした瞬間、パタパタと音を立ててヘリコプターが近づいてきて、武装したFBIかなんかに連行されそうな気がする。

あのときは、すっかり緊張して、面白いことひとつも言えなかったし。

やっぱりつまらなかったんだろうか。

イヤイヤ、それ以前に、俺なんか、眼中に無いだろうし。

多分詩織ちゃんは礼儀正しく育ったから、ちゃんとお礼をしないと気がすまなかっただけなんだ。

俺なんか、メール送ったりしたら、優しい詩織ちゃんの事だ、嫌でも返事してくるだろうし。

このまま忘れるのが一番だ。詩織ちゃんがわざわざ会社に会いに来てくれた事は、最近頑張ってる俺への神様からのご褒美だと思うことにしよう。

胸の奥がチクリと痛んだけど、いつものように無視することにした。

そのとき、手の中で携帯のメール着信音が響いた。

急いでチェックすると、詩織からだ。

” こんばんわ。先日は、ご馳走様でした。突然会社に押しかけてしまつて、申し訳ありませんでした。山田さんは、まだお仕事中でしょうか。私は、今やっと予習を終えたところです。ところで、お休みのときは、何をされてますか？もし良かったら、またお会いしたいです。”

携帯を持つ手が震える。 ” またお会いしたい ” という部分を何度も読み返す。

気付いたら、詩織の携帯を鳴らしていた。

” 山田さん？” ワンコールで、詩織が出た。

” 俺……。今メール見たんだけど。あ、その前に、ネクタイありがとう。いいのかな？あんな高そうなもの。”

” あの……。わたし、ネクタイとか、選ぶの初めてで、お店の人に相談して、それでやっと決めたんですけど、山田さん気に入って頂け



ましたか？”

のんびりした、優しいな独特の話し方。

（あく。もう、声聞くだけで癒されるよ。）

”ああ。ありがとう。大切にするよ。”

”こちらこそ、気に入って下さったならとっても嬉しいです。”

ぎこちない沈黙の後、良太が口を開いた。

”・・・それで、今度の日曜日は休みなんだ。だから・・・。”

良太の携帯を持つ手に力が入る。

正直なところ、女の子と2人で会う約束をするなんて、初めてなのだ。

”はい。”

”日曜日だったら、会えるんだけど。”

”ほ、本当ですか！ありがとうございます！”

こんなに無邪気に喜ばれて、良太は心の中がくすぐったくなる。

”じゃあ、10時に、駅前の噴水のところで待ち合わせって事ではないかな？”

”はい！そこなら私でもわかります。”詩織の弾んだ声が答える。

”じゃ、日曜日。”そう言って、良太は通話を終わらせた。

\*\*\*\*\*

(ヤッター！！！！ 日曜日、山田さんとデートやわ！)

携帯を切った詩織は、興奮冷めやらず、部屋をぐるぐると歩き回った。

初めてのデート！山田さんとしっ！

嬉しくて嬉しくて、顔がゆるむのを止められない。

日曜日、楽しみやわ！

詩織は、明日学校からの帰り、日曜日の服を見に行くことに決めて、

いそいそとベットに入った。

そうやわ。ちゃんと寝とかな。寝不足は美容に悪いしな。

一番綺麗な自分を見て欲しい。そのためには日曜日までにベストのコンディションに持っていかなあかん。

そう自分に言い聞かせ、優しく、強そう、そしてどことなく可愛らしい山田の事を思いながら、眠りについた。

## 日置の誤算 1

「なあ、山田、お前さあ、妹いるんだってな。」日置が珍しく、笑顔で話しかけてくる。

昨夜、詩織と電話で話をして、日曜日に会うことになったので、良太は早速現場事務所への出勤途中にコンビニで情報誌を買っていた。昼の休み時間、良太はちょうど、弁当の蓋を開けて、リュックから情報誌を取り出したところだった。

「は？はい。妹はひとりいますが……。」

(どう見ても、弟なんすけど、とは言えず……。そんな発言して、もしばれたら真琴に殺やられるし)

「噂で訊いたんだけど、お前とは全然似てないらしいじゃん。まあ、言うなれば、かなりモテそうな。」

「はあ、確かに……。アイツは、真琴は昔から滅茶苦茶モテますけど……。」(女の子限定ですが。)

(この人さつきから、何が言いたいんだろう?)今ひとつ、話の流れがつかめない。

「いきなりで悪いんだけど、その、お前の妹紹介してもらえねーかな?」今までさんざん良太を苛めていたくせに、その辺は自覚が無いのか、平気なようだ。

「!!!!!!つえ?!?!?!」 日置先輩、正気なんだろうか？

「なんだよーっ。俺、お前と2年しか歳はなれてねーぞ。ぜんぜん許容範囲だろ?てか、妹さん、彼氏いるのか?」

「いいえ。それは、1500%いないと思いますっ。・・けど先輩、本当に俺の妹でいいんですか?」

「さつきから、いいつて言ってんじゃねーか!なあ、紹介してくれよ。この通り!頼む!」

日曜日の休み、映画のペアチケットあるんだけどさ、一緒に行ってくれる人も居なくてさ。

「先輩・・・。」 性格はかなり悪いけど、結構見た目は良いのにな。

(それともこの人、あっちの趣味なんだろうか。人ってわからないもんだな。)

「わかりました。電話してみます。」でも、期待はしないで下さいね。

携帯を取り出し、妹に電話をする。

「あ?」相変わらず、無愛想で威圧的な声だ。

「お、俺だけど。」

「ああ。どうした？なんか用？」

「実はそうなんだ。あのさ、会社の先輩がさ、お前と一緒に映画見たいって。今度の日曜日。」

「ああ?! コラ、バカ兄貴テメエ仕事中にいたずら電話か？」そんな度胸良くあったな。死にたいのか？

「そそそ、そんな……。マジなんだよう。それに、結構カツコイ先輩でさ。俺より2コ上で。」やばいよ俺。だから嫌だったんだよ。

「……。そうか。わかった。いいよ。」日曜日はちょうど暇なんだ。

「え? いいのか、真琴!」

「ああ、その代り、そいつに焼肉奢れって言っついて。最近肉喰ってないからさ。」時間と待ち合わせ場所はメールしといてくれ。

良太の史上最強の妹は、さっさと電話を切った。

「……。先輩、妹がオツケーしてくれました。」でも、その代り、焼肉をご馳走して欲しいって……。

(アイツ、全メニュー突破とか、平気でするし。先輩、大丈夫かな)

「マジでマジで!!!! ヨッシャ! お兄さん、焼肉でも何でも奢っちゃう

「やっぞー！」

（ポニーテールの、可愛い女子高生と映画行って焼肉行って・・・。クスクスっ。なんだか、楽しそうだな。お兄さん、張り切っちゃっぞー！）

先日、詩織が良太に会う為、本社に出向いた時に、良太と詩織のツィットを複数の社員が目撃している。

まさか詩織が、良太の親戚や家族以外の存在だなんて、誰も想像すらしておらず、あれは、全然似てないけど妹ではないかと憶測が流れ、それがまわりまわって日置の耳に入ったのだ。

日置は、女子高生アイドル好きで、ひそかに某アイドルグループのファンクラブに入っているほどだ。

（アイドル顔負けの可愛いお嬢様タイプって確かな筋からの情報があつたし。）

日曜日、待ちきれないぞー！

日置の顔は、その日からゆるみっぱなしだった。

## 日置の誤算2

そして運命の日曜日。

約束した映画館の前では、待ち合わせ時間10分過ぎても、日置のお待ちかねのお相手は現れない。

（おかしいな……。あと20分ほどで上映時間はじまってしま  
うんだけど。）

さっき、パンフレット買いに行ったりしたときに、すれ違ったのか  
もしれない。

幸い、日置よりも早くから人待ち顔で同じ場所に立っている野球帽  
を被った若い男が居たので、訊いてみることにした。

「すみません、さっきここに、高校生ぐらいの女の子が一人で来ま  
せんでしたか？」ポニーテールの、可愛い感じの……。

「は？いや、見てないけど。」なんだコイツ。てか、兄貴から訊い  
た日置って奴の風体になつくりなんだけどな。偶然なんだろうか。

「そうですか……。あ、ありがとう。」そう言って、携帯を取り出  
した。後輩に電話をかける。。

「はい、山田です。」

「山田？妹さん、まだこねーんだけど？映画始まつちゃうからさ、  
急いで携帯の番号教える。」最初から訊いてりゃ良かったよ。った



く。

「は、はい。おかしいな。真琴の奴、いつもは待ち合わせの時間よりは絶対早めに着くんだけど。じゃ、番号言いますね。」

「おけ。わかった。電話してみるわ。」早速、後輩に訊いた番号にかける。

「はい。」2コール目に、山田の妹は電話に出た。

「あ、俺、日置と言います。お兄さんの紹介で。」

「はい。」どちらかというと落ち着きのある低い声。

(ん？なんか、声がイメージと違うぞ？)

「で、今どこかな？道迷っちゃった？」

「いえ。20分ほど前から、映画館の前に立ってます。」

「え？どこ？俺も映画館の前に……。」

そう言って振り向いた時、同じように携帯を耳にくっ付けて、眉間にしわを寄せているさっきの若い男と目が合った。

しばし沈黙のまま見詰め合う2人。

「アンタが、日置さん?」

「!!!!!!っええ!!!!!!」 嘘だ!嘘だろ?

日置の目の前には、アイドル系女子高生とは真逆の存在が立ちふさがっていた。

とりあえず、お互い携帯を切って、向かい合う。

日置は、あつげにとられて、口がきけない状態だ。

「山田真琴です。兄が、いつもお世話になっております。」山田の妹????」がニヤリと笑う。

「はぁ……。」

「この映画、ちょうど見たかったんすよ。今年の全米ナンバーワンのホラーですよね。」ささ、行きましようか。飲みモノ買いたいし。てか、久しぶりの焼肉も楽しみつすよ。

「ちょ、ちょっと待ってくれないか?俺、ちょっと……君のお兄さんに電話させてくれ。」日置はそう言って、もう一度後輩に電話を掛ける。

「はい、山田です。あ、待ち合わせ大丈夫でしたか?」

「っテ、テメー!コ、コラ、山田あ!!!!なにが大丈夫だ?大丈夫じゃねーから電話してんだよつ。テメエ、妹寄せさせて言ったじゃねーかつ!」なんで、弟が待ってるんだよ!

「は？あの……。てか、え？俺、い、妹しか居ませんけど。。。」

「じゃあなんで若い男が来てるんだよ！お前の妹の代わりにさ！」  
携帯まで渡しやがって。

「ち、ちがっ」

「何が悲しくて、俺が男と一緒に映画見て焼肉食わないといけねーんだよっ！」

カップル用のプレミアボックス席だぞ！知ってる奴に見られたら、勘違いされるじゃねーか。

そのとき、いきなり後ろから、先ほどの男に携帯電話を奪われ、強制的に通話を終了させられた。

「なっ、何すんだよっ！！」

「オニイサン、そろそろ時間だよ。」アタシ、喉渴いたんだけど。

日置は最後に社会人の威厳を見せようとした。

「で、でも……。その前に、お前、一体誰なんだよっ。」

「あ？てか、アンタさつきから何ぐだ言ってるんだよ？」大体アタシがアタシに会いたいって兄貴に頼んだんじゃねーの？ 良く考えたらさ、軽くパワハラじゃね？

「それに、悪いけど、うちの兄貴をいじめていいのは、昔からアタシだけなんだよ。」わかる？

そう言つて、日置の両肩をガシッと掴んだ。

「痛っ！ 痛いよ！ 離せよ！」日置は必死にもがくがびくともしない。

「クスクスっ。体中の関節はずしてやるうか？んん？アンタがうちの大事な兄貴に偉そうな口叩いてんの聞いているだけで、かなりむかついたもんですから。」さっきから山田の”妹??”の顔は笑っているが、目は全く笑っていない。

「あぐっ。離してくれよ！お願い！お願いします……。」ぎりぎりと掴まれた所からしびれた痛みが身体全体に広がっていく。

「今後アイツに嫌がらせしたりしたら……。」死んだほうがマシって言うくらい可哀相な目にあわせてやるからな。

「し、しません！しませんってば。」脂汗が額ににじむ。目がかすんでくる。

「よし。わかればいいんだ。」そう言つて、山田の”妹(じゃないぜ、絶対に！)」が、日置の両肩から手を離れた。

その場にへなへなと座り込み、大きく息をしている日置を、真琴は無表情のまま腕組みをして、じっと見下ろしている。

そして、ふと思いついたように携帯を取り出し、兄に電話を入れた。

「ま、真琴？お前、日置さんと……。悪かったな。なんか、行き違いがあったみたいで。大丈夫か？」ワンコールで聞こえてきたのは、兄の心配そうな声。

「あ、兄貴？日置さんとちゃんと会えたし。今から”カップル用のプレミアボックス席”で映画見るんだ。すっかり意気投合しちゃってさ！だから、もう心配ないぞ。」じゃ、またな。そう言って通話を終了させた。

「ほら、もう行こう。」映画始まっちゃうよ。何事も無かったように、日置に声をかける。

放心状態だった日置は、ビクッと引きつった顔で、野球帽の若い男を見上げた。

「もう、早くしろよつ。」そう言って、手を伸ばしてきたので、あわてて自分でさっと起き上がった。

「アタシ、コーラのMサイズと塩バター味のポップコーン」「満面の笑みをたたえる山田の”妹（だと言い張る存在）”」。

「は、はい！かしこまりましたっ」

こうして日置の長い一日が始まった。



## 日置の誤算2（後書き）

真琴はある意味真性のブランクではないかと、最近思い始めてます。

## 初デート 1

日置から二度目の電話が入った時、良太と詩織はちょうど待ち合わせの場所から駅に移動し、ホームで電車を待っているところだった。

（意味わかんねーよつ。先輩は真琴とデートがしたかったんじゃないのか？）

いらだたしげに、一方的にぷつりと切られた通話に顔をしかめて、良太は携帯をジーンズのポケットに突っ込んだ。

「あの・・・、大丈夫ですか？」

心配そうに眉をひそめて、詩織が良太を見上げている。

「え？あ、ああ。大丈夫だよ。会社の先輩が、今日俺の妹と映画を見る約束してて、なんかちよつと行き違いがあったみたいで。」

（それにしても、女の子って服装で変わるもんだな。）

今日の詩織は、さわやかな水色のノースリーブのワンピースに、薄手の生成のレースのカーディガンを羽織っている。なめし皮のサンダルには、ターコイズブルーとグリーンのビーズで作られた葉っぱと花の飾り。

形の良い小さな足の爪は、明るいオレンジ色に塗られている。



制服姿では2度会っているが、やはり私服姿のほうが大人っぽい。

「妹さんと、山田さんの先輩が？」

「ああ。どうしても紹介しろって言われて。」

また携帯が鳴り始めた。今度は真琴からで、とりあえず心配するなという内容だった。

明らかに怪しいが、真琴がそついうなら、大丈夫なんだろうな。と無理矢理自分を納得させる。

（ふーん。映画でカップル用のプレミアボックス席か）

俺も誘ってみようかな。今度。

チラッと隣の彼女を見る。

ホームには涼しい風が吹き渡っていて、ポニーテールをした詩織のうなじのところで、後れ毛がそよそよ揺れている。

待っていた特急電車が到着したので、比較的空いている車内に乗り込んだ。

悩みに悩んだ拳句、今日は県立の昆虫博物館に行くことにした。良太が少年の頃から、時々訪れるお気に入りの場所があるのだ。

駅に向かう途中に、行き先を告げると、詩織は意外そうな顔をした

が、すぐに笑顔で、行った事ないので楽しみですと言ってくれた。

座席に2人で並んでいると、周りの乗客からの視線をいつもより多く感じる。

（もうちよつと、お洒落なカッコすればよかったな・・・。）あきらかに、不似合いな2人の服装。

私服といえば、ジャージかジーンズと洗いざらしのTシャツ。それ以外は持っていない。仕事を無理に切り上げてでも、昨日何か買に行けばよかったと後悔する。

（ま、不似合いなのは服装だけじゃないけどさ。）

なんだか、お姫様を護衛するボディーガードになったような気がしてしまう。

ボディーガードとしてもいいから、こうやって一緒にいられるだけで、俺は充分満足だけど・・・。

詩織ちゃんの彼氏になりたいなんて、そんなおこがましいことは望んではいない。

ま、厳密に言うとな望んでないわけじゃないけど、俺も年齢を重ねて、さすがに少しは賢くなってきた。

そんな夢のような話は、現実世界ではありえないと理解する脳味噌ぐらいは持っている。

縁あって、こうやって知り合いになれて、時々連絡取り合って、一

緒に出かけて……。

それだけで良しとしないと。

変にいろいろと期待してしまったら、後が辛いだろうし。

いつもの暴走癖は、何重にもきっちり鍵をかけて、胸の奥にしまっている。

今まで好きになった女性の前で、しでかしてきた失態を、詩織の前でも繰り広げてしまったら、あきれられて、もう会えなくなってしまうだろう。

それが怖かった。

だから、詩織の前ではあくまでも紳士的に、親切なお兄さんとして振舞おうと決めたのだ。

「緑がだんだん多くなってきましたねえ。」

車窓を眺めていた詩織が、ふいに良太のほうを向いてにっこりする。

「この辺りからはまだ開発されつくしていないからね。あ、あと3駅で着くよ。」

「駅から近いんですか？」

「ん〜。そうだな。ちょっと山のほうへ歩くんだけど。20分くらい。」大丈夫？

今更ながら、詩織の体調が気になった。

「しんどいようなら、タクシーで。」

「いえつ。もう平気なんです。今日に備えて、ばつちり体調調整してきましたんです！」それに、わたし、山田さんと一緒に歩きたいんです。相変わらず、大胆なことを言ってしまった後に、かっとな顔を赤らめる。

「……………」

(いつそのこと、聞こえなかったふりをしてしまおう。)

リアクションに困った良太は、この状況をやり過ごす、一番ずるい方法を選択した。

でもやはり、詩織と同じように顔が熱くなっていくのは防げない。

(あんだアホやる！ちょっとは学習せなっ。山田さん、困ってはるやないのっ！)

油断すると、ついつい本音が漏れてしまう。もう少し、自重しないと、いよいよ山田さんにしつこい娘やと思われてしまう。

(山田さんは、ただ単に暇やから、私に付き合ってくれはっただけなんや。)

相変わらず車窓を眺めるふりをしながら、詩織は悲しく自分に言い

聞かせた。

連絡先を訊いたのも、わたしからやし。

メールを送ったのも、わたしから。

片思いつても結構つらいもんやな。

”倉田家の女は少々の事じゃへこたれない”

トキコ姉ちゃん言葉を思い出す。

とりあえず、休日になんか会ってくれはったし。嫌われてるわけじゃないよね？

山田さんの、好みの女性はどんな人なのか教えてもらって、出来るだけ努力してみよう。

せっかく好きな人ができたんやもん。そうそう簡単には諦めたくない。

目的の駅につくまでに、詩織は何とか自分を叱咤激励し、元気を取り戻すことに成功していた。

## 初デート 2

駅から山のほうへ真っ直ぐに伸びている坂道を登っていく。

良太は詩織の歩幅に合わせて、ゆっくりと歩いた。

「山田さん、博物館に着くまで、質問ゲームしましょう。」

「え？」小さなレモン色の日傘を差した詩織が、にっこりと期待に満ちた目で良太を見あげる。

「じゃ、わたしから。」好きな色はなんですか？

道沿いに、綺麗な川が流れていて、せせらぎの音が聞こえてくる。

「ん〜。青かな。」

「次、山田さんの番ですよ。」

「詩織ちゃん、好きな食べ物は何？」

「そう来たか。・・・んと。好き嫌いは無いんですが、パスタ全般かな。」

「山田さんのストレス発散方法はなんですか？」

「え・・・と。まあ、普通に友達と飲みに行ったりカラオケ行ったりとかかな。」

「そうなんですか……。はあく。私も行きたいな。山田さんとカラオケ。」

（はっ！また、言ってもうたやん！どないしよう……。）

「いいよ。今度行こうか。」

「い、良いんですか？」

さつきみたいに、聞こえないふりをされなかつたので、詩織はそつと安堵のため息をつく。

「うん。詩織ちゃんの歌聴きたいし。」

「わ、あんまりプレッシャーかけないで下さいね。」

やっと会話が弾みかけた時に、博物館の建物が見えてきた。

「着いたよ。」良太は半分ホツとして、半分は残念な気がした。

（もっと知りたい。詩織ちゃんの事……。）一番知りたいのは、俺の事どう思っているか。

イヤ、やっぱりよそう。そんな事知らないほうが良い。やっぱり知りたくない。

コンクリートの打ちっぱなしの外壁には、沢山のガラスブロックが埋め込まれていて、採光の役目を果たしている。

「ここは、昔、うちの会社が設計施工したらしいよ。」少し誇らしげな顔で、詩織に説明する。

入場券を2枚買うと、良太は、さっさとグロテスクな虫達が展示されてあるエリアを避けて、目的の場所に向かった。

「この奥に温室があるんだ。」気が急せいでしまつて、ついつい速く歩いてしまつた。

まだ時間が早いし、もともここは有名な人気博物館つてわけでもない。

良太の予想では、殆ど貸しきり状態のはずだ。

温室の中は、ジャングルのように熱帯地方の木が生い茂り、派手な色の花が咲き誇っているが、案の定人影は無く、ひっそりとしていた。

「詩織ちゃん、ちょっとじつとしててごらん。」きよるきよるあたりを見回している詩織に声をかける。

「はい。……ふえ?!?!わ、わ?!?!」

黒い羽に青い模様の入った大きな蝶が、詩織の肩に留まった。

立派なアゲハチョウが2匹、2人の目の前を通り過ぎる。



良く見ると、普段目にしたことの無いような、珍しく美しい蝶がひらひらとジャングルのあちこちに舞っている。

まるで夢の中の景色のようだ。

「ここは、蝶の為に作られた温室なんだ。」あ、ちょっと待ってて。

良太はそう言って、詩織を残して温室の奥に隣接する事務所に入っていた。

5分ほどして、良太が詩織の所へ戻った時も、詩織はまだ固まったままで、肩にも頭の上にもアゲハ蝶が1匹ずつ留まっていた。

「山田さん？」わたし、どうしたらいいんでしょうか。

「あ、ごめん。もう普通にしてて。」

詩織はホッと身体力を抜いた。

「こここの蝶って、人なつこいですね……。」さっきは、わたしの鼻の頭に一匹留まったんですよ！

詩織はすっかり興奮して、目をキラキラさせている。

「あそこのベンチに座ろうか。」良太は明るいピンクとオレンジの花に囲まれたベンチを指差す。

二人並んでベンチに座ると、良太は事務所から持ってきたものを膝の上に乗せた。

小さなプラスチックケースの中には、羽化の最中の蝶が入っている。

「手出して。」

両手を上に向けて差し出すと、良太はそっと、まだサナギにしがみついているままの蝶を、詩織の手のひらにのせた。

2人でじつと見守っていると、サナギから完全に抜け出した蝶はやがて羽を震わせ、そしてひらひらと詩織の手のひらから飛び立っていった。

「ここは、タイミングさえ合えば、放蝶体験もさせてもらえるんだ。」  
飛び立った蝶の行方を目で追いながら、詩織に説明する。

詩織はまだ、両手を差し出したままの格好で俯いている。少し震えているようだ。

「詩織ちゃん？」良太は詩織の顔を覗き込んで、そして、とんでもなくうつろたえた。

「な、なんで泣いてるの！」

「す、すみません！なんか、涙が出てきちゃって。」  
「なんでか自分でもわからないです。わからないけど、涙が勝手に……。」

ぼろぼろと、涙が頬を零れ落ちる。

「俺、なんか、どうしてかわからないけど。ごめん。」謝るから、泣かないでくれないか。

良太は正直この場から猛ダツシユで逃げ出したい衝動と戦っていた。女の子を泣かせたことなんて、今までの人生で一度も無い。

「ちがうんです！多分ですけど……。」良太の差し出してくれたティッシュユで、そつと涙を拭った。

「多分ですけど、あの飛んで行った蝶の特別な瞬間に、山田さんと一緒に立ち会えたことが、嬉しくて、それで。」上手く言えないけど、嬉しくて。

「詩織ちゃん……。」

(そんなこと言われたら、俺、勘違いしそうになるよ。)

プラスチックケースを持つ手に力が入る。

その後、不器用な2人は、しばらくベンチに座ったまま、相手にかけるべき言葉を搜していた。

沈黙を破ったのは、良太のほうだった。

「……これ、事務所に返してくる。」そう呟いて、立ち上がる。

「あの、一緒に行ってもいいですか？」詩織も慌てて立ち上がった。

2人で温室の奥にある事務所に行くと、良太を少年の頃から知っているという年配の職員が応対してくれた。

「そうか。山田君もとうとう彼女を連れて来るようになったのか。こんな綺麗な娘さんをねえ。はあ。長生きはするもんだねえ。」

おじさんは、しきりに感心して嬉しそうに目を細めている。

「違いますよ！詩織ちゃんは、最近この街に引っ越してきて、たまに俺があちこち案内してるだけで。」

自分の気持ちをもてあましている、今の良太には、おじさんの言葉に冗談で返すだけの心の余裕は無かった。

いつもの良太らしくなく、ムキになって事情を説明しようとしている。

それがどれほど、詩織の心を傷つけているかも気付くことなく。

### 初デート 3

2人が博物館の建物から外に出たときには、午後一時を過ぎていた。

「さてと、詩織ちゃん、お腹すいた？」何か食べたいものある？

「あ、わたし、そうですね。ちょっとお腹すいちゃいました。」

「川沿いに山の上のほうに登っていくと、滝があつて、その周りに食べ物屋さんが何軒かあるんだけど、もう少し歩けそうか？」

詩織は、微笑んで、大丈夫ですと言った。

滝へと続く山の中の坂道には、山歩きの格好をしたグループや、家族連れ、そして詩織たちのように、軽装の観光客やデート連れなどの姿が見られる。

滝の傍の、最近出来たらしい、オーガニックの材料を使った料理を出すオープンカフェで、昼食をとることにした。

「素晴らしい景色ですね。それに、とっても涼しいです。「川の上に張り出したベランダのテーブル席に座ると、滝の方から細かい霧のようなひんやりとした風を感じる。」

「ここは、真夏でもこんな感じなんだ。「子供の頃は、水着を持つ

てきて、川に下りて泳いだんだよ。

「この川で泳げるんですか？」

「うん。今でも、もっと暑くなったら川遊びするひとで結構にぎわうよ。」

「確かにとっても綺麗な水ですね。……でも、ちょっと水が冷たそう。」

「ビックリするくらい冷たいよ。後で階段で川辺に下りて、水に触ってみる？」

「はい！触ってみたいです。気持ち良さそう。」

詩織が頼んだ日替わりパスタとジュース、良太のロコモコ丼とアイスコーヒーが運ばれてきた。

「んん！美味しいです。このパスタ！」詩織は海老とアスパラガスのクリームパスタを、上手に口に運ぶ。

「そうか、良かった……。」「良太も嬉しそうな顔をする。

（幸せだなあ。詩織ちゃん、可愛いなあ。）

爽やかな風に吹かれながら、ぼんやりと詩織が上品にパスタを食べる様子を見つめている。

「山田さんは、ちゃんと自炊されてるんですね。男の人なのに、偉いですね。」あるとき下さったオニギリも、とっても美味しかったし。

「あの頃は、まだ現場に回される前だったから、何とかご飯ぐらいは炊いたりしてたんだけど。最近は仕事がきつくて、殆ど料理してないんだ。」

「そうなんですか。」

「朝はコンビニでパンと牛乳買ってきて、現場事務所で食べることが多いかな。昼は会社で頼んでる給食屋の弁当か、現場近くの喫茶店で定食食べるか。晩も残業で弁当になることが多いな。」

「でも、それじゃ、栄養が偏ってしまいますね。」詩織が眉をひそめて心配そうな顔をする。

「ん。じゃあ、今度詩織ちゃんご飯作ってよ。」

軽い気持ちで言った後、自分の発言に啞然とする。

（まずいよ俺！ 何言ってるんだよ。）自分で自分の頭を思い切り叩きたくなる。

「い、今のは、違うから。全然気にしないでっ！」

「ご飯、作りに行っても良いんですか？」

「へっ？」

「わたし、こっ見えて、お料理好きなんです。」

「で、でも……あの。」

「お野菜とかがたっぷりのお惣菜作って、山田さんに食べて欲しいです。」

「……」

「ダメですか？」

（さっき、作ってよって言うてくれたのに、今は、また困った顔してはる。）

「それは……」

「ふっ。ごめんなさい。山田さんを困らせるつもりじゃなかったんです。」

「ちがつ。」

「いいんです。あんまりしつこくしたら、嫌われちゃいますよね……ごめんなさい。」

こみ上げてきた涙をこまかすために、急いでジュースを飲むふりをする。



「違うんだよつ。俺が、ずづずしいこと言って、詩織ちゃんは優しいから、断れないんじゃないって。それに、やっぱり、男の一人暮らしの部屋で料理なんて、そんな事ダメだよ。」大阪のご両親も、心配されるだろうし、一緒に暮らしてる親戚の人たちにも心配かけることになるよ。

「山田さん。あの、わたし。」

「ごめん。変なこと言い出して。」俺が悪かったよ。

その後、良太は黙って目の前の皿を空にすることに集中した。

そして2人は静かな食事の後、先ほどの会話は無かったようはふりをして、当たり前障りの無い話をしながら、水辺を散策した。

「もうそろそろ帰ろうか。」詩織ちゃんも明日は学校だし。

午後3時半になる頃、良太がそう言うと、詩織もどこと無くホツとした様子で、うなづいた。

お互いの気持ちを量りかねて、あと一歩が踏み出せないままの2人。

帰りは下り坂のせいもあって、駅に着くのもあっという間だった。

## 帰り道 1

帰りの電車も、行きと同じように比較的空いた車内で、二人用の座席を確保し、窓際に詩織を座らせた。

詩織はしばらく車窓からの景色を眺めながら、ポツリポツリと話をしていた。

それが急に静かになり、やがて良太の右腕にぐつと身体をあずけてきたので、驚いて顔を覗き込むと、スースーと寝息を立てて、ぐっすり眠りこんでいたのだ。

電車の揺れが激しくなると、それにあわせて良太の右腕にもたれ掛けている詩織の頭もぐらぐら揺れる。

前の晩は緊張のあまり殆ど眠れず、蝶の温室では泣いてしまい、そのうえ普段より長い距離を歩いたせいもあるのだろう。電車の振動と隣の温かい良太の体温を感じているうちに、詩織はあっけなく深い眠りに落ちたのだ。

「し、詩織ちゃん・・・？」遠慮がちに声をかけてみるが、ピクリとも反応しない。

ガタンッ！

「あつ。」

電車がカーブを通過した時、詩織の体がガクンッと大きく前に傾い

た。

詩織の膝に乗せていた藤の籠バックが滑り落ちる。

良太は思わず詩織の肩を抱いて倒れないように支えながら、床に転がっている籠バックを拾って自分の膝に置いた。

腕の中の詩織は、たおやかで柔らかくて温かくて、そしてほんのり甘い花の匂いがする。

こんなに無防備なのは、やはり俺が、完全に対象外だからなのか。

ただの気の良いお兄さんだと思われているから、こんなに可愛い寝顔を平気で見せるのか。

詩織は、寝心地の良い体勢をとるために、しばらく体をもぞもぞさせていたが、やがて満足したのか、また動かなくなった。

次の停車駅を知らせるアナウンスが流れる。良太は心の中で悪態をついた。

まだあと30分近くもこのままの状態が続くのか。なんなんだよ。新車の拷問か、これは？

(俺だって、男なんだぞ！)

幸せそうな寝顔を見つめていると、無理矢理起こして、もっと警戒心を持つようにと説教したくなる。

そのくせ、いつまでもこのままずっと、電車が目的地に着かなけれ

ばいいのにと思っている自分もいる。

( 親切なお兄さんとして・・・ )

そういう存在でも良いから、たまに会えるだけで、それだけで良い  
って思っていた。

でも、一緒に居る時間が長くなるほど、詩織をひとりの女性として  
見てしまうのを止められなくて。

( 俺は、どうすればいいんだ。一体どうしたいんだ。 )

いっそのこと、告白してきっぱり振られたほうが良いのか。

こうやってじわじわと蛇の生殺しのような気分を味わうくらいなら、  
もう会わなければいいのだろうか。

詩織に会えなくなった自分の毎日を想像してみる。

仕事に行って、疲れて帰って寝るだけの日々。

彼女に会う前の自分なら、それでも良かったと思う。今では松永主  
任のおかげで、仕事に行くのが楽しくなったし。

でも、今の自分はある頃よりも、もっと欲張りになってしまった。

詩織ちゃんと一緒の時間が欲しい。

時々でも良いから、彼女の笑顔が見たいのだ。

また、がたとんと電車が大きく揺れた。

そのとき、行儀良く膝の上にそろえていた詩織の手が動いて、良太のTシャツのわき腹のところをそっと掴んだ。

まるで小さな子供がお父さんとはぐれたりしないようにと、きゅっと服につかまるみたいに。

詩織の体にまわした腕に力を入れて、少しだけ強く抱き寄せる。

腕の中の存在は、眠ったまま甘いため息をついて、いっそうきつく良太の身体にしがみついた。

(こんなことじゃ、いつまで”オニイサン”でいられるか、自信無いよ……。)

良太は、なんだか切なくなつて、ぐつと奥歯をかみ締めた。

## 帰り道 2

詩織は、幼いころ同居していた、父方の祖父の夢を見ていた。

祖母は詩織が生まれる前に亡くなっていたが、先代の社長である祖父は、倉田家の初孫である詩織をことさら可愛がっていた。

覚えているのは、時間があればいつも詩織を膝に乗せて、絵本を読んでもくれた事。

祖父は詩織が小学校に上がる頃に、他界した。

詩織は祖父の事が好きだった。忙しい父よりも、そっけない母よりも、無条件で詩織という存在をまるごと愛してくれた祖父。

「おじいちゃん！」大阪にある倉田家の、祖父のものだった部屋に入ると、かつてそうだったように、祖父が窓際の安楽椅子にもたれて優しく微笑んでいる。

「詩織、大きくなったなあ。えらいべっぴんさんになったやないか。」

「おじいちゃん、どうしてたん？うち、もう高校生やねんよ。」

「そうかそうか。詩織の事が心配で、あっちにおっても、なかなか落ち着かへんさかいに、ちょっと様子見にきたんや。」

「おじいちゃん、うち、おじいちゃんがおらんくなって、寂しかったんよ。」

今はもう、大きくなったので膝に乗ることは出来ないが、詩織は祖父の肩に頭を載せて、目を閉じた。

「かんにんな。詩織は甘えたさんやからな。さよならするんは、おじいちゃんも辛かったんやで。」

「ひとりにせんといて。一緒におって。」小さな子供のように祖父の服を掴んで我儘を言う。

「おじいちゃんはな、いつでも詩織の事、遠くから見守ってるで。それに、詩織にはもう、一緒におってくれる人できたやないか。あれは、なかなかええ男やで。さすがおじいちゃんの孫や。人を見る目がある。これでおじいちゃんも安心してゆっくりできるわ。」そう言っつて、詩織の肩をやさしく抱いてくれた。

「違うねん。山田さんは、うちのこと、なんとも思っつてはらへんねん。」目の奥が熱くなって、ちくちくする。

山田さんは、うちが一步近づいたと思っつたら、一步後ずさりしはんねん。

そのたびに、心がくじけそうになっつてしまっつ。

「そっつや。人の気持ちは自分の思っつようにはでけへんもんや。でもなあ、詩織はそのまま真っ直ぐに、あの人の事を想っつといたらええんと違っつか。そのうち、あの鈍い男も、詩織の気持ちに気付くやろ。」

「ほんまに？うちは、このまま、山田さんを好きでいてもええんやろか。」



「・・・・・・・・・・」

「おじいちゃん?!」 気がつくと、安楽椅子は空っぽで、詩織は一人、祖父の部屋に立ち尽くしていた。

「詩織ちゃんっ。ほら、もう起きて。つぎ、もう駅に着くよ。」

優しく揺り起こされて、目を覚ました。

そして自分の状態に気付く。

なぜか好きな人の温かな腕の中。

「!!!!!!っ!!!!!!」 詩織は、一瞬パニックになった。恥ずかしいのと情けないのとで、かっ顔が熱くなる。

(わたしっつてば、帰りの電車で爆睡してもうた・・・・・・・・) 間抜けな寝顔見られたんやろか?

「すす、すみませんっ!!」 思いっきり頭を下げる。 山田さん、あきれてる?

「ふっ。なんか、すごく気持ち良さそうに眠ってたよ。」 詩織のあまりの慌てぶりを見て、良太は優しい気持ちになった。

「祖父の夢を見てたんです。」改札を出たところで、詩織はポツリと言った。

「え？おじいさんの？」

「はい。もうずいぶん前に亡くなりましたけど。」

「そうなんだ……。」

「山田さんの事、なかなかいい男だって言ってました。」詩織は、祖父との会話を思い出して、微笑んだ。

「え？俺が？」そうなのか？なんか、照れるな……。

「ふふっ。」「2人で目をあわせて微笑みあう。」

そのとき、良太はいきなり後ろから、ガシッと羽交い絞めにされた。

詩織がビククリして目をまるくしている。

「おいコラ。こんなところで、何やってんだ？あ？」「あんなバカ男アタシに押し付けといて。」

良太のほんわかした気持ち、その聞き慣れた低い声で一気に急速  
冷凍され、目の前が暗くなる。

（まずいよ。マジで、お願いしますよ……。）

「ま、真琴……か？」

なんで、今このタイミング?!

（神様、俺になんか恨みでもあるんすか？）

### 帰り道 3

「やつ、やめて下さい！だ、誰か、けいさつをつ！」詩織は必死になつて、山田を助けようとした。

心臓がばくばく鳴っている。

周りには沢山の人が歩いているが、誰も関わりたくないのか、チラッと見るだけでさっさと通り過ぎていく。

駅の改札を出たところで、山田と話をしていたら、いきなり野球帽の若い男が近づいてきて、後ろから羽交い絞めにしたのだ。

震えながらも、ぎゅうぎゅうと山田の首を締め付けている男の腕を引き剥がそうとした。

当然びくともしない。

「詩織ちゃん、いいんだ。これ、妹なんだつ。」良太は慌てて、半泣きで真琴の腕にしがみつく詩織に言い聞かせた。

「ふえっ？」詩織の動きがぴたつと止まる。

「離せよ、真琴！」詩織ちゃんを紹介するから。

「ちつ。久しぶりに落としてやろうと思ったのに……。」野球帽の若い男が、しぶしぶ兄から腕をはずした。

「いもうと・・・さん？」　この人が？　山田の後ろに立つ人物をきよとんと見つめる。

「こんにちは。山田真琴です。」　野球帽を脱いで、自己紹介をする。

「はっ、はじめましてっ。倉田詩織と申します。あの、先ほどはすみません！」

「いえいえ・・・」　それにしても、兄貴にはもったいないくらい可愛いな。ポニーテールか。

（ん？　ポニーテール？）

「おいコラバカ兄貴、どういうことなんだよっ。　テメエがポニーテールの女子高生喰っちゃったから、アタシが代わりにあの変態ヤロウと映画行くことになったってわけか？」　ぐいっと兄の胸倉を掴む。

「は？ち、違うよっ！日置さんは、詩織ちゃんの事なんか知らないんだぞ。」　それに、喰っちゃったとか言うなよっ。　詩織ちゃんの前でやめてくれよ。

「ふっん。なんだかわからないけど、まあ、映画面白かったし、焼肉美味かったし。」　別に良いけどさ。

真琴はそれでもまだ釈然としないらしく、兄を解放した後も、詩織を興味深げにじろじろ見ている。

「で、何？このどスケベになんかされたりしなかった？」

詩織は、たちまち顔を真っ赤にして首を横に振る。

「ま、真琴！お前、だからそういうこと言うなって！頼むよ。」

「何言ってるんだよ！妹として、心配してんじゃねーか。」「下手に手出したら、警察連れて行かれそーじゃん。こんな純情そうなお嬢ちゃん相手じゃさ。」

「だから、そういうんじゃないんだってっ！」

「じゃ、どういうんだよ？」「あれだけラブラブモードで見つめあってさ、アンタ達付き合ってるんでしょ？」

「ち、ちがつ」「良太は必死で真琴を黙らそうとする。

「お前、悪乗りし過ぎだぞ！いいかげんにしてくれよ。」

「なぐに、しらばっくれてんだよ！」「あれだけ鼻の下伸ばしてさ。」

「あの、わたし、この街に引っ越してきたばかりで。それで、山田さん・・・お兄様が、あちこち案内して下さったんです。」「

「そうなんだ・・・。」「真琴はまだからかい足りないようだ。

「お兄様」だって！ぷぷっ。」「良太の耳にそっと囁く。

（勘弁してくれよ・・・。）良太は思わず目をつむった。こいつにだけは見つかриたくなかったのに。

「で、これからどこ行くの？」真琴は2人に聞いた。

まだ、五時前じゃん。どうすんの？

「詩織ちゃんは、明日学校があるし、俺も仕事だし、もう帰るところなんだ。」

詩織もこくんとうなずいた。

(本当は山田さんともう少し一緒にいたい。でも我儘は言えないから。)

「じゃあさ、せっかくだから、うちで晩御飯食べて行かない？」アタシ、母さんに電話してみるわ。今日のおかずなんだろうな。

「え？あの。でも……。」

「真琴！」詩織ちゃんにも都合があるんだ。勝手なこと言つなよつ。

「なんだよつ。晩御飯ぐらいいいじゃん。アタシだって、しょっちゅうバンドのメンバー連れてつてるし。」それにさ、兄貴が全然帰ってこないって、母さん嘆いてたぞ。休みの日ぐらい、顔見せてやれよ。」

真琴が母に電話すると、是非、良太の彼女を連れて来て欲しいと大喜びの様子。

「クスクスっ。母さんめちゃくちや興奮してた。」真琴は上機嫌だ。

「詩織ちゃん、うちで夕飯食べても時間大丈夫か？」ちょっと遅くなるけど、俺、実家の車で送っていくから。

良太は、詩織が急な誘いを断れなくて困っているんじゃないかと心配だった。

「叔母夫婦は出版社の招待で、ホテルのディナーショーに行くので今夜は遅くなるんです。」だから、わたしも、家に帰っても独りなんです。

「そうか。じゃあ、うちで夕飯食べて行ってくれよ。母さんも喜ぶし。」良太も本当は、詩織との時間を少しでも延ばしたいのだ。

「ありがとうございます。わたしも山田さんのお母様とお父様にお会いしたいです。」でも、あの、手ぶらでお邪魔するわけには……。

「あー、いーのいーの。気にしないで。自分ちみたく、くつろいでくれたらいいから。」

急展開にとまどう、2人をよそに、真琴だけがやけに張り切っていた。



## 山田家訪問

「いらっしやいっ。」ね、ちよつと、お父さん〜！良太達が帰ってきたわよ。

玄関扉を開けた瞬間、良太たちの母がリビングから顔をのぞかせて叫んだ。

「こんにちわ。あの、お邪魔します。」詩織は、すっかり緊張している。

今日、いきなり好きな人の実家を訪れることになるなんて、予想もしていなかった。

良太の実家は、昔ながらの町並みを残す住宅街の中にある、こじんまりとした古い二階建てである。

玄関の横には、沢山の鉢植えが置いてあった。

「さあさ、お上がり下さいな。」良太っ！はやく、案内してあげて。

「詩織ちゃん、上がって。」良太は詩織をリビングに連れて行った。

「あらまあ〜、なんて綺麗なお嬢さん。」ちよつと、お父さん呼んでくるわ。

「もう、母さんっ。あんまり騒いだら、詩織ちゃんがつ。」良太は、母をたしなめるが、大事な息子が初めて彼女を家に連れてきたのだ。

舞い上がるなというほうが酷だ。

真琴は、お茶でも持ってくるわと言って、さっさとキッチンに引っ込んでしまった。

「母さんは、いつもあんな感じだから、気にしないで。」緊張気味の詩織に、良太は安心させるように話しかけた。

「はい。あの、でも凄く優しくそうなお母様で……。」良太は丸ごと母親似だった。

「いらっしやい。ゆっくりして行って下さいね。」奥の扉から、母親に連れられて、良太と同じように大柄な父親が入ってきた。真琴はハンサムな父親にそっくりだ。

「倉田詩織と申します。今日は、お招きありがとうございます。」詩織は、丁寧に手をそろえて挨拶した。

「詩織ちゃんね。そんなにかしこまらないでいいのよ。」それより、良太がどうやってこんな可愛い人捕まえたのか、まずはそこから教えて欲しいわ〜。

さすがは真琴と良太の母、いきなりぶつちゃけトークを要求してきた。

「母さんっ！やめろよっ！」

「あ、それ、アタシも知りたい。」真琴がお茶を運んできた。

「ね、どうやって知り合ったの？」

「あの、通学途中の電車の中で……」詩織が話し出すと、

「え？こいつがいきなり触りやがったとか？ったく。それ、犯罪じやんよ。ね、母さん。」と真琴が深刻そうに眉をひそめて言う。

「ま。良太。いけませんよつ。」痴漢は犯罪”なんだよ。ね、父さん」母親もぎろつと良太を睨みつける。

「ち、ちがつ」詩織が懸命に否定しようとするが、誰も聞いてない。

「良太お前、いくら彼女いない暦22年つつたつて、女子高生を電車内で……。父さんは、お前をそんな子に育てた覚えは無いぞつ！」父親も怖い顔をして声を荒げた。

（どないしよう……。わたし、なんか誤解されるような事、言うたんやるか。）

「あ、あの……。」「詩織がもう一度口を開こうとした時、良太に右手を掴まれた。

「詩織ちゃん、やつぱり、帰ろう！真琴だけならまだしも、母さんも父さんも冗談が過ぎるんだよつ。ふざけすぎなんだよつ。詩織ちゃん、こまってるじゃないかっ！」

良太はムツとした顔で、詩織の手を引っ張ってソファから立ち上がろうとした。

良太の怒りもお構いなしで、真琴も、父も母もお腹を抱えてヒーヒー笑っている。

「あははははっ。ごめんごめん。冗談だよ。冗談だつてば。」「真琴は笑いすぎて涙まで出ている。」

「ったく。せつかく詩織ちゃんが真面目に話してるのにさ。」「いい加減にしないと、マジで帰るぞ。」

「わかったてば。」「で、通学電車の中でどうしたの？くすくす笑いは、まだ止まらないが、3人は詩織の話に耳を傾けた。」

詩織は、良太に出会ったいきさつを話して、大阪から出てきたばかりの自分がこの街に不慣れで、親しい友達も居ないので、良太が親切で街を案内してくれたと説明した。

「そうなんだ。」「で、今どこ住んでるの？」

「はい。叔母の家です。」「住所を告げると、そこは昔からの高級住宅地なんだよと良太の父親が教えてくれた。」

「じゃ、曜子ちゃんちの近所だね。」「うちのバンドのボーカルが、そのあたりに住んでるんだ。」

「真琴さん、音楽されてるんですか？」

「うん。アタシはベースで、あとはピアノとドラムがいる。」「ギタ―担当は、今留学中なんだ。」

真琴は、今度ライブする時は招待するから、兄貴に連れて来て貰え

ばいいと言ってくれた。

詩織は、是非行って見たいと思った。真琴達の演奏を聞いてみたかったし、そうやって、山田と会う口実がひとつ増えると、それだけで明るい気持ちになれる。

良太の母の心づくしの料理は、どれもとても美味しくて、最初は硬かった詩織の表情も、食事が終わる頃にはすっかり和らいでいた。

大阪の実家では味わったことの無い、楽しい食卓には笑い声が絶えなかった。

お客さんだからいいよと言われたが、詩織は是非にとお願いして、真琴と一緒に後片付けをさせてもらう。

「詩織ちゃん、兄貴の事、よろしくね。」泡のついたスポンジで皿を洗っている真琴が、ボソリと言った。

「え？」隣で皿を拭いていた詩織が、真琴を見上げる。

「アイツ、見た目あんなだし、不器用だけど、結構いい奴でさ。だから、詩織ちゃんみたいな彼女が来て、アタシも嬉しいんだ。」

「真琴さん……。」わたし、お兄様の事、大好きなんです。でも……。

「兄貴もあのとおり詩織ちゃんにぞっこんだから。」

「そ、そんな。」山田の気持ちが変わらなくて、正直なところ、真

琴の言葉を鵜呑みにはできないでいる。

ただ、ひとつ確かなのは、自分がどれだけ彼を想っているかということだけ。

「多分、わたしだけがお兄様にぞっこんなんです。」

「詩織ちゃん……。」今度は真琴のほうに驚いた。

(もしかしてこの2人、余りにも鈍すぎて、お互いの気持ちに気付いてないのか?……。)

「はあく。」真琴はため息をついた。　　「たたく、手間のかかるラブラブカップルだなあ。」

(ま、いいや。暇つぶしに面倒見てやることにするか。)

でも……そうだな。しばらくは2人で頑張ってもらおうか。

兄貴アイツがこの状況でどこまで辛抱できるか見てみたいしな。

(クククッ。面白くなってきたな。)

詩織には、なぜ真琴が急に、腹黒っぱい笑いを浮かべたのか、さっぱりわけがわからなかった。

良太と詩織は、今ここに、最強の（そして若干、意地悪な）味方を  
得たことになるのだが、本人達は全くそのことに気付いていなかっ  
た。

漫 1 (前書き)

経理の吉井さんの恋バナです。

ちよつと寄り道です。



昼休みに携帯をチェックすると、弁護士からの着信履歴があったので、澪は急いで電話をかけなおした。

予想通り、電話の内容は夫が澪の申し立てを全面的に受け入れ、離婚が成立したという報告だった。慰謝料も請求どおり支払われるとのことだ。

3年半の結婚生活が、今日で終わった。少々複雑ではあるが、肩の荷が降りたという気持ちがいよいよ大きい。

”先方は最後まで、もう一度会って話しがしたいとおっしゃってました。”

”そうですか。でも、申し訳ないですが、”

”もちろん、当初からお話いただいたとおり、今後、吉井さんが先方と会う事は無いとお伝えしておきました。”

”ありがとうございます。あの、いろいろお世話になりました。”  
そう言って、通話を終えた。

就職して3年が過ぎ、ちらほら友人の何人かが結婚するという話を聞き始めた頃、友人の紹介で夫に知り合った。

優しい雰囲気、穏やかな人というのが、初対面の時の印象だった。

3歳年上の商社マン。学生の頃付き合っていた同級生よりも大人で、スマートで話し上手で、何もかもが素敵に見えた。

夢中で彼に恋していたと思う。

付き合って半年で結婚しようといわれたときは、幸せすぎて、夢を見ているようだった。

そして、確かにそれは夢のようなものだった。

結婚して、しばらくすると、見たくもない現実が澪の目の前に現れた。

結婚前から付き合っている女がいる。そんな噂がやがて耳に入ってきた。

相手は夫よりかなり年上の、子供のいる、離婚暦のある女性らしい。

帰宅の遅い夫を問い詰めると、案外あっさりと認めた。

そして、相手とは腐れ縁で時々会うことは会っているが、結婚生活には、全く影響は無いからと開き直ったのだ。

裏切られた澪はショックでどうにかなりそうだったが、それでも夫を愛していた。

相手と別れて欲しい。この結婚を大切に考えて欲しいと泣いて訴えた。

夫は、わかった。今度こそ相手ときっぱり別れると約束した。

漣は、それを信じた。実際は信じようと努力した。

夫の顔色をうかがい、まるで腫れ物のように気を遣う毎日。

どうしたら自分だけを見てくれるのかと思い詰め、夫の言動にはいちいち神経を尖らせた。

しかし夫の約束は口ばかりで、彼女と別れたようには見えず。

帰宅の遅い日は、夫の足音を息を殺して待っていた。

それでも漣はどこに行ってたのかと、訊けなかった。

同じ問題を蒸し返して、不毛な問答を繰り返す気力は、もう残っていなかったのだ。

その後も、奴は相変わらずだと、漣に忠告してくる夫の友人も何人かいて……。

もしかしたら、愛されて結婚したのではなく、実際は見栄っ張りの夫が、ただ単に世間体の良い妻が欲しかっただけではないか。

そう気付いた時は、身体中の力が抜けてしまった。

「離婚したい。」とうとう漣が夫に告げたのは、半年前。

体重もごっさり落ちて、薬に頼らないと、眠れなくなっていた。

今の自分は、本当の自分じゃない。私はこんなに情けない女じゃ

なかった。もつと幸せで、もつと明るくて、楽しい女だった。  
ある日ふと、このままでは自分の人生がダメになると怖くなった。  
若いうちにやり直したいと思えたとき、ようやく吹っ切れたんだな  
と思えた。

夫はあきれれるほどろたえ、離婚には絶対に応じられないと言った。  
まるで溲がいつでも夫を受け入れると思ひ込んでたかのように。

溲には逆にそれが不思議だった。こんな不誠実な夫を、いつまでも  
忠実に思い続ける妻が居ると本気で思ってたんだろうか。

その日のうちに、夫が会社に出かけている間に荷物を纏めて、新婚  
生活を送ったマンションを後にした。

離婚になかなか踏み出せなかったのは、結婚を祝福してくれた両親  
や親戚、友人に顔向けできないと思っただし、やはり彼の事が諦め切  
れなかったから。努力すれば自分だけを見てくれるようになるので  
はという希望を捨て切れなかったから。

幸い、結婚を秘密にするつもりではなかったが、子供が出来たらす  
ぐに辞めるつもりだったので、名刺を作り直すのももったいないと、  
会社では旧姓のまま通していた。勿論結婚したことを秘密にして  
いたわけではないので、既婚者であることを知っている者は多い。

夫に離婚を切り出した事を、家族に報告すると、両親も姉も意外と  
あっさりと受け入れてくれた。

もう少し頑張ってみるといわれると覚悟していたが、皆一様に口を  
そろえてさっさと帰って来いと言ってくれた。

「子供が居なくて、よかつたじゃない。もし出来てたら、少々の事じゃあ、別れられないからね。」3人の子供達の母である姉の言葉は重い。

「そうよね。結婚を祝って下さったお友達や親戚には、申し訳ないけど、これから一生信用できない人と一緒に居ても、辛い思いをするのはあんただからね。」まあ、今後は、見た目や雰囲気だけで男を判断するもんじゃないって教訓を得たわね。母も、澪にちくりと釘を差しながらも、最後には味方してくれた。

父親が知り合いの弁護士に頼んでくれて、代理人として離婚を受け入れるように交渉を進めてもらった。夫は何度かもう一度やり直したいと申し入れてきたが、澪は頑なに拒み続け、そしてやっと今日、離婚が成立したのだ。

なんとなく、今日は真っ直ぐ帰りたくないな。そんな気持ちで午後  
の業務をこなしていた。

目の端に、ある人物の姿が映ったのは定時近くになってから。

そうだ、今日は金曜日。

「山田君！」さっとデスクから立ち上がり、前と同じように人差し指で呼び出した。

「なな、何でしょう……。」施工部の新人君は、気まずそうに目をそらしている。

「いいから、ちょっと。」オフィスの扉をあげ、廊下に出る。

山田もしぶしぶながら着いてきているのがわかった。

(あの可愛い女の子が会社に訪ねてきてから一ヶ月近く経つんだな・  
。。。。)

廊下の突き当たりで、振り向くと、山田も立ち止まった。

不安な面持ちで、大きな身体をモジモジさせている。

彼、現場で鍛えられて、どんどんいい顔になってるな。漣は何だかまぶしい気持ちで目の前の若い男を見上げた。

「山田君、久しぶりねえ。彼女・・・何てったっけか、そうそう、倉田さんとは順調？」

「はっ！そ、それは・・・いや・・・はい。まあ、そうですね。まあ、お蔭様で。」なにやら顔を真っ赤にしてぼそぼそ答える。

「よかったじゃないの！あんな可愛い子つかまえちゃってさ。ったく。上手いことやっちゃって！」

「いや〜。そんなんじゃないですよ。俺はただ・・・でも、吉井さんが彼女に声かけて下さったんですよね。詩織ちゃんも吉井さんに親切にして頂いたって凄く感謝してました。」

「詩織ちゃんだったさ〜。この〜。羨ましいぞ！」バスつと一発、山田の腹にパンチを入れる。

「うつつ。そんなことないですよ。」大きな身体を縮めるようにして、照れまくっている姿が可愛い。

「ところでさ、今日2人で飲みに行かない？」

「へ？お、俺とですか？」

(なんでだよ)。吉井さんやっぱり俺の事……？イヤイヤ、そうじゃないだろ。多分違うはず……。( )

「ん！今日は何となく、ぱーっと騒ぎたい気持ちなんだ。」お姉さん、奢っちゃうからさ。

訳知り顔の女友達に愚痴りながら、荒れたお酒を飲む気にはなれなくて、この幸せオーラ全開のとぼけた奴と楽しく飲んでみたいなと思ったのだ。

「でも……。」

「いやじゃないの。なによ！ついこないだは”遠慮なく召し上がって”なんて言ってたくせに！」

あー、いいのかな？”詩織ちゃん”に言いつけちゃおうかな？

「わわわわ。「やばいよ俺！まさに口は禍の元だよ！」

「じゃ、決まりね。「今日は意地でも定時で上がるから、一階のロビーで待ち合わせね。」

慌てふためく山田を残して、漣はさっさとデスクに戻っていった。



## 漣 2

ア、アタマ痛い……。分厚いカーテンの隙間から、ぼんやりとした夜明けの光が差し込んでいる。

ん？これなんだ？

腕枕……。か。もう一方の腕は、漣のお腹あたりを後ろからしっかりと抱き込んでいる。

（ああ、そーだった。昨日、わたし。）

それにしても、背中に男の人のぬくもりを感じながら、目覚めるなんて、一体いつぶりだろう……。

（なんか、癒されるわぁ。）

漣はうつとり目を閉じた。適度な疲労感で、いつになくぐっすり眠れたようだ。

はっ。違う違う！ そうじゃなくて！

なだれのように、昨夜の自分の行動が鮮明な映像となって押し寄せてくる。

それは、アルコールがすっかり抜け切った今となっては、あまりにも刺激が強過ぎた。

金曜日、定時退社して、新入社員の山田を半強制的に連れ出し、駅

のほうに2人で歩いていると、ばったり施工部の松永主任に会ったのだ。

「主任も是非一緒に！」綺麗どころの先輩女子社員と2人で飲みに行くという絶好の機会を自ら放棄し、山田が縋り付くような形で松永主任を飲み会に引き入れたのだ。

そんな山田に、漣は苦笑しながらも、ご一緒しませんか？と主任に声をかけた。

部署は違うが、いつも冷静で仕事が出来、上司からも部下からも頼りにされる存在。

殆ど話をしたことはないが、いかにも仕事が出来そうな、知的で落ち着いた大人の雰囲気、なんとなく素敵だなあと常々思っていたから。

漣は、初めからハイテンションで、飲みながら自分でも、わたしつてば、はじけてるなあなんて、ヒトゴトみたいに思っていた。

ひとしきりはしゃいで。

山田は案外お酒に弱かったのか、早々に一次会で抜けて、気がついたら松永主任と2人で飲んでいた。

『その後、どうなったか・・・覚えていない。』

と言えたらどんなに気が楽だろう。

残念ながら、妙に細かなところまでしつかりと覚えている。

「主任のおうちに連れてって。」

2軒目に行ったバーを出たところで、主任の上着の襟にぎゅっとしがみついで、おねだりしたのだ。

頬をシャツの胸のところに押し付けると、驚いたのか、一瞬身をかくたくして、それから「一体どうしたんだ？」と呟いて、ぎこちなく頭を撫でてくれた。

主任の胸に顔をうずめたままの漣はその問いかけには答えなかった。

バーのカウンターの隣で、何杯目かの甘いカクテルを飲みながら、主任の日に焼けた大きな手と、きれいに手入れされた爪を見ていたら、すっかり”そんな気分”になってしまっていた。

自分から男の人を誘ったことなんて、今まで一度も無かった。

あの時の自分は、確かにどうかしていた。それは認める。

その後、タクシーで主任のマンションに向かった。

玄関の扉を閉めた後、主任は気遣わしげに、「本当にいいのか？」と聞いてくれた。

今ならまだ間に合うよと。

漣は首を横にふり、黙ったまま靴を脱いで部屋に上がりこんだ。

『その後の事は、覚えて無い……。』

と言える権利が、どこかの店で売ってるなら、貯金を全部はたいてでも買いたい。

残念ながら、全部覚えている。

主任は、優しく、そして、情熱的で。澁をまるで恋人のように扱ってくれた。

あまりにも満たされて、逆に泣きたくなった。

(それにひきかえ、わたしは……。) そこまできて、慌ててバタンと昨夜の記憶の扉を閉じた。

分厚いカーテンの引かれた、暗い部屋の中で、自分のものではない布団に包まれ、あれこれ考えていると、かすかな寝息をつなじに感じた。

(このまま黙って、こっそり帰ってしまおう。(でもその前にトイレに行きたいな。喉も渴いちゃった。

温かい腕の中からそっと抜け出して、裸のまま寢室を後にした。

(やばいよ。部屋が暗すぎて服も下着もみつからない。(

トイレに行つて、キッチンで水を飲んだ後、真っ暗な寢室に戻つて、手探りで服を探している。

(とにかく音立てないようにしないと・・・)

裸で這い蹲っている姿を見られたくない。

「ん？起きたのか？」まだ眠そうな声が出た。

(げっ！まずいつ。(主任がとうとう起きちゃったよ。

「吉井？大丈夫か？」ベッドが軋む音がして、主任が起き上がる気配が出た。

「は、はい。あの、お、おはようございます。」

「明かりつけようか？」

「無理です。す、すみません。まだ服がっ。」あせりまくって手探りする。

「ほら、これでも着てる。」クローゼットのほうで、引き出しを開け閉めする音がして、Ｔシャツとジャージの短パンを投げつけられた。

急いでもそもそと頭からＴシャツを被る。

シャツ、シャツとカーテンを引く音がして、部屋が明るくなった。

(气まずいです。。。) 27年間の、わたしの人生、こんなに气まずい瞬間で、今まであったっけ？

今がMAX？

暢気にそんなことを考えてる場合じゃないのに、あきらかに現実逃避してる自分。

「シャワー浴びるか？」

「は、はい。すみません。それと、あの、主任、わたし。。。」

「後で話そう。とりあえず腹減ったし。」そう言って、新しい歯ブラシとタオルを渡された。

シャワーを借りて、歯を磨いて、借りたTシャツと短パンをまた身につける。濡れた長い髪は、くるりとひとつにまとめて、ピンで留めた。

キッチンに行くと、コーヒーのいい香り。

テーブルの上には、サンドイッチと菓子パン、ヨーグルト、サラダ、ソーセージと卵、牛乳とオレンジジュース等、食べきれないほどの食材が入ったコンビニの袋があった。

「普段はあまりここで食べないから何も無くて。吉井がシャワー浴びてる間に、隣のコンビニ行ってきた。」

「あ、すみません。どうぞお構いなく。」

(そうだ、タクシー降りるとき、チラッと見た。確か、主任のマンションの隣に、セブンイレブンあったな。)

ぼんやりしていると、主任が声をかけてきた。

「俺もシャワー浴びてくるから、その間、卵とか適当にお願いできるか?」

「わかりました。」

フライパンと、調味料の場所を教えると、主任はさっさとシャワーを浴びに出て行った。

(はあ)。もう、このままトンスラしたいよ。)

心の中でばやきながらも、プレーンなオムレツを焼いて、ソーセージを炒めた。

しばらく使ってなさそうな皿が見つかったので、一応洗ってから、料理を載せた。フォークはどこかわからなかったので、主任にお願いすることにして、椅子に座って、オレンジジュースをグラスに注いだ。

通勤便利な場所に建つ、広いリビングのある、2LDKのマンションは、一人暮らしには少し贅沢に思えた。でも、誰かと住んでいるような形跡はない。

(ていうか、主任が誰かと住んでたらこんなことにはならなかったし……。)

「先、食べてて良かったのに。」タオルを肩に引っ掛けて、シャワーを浴びた主任がキッチンに戻ってきた。

一見冷たそうな外見だが、クスリと笑うと、目じりの皺が色っぽい。少し長めの髪からは、まだ水滴がぼたぼた落ちている。

Tシャツとジーンズ姿の主任はスーツ姿の時より、ずいぶん若く見えた。

「はあ。あの、フォークはどこですか？」

ぼけっと主任に見とれていた自分に気付いて、顔を赤らめる。

教えられて、シンク横の引き出しから、フォークを二本取り出した。



静かな朝食風景。

何年も過ごした夫婦のような。

会話も無く、ひたすら目の前の皿を見つめる。

「着てたものが、見当たらないんです。」 澪がとつとつ切り出すと、主任はあたりまえのように、「あ、あれ、洗濯中。」と言った。

「へっ？」 目をまるくして目の前の男を見つめる。

(いつの間にか……！……！……！)

「天気良いから洗濯しようと思って。洗ってよさげなモノばかりだったから、ついでに一緒に放り込んでいた。」

「はあ確かに。お手数かけまして、すみません……。」

(どつりでいくら探しても無いはずだよ……)

ぎこちない沈黙の中、朝食と後片付けを済ませた。

洗濯が終わるまで、何もすることが無いので、なんとなく二人でリビングに移動して、2人がけのソファに落ち着く。

そのときの澪の頭の中は、いかにすばやくこの場から退散できるかということしかなかった。



「吉井、悪いけど塗ってくれないか？薬。」手が届かないからさ。そう言いながら、主任は着ていたTシャツを脱ぎ始めた。

「うっ。」その部分、もしかしたらスルーしてくれるかもと、淡い期待を抱いていたが、やはり現実は甘くなかった。

「やっぱ、ちょっと沁みるわ。」ブツブツ言いながら、背中を漣のほうに向ける。

「うげっ！」ここ、これ、わたし・・・が？

程よく筋肉のついた、日に焼けた背中には、くつきりと深い爪あと。渡された薬を、背中 of 傷に塗りながら、今この瞬間、自分だけトリップして異世界に飛ばされますようにとちょっと神様をお願いしてみた。

（そんな都合良くは行かないわな。）とほほ。

「さんきゅ。」傷薬を塗り終わった後、振り向いた主任の右腕の上のあたりを見て、さらにうるたえる。

漣のつけた歯型が痛々しい。

もう、逃げられないし、すっとぼけるわけにも行かない。

行きずりの相手というわけではなく、同じ会社の社員である。

それに、直属ではないが、一応上司でもあるのだ。

これから何度でも社内でも顔をあわせる機会があるだろう。

この際、納得して貰えるまで、誠心誠意謝るしかない。

澪は覚悟を決めた。

「主任、本当に申し訳ありません！こんなに、傷つけちゃって。本当に……。」

がばつとソファから降りて、床に座って頭を下げた。殆ど土下座状態である。

「そうだな……。吉井、なんでこんなことしたのか、説明してくれないか？」

妙に静かな口調に、かすかな苛立ちのようなものを感じた。いっそ怒鳴られるほうがましとさえ思ってしまう。

「はあ。あの、なにを申し上げたとしても、言い訳になっちゃいますが、でも、もし聞いていただけるなら、きっちり説明させていただきます。ご了承ください。」

こうなったら、仕方が無い。納得してもらえるかわからないけど、こちらの事情だけはわかってもらおう。

「じゃ、説明してくれ。」

「はい。あの、わたし、半年……。いえ、今更見栄を張ってもしかたないですね。そう、8ヶ月以上、こういうこととしてなくて。ま、所謂いわゆるご無沙汰というか。」チラツとソファーに座る主任を見上げる。

「……………」主任は黙って腕を組んで、澁の話を聞いている。

「それで、まあ、昨日は何だか、主任がお上手だったのも勿論あるんでしょうが、かなり気持ちが悪くなっちゃって。」こんなコト、なんだか言いにくいなあ。でも、主任はちゃんとしたを説明を求めてるわけだし。

目を伏せて、言葉が続ける。

「で、わたし、一旦声出しちゃうと、音量調節が出来ないタイプで。……相手が、恋人だったら、キスしてとか適当になんとか。でも、さすがに恋人でもない主任に、自分からするのは、いかななものか。でも、良く考えたら、それ以上の事お願いしちゃってたわけですが、そのうちに、いよいよ我慢できなくなりました。思わず目の前の腕にガブツと……。あ、背中の傷もそんなわけで。つい。」

「所謂、苦肉の策っていうところでしょうか。あ、使い方ちよっとおかしいですか？と、とりあえず、本当にすみませんでした！」

もう一度手について頭を下げる。

「……………」

勇気を出して、もう一度主任を見上げると、啞然とした表情だ。

沈黙が続く。

「あの、納得、していただけましたでしょうか。」「今の説明で。

恐る恐る訊いてみた。

「そこじゃないんだけど。てか、お前バカだろ。」「

「なっ！じゃ、どなんですかっ！？」面と向かってバカと言われて、さすがにムツとする。

「だ・か・ら。はあ。．．．誰がお前の赤裸々な性生活や性癖について、事細かに語れと言っただ。そんな事、聞いてねーし。」

「へ？違うんですか？」だって．．．さっき．．．

「なんで、こんな無茶したのかと聞いているんだよ。なんで好きでもない男と寝たのかって聞いているんだ。」なにが、音量調節だ。マジで聞いてねーし。そんな事。

「そそそ、そうだったんですか．．．。」「自分の勘違いに頭がくらくらする。

「良くそんな恥ずかしい話、そんなに真面目に語れるな。」「ある意味尊敬するよ。」

「どどどどどつしよう．．．。」「もう、恥ずかしすぎて、顔が真っ赤になるのがわかる。」

「何が”お上手”だ。俺は別にピアノ弾いてたんじゃねーぞ。ったく。」

主任がブツブツ言う声が聞こえてくる。

(いつそのこと会社、辞めちゃおうか。(もう、二度と主任の前に姿を現すことの無い世界に行きたい。)

そんなことをチラリと考えながら、両手で顔を覆って、うづくまる。

(もう立ち直れないよ)。恥ずかしすぎて。(

しばらく沈黙が続いたが、それでも主任は追及の手を緩めるつもりは無かつたらしい。

「……で、なんでだ？話してみろよ。」

溥は顔を覆う手はずして、真っ直ぐ主任のほうを向いた。

「わたし、離婚したんです。昨日。」

「元夫には結婚前から女の人がいて。」

「……。」

「離婚がやっと成立したのに、どこかで彼の事をまだ少し引きずっている自分がいて。それが嫌だったんです。」

(言わないと。それがどんなに気まずくても。この人にはごまかし

は効かない。」

「昨日、2軒目の店で飲んで、主任の手を見てたら、なんとなくこの人だったら彼を忘れさせてくれるかもって。」

「わたし、利用したんです。主任のコトを。」

「……………」主任は黙ったままだ。

「申し訳ありません。言い訳できません。わたし、最低ですね。」  
「めんなさい。」

いつの間にか、涙が頬を濡らしていた。

情けないやら、切ないやらで、泣くのをやめられない。

あれから一度も泣いてなかった。元夫にすがり付いて泣いた時から一度も。

床にへたり込んで、止まらない涙を拭っていると、突然抱きかかえられて、ベットに寝かされた。

「しゅ、主任……………」なんで、服脱いでるんですか？

「忘れさせてやるよ。忘れたいんだろ？」そう言って、濡の着ていたTシャツも脱がせた。

「わわわわ、あの、でも……………」

「声出していいから。もう嘔むなよ。」そう言って、濡の上に覆い



かぶさってきた。

「ちょっと、待ってください。」

「無理。」

「あの。」

「黙れ。」

主任のキスは、強引なのに甘くて、漣は頭がクラクラし始める。

背中を確かめるように、そっと指で撫でた。

「主任？」キスが別の場所に移ったので、漣はようやく声が出せた。

「ん？」

「忘れさせて下さい。」

「吉井、お前の下の名前は？」

「みお。漣です。」

「漣、わかったから、もう泣くな。」

そう言っつて、そっと触れるだけの優しいキスをする。

一旦唇が離れて、それが気に入らなくて、腕を伸ばして主任の頭を引き寄せた。

今度は澪からキスをする。

主任はそれから、約束どおり全部忘れさせてくれた。

## 木下の焦り

「これ飲んだら、出ようか……。」お代わりの飲み物を、バーテンに頼んだ後、木下は、バーカウンターの隣に座る女に囁いた。

コクリと頷いて、少し恥ずかしそうにまつ毛を伏せる彼女。

名前は……そう、たしか”マキちゃん”それとも”ミキちゃん”だったか。

「じゃ、改めて、カンパイ。」カチリとグラスを合わせる。

小さなラインストーンがキラキラ光る、派手な付け爪をチラッと見て、こいつもかとげんなりする。

(あんな尖がった爪のついた手であちこち触られるのもなあ。なんだかなあ……)

じゃ、やめとけよと自分で突っ込みを入れそうになった時、携帯が鳴った。

詩織からだ。

こんな時間に詩織から掛かって来るなんて、滅多にない。

失礼、と相手に断ってから、電話に出た。

「ごめんなさい、こんな時間に。」

「いいえいえ……。それよりどうしたんですか？」元気な声を聞いて、ホッとする。体調が悪くなったとかではないようだ。

「えつと……。あの……。ま、その、相談というか、なんと  
言うか……。うちなあ……。」

「はい。」隣の女からの視線を感じて、曖昧に微笑み返す。

「まずいな、完全に他の女からだど勘違いされてるな。」今夜のデザート”はおあずけか？

詩織が話し出すのを待っている間に、木下は右手のグラスを持ち上げ、ウイスキーの水割りを口に含んだ。

「キスしてって言うてみようかなと。山田さんに。」

絶妙のタイミングでの爆弾発言。

「ぶはっ！ゲホっ！ゲホっ！」詩織の口から、まさかそんな言葉が飛び出すなんて。

木下は思わず口の中の液体をカウンターに吐き出した。

隣の”今夜のデザート”の事は、この時点で完全に頭の中から消えてしまっている。

「い、今なんて?!」詩織が驚いて大丈夫かと言っているのが聞こえたが、かまわず話をする。

バーテンが飛んできて、カウンターを拭いてくれた。

「も〜。そんな大きい声出さんという。あんなあ、うちが、もうすぐ誕生日やって言うたら、何か欲しいものあるかって聞いてくれるってん。」いつもののんびりした口調で話し出す。

「それで？」

「ま、お約束やねんけどな、キスしてくださいって言うてみようかなって……あかん？」

「詩織様……。」頭がくらくらする。

頭では違つとわかつていても、木下の心の中では詩織は出会った頃の、幼い7歳の少女のままなのだ。

「女の子からそんな言われたら、木下やったら、ひく？ひかへん？」無邪気に聞いてくる。

「ひくとか、ひかないとか言う以前の問題ですね。」とにかく、明日そちらに伺いますから、いつものところで。わかりましたね？

「ほんなら、一緒に作戦考えてくれるんやね？」ありがと〜。  
木下は、やっぱり頼りになるわ。

「……わかりました。明日一緒に”作戦”を立てましょう。」ではもうおやすみなさい。

電話を切って、大きなため息をつく。バーテンに、今度はウイスキーのストレートを頼む。

「あの……。」「隣の女（名前・なんだっけ？）がためらいがちに声をかける。

「え？なに？」

「もう、お店でるんじゃない。」

「あ、もう帰るの？そう。じゃ、まだ終電間に合うし、気をつけて。」「そっけなく言うと、タバコに火をつけた。

ムツとして、席を立つ女を見送りもせず、タバコの煙を目で追いながら考えをめぐらせる。

詩織の初恋については、木下も気にはなっていた。だが、先日、さりげなく聞いたときは、メアドを交換したけど連絡が無いとしょんぼりしていたので、上手く行かなかったんだと、安心していただ。

あの様子では、あれから2人は何度か会っているのかも。

まずいな。

やはり最初に裏から手を回して、ぶっ潰せばよかった。あのヤロウ。

さてと、明日はちょっと忙しくなるな。

ウイスキーのストレートを一気にあおって、チェックの合図をした。



## 良太と木下

仕事を終え、現場事務所を出たときは、まだ7時半だった。

最近では、仕事の段取りの仕方や、チェックポイントが何となくわかるようになり、ミスをすることも無くなって来た。

それに伴い、残業も飛躍的に減った。

まわりも良太を戦力のひとりとして、見てくれるようになった気がする。ただのお荷物ではなく。

（詩織ちゃん、もうプレゼント決めたのかな。）

真琴が観ないと人生損をするぞとこり押しするので、先週詩織とふたりで例のカップル用プレミアチケットを買って、映画を観に行った。

怖い場面になるたびに、詩織がぎゅっと良太の腕にしがみついたので、良太としては映画の内容等は殆ど頭に入らずじまだった。

その後、ふたりで食事をしたときに、詩織の誕生日は来週の7月7日だと言われたのだ。

「詩織の、織は、織姫にちなんでつけたって父が言ってました。」  
恥ずかしそうに頬を染めて、18歳の誕生日を、一緒にお祝いしてくれませんか言ってくれた、可愛い人。



誕生日に何か贈らせて欲しいといったら、プレゼントについては、自分で決めたいと言われた。

当日は仕事を早めに終わらせてもらって、実家の車を借りて、詩織の学校に、放課後迎えに行く約束をしている。

そしてその日に、良太はいよいよ自分の気持ちを伝えようと思っ  
ている。

もう、これ以上自分をごまかせないし、今では、もしかしたら彼女も同じ気持ちなのかもと、かすかな希望を抱いているのだ。

自転車にまたがり、自宅のマンションに向かおうとしたとき、黒塗りの車がすーっと良太の目の前で静かに止まった。

ポカンと見ていると、後部ドアが開けられ、中から高級スーツに身を包んだ、恐ろしくハンサムな男が出てきた。

「山田良太さんですね。」

「はい……。」

「はじめまして。倉田製薬の木下と申します。」そう言って、名刺を山田に差し出した。

「わたくし、社長秘書をしております。恐れ入りますが、大事な話がありますので、少々お時間よろしいでしょうか？」

「はぁ？何でしょうか。」

「ここではちょっと・・・。」

「でも。」

「詩織様の事です。」

「詩織ちゃんのこと？」 倉田製薬つて、詩織ちゃんの実家が・・・？

「とにかく一旦車に乗っていただけませんか？」 言葉は丁寧だが、うむを言わせぬ態度である。

「わかりました。」 良太は自転車から降りて、車に乗り込んだ。

後部座席に木下と良太がおさまると、車は音も無く動き出した。

「後で、またこの場所にお送りさせていただきます。それでよろしいですか？」

「はい。」

「早速ですが、詩織様のご実家については、ご存知でしたか？」

「いえ。大阪から出てきたというだけで、具体的には何も・・・。」

「そうですか。詩織様は、倉田製薬の社長の一人娘でいらっしやいます。ご存知ですよね、会社の名前くらいは。」

「はい。」

「それならもう、わたしからはあまり言うことはありませんね。」

「……………」

「詩織様の事は、忘れて下さい。」

「それは……………どういづことですか。」

「詩織様と会う事を、今後は止めて頂きたいと申し上げているので  
す。それと、もし、詩織様に指一本でも触れるようなことがあれば、  
あなたはこの世から抹殺される。それくらいの覚悟はありますか？」

「抹殺？」

「あつという間に、跡形も無く。本気ですよ。」

木下の目つきを見て、良太の背中がぞくりと冷たくなる。

いつの間にか、車は元の場所に戻っていた。

「よろしいですね？」車のドアを開ける前に、木下が念を押すように良太の返事を促した。

「俺は、彼女の事、本気で想っています。だから、あなたとは何も  
お約束出来ません。」

良太は真っ直ぐに木下の目を見つめて、そう言った。

「詩織様はあなたの手の届くような人ではない。社会人のあなたなら、それぐらいは充分理解していただけたらと思ったのですが。」

「勿論、俺にはもつたいたないほど素晴らしい人だと思えます。でも、彼女自身が、俺に会いたくないと言うなら諦めもしますが、ただあなたに脅されたからと言って、あっさり諦めるつもりはありません。」

木下から冷たい怒りのオーラを感じて、良太の背中に冷や汗が流れる。

「あなたでは、詩織様をお護りすることも、幸せにすることもできない。私は詩織様が子供の頃から、あの方を近くで見守ってきた。あなたにはお知らせできない事情もありますし。どうかご理解下さい。あなたには無理です。」

「それは、やってみないとわかりません。俺は、彼女のためなら何だってするつもりです。」

「……………」今度は、木下のほうが、黙り込んだ。

お互い一步も譲らず、睨みあう。

突然ふつと、木下が視線を緩めた。

「わかりました。今回は引き下がらしましょう。ただし、軽はずみなことをして詩織様を傷つけたりしたら。」

「それは絶対に無いです。」

「……………」それでは、またお会いすることになるかもしれませんね。」

ため息混じりに、木下は車から降り、良太のためにドアを押さえた。自転車のところで、振り返ると、木下の乗った車が去っていくのが見えた。

（そうだったのか。詩織ちゃんはやっぱり……。）

一見おっとりしているが、物腰の上品さや、凜とした雰囲気、よほどいいところのお嬢さんなんだろうなとは思っていたが。

木下の前では、動じないふりをしたものの、詩織がこれほど大きな企業の社長の一人娘と知らされて、正直動揺している。

それに引き換え、自分はただの平凡なサラリーマン。

それも、入社してまだ3ヶ月弱の、ひよっこだ。

給料だってそんなに高くないし。仕事だったって、やっと人並みになれたかどうかだ。

（俺、何浮かれてたんだろう。）

やっと取り戻したかに思えた自信のようなものが跡形も無く消えていく。

だからと言って、ここで身を引くことが出来るかと自問するが、答えは否だ。

詩織ちゃんが、もし俺の事少しでも好きでいてくれるなら、俺はどんなことをしても、一緒にいたい。

仕事だつてもっと頑張るし、仕事に役立つ資格が取れるよう勉強だつてする。

ただ何もしないまま、彼女を諦めるなんて出来ない。それだけは確かだ。

（それにしても、木下さんが言っていた、俺の知らない事情ってなんだろう……。）

心の中のもやもやを抱えたまま、良太は帰途についた。

## FIRST KISS

「倉田さんってば、何だかいつもよりご機嫌だね。」お昼休みに、隣の席から、おかつぱ頭と丸い黒縁メガネがトレードマークの慈子ちゃんいっこが、詩織に話しかけてきた

「え？そうかな・・・。」

「なんか、良いことあったの？ね、誰にも言わないからさ、教えてよ。」

「うん・・・あのね、好きな人が・・・今日わたしの誕生日だから、その人が迎えに来てくれることになって・・・。」もじもじしながら説明する。

「なっ！ここに？倉田さんの彼氏が迎えにつ！見たい見たいよ！」慈子ちゃんの叫び声がクラス内に響き渡り、あっという間に詩織はクラスメートに囲まれた。

「倉田さんってば、彼氏いたんだ。」ね、大阪の人？

「ねね、どんな人？早く教えてよ。」カッコイイの？学生？

皆、口々に質問し始めた。

矢継ぎ早に投げかけられる質問に、恥じらいながらも素直に答えているうちに、午後の授業が始まり、続きは後でということになった。

でも、そのときには既に、慈子ちゃん達の執拗かつ巧みな誘導尋問で、今日、誕生日のプレゼントとして、キスをねだるつもりとまで白状させられていた。教室内は、大盛り上がりである。

このぶんでは、山田が迎えに来る頃には、校門の周りには、興味津々のクラスメート達が鈴なりになっているだろう。

(あんまり騒がれたら、山田さん困りはるやか……)

でも、山田さんの事をクラスメート達にちょっと自慢したいって気もするし……。

じりじりしながら、ホームルームが終わるのを待ち、足早に校門に向かった。

後ろから、ぞろぞろとクラスメート達がついてきているのは、気付かないふり。

「山田さん！」校門から少し離れた路上に、ファミリータイプの白い車を駐めて、山田が立っているのが見えた。

「詩織ちゃん。」紺色のブランド物のポロシャツに、ベージュのチノパンをあわせている。良太にしてはかなり頑張ってお洒落をしたつもりだ。

「え」。

「マジですか？」

「あの人……なの?!」



詩織のクラスメートだけでなく、下校中の他のクラスや学年の生徒達も、一体何事かと、いつせいに良太を見つめている。

良太としては、これほど大勢の女子高生に取り囲まれ、そしてガン見されまくり、とてもじゃないが身の置き場も無く。

とにかく一刻も早くこの場を立ち去りたくて仕方が無い。

「いくら恋は盲目だったって……。」

「だよねえ……。」

どんなイケメンが登場するかとわくわくしていた詩織のクラスメイト達。

正直、かなり肩透かしをくらったといっても過言ではない。

「シーーーーーっ！ 静かに！でもさ、見てよ、あの倉田さんの恋する乙女オーラ全開の笑顔！」慈子が囁く。

「倉田さんのあんな顔、初めて見るね。」

「……なんか、すごく雰囲気良くない？あの2人。」

「だよね、ね、なんだか応援してあげたくなっちゃうね。」

「まさに、美女と野獣って感じかな。」

「だね、だね……！」

クラスの皆で盛り上がっている。

「し、詩織ちゃん、行くうか。」良太が詩織のために、助手席を開ける。

「ありがとうございます。」車に乗り込む瞬間、詩織はチラッとクラスメート達を振り返った。

「倉田さん！頑張ってる！」クラスの皆が声を合わせて励ましてくれる。

慈子ちゃんが、親指を立てて送り出してくれた。

詩織もにっこりしながら、小さく手を振って答える。

車が動き出した後、車内ではしばらく沈黙が続いた。

「ごめんなさい……。さっきのこと。クラスの皆が、山田さんの事どうしても見たいって。」

「え？そうだったのか……。ま、確かにちょっとビックリしちゃったけど。」

「わたし、話すつもり無かったのに。気付いたら、色々……。」

「詩織ちゃんが、なんて話したかちょっと気になるな……。」

「とっても素敵な人だって言ったんです。男らしくて、優しく、大人で。」

「詩織ちゃん……。」

（あ。運転してて、良かったよ。そうじゃなかったら、思わず押し倒してたかもしれないよ……。）

「だって本当のことだから。山田さんに、誕生日を一緒に祝ってもらえて、とっても嬉しくて。でも、ちょっと浮かれすぎかな。」

「あ、そうだ。お誕生日おめでとう。」さつきは、ギャラリーが多すぎて渡せなかったが、後部座席には、18本のピンクのバラの花束が置いてある。

「ふふつ。ありがとうございます。」

「プレゼント、決まった？一応駅前のほうに向かってるけど。色々お店があるから。」

「・・・あ、あの、プレゼント決まったんですけど、売ってないんです。お店には。」

「え？」

「お店には売ってないものが欲しいんです。」

「・・・手作りのものとか？」

「違います。」

「じゃ、なんだろう。俺で買えるものなら、いいんだけど・・・。」

「キスして欲しいんです。」

「!!!!!!!!!!!!!!」

車がグラツとゆれて、キキーツガツンと路肩に急停止した。幸い後続車が居なくて、事故にはならず済んだ。

「詩織ちゃん？」

良太は、助手席に行儀良く手を膝に乗せて、ちょこんと座っている可愛い人を、どう扱ってよいかわからず、ただただうるたえている。もう少して大事故になるところだったのに、まったく。

この人は。

そんな事言ったら、俺にどんな影響があるか考えもしないのか？

「ダメですか？」おずおずと、運転席のほうに視線を向ける。

「……………」先日木下に言われたことがちらりと頭をよぎる。

指一本でも触れたら…………。あの目は本気だった。

(やっぱり、木下の言うとおりやったわ。女の子から迫ったりしたら、男の人は興奮めするって、ほんとやったんやわ。)

先週、映画に連れて行ってもらって、怖い場面で、ぎゅっと腕にしがみついても、山田さんは嫌がらずにいてくれたから。もしかしたら、私の事少しは好きでいてくれるのかもって。

(木下が正しかった。キスは、女の子からお願いするもん違うんやわ…………。)

「えへへ…………。冗談ですっ！今のは嘘なんですっ！プレゼント、

ちゃんとお店で見つけてるんです。だから駅前連れてって下さい。  
「詩織は必死でその場を取り繕おうとした。」

「いいよ。」

そう言っつて、良太は車を発進させた。

駅前を通り過ぎ、高速に乗って、ひたすら走った。

行き先は決まっている。

「山田さん……、ここは？」

目の前に広がる海。

7月に入ったとはいえ、まだ夏休みではないので、夕方の砂浜は閑散としている。

海沿いの広い駐車場には、良太達の乗った車がぽつんと一台とまっ  
ているだけ。

エンジンを切った後、良太はしばらく海を見つめていた。

木下に言われたことを、何度も何度も考えて、自分なりに答えを出  
したつもりだ。

俺は、この人と一緒にいたい。詩織ちゃんの彼氏になりたい。

「こないだ、木下さんて人から、詩織ちゃんは倉田製薬の社長の一人娘だって言われて。」

「え？木下がっ、山田さんに？」

「俺とはつりあわないって、はっきり言われた。」

「そんなっ！そんなことっ。」

ひどいよ、木下。絶対許さへん。山田さんにそんな失礼なこと言うなんて。

孤独で、情けなくて、悔しくて、涙がこみ上げてくる。

木下のせいで、山田さんに嫌われてしまった。

（木下がそんなことするなんて、これから誰を信じたらいいのか・・・）

「だけどやっぱり、好きなんだ。詩織ちゃんの事が。」

「え？」

「詩織ちゃんの事考えるの、やめられないんだ。・・・最初は、兄と妹みたいに仲良く出来たらって思っただけ。でも、そんなのただのこまかしで。本当は、俺。」

「山田さん・・・。」

「彼女になつて欲しい。好きなんだ。これからもつと仕事を頑張つて、詩織ちゃんに相応しい男になれるように努力する。だから、俺を、詩織ちゃんの彼氏にしてくれないか。」

カチャリとシートベルトをはずして、詩織は運転席のほうを向いた。

良太も詩織と見詰め合ったまま、無言でシートベルトをはずす。

詩織の右手が、ハンドルに載せたままの、良太の左腕を掴んで引き寄せた。

「早く……早くして下さい。プレゼント。」そう言って、目をして、上を向く。

小さく息を呑む音がして、そのあと良太の大きな右手が、詩織の頬をそつと包んだ。

そのままじつとしていると、唇に軽く何かに触れた気がして、詩織は目を開けた。

その瞬間、ぐつと唇を押し付けられて、詩織はまた目を閉じた。

(今、山田さんとキスしてるんやわ……。)

両腕を伸ばして、山田の首にしがみつく。大きな身体から震えが伝わってくる。

狭い車の中で、何度もキスをしているうちに、息苦しくなってきた。詩織は大きくあえいだ。

「詩織ちゃん、だいじょうぶ？」良太が身体を離して、心配そうに顔を覗き込んだ。

こくんとうなずいて、上気した顔で恥ずかしそうに微笑み返す。

「まだ初心者やから、これからいっぱい練習せなあかんわ。」

すっかり我を忘れていいのか、詩織は素の言葉でしゃべっている。

(わっ！なんか、関西弁で可愛い。) 良太の萌えポイントがまた上昇する。

「ん。もいつかいして。本気のやつ。」運転席の恋人に、両手を伸ばす。

「詩織ちゃん……。本気のやつって……。まさか。」

(うわっ。)

今度は良太のほうに酸欠状態になって、ふらふらになった。



## 雨宿り

(あれから一週間……) 時間が経つのはあまりにも早い。

松永主任と”大人の関係”になつてから、2度ほど荷物を取りに帰つたくらいで、溇が自宅のワンルームマンションで過ごすことは無かつた。

初めて2人で朝を迎えた土曜日に、一旦は主任の車で送ってもらつて自分の部屋に戻つたが、次の日には、当然のように背中ของクスリを塗りに来いといわれ(無理なら、山田に頼むと暗にほめかされ)慌てて主任の元へ駆けつけた。

そして、そのまま何となく食事を作り家事を手伝い、気付いたら食費と鍵を渡されていた。

きつぱり断ればいいのだろうが、溇自身、主任と過ごす時間が嫌ではないから困るのだ。

嫌でないという表現は控えめすぎるかもしれない。むしろ一緒にいたい。

料理が出来ない彼のために、あれこれ栄養のあるものを作るのも楽しくて。

そして、食事の後片付けを終えた後、さっさと帰ればいいのに、ぐずぐずしてるうちに、いつの間にか主任の温かい腕の中で眠るといふパターンが出来てしまっていた。

主任は無口なたちらしく、一緒に過ごしていても特に会話が弾むわけではない。

でも滯にとつては口先ばかりの調子の良い言葉を聞かされるよりも、黙って寄り添って傍にいてくれる方が心地いいのだ。

（はあゝ。でも、もう終わりにしないと。）

背中傷も、そして痣になつていた噛み跡も、もうすっかりきれいに治つてきている。これ以上、一緒にいる理由はないのだ。

共に暮らす女性はいなくても、あれだけ素敵なんだもの。

付き合っている人ぐらいいるのだろう。

一度そういうことをチラツと訊いたら、「こんな傷で、他の女のところへ行けると思うか？」と怖い顔で叱られた。

確かにそうだなと、そのときは納得したが、良く考えると、傷が消えたら、もう他の女性のところへ行つても問題ないということになるのだ。

（鍵も返そう。これ以上未練がましく持っていたくないし。）

短い間だったが、着替えや化粧品などの私物を少し置いてしまっているの、少し大きめの丈夫な紙袋を用意した。

退社の際に、携帯をチェックすると、「8時には戻る」とまるで夫婦間のメールのような文が送られていた。

会社から直接主任のマンションに向かう。途中で夕飯の材料を買うとき、つい、明日の分まで買ってしまいそうになり、あわてて思い直して、今晚の分だけ買った。

一週間通った部屋に入り、夕飯の支度をして、先にシャワーを浴びて着替える。

お気に入りの、淡いベージュにくすんだピンクと深緑の花柄のカットソー素材のワンピースを着る。

髪の毛はいつものように、ひとつにくるっとおだんごにまとめた。

ここに来るのも今日で最後。

でも仕方が無い。

主任は元々わたしの事が特に好きだったわけでもなく、行きがかり上、同情で抱いてくれたんだから。

このままの状態を続けるのは、やはり間違っている。主任もわたしと同じ気持ちだろうし。

終わりにするなら早いほうがいいのだ。

この心地よい場所に居続けると、いつしか勘違いしてしまうに違いない。

主任の本当の恋人のような、そんな気になってしまっただろう。

そんなことになれば、また傷つくのは、わたし自身だから。

私はそんなに強くない。

今ならまだ、また独りに戻れる。

連絡どおり、主任が帰宅したのは、8時前だった。

「オカエリなさい。お疲れ様です。」エプロン姿のまま、笑顔で迎えた。

いつもより可愛く見られたいと、自分のずるい部分がひそかに顔をのぞかせる。

「先、ご飯ですか？」

「ああ、ありがとう。」寝室で着替えを済ませると、すぐに料理の並ぶ、ダイニングテーブルの席についた。

以前食べ物の好みを訊いたが、特に好き嫌いは無いといわれたので、魚、肉、鳥・・・とメインの素材を変えるようにして、出来るだけ野菜中心のメニューにした。

今日は、いつもよりおかずを数品多めに作った。

冷蔵庫から缶ビールを取り出して、グラスの隣に置く。

「なんかいろいろ沢山あって、美味うまいそうだな。ほら、漣も飲んで。」主任が漣のグラスにもビールを注いでくれた。

「いただきます。」 澁も、嬉しそうに、グラスを受け取る。

食事中、主任から話をするのはあまり無く、澁が一方的に話題を提供する。

内容は、やはり仕事の話が中心だ。

「現場のほうはだいぶ落ち着きましたか？」

「ああ、来週は設計のチェックがあるから、皆びりぴりしてるけど、今はもう、ずいぶん工程も追いついてきたから、何とか。」

「良かったですね。今日もチラツと見かけましたが、山田君、どんな顔になってますね。」

「アイツか……。」「クスリと笑う。 澁は滅多に見れない主任の笑顔が好きだった。

「アイツの一生懸命さを見てると俺も初心に戻るといっつか。」

そんな話をポツリポツリとしながらの、2人きりの食卓も今日で最後だ。

胸の奥がぎゅっと締め付けられながらも、いつも以上に明るく振舞う。

澁が夕食の後片付けをしている間に、主任はシャワーを浴びて着替えていた。

明日はお互い仕事が休みである。

場所をリビングに移して、簡単なおつまみを用意して、漑が特別に買ってきた白ワインを二人で飲んだ。

「このワイン、オーストラリアを旅行した時に、美味しいなって気に入っちゃって。重いのに、3本も買って帰ったら、日本でも売ってたんですよ。」

「そうか、飲みやすいな。たしかに。」

漑はいつもより早く酔いが回っていた。食欲が無くて、あまり食べられなかったのだ。

「オーストラリアには、いつ？」珍しく、主任から口を開いた。

「んん。えと、3年ほど前に。・・・新婚旅行で・・・。」

「そう・・・か。」 気まずい沈黙。

( 適当にごまかせばいいのに、あんたって、ほんとそういうところが融通利かないというか。 ) 自分のドジさ加減にあきれてしまう。

いたたまれなくて、グラスを一気に空にした。

「・・・もう忘れられた？」

「主任？」

「まだ吹っ切れないのか？」 心配そうに眉をひそめて、漑を見つめ

る。

「あの、わたし……。」

言わなきゃ。今、言わないと。これ以上心配かけちゃいけない。

すうつと息を吸って、真っ直ぐに主任の目を見つめる。

「わたし、主任のおかげで、彼のことちゃんと忘れることが出来たみたいです。……それに、主任のほうも傷がすっかり治ってきたようだし。」

「は？」

「だからもう、鍵、お返しします。もうここにいる意味がなくなっちゃったので。」

ぎこちなく笑って、リビングの隅に置いたカバンをとってきて、主任のマンションの鍵を取り出した。

かちりと小さな音を立てて、ソファの前のローテーブルに鍵を置く。預かっていた食費の残りが入った封筒もその横に並べた。

「主任にはお世話になりっぱなしで。ここで、主任のところまで、しばらく雨宿りさせてもらえたこと、本当に感謝しています。おかげで、なんとか前を向いて歩いていけそうです。ありがとございました。」わざと軽い口調で告げる。

ちゃんと笑えてるかな、わたし。

『これ以上一緒にいる時間が長くなれば、本気で好きになっちゃいそうなんです。』

そんな風に、素直に自分の気持ちを伝えることが出来たら、どんなにいいだろう。

(何でこんなに心が張り裂けそうなの?)

主任の表情は変わることなく、ただ、そうかと呟いただけだった。

「あの、まだ終電もあるし、帰りますっ。」 澁は突然、部屋の隅に、既にまとめてあった荷物を取りに行こうとした。

今はただ、独りきりの自分の部屋で、布団被って、思い切り泣きたい。

(もう少いで、涙腺やばいです。)

「おい、待てよ。」

振り向くと、主任がソファから立ち上がり、澁に近づいて、さっさと右手を掴んだ。

「明日送っていくよ。車で。」



「でも。」

「今日は泊まっていけよ。なあ、いいだろ？」引き寄せられて、ぎゅっと抱きしめらる。

主任はずるい。

こうやって主任の匂いに包まれただけで、わたしの身体全体が次に起こる事を期待して、痺れていくのを知ってるんだ。

でも最後に、もう一度抱いてもらいたい。

ずっと、覚えていられるように、もう一度だけ。

「ここに居ろ。」耳元で囁かれて、熱い身体を押し付けられて。

耳の後ろや首筋に触れるか触れないかのキスをされて。

濡はただもう頷くことしか出来なかった。

## 溥の逃走

まだ始発の電車も通ってない時間に、溥は静かに温かい布団から抜け出した。

ベランダのガラス扉から差し込む夜明けの光を頼りに、リビングのローテーブルに置かれたグラスと、皿をキッチンの流しに運ぶ。

一週間の疲れが溜まっているのだろう。この部屋の主はぐっすり眠っている。

リビングを出るとき、2人がけのソファーに視線がとまり、前の晩の自分達を思い出して顔が熱くなった。

これまでは、溥の嫌がる事は一度もしなかったのに、昨夜はもうこれ以上は無理だと言っても、主任は溥をなかなか放そうとはしなかった。

途中で気が遠くなって、いつ終わったのか覚えて無いくらいだ。

今もまだ、身体の節々が痛くて、けだるくて、足もがくがくする。

それでも溥は、グラスと皿を片付け終わると、身支度をして、そつと主任のマンションを後にした。

今日、もう一度、明るく別れの挨拶ができるかどうか自信が無いから。

運よく通りがかったタクシーを捕まえ、自宅マンションに戻った。

そして、一週間ぶりの自分のベットに倒れこむとそのまま泥のように眠った。

3時間ほどは眠っただろうか、目覚めて時計を見るとまだ朝8時過ぎ。

漣は、思い立って姉に電話を掛けた。今日は1人でいないほうが良いような気がする。

”お姉ちゃん？”

”どした、漣？　こんな早くに。”

”あのさ、今日お姉ちゃんどこ泊まりに行ってもいいかな？　突然だけど。”

”おいでおいで〜！　チビたちも喜ぶし。旦那は今日、休日出勤だから、わたし達、ずっと家にいるわよ。今から来れる？　お昼何が食べたい？”

”じゃ、今からそっち向かうね。ごめんね。突然。　お昼は、あとで一緒に買い物行かない？”

”おけ。じゃ、待ってるよ、気をつけておいでね。”

漣は急いで荷造りを済ませ、誰かに追い立てられるように自分のマンションから逃げ出した。

誰から逃げ出したかはわかってる。

それは、主任が追いかけてきてくれることを願ってしまう、未練がましい自分自身からだ。

まだ周りに田園風景が残る、郊外の一軒家に、姉は優しい旦那様と、6歳の女の子、3歳の男の子の双子と暮らしている。

最寄り駅まで車で迎えに来てもらって、可愛い姪と甥達から大歓迎してもらえると、心がずいぶんと癒された。

みんなで食料品をたっぷり買いこんでから、姉の家に戻った。

「離婚成立したって、お母さんから訊いたけど。」アイステイーを飲みながら、キッチンで姉と話をする。

「うん。先週、弁護士さんから電話があって、書類も送られてきた。」

「実家のほうに電話があつたの、知ってる？和也かずやさんから。」

「え？そうなの？」元夫の和也が実家に電話してきたなんて。

「お母さんが出たら、真剣な声で謝ってたらしいよ。自分のせいで申し訳ありませんでしたって。溼を幸せに出来なくてすみませんでしたって。でも、離婚届にハンコは押したけど、まだ溼に戻って欲しいようなこと言ってたんだって！おかしくね？」

「……。」 澪はなんていえばいいのかわからなかった。友人にも口止めしているし、引越し先の住所も、携帯電話の番号も元夫には知らせていないので、連絡しようがないのだろう。かといって、実家に電話してくるなんて。

何がしたいんだろう……。よりを戻すつもりなど、絶対に無いとはっきりと弁護士さんに伝えてもらったのに。

「なんだかねえ。そんな事言うなら、女つくるなって言いたいよねえ。」 姉も複雑な顔をしている。

「もう、終わったことだから。早く忘れたい。それが本音かな。」

「だよな。ごめんね。変なこと耳に入れて。てっきりお母さんから連絡あったと思ってたわ。ごめん。」

「ううん。後でお母さんに電話してみる。お母さんやお父さんにすつかり迷惑かけちゃって。」 母が、元夫になんて言ったか大体想像はつく。もう娘には関わらないでと言ってくれたに違いない。

その後は、子供達と夢中で遊んで、楽しい時間を過ごした。可愛い姪や甥っ子達と過ごしていると、幼い頃の、何の悩みもしがらみも無い真っ白な自分に戻れた気がする。

お昼はみんなでピザを焼いて、その後は風通しの良い部屋で川の字になって昼寝をした。

明日はみんなでプールに出かけることにする。

携帯はかばんの中に放り込んだまま一度も開いていない。

もし主任から連絡があったとしても、今のわたしには感謝の気持ち伝えて、もう大丈夫ですからと言っしかできない。それはもう昨日伝えたし。だとすれば、2人にはもう何も話すことは無いのだ。

今後は、社内で偶然すれ違ったりしても、今までのように会釈する程度の間柄に戻るのだ。

部署も違っし、主任は現場に居る時間が長いので、多分これからは殆ど彼の姿を見る機会は無いだらう。

それでいいと思う。滅多に会えないほうが、忘れるのも簡単だろうから。

次の日、姉に借りた水着を来て、姉夫婦と子供達と近所の市民プールに向かった。

ちびっ子達は、もう既にパパとプールへ入って遊んでいる。

日焼け止めを塗ろうと、澪が肩に羽織ったパーカーを脱いだとき、姉が息を呑む音がした。

振り向くと、姉がポカンと口をあけて、澪を見つめている。

「お姉ちゃん・・・？」

「アンタ、いつの間に彼氏できたの？」

「は？そんな。彼氏なんて、まだまだ先の……。」

「じゃ、なんで背中にキスマークついてんの？」

「まま、まじで？」慌てて背中を隠す。

「溼く。こら、白状しろつたらう。てか、キヤー！それ、はげしつ。  
妹をからかうチャンスを姉は絶対に逃さない。」

「ち、違つうのつ。そんなんじゃない。それに……もう終わ  
つたし。」

「は？終わった？」

「うん。終わりにしたの、昨日。もともと、和也さんを忘れるため  
にしばらく一緒に居させてもらっただけなの。」胸の奥がズキンと  
痛くなる。

言葉にすれば、何だか少し薄汚く感じる。

大人の関係。

そう、お互い最初から割り切って始めたはず。

姉は溼の話を黙って聞いてくれた。

「そうなんだ……。でもさ、同じ会社ってのは、何かと問題が  
多いから。これからは気をつけなよ。下手に深い仲になって、あと

あと揉めたり周りにはれたりすると、お互いマイナスになっちゃうからね。」

「大丈夫。主任はそんな人じゃないし。わたしもこれ以上迷惑かけるつもりはないの。」

「じゃ、いいけど……。でもさ、そんなに素敵なんだったら、その人に結婚してもらえば？独身なんですよ？」

「まさか！わたし、たった今離婚したばかりで。またすぐ再婚なんて考えられないよっ。それに、主任は付き合ってる人いるっばかったよ。」

「そうか……。ま、しばらくはシングル生活を満喫しないかね。いい男はいくらでもいるもんさ！若いうちに、遊んじゃえ遊んじゃえ！」明るく励ましてくれる。

姉がこのどこか不器用で天然な妹の事をどれだけ心配しているかわかっている。

明るい姉の存在がどれだけ澁には心強いかな。

感謝の気持ちでいっぱいになる。

「わたしもいつかは、お姉ちゃんみたいに元気なママになりたいな……。」

「何言ってるの！なれるに決まってるじゃないの。ま、その前に、今度こそ澁だけを大事にしてくれる人探そうね。」



「うん。そうだね。」

前を向いて頑張っていれば、いつかまた、自分の全てをゆだねたい  
と思える人に出会うかもしれない。

姉が背中にコンシーラーを塗ってくれている間、澪はそんなことを  
考えていた。

## 週末の過ごし方

朝目覚めた時、腕の中にいるはずの相手がない。

松永はため息をついて、ベッドから降りた。

昨夜は、突然溲に出て行くと言われ、頭に血が上ったらしい。

かなり無理をさせてしまった。

しんとした室内からは彼女の気配はすっかり消え失せていて、コトリとも音がしない。

（まさか、ひとりで帰ったのか？いや、朝食を買いに行っただけか。）

淡い期待を胸に、急いでリビングに向かう。溲の荷物は跡形も無かった。食器類が片付けられたローテーブルには、家の鍵と、食費の入った封筒が昨夜と同じ場所に置かれたままになっており、それがやけに腹立たしい。

（一体何のつもりだ。黙って出て行きやがって。）

今日は休みだし、2人でどこかに出かけようと思っていたのに。

今週は仕事が忙しかったので、平日はさすがに外出できなかったが、その代りこの週末にゆっくりデートしようと考えていたのだ。

）そのためにどれだけ仕事をがんばって終わらせたと思ってんだよ。）  
昨日の夜、漣にどこか行きたい所あるかと訊こうとした矢先に、話  
が変なほうにずれて行き、気付いたら有無を言わせぬ態度で、鍵と  
食費の入った封筒を返されていた。

（アイツの事だから、またどうせ、あさつての方向に思考回路飛ば  
して、独りで自己完結したんだろう。）

松永自身、今まで何人か真面目に付き合った女性はいたが、同年齢  
のキャリア志向の女性と付き合うことが多かったせいか、なんと  
なく誰とも結婚までにはいたらなかった。

仕事に熱中するあまり、結婚にまで神経が行かなかった時期もある  
し、自分がそろそろと思っけていても、その時の相手にそこまでの覚  
悟がなかったり。

恋人に”好きだよ”なんて甘いセリフを囁いたりするのはどうも苦  
手だし、去るものは追わない主義だったのも原因のひとつだろう。

漣は今までの交際相手にはいなかったタイプだ。仕事もちゃんと  
真面目にやっているが、どちらかというと家庭的で、控えめで、そ  
して少し甘えん坊で。年齢も10歳近く離れている。

そう、確かにきつかけは、”一夜の過ち”と呼ぶべきものだったか  
もしれない。

でも、今となつては、そんな事どうでもいい。

先週の土曜日に一旦漣を自宅に送ってから、ひとりで部屋に戻った後は、なんとかして、漣をまたここに居させたいと、それしか考えられなくなった。

一晩考え抜いた挙句、翌日になって、背中にクスリを塗る為だとか何とか馬鹿げた理由で呼び戻し、そして半ば強引に鍵と食費を受け取らせたのだ。

この一週間、どれほど帰宅するのが楽しみだったか。

玄関を開けると、必ず笑顔で迎えてくれて、温かい料理を用意してくれて。

そして手を伸ばして抱き寄せれば、いつでも甘いため息をついて、素直に柔らかい身体を預けてくれた。

2人で過ごす時間はとても穏やかで、優しく、そんな時、口には出さないが漣の元夫は世界チャンピオンレベルの間抜けだなとしみじみ思ったものだ。

いつでも漣の隣に居られる存在。

俺なら絶対にその権利を手放さないだろう。

元夫のことは、ちゃんと忘れられたと言っていた彼女。でもその

表情はどこか苦しそうだった。

そいつの事、忘れられたから、もう俺は必要ないのか？

それとも本当はまだ忘れられないから、出て行ったのか？

(普通に考えたら、わざわざクスリ塗らせるために、鍵と食費渡すわけないだろ。ったく……。それぐらい判れよ。)

何度か携帯に電話したが全然つながらず、苛立ちはマックスになる。

何で俺がこんなにイライラしないといけないんだ。

全部、あの、空気読めない鈍感女のせいだ。

手負いのクマのように、部屋中をうろろ歩き回る自分に気付いて、  
我ながら滑稽だと思う。

まあいい。

俺もこの週末、頭を冷やして、あの薄情な女をどうしてやるかじっくり考えるところ。

(誰がデートなんか連れて行ってやるかっ！)

半分以上やせ我慢だと自覚しながらも、しづしづながら週末の時間の使い方を変更することにした。

## 迷惑な誤解

澁は、いつも始業の40分前には出社している。

何本か通勤の電車を早めるだけで、ゆっくり座って来れるからだ。

会社のロビーも、まだ早いこの時間はひっそりとしている。

カツカツとヒールの音を響かせながら、広い空間を突っ切って、エレベーターのボタンを押した瞬間、大きな手がどんと肩に載せられた。

「おはよう。今日もお早いご出勤で。」低い声で耳元で囁かれて、びくっ！と身体が硬直する。

目をまるくして振り向くと、どす黒いオーラを背負った主任が冷たい笑みを浮かべて立っている。

「ななな、なんでっ！」この人、今日は現場じゃないの？

「はっ？自分の会社に来て何が悪い？」澁の肩から手はずす時、自分のほうへ身体の向きをかえさせた。

「い、いえ……。そんなことは。」主任の顔を見つめることが出来ず、おどおどしながら目を泳がせる。

エレベーターの到着を告げる音がしたので、一目散に乗り込もうとしたが、今度はがしっと腕を掴まれた。

「まだ早い。コーヒー飲むぐらいの時間はあるだろ。」主任は腕時計をチラッと見て、溻をエレベーター奥にあるパーテーションに仕切られた休憩コーナーに引っ張って行った。

「あの、でも……。」

「何にする？」硬貨を自販機に入れながら訊いてくるので、聞こえないようにため息をついて、”ミルクティーお願いします”と答えた。

「で……？」小さなテーブルに、向かい合わせに座ると、主任は腕組みしながら溻を見据えた。

「はあ。あの、土曜日はすみませんでした。黙って帰ったりして……。」

「それで？」

「え、えと。お疲れのようでしたので、わざわざ車で送っていただくのも申し訳ないと。」

「お疲れって、誰のせいだよ。」

「は？誰の……て。」わたし、責められてるの？でも……。

（でも金曜日の晩は主任が無理矢理……。）

「あの、わ、わたしが、悪いんですか？」ポカンとした顔で、主任



を見上げた。

「わかればいいんだ。」上司が、ダメな部下を諭すような口調。

(えー………???納得行かないよー……。なんでわたしのせいになるのよっ)

心の中で思いつきり叫んでみるが、目の前にしたり顔で座っている本人に直接抗議する勇氣は無い。

「身体、大丈夫だったか?」今度はさすがに少しばつの悪そうな表情を浮かべている。

「……はい。もう平気です。」澁も、やはり恥ずかしくなって目をふせる。

「昨日までどこ行ってたんだ?」

「週末は姉のところ、姪や甥と過ごしてました。」

(携帯に何度か主任の着暦があつたのに、コールバックしなかつたことも、謝らないと……。)

「ならいいんだ。ちょっと気になってたから。」

「すみません……。」主任の優しさが沁みてきて、胸がジーンと熱くなる。

「今週はずっと仕事で遅いんだ。でも、金曜日はなんとか早く終わらせるから、飯でも行こうか。」

「あの、わたし。」

「予定でもあるのか？」

「いえ、でも。」

断らないと。

さすがの漣でも、主任の目を見れば、ご飯だけじゃ済まないのはわかるし、何よりも自分が食事に行くだけで我慢できるか自信が無いのだ。

このままずると関係を続けるのは良くないのに。

こんな風に誘いに応じていれば、すぐにまた主任への執着心や依存心がどんどん大きくなって、やがては漣の手に負えなくなってしまっただろう。

（男の人との距離のとり方がよくわからない。）

最初、こちらから誘ったから、そういう関係をさらりと楽しめる大人の女性だと思われているのだろうか。

でも本当の漣はそんなに器用なたちではない。

それとも主任は、漣がすっかり立ち直るまで、見放せないと責任を感じているだけなのだろうか。

「漣？」

すっかり温くなったミルクティーを一気飲みして、主任を真っ直ぐ見つめた。

「あ、甘えちゃいけないって。これ以上、迷惑かけちゃいけないって。・・・決めたんです。だから、主任とご飯行けないんです。」

本当は、今この瞬間でも、ぎゅっと抱きしめてもらって、主任が与えてくれる温かさに包まれない。

「は？」

「ご飯と一緒にできません。い、行ったらダメなんです。」

胃がきりきり痛むけど、ここで踏ん張らないと。

冷たい沈黙が、仕切られた狭い空間に広がる。

「迷惑？はあ？・・・ま、確かに迷惑だ。お前は迷惑な奴だよ。ほんつとに。」

主任の声が、こんなに冷たく聞こえるのは初めてで。

「そう・・・ですね。」傷ついた澁の目から大粒の涙が零れ落ちた。

「どれだけ迷惑か言ってやるうか？」

（お前のせいで、この週末何も手につかなかったし。それに今朝も

本当はこんなところで、お茶なんかしてる場合じゃないんだ。(

自分が吐いた言葉にショックを受けて震えながら涙を流す滯を見て、心の底から暗い満足感が湧き上がってくる。

この週末ヤキモキさせられた分は、充分補ってもらったな。

そうして彼女の可愛い泣き顔をジックリと味わった後、おもむろに口を開こうとした。

自分がどれだけ彼女に囚われてるか、どれだけ傍に居てほしいかということを懇々と説明つもりだった。

この、とんでもなく鈍感な女にも、きつちりとわかるように。

自分の気持ちをちゃんと伝えるつもりだったのだ。

しかし、年甲斐も無く好きな女をいじめて喜んでる時間が少しばかり長すぎたようだ。

「松永君？どうした、何が迷惑なんだ？」

今度は松永がびくつと驚く番だった。

振り向くと、設計部の部長がパーティーションの端から、2人をいぶ

かしそうに見ている。

「井上部長、おはようございます。」泣いている澪を隠すように、立ち上がって部長に挨拶をする。

「なんだ？君は・・・、確か、経理部の・・・。」松永たちの座っていたテーブルに近づいてきた井上部長は、ハンカチで顔を拭いている澪のほうを覗き込もうとした。

「おはようございますっ。」澪も椅子から立ち上がって、挨拶をした。

「どうした、君達・・・？」

「あの、わたし、実家のリフォームの事で、主任にご相談しようとしてたんです。でも、今は、現場がお忙しくて、無理だって言われちゃって。」とっさに考えた不自然な言い訳。

でも、主任の言葉に深く傷ついた澪に出来る精一杯の作り話だった。

（わたしのこと、そんなに迷惑だったなんて・・・。）

胸がナイフでえぐられたように痛い。息も出来ないくらいに。

玄関でオカエリなさいと迎えるたびに、ちょっと照れくさそうに微笑んでくれたから。

美味しいといって、わたしの作った料理を毎回平らげてくれたから。

そして、いつも優しく抱いてくれたから。

少しは、好かれてるのかなって。嫌われてはないかなって。そう思ってた。

( 迷惑だって、そんな風に思われてたなんて知らなかった……。ほんとに、知らなかった。 )

部長がじろじろ見ているので、澪は必死で泣くのをこらえた。

「松永君、そういう言い方は無いだろう。まあ、確かに今、君の現場は佳境に入っているから、神経使うことも多いだろうが……。何も泣かさなくても。」

「違うんですっ。これは、ちょっとコンタクトがずれただけで。主任は全然関係ないんです。」カバンを掴んで、空になった紙コップを押し込む。

「あの、着替えがありますので、お先に失礼します。」もう一度部長に頭を下げると、松永の方は一度も見事無く、走り去っていた。

そしてタイミング良く到着したエレベーターに、入社してきた社員達と一緒に乗り込んだ。

( あんな泣き顔で席についたら、同じフロアの奴らに変に思われるぞ。 )

自分が泣かしたくせに、松永は苦々しい思いで走り去っていく澁の背中を見送った。

澁が自分の言葉を思いつきり誤解しているのはわかってはいるが、他の社員の目があるし、今は放っておくしか仕方が無い。今すぐつかまえて、自分の失言を釈明したい気持ちを必死で抑えた。

「社内の女の子に手を出すのはいろいろと問題が多いからな。ま、あんまり堅いこというつもりはないんだけど。」

「いえ。彼女とはそういうものではありませんから。」

(手を出したんじゃないなくて、最初に限って言えば、俺が手を出されたわけだし。)

心の中で言い返す。あんなふうに、澁を泣かせたままで行かせてしまい、内心ひどく動揺している。

でも、澁が社内で居心地悪くなるような噂を立てられたくないので、部長には適当にごまかしておくしかない。

「そうか。君には大きな期待がかかっているから。変なことにならないように、気をつけてくれ。それから、現場のほうを堪能したらそろそろ、うちの部に戻ってきてくれないか。いつでも待ってるから。」

井上部長は、そう言って、自販機のほうへ歩いていった。

「ありがとうございます。今の現場が終わってから、ゆっくり考えさせていただきます。」

松永は、部長に一礼してから、本社ビルを出て、足早に現場事務所に向かった。



## 助っ人良太

「なんか最近、松永主任の機嫌、メツチャクチャ悪くね？」先輩達が現場のあちこちでそう話しているのを、良太は何度が耳にした。

確かに良太も、そんな風に感じる事が何度かあった。声を荒げたりはしないが、時折イラついているような態度を見せたりするのだ。

つい何週間か前には、経理の吉井さんと3人で楽しく飲んで……。

それから、一週間ほどは、逆にビツクリするほど”ご機嫌”だったのだ。それまでは、いつも監督よりも遅く残って残業していたのに、昼食もとらずに押し押せで仕事して、さっさと帰っていたのだ。

なのに最近では、また以前のように人一倍仕事を抱え込み、遅くまで仕事をしている。

昼休みになったので、良太は給食センターから配達された保温箱から、弁当を取り出して、机に広げた。

「日置、お前、知ってるか？経理の吉井澪ちゃん、離婚したんだってさ。」先輩社員の一人が、弁当を食べながら噂話を始めた。彼女が総務にいるらしく、社内のネタには事欠かないらしい。

「まじっすか!？」日置は相変わらずリアクションが大きい。

彼は、真琴との”デート”以降、良太の事をからかったり、いじめたりすることは一切しなくなった。

良太も自分の良く知っている吉井さんの名前が出たので、何となく聞き耳を立ててしまう。

「え？吉井ちゃんって結婚してたんだ。知らなかったよ。」他の社員達も会話に加わった。

綺麗で性格が良いだけあって、吉井さんは社内でも人気があるようだ。

「そうか。じゃ、俺、頑張ってみようかな。ちょうど彼女と別れたところだし。」同じく先輩社員の一人である、片岡も話の輪に入ってきた。

良太は、この人なら、美人の吉井さんとお似合いかもしれないとぼんやり思った。パクパクと弁当を平らげながら、片岡のほうをチラッと見る。

ガテン系の多い施工部の中では珍しく、お洒落で、しかもどこか優しげな顔しており、うちの女子社員の中にもずいぶんファンがいるらしい。

「早速今度の金曜日、誘ってみようかな。澁ちゃんお酒結構いけるって聞いた事あるし。」かなり自信満々の様子だ。

そのとき、良太の背中あたりから、どす黒いオーラが漂ってきた。

振り向くと、主任が作業机に広げた図面を、敵のよう<sup>かたき</sup>に睨み付けて

いる。

「片岡、ちょっといいか。」あまりの声の冷たさに、一瞬、現場事務所全体が震え上がる。

「は、はい？」にやにやしながら弁当を食べていた片岡が、びくっとして主任のほうを見た。

「外壁工事の見積もり、見直してるんだが、どうも積算方法が怪しいんだ。悪いが、図面でタイル割りまで細かくチェックして、もう少し正確な平米数と材料ロスの数を出して欲しい。」

「は……。外壁全部すか？駐車場部分も含めて？」

「ああ。今週中に頼むわ。」

「……はい。わかりました。」不満げな顔の片岡は、やがて観念したようにしぶしぶ返事をした。

「片岡さん、じゃあ俺、手伝いま。」良太が声をかけようとしたら、

「山田、お前には別の仕事があるんだ、飯終わったら、外に出てきてくれないか。」主任はそう言って現場事務所の外に出た。

良太も急いで弁当を片付けて、主任を追いかけた。

「すみません。お待たせして。」良太は頭を下げた。

主任は資材置き場の前で、腕組みして立っていた。

「・・・・・・・・・・。」

「あの、俺何をすれば。」

「空気読め。」

「は？」

「俺が何で片岡に仕事渡したかわかるか？」

「業者の見積もりが・・・材料ロスが多いとか？」

「はあ・・・・・・・・。違うよ。つたく俺が仕事に私情を挟むなんて最悪な気分だよ。」主任は頭を抱えてうめいている。

「主任、大丈夫ですか？身体の調子でも・・・？」最近残業が重なって、おかしくなってしまったのだろうか。

「それもこれも、あの鈍感女のせいで。」

「え？」

「・・・・・・・・吉井だよ。アイツ・・・・・・・・。」あれから何度も会おうとしているが、徹底的に避けられていて、手も足も出ないのだ。

先日思い余って彼女のマンションをたずねてみたが、あからさまに居留守を使われてしまった。

自業自得とはいえ、惚れた女にそこまでされて、かなりショックだ。

「吉井さん？でも、何で主任が・・・？」先日3人で飲みに行った時、山田は一次会でかなり酔ってしまい帰宅したが、その後2人もそれぞれ家に帰ったと思っていた。

「・・・実は、あれから、もう一軒飲みに行つて、その後・・・俺の家に連れて帰つたんだ。」

「え」・・・・・・・・・・・・・・・・「良太の小さな目がめいっばい見開かれる。」

いきなりお持ち帰りかよっ！！！！あんな綺麗な人を。

(いくらなんでも、手え早すぎっ！！！)

心の中で突っ込みを入れるが、目の前の本人はちっとも幸せそうじやなくて。

むしろ悲壮な表情を浮かべている。

それにしても、凄いな。仕事が出る男はやるのが早い。

良太は心の中で主任に賞賛を贈った。

俺なんか、詩織ちゃんとまだキスどまりなのに……。それも、彼女から誘ってもらってやっとこさ。

は。俺も頑張らないと……。あれやこれや。あんなことこんなこと……。

どどんあらぬ方向へ飛んでいきそうになる思考を無理矢理戻して、主任に意識を向けた。

「だから、別の仕事だったって、今は思い当たらない。悪いが、片岡を吉井に近づけるわけには行かないんだ。……色々あって、ちょっと今揉めてるから。」

「そうなんですか……。」

「俺が勘違いさせるようなことと言って、泣かせてしまった。」

「吉井さんですかつ？」主任が女の人を泣かせるなんて、考えられない。

（違う意味の、”啼かせる”なら何となく想像つくけど。）

「ああ。会って謝って、ちゃんと説明したいんだが、電話にも出てくれないし、会いに行っても避けられてしまつて。正直俺もこんな経験初めてなもんで、この歳で。はあ……。結構きついわ。」  
自嘲気味に笑う主任の目の下にはクマが出来ている。

主任の困り果てている姿を見て、良太は何とか力になりたいと思つた。

「あの、俺、金曜日に彼女とデートの約束してるんすけど、吉井さん誘ってご飯食べに行きましようか？俺の彼女も、吉井さんに会いたいって言ってるし。それで俺が急に主任も招待してみたいにして・・・なんか、わざとらしいけど、それで何とかちゃんと話を訊いてもらえるように頼んでみたらどうでしょう。」

「山田・・・。悪いな、せつかくのデートなのに。でも、そうして貰えると助かるわ。俺と吉井が上手く行くかなんて、今はどうでもいいんだ。ただ、アイツを誤解させたまま、傷つけたままでいるのが嫌なんだ。」

「俺、主任の事、仕事のやり方とか、仕事に対する姿勢とか、いつも凄くなって尊敬してます・・・吉井さんも新人の俺に明るく接してくれて、ほんと素敵な人だって。だからお2人が上手く行けばいいなって思います・・・。てか、あまりにも早業で、俺、そっち方面でもマジ尊敬っす！」

出来れば、そっちのほうも指導して欲しい。とまでは言えず。

「はあ、まあ、いや、それほどでも・・・。」主任が珍しく照れている。

「じゃ、俺、午後から現場まわって、内部のドア枠ちゃんと養生できてるか確認してきます。」

「ああ、頼むわ・・・悪いな、山田。いろいろと。」主任は少し

だけホツとした様子だ。

「そんな！俺、ちよつとでも主任に恩返しできて、嬉しいっす。じや、金曜日の件、任せてください！」

それから2人は仲良く事務所に戻っていった。



## 鞠子さん一家の様子（前書き）

前作を読んでくださった方へ、

鞠子さんと義彦さんの子供は女の子でございまして。  
雛子ひなこちゃんです。

まー、なんてこと無い話なんです。 本編あらすじにはあまり絡み  
ません。

前作の”後日談”的なものでしょうか。

## 鞠子さん一家の様子

「さ、あとはもう焼きあがるの待つだけなの。」鞠子さんは、満足そうに微笑んだ。

詩織は今、トキコ姉ちゃんの友人の鞠子さんのお宅で、鞠子さんに教えてもらってケーキを焼いている。

今日は、良太と、吉井さん、良太の上司と4人で、食事に出かけるので、そのときに、お世話になった吉井さんに自分で焼いたケーキを渡すつもりなのだ。

学校が終わって、一旦家に戻り、着替えてから鞠子さんのお宅にお邪魔している。

鞠子さんが旦那様と、もうすぐ3歳の雛ちゃんと暮らすマンションは、駅から近い。

良太との待ち合わせは、いつものように駅前の噴水のところである。

「まだ？ヒナちゃん、おなかすいたよう・・・。」テーブルのところ、一人前にピンクのエプロンとおそろいのスカーフを頭に巻いた小さな女の子が、ため息混じりに呟いて、ママの足に寄りかかった。

「まだよ」。だって、今オープンに入れたとこなんだもん。・・・

それにもうすぐ夕飯だから、そんなに食べちゃだめよ？さ、詩織おねえちゃんと一緒に、ジュース飲もうか。」

「りんごジュースくらさい。」

「じゃ、お椅子にすわってね。もうすぐパパ帰ってくるかな。あ、詩織ちゃんも、そこ座ってね。何か飲みましょう。」

「パパすきー。ー。ー。」

「パパも、雛ちゃんの事大好きだよ。」

「でも、ゆうくん、もっとすきー。ー。ー。いちばんすきー。ー。ー。」

「あつ。それ、パパには言わないで。平気な振りしてても、結構傷ついてるんだよ。」鞠子は、幼い娘を溺愛する夫のしょんぼりした顔を思い浮かべた。

「ゆうくんって、誰ですか？」ほのぼのとした会話についつい詩織も参加する。

「一番上の娘の曜子が、もう大学4年なんだけど。裕史君は曜子の旦那様なの。」

「そうなんですか。」トキコから、鞠子には、結構大きな娘が居ると聞いてはいたが、目の前のまだ少女っぽい雰囲気的女性は、とてもじゃないが大学生の娘が居るようには見えない。

「よーこたんもすきー。ー。」ストローつきのコップでちびちびジ

ユースを飲みながら、雛はニコニコ顔だ。

「娘の旦那様、とつてもカッコイイの。雛は面食いらしくて、赤ちやんの頃から、どんなにぐずってても裕史君に抱っこされたとたんぴたつと泣き止んで。．．．それが、主人はとにかく気に入らないみたいで。」思わずため息がもれてしまう。雛のことになると、夫の義彦は突然人格が変わってしまう。もう、メロメロなのだ。

裕史のほうも、わざと義彦をからかうように、雛がなついているのを見せ付けるようにするから、最後はいつも子供同士の喧嘩みたいになってしまうのだ。

「ご主人が、娘さんの旦那様に、やきもち焼くなんて．．．。」  
詩織は思わず笑ってしまう。

「でしょ？これから先が思いやられるわ。それに、この子が主人に甘やかされすぎないように、気をつけないと。」鞠子もクスクス笑い出す。雛だけがすました顔でジュースを飲んでいる。

詩織は、目の前の小さな女の子を見つめた。大きな目と、ちいさな鼻と口。お人形のような顔立ちで、ママにそっくりだ。ぷっくりしたほっぺに思わず触りたくなる。まだえくぼのあるもみじのような手で、プラスチックのコップを持っている。

目があったので、にっこりしたら、雛も恥ずかしそうに微笑み返してくれた。

「いっしょにあそぼ？」雛は、さっきから詩織と遊びたくて、ケー

キ作りが一段落するのをずっと待っていたのだ。

「いいよ。何して遊ぶ?」

「ごほんよんで。」

「そしたら雛ちゃん、ご本持ってきなさい。詩織ちゃん、あと20分くらいで焼けるから、それまで雛の事、いいかしら。」

「はい。ケーキ出来上がるまで、雛ちゃんに遊んでもらいます。」

「じゃあ、リビングのほうで、ソファーに座ってもらったほうが楽だから。」

「はい。わかりました。」雛がお気に入りの絵本を抱えて戻ってきたので、一緒にリビングのほうに移動した。

絵本を詩織に渡すと、雛は当然のように詩織の膝の上に座った。

詩織は、絵本を読み始めた。

大事にしていた狐のぬいぐるみの尻尾が破れたので、直してもらおうと、ちいさな女の子がぬいぐるみと一緒に遠くに住むおばあちゃんのところまで、電車で旅をするのだ。

かわいらしい話なのに、おばあちゃんの家にとどり着くまでの女の子の心細さと一生懸命さが伝わってきて、涙が出そうになる。

亡くなった祖父を懐かしく思い出す。

お話が終わりかけた時、玄関扉が開く音がして、男の人の声が聞こえた。

「ただいま。」

「おかえりなさい。まあ、きれい。どうしたんですか？」出迎えた鞠子は、夫の義彦が抱えている淡いピンクと白の花束に目を瞠る。

「ああ、これ。帰りに駅前の花屋さんで見かけて、今日入荷したんだって。」

「トルコ桔梗。きれいですね。ありがとうございます。あの、今、細川さんの。」早速大きなガラスの花瓶に生けた。

「お礼ならいいよ。・・・後でジツクリしてもらおうから。」

「え？でも、昨日。」ぱつと振り返ると、夫がさっきより近い位置に立っている。

「昨日は、カウントしないよ。だって、雛ちゃんがママ〜って泣いてさ、途中で。」

「そうなんですけど、でも、・・・。」

「幼稚園選びとか、プレ教室とか、色々大変なんだろうけど。もう少し僕の事もかまって欲しいな。」義彦は、可愛い奥さんを腕の中に引き寄せた。

「でも、わたし、もっと頑張らないと。・・・良いお母さんになり

たいんです。」

「もう充分だよ。そんなに頑張り過ぎなくてもいいんだよ。」雛が生まれてからの鞠子は、いつも子供のためにと痛々しいくらいに一生懸命で、義彦は少し心配なのだ。相変わらず華奢な身体をぎゅっと抱きしめる。

「あ、あの、今リビングに。」鞠子は少し困った顔で、夫を見上げた。

「雛ちゃんリビングで寝てるの？じゃ、ちょうどいいじゃん。」鞠子の当惑もお構い無しに、うなじにキスをしながら、背中を撫でている。

「じゃないです。お客様が。」義彦の胸を両手で押し返そうとする。

「ん?!」

「細川さんの姪御さんが遊びに来てくれてるんです。今、雛と遊んでくれてて。」

「……なに？番長のっ?!鞠子さん、それ、先に言ってくれないと。」ちよつとばかり、とがめるような顔。

「」あの”番長の姪っ子となると、一体どんなキャラなんだろう。」

（言おうとしたのに、義彦さんがっ。）鞠子は心の中で口答えるのが、後がめんどくさいので、黙っていることにした。

「パパとママはラブラブなの。」膝の上のちいさな女の子が、困ったように眉を下げて、詩織を見上げた。

「雛ちゃん、そんな言葉知ってるんだ。」雛の発言と表情が面白くて、詩織は思わず笑ってしまった。

「いらっしやい。」キッチンのほうから、何食わぬ顔で鞠子の夫が現れた。

ひよろつと背の高い、優しそうな男の人である。

パパと叫んで、駆け寄ってきた幼い娘を抱きあげる。

「こんにちわ。お邪魔してます。」詩織はとりあえず、キッチンでの夫婦の会話は聞こえてないふりをした。

美味しそうに焼けたケーキを充分に冷まし、3つそれぞれ可愛くラッピングし終わると、そろそろ約束の時間が近づいていた。

その頃には、詩織は雛ちゃんや義彦ともすっかり打ち解けていた。

雛には今度また遊ぼうねと約束して、鞠子と義彦にお礼を言ってから、詩織は元気いっぱい、彼との待ち合わせ場所に向かった。





## 待ち伏せ 1

彼女が会いたがっているからと半ば強引に誘われて、山田君と山田君の彼女である倉田さんと食事をする事になった。

山田君との食事と言えば、どうしても”彼”の事を思い浮かべてしまふ。

主任からは、休憩室での一件のあと、何度か携帯に着信もあり、社内で声をかけられたりもしたが、ここ何日かは、連絡はぱったりと途絶えている。

あれだけあからさまに避け続けたしわけだし。居留守までつかっちゃったわけだし。

もう、呆れて放っておくことにしたのだろう。

多分、あの時、漣が泣いたので、罪悪感からか、謝らなければ思っただろうか。

でもあの発言が、主任の本音なんだとすれば、それはそれで仕方ないと思うし、謝ってもらいたいとは思わない。

数日前の夜遅い時間に、漣のマンションのインターフォンが鳴って、玄関の外に居るのが主任だとわかったときは、正直どうしてよいかわからず、膝の力が抜けそうになった。

これだけ避け続けているのに、家にまで来るなんて。

主任の気持ちがわからなかった。

ただ謝りたいだけなら、もう必要ないのに。

それとも今でもまだ、”大人の関係”を続けたいと思っているのだろうか。

どちらにしても、もう一度主任と2人きりになって、これ以上心を乱されたくはない。

このまま会わないまままで、なんとなく自然消滅するのが一番のようない気がする。

自分でも情けないと思いつつも、主任の気配が玄関の外から消えるまで、布団を被って息を潜めていたのだ。

そんなことをぼんやり考えながら、山田君に指定された店に向かう。

今日のお店は、山田君の妹さんがバイトしている、個室のある創作料理のお店だそうだ。

「「「いらつしゃいませ」「」」

前もってネットで調べていたので、お店の場所はすぐにわかった。繁華街の中にある、お洒落な飲食店ビルの一角。

間接照明が柔らかな光と影をクリーム色の漆喰の壁に映し出している。

「あの、山田さんの名前で予約してあるんですけど。」

「あ、吉井さんですね。はじめまして。兄がお世話になってます。」

白いシャツをお洒落に着こなして、腰に黒いエプロンを巻いた、若い男の子が応対してくれた。

思わずうつとり見つめてしまいそうになるくらい素敵な笑顔。

(・・・あれ？妹さんじゃなくて弟さんだったの？てか、山田君に似て無くね???)

「いえ、こちらこそ、山田君にはお世話に・・・」

「兄と詩織ちゃんは、まだなんですが、先にお部屋のほうにご案内します。」

そう言っつて、予約していた個室に案内してくれた。

「すみません、早く来すぎちゃったみたいで・・・。」

「いえいえ、先ほど1人来られてますから。それに、兄達ももうすぐ到着するからってメールありました。」

そう言っつて、部屋に通された。

(・・・ん？先ほど1人?)

その言葉が、脳に届いたときには、ドアはしっかりと閉められた後だった。

咄嗟には、頭も身体も動けない。

（あわわわわわ！）

黒い長方形のテーブルには、4人分の席が設けられている。

そのひとつから、さっと立ち上がったのは、ここ暫く漣が避けまくって、逃げまくって、何とか忘れようとしていた相手。

「漣、こつち。」

抵抗する間も無く、右手を引っ張られて、主任の席の隣の椅子に座らされた。

気まずくて、主任の顔を見ることが出来ない。どうしようもなく、膝の上に置いたカバンに視線を落とす。

主任の視線を痛いほど自分の横顔に感じながらも、ただ俯くことしか出来ないでいる。

沈黙を破ったのは、やはり主任からだった。

「……こないだの事。」

「い、いいんですっ」漣は、あの日以来、初めて主任の顔をまともに見た。

(少し?せた?現場が佳境に入ってるって聞いてたし。仕事、大変なんだろうか……。)

「しゅ、主任は、悪くないんです。わたしが、わたしが、勘違いして。」

「違うんだ。俺は。」

「わたし、元夫ともそうだったんです。私だけを見てくれてる、愛されてるって思い込んで。本当はそうじゃなかったのに……。そう。多分、男の人の気持ち読むの、下手なんです。わたし。自嘲気味に笑う。」

「漣……。」

「だから、主任が一時的にでも受け入れて下さって、優しくして下さい。自分の都合の良いように解釈してたんです。何となく、傍に居てもいいのになって……。め、迷惑だったって気付かなかつたんです、ホント、学習能力無くて、ごめんなさい。」

「違うっ!違うんだ。ま……確かに迷惑なんだよ。だけど、それはお前の思ってるような意味じゃない。」

「へ?」

「お前が、漣が出て行ってから、何をしても落ち着かなくて、イライラして。あれから何度電話しても出てくれないし、会社に会いに行っても、家に行っても避けられたし。年甲斐もなく、じたばたしてる自分がマジで情けなかったよ。現場の奴らからも、俺の機嫌が悪すぎるって言われちゃってさ……わかるか?だから、そ

ういう意味なんだよ。」

「あ……………。そういう意味って言われても……………」

「はあ……。ったくお前は、相変わらず……………」主任は苛立ちを隠すかのように、顔を両手で覆ってゴシゴシこすっている。

「主任？」

「だから、こついう意味だっって言ってたよっ！」突然主任の手が伸びてきたと思うと、右手で後頭部をガシッと固定され、左手で、肩を引き寄せられ、激しく唇を奪われた。

## 待ち伏せ 1 (後書き)

主任、30代半ばの設定だったんですが、ちょっとおとなげないなあ。

ま、いいか。



## 待ち伏せ 2

膝においていたカバンが床にどさりと落ちる音がして、その後いつそう身体を強く引き寄せられる。

自分が何をされてるかに気付いて、あわてて両手で主任の胸を押しつけようとするが、びくともしない。

抗議しようとして口をあけたところに、いつそう深く口付けられて、それから、頭が痺れて、何も考えられなくなった。

いつのまにか、主任のスーツの襟を両手で握り締めて、自分からもキスに応え始めていた。

突然ガタンと椅子が倒れる音がして、唇は離れないまま、主任の膝の上に横向きに座らされる。

どれくらい時間が経っただろう、とうとう主任がキスをやめようとした時には、漣が追いかけて、その後漣が一息入れようとしたら、今度は主任が許さなくて。

やっと2人が満足した頃には、お互い息が上がって、漣は頭がクラクラしていた。

「もう意味わかったか？」漣の額に自分の額をくっ付けて、主任が囁いた。

「んん……？」酸素の足りない頭でぼんやりと考える。

（わかってているのは、もう手遅れだってコトだけ。わたし、主任が好き。やっぱり好きなの。）

諦めのため息をついて、スーツの襟を握り締めていた手を離し、主任の首に両腕をまわした。

懐かしい彼の匂いを思いつきり吸い込む。一緒に居たのはごく短い期間だったのに、恋しくて恋しくてたまらなかった。

「わからないけど、いいんです。もう。」主任のうなじにかかる髪の毛をそつと指先で撫でる。

「お前、バカだろ。」クスリと主任が笑う。

「バカでもいいんです。」

額と額をくっ付けあったまま、なぜか2人でクスクス笑いあっている。

そのとき、コンコンとノックの音が聞こえて、すぐにガチャリとドアが開く音がした。

ドアに背を向けた形で座っていた松永が振り向くと、山田がポカんと口をあけて部屋の入り口に立ち尽くしていた。

ドアハンドルを握ったままピクリとも動かない。

その隣には、ポニーテールの可愛い女の子が目キラキラさせて興味津々の表情で立っている。

「待ってたぞ。」ニヤリと笑う。まだしっかりと溲を膝に乗せたま

まで。

「はっ！お待たせして、すみませんっ。」良太は、先ほどから目の前の光景に目が釘づけである。

（一体どこが揉めてんだよっ。）（心の中で思いつきり突込みを入れる。

「いや、俺達が、早く着きすぎたんだ。」

「はぁ……。」モジモジと落ち着かない様子で身体を動かす。

「吉井？ここはお前の席じゃないぞ？」たった今、膝の上の存在に気付いたような顔をして、澁をからかう。

（居留守使ったお返しだ……。）（案外執念深い性格のようで。

「なっ！」恥ずかしさのあまり、身動きすることすら出来ないでいた澁は、はじかれたように、主任の膝からすべり降りた。

## まだ帰らない

漣はキツと怖い顔で主任を睨んだが、当人は全く気にしておらず、むしろ上機嫌の様子。

「山田、噂の彼女を紹介してくれないか。」澄ました顔で主任も椅子から立ち上がった。

「へ？あ、は、はいっ。主任、こちらは、倉田詩織さんです。」詩織の華奢な背中に、そつと大きな手をあてて、主任に紹介した。

「倉田です。はじめまして。」礼儀上、今しがたの衝撃的な場面など、一切目にしなかったようなふりをして、丁寧に挨拶をした。

「松永です。よろしく。」顔を真っ赤にしてあたふたしている漣をよそに、主任は普段どおり、落ち着き払っている。

真琴が飲み物の注文をとりに来た。

主任は、漣と自分のためにビールを頼み、良太は詩織を家まで送るからと、お酒ではなくお茶にした。

食事は、かなり盛り上がり、漣も最初のうちは照れくさくて、おとなしかったが、アルコールが入るにつれて、いつもの明るさを取り戻した。

詩織が良太を尋ねて本社に来た時の話や、良太たちの現場の話など、話題は尽きなかった。

食事が終わると、詩織に渡されたケーキのお礼を言った後、主任はほろ酔い加減の溼を引きずるようにして、あっという間に帰っていた。

「はあく。大人のカップル……。ほんっとお似合いですねえ。  
「詩織はうっとりしながら、2人の背中を見送っている。」

「俺、主任のあんな甘い顔、初めて見たよ。仕事の時の顔と全然違う。現場では、怒鳴ったりとかはしないんだけど、一番怖い人なんだよ。」

「そうなんですか？」確かにちょっと厳しそうな人だったけど、怖くは無かったな……。

「うん。でも今日は。なんか、すっごく嬉しそうだった。」

「そうですね。吉井さんが、ちょっと酔って主任に甘えてる姿も可愛かったですね。」

2人顔を見合わせて、微笑みあう。

「さてと……帰ろうか、送っていくよ。」名残惜しいけど、詩織の親戚に変な心配をかけたくは無い。

「良太さん……。」

「遅くならないうちに、さ、行こう。」良太は詩織の手を握って、

歩き出そうとした。

しかし詩織は立ち止まったままで、歩こうとはしなかった。

「まだ……帰りたいくないです。」

## 夜の公園で

今日の詩織は、前身ごろに同色のレースの付いた7分袖の淡いモスグリーンブラウスに、膝丈のグレーのサマーウールのプリーツスカート。良太の上司に会うので、少しかしこまった格好をしていた。週末の繁華街は、人通りも多くにぎわっている。

「あの、時間も早いし……。」

詩織はすうっと深呼吸した。

「良太さんの……、これから良太さんのところに行っちゃダメですか？」握った手にぎゅっと力を入れる。

「え？」

当然のように吉井さんを連れて帰って行った主任の姿を思い出す。羨ましくないといえは嘘になる。

「だって、ほら、今日はまだ”練習”もしてないし……。「恥ずかしくて、頬が熱くなってきたけど、気にしない。だって本当のことだもん。」

良太は黙りこんだまま、顔を真っ赤にして、困ったような顔をしている。

「それに……、それに良太さんにもケーキ焼いたの。一緒に食べたいし。」

「今日は帰ったほうがいいよ。叔母さんが心配してるだろうから。」

「でも……。」

「また今度、明るいうちにおいで。そうだ、明日でもいいよ。それまでちゃんと、ケーキ冷蔵庫に入れとくからさ。」聞き分けの無い子供を諭すような口ぶりに、詩織の心はずしりと重くなる。

「叔母は、私が選んだ人となら、少しぐらい遅くなっただって、気にしないと思います。」いつものおっとりとした口調ではなく、少しきつい話し方になっている。

「詩織ちゃん？」

「どうして？お友達にも彼氏のところにお泊りしてる子だって、結構いるし。」

「……。」

「もう少し一緒に居たいんです。お仕事で、疲れてはるのわかってるけど……。」

「俺だってもっと一緒にいたいよ。でも。」

「もっと知りたいの。良太さんの事を。住んでる所はどんなお部屋なのかなとか。窓から何が見えるのかなとか。良太さんの為にご飯だって作ってあげたいの。家事のお手伝いもしたい。……それが、そんなにいけないことなんですか？」



止めようと思つても、常日頃心の底でぐるぐると渦巻いていたものがどどんあふれ出す。

可憐で清楚な雰囲気の時織と、いかにも格闘家タイプの身体の大きな良太。

ぱつと見、ただでさえミスマッチな外見の2人である。

時織が真剣な顔で良太に抗議しているのを、行き交う人たちがちらちら見て通り過ぎる。

人通りの多い路上での立ち話は落ち着かない。

「ここじゃあれだから。ちょっと歩こうか。」

良太は時織の手を引いて、商店街を抜けたところにある小さな公園に連れて行った。

誰も居ない公園のベンチに2人、手をつないだまま座る。

桜の木が公園の周りをぐるりと取り囲み、古い滑り台が真ん中にある。隅っこには赤いブランコが二つと楕円形の砂場があるだけ。

その頃には時織も頭が冷えてきて、すっかり意気消沈している。

もともと無理に我を通そうとするような性格ではなくて、穏やかでおとなしい女の子である。柄にも無く、恋人に楯突いてしまったことに、我ながらショックだし、落ち込んでもある。

しばらくは、ふたり静かに寄り添ったまま、公園の前の道を犬を散歩させる人や、家路を急ぐ社員が時折通り過ぎるのを眺めていた。

「…………ごめんなさい。」詩織がポツリと呟く。

夜風が詩織のうなじの髪の毛を揺らす。

「あんな言い方したりして。これじゃ子供だって思われても仕方ないですね。」

「詩織ちゃん…………。」

「お付き合い始めたばかりで、わたしはまだ少し不安なんです。良太さんはお仕事があるから、平日はなかなか会えないし…………ごめんなさい。もう我儘言いません。」

平気なふりをしようとしても、声が震えてしまう。目の奥が涙でちくちくする。

「違うんだよっ！謝ることなんてないんだ。俺だって、俺だって本当は主任みたく、詩織ちゃんをさっさと自分の家に連れて帰って…………でも、そんなことしたら、自分がどこまで我慢できるか自信ないし。」

「良太さん？」

「そうになると、詩織ちゃんがお世話になっている親戚にも、大阪のご両親にも顔向けできないから。」

「わたし…………。かまわないです。それでも、だって、一緒にいたいんだもん。」

良太は繋がってないほうの手を伸ばして、そっと詩織の頭を撫でる。

真っ直ぐに自分を見つめる瞳は少し潤んでいて、そしてどこまでも澄んでいる。

彼女の事を自分の精一杯で護って大事にしたいと思う。

「……わかったよ。でも俺、その前にやっぱりちゃんと詩織ちゃんの叔母さんに挨拶するよ。」

「叔母に？」

「詩織ちゃんが親戚のところまで気まずい思いしなくてもいいように、俺の家に遊びに来てもらっても良いか頼んでみるよ。それでいいか？」

詩織は嬉しそうに微笑んだ。

「はい。叔母も良太さんに会いたいです。」

「今日は遅いから家まで送るだけにして、明日改めて挨拶に伺うことにするよ。」

「わかりました。じゃあ、今日は良太さんの所に行くの我慢します。

「そう言って、満足げに目をキラキラさせて、良太の肩に頭をもたせかけた。

「……ネクタイ似合ってます。」繋いでないほうの手で、良太の

ネクタイを軽く引つ張る。

「これ……。詩織ちゃんのプレゼントだから、特別の日だけつけてる。」

「ん。素敵です。」詩織が繋いだ手を自分の膝に乗せて、もう片方の手をそつと重ねた。

「良太さんの手、大きくて温かくて。こうやってずっと繋いでたい。」

「詩織ちゃん……。練習”しようか。」そう言って、良太は詩織のほつに身体を向けた。

「ん。お膝に乗せて。吉井さんみたいに。」

「は？」

「あかん？」

詩織は恥ずかしそうに頬を染めて、上目遣いに良太を見上げている。

「あーもう、可愛すぎ。それ反則。それダメ。」

（俺の彼女は、なんて可愛いんだ！俺はなんて幸せ者なんだ！）

痺れるような幸福感が押し寄せてくる。

良太は軽々と詩織を膝に抱きあげると、なけなしの技術を駆使して夢中で口付けた。

それはあまりにも激しくて、甘くて、繊細で。

会えない時間を埋め合わせするかのように長く続いた。

まったりな週末 1

「はい、どうぞ。」良太はガチャリと自宅マンションの玄関の鍵を開けて、詩織を先に入れた。

「お邪魔します・・・。」詩織は狭い玄関にきちんとサンダルをそろえて、ドキドキしながら恋人の部屋にあがった。

玄関を上がるとすぐにキッチンとダイニングで、その奥にベランダに面して和室と洋室が一部屋ずつ。和室のほうにはテレビとローテーブルが置いてあり、寝室らしいもう一方の部屋のドアは閉まっている。

「とりあえず、なんか飲む？」良太は詩織が用意していた大きな荷物をキッチンのテーブルに置いて、冷蔵庫をのぞいている。

「あ、おかまいなく。」詩織は良太が運んでくれた大きなカバンから、いそいそとお気に入りのエプロンを取り出して身につけた。朝から用意していた食材も全てテーブルに並べる。

昨日約束したとおり、良太は詩織の叔母であるトキコに挨拶するために、細川家を訪れた。

会ったとたん、詩織の叔母が、実は曜子の母の友達でもあり、真琴達のバンドの熱心なサポーターのひとりである”番長”だとわかり、別の意味で緊張することになった。

しかし「真琴君のお兄ちゃんなら心配ないわ。うちの大事な大事な姪をよろしくね。」と案外まともなことを言われて、こうして堂々と詩織を自分の住むマンションに連れてくる事が出来たのだ。

若干プレッシャーを感じないことも無いが。

(とにかく番長は目ヂカラが半端無いから……)

「詩織ちゃん、まずは休憩してから。」部屋についてすぐに、料理を始めようとしている詩織に声をかける。

「そうですね？あ、わたし気合入りすぎ……。なんか、すみません。」念願の彼氏の家に来て、とにかく何か役に立ちたいという気持ちでいっぱいなのである。

「ちょっと座ろう。まだ昼には時間あるし。あ、詩織ちゃんのケーキ冷蔵庫に。」

「はい。じゃ、紅茶も持ってきたので、それと一緒に。」

薬缶に水を入れて、お湯を沸かす間に、持参したティーセットを取り出す。

詩織が和室のローテーブルに紅茶とケーキを用意してくれた。

「美味しい。あんまり甘すぎなくて美味しいよ。」良太は詩織のケーキを頬張る。

紅茶の良い香りが、テンション上がりすぎてわさわさしていた二人の気持ちを落ち着かせてくれる。

「鞠子さんに教えていただいて。」

「そうか。鞠子さんとこの小さい女の子、なんてっただけ。」

「雛ちゃん？」

「そうそう。あの子ママそっくりで可愛いよな。」

「はい。パパとママはラブラブなの〜って……。」雛が眉毛をぷっくりさせて困った顔をしたのが可愛かったと思い出しながらクスクス笑った。

「あー。あそこの旦那さんは鞠子さんにべた惚れだからね。」

「結婚しても、ずっと熱々って素敵ですね。」

「そうだね……。」

（俺もいつか、詩織ちゃんと……。）

ピンクの花柄のノースリーブのワンピースに水色のエプロン姿の詩織は、ありえないくらい可愛くて、この部屋に入ってからずっと、良太の中で理性との戦いが続いている。

「良太さんのお部屋、なんだかとても落ち着きます。」紅茶のカップをそっと置いて、詩織がにっこりしながら部屋の中を見回す。



「そ、そうか？ま、何にも無いけど。」

実用一辺倒の自分の部屋を見回す。

1人暮らし始めて日も浅く、まだ本当に必要なものしか置いてない。カーテンは薄いグレーで、黒い化粧板貼りのローテーブルとそれにあわせて床にべったり置くタイプのソファアは生成のざっくりとした生地で出来ている。

こまごました物は全部洋室のクローゼットにしまえるので、部屋の中は全体的にすっきりしている。

(ま、見られてまずいものは昨日押入れに隠したし。)

「あとで本棚見てもいいですか？」

「いいよ。でも、まだ殆ど実家にあるよ。」

「そうですか……。また良太さんのお父さんとお母さんに会いたいな。」

「いつでもおいで。母さんも、詩織ちゃんが次いつ来るのかわつて、しつこく聞いてくるんだ。真琴も会いたがつてるんじゃないかな。」

「あ、あの、実は真琴さんとは先日……。」「

「うっ！ななな、なんで……。知らなかったよ。詩織ちゃん、真琴と会ってたのか？」

「はい。あれから仲良くしていただいて。結構メールもしてて。」

「そそ、そうなのか……。」真琴とメール。嫌な予感。

(真琴の奴、詩織ちゃんに俺の事絶対あれこれ吹き込んでるよ。)

「色々、相談に乗ってもらってるんです。」

「相談？」思わずぐくりとつばを飲み込む。

「はい。」

「あの、聞きたくないけど、一応聞くよ。相談って……。」

「それは……。」詩織はモジモジしながら俯いている。

「それは？」ま、まさか俺のいじめ方とか？

「良太さんの墮とし方。」

「お、俺の？」「さすがにぎよっとする。」

「はい。」

「……。」

(詩織ちゃん、相談相手の選択、思いつきり間違ってるよ。)

「コホンっ。えー。本当は、真琴さんには、部屋に入るなりとにかく押し倒せて言われたんですけど。」

詩織はちよつと深刻そうに眉をひそめる。

「はぁ……………」

(アーでも押し倒してもらいたいです。今回だけはグッジョブだよ  
真琴！)

「でも、私にも夢があつて。」

「夢？」

「はい。あの、できれば押し倒すより押し倒されたいんです。」

詩織は爆弾発言にもかかわらず、すました顔で紅茶を飲んでいる。

「……………」

「クスッ。でも、真琴さんは、そんなこと言ったら、兄貴は絶対に  
3分ぐらい固まるぞって言ってました。さすが妹さんですね。」

「っつ。」

詩織ちゃんと真琴、一体どんな会話をしてるんだ……………」

一瞬気が遠くなる。

「でもせつかくだから、先にお昼ご飯作っていいですか？」

「は？」

「お好み焼き、良太さん好きだから喜ぶよって、真琴さんに教えてもらったんです。」

「あ、俺、大好きだよ。」

「小さいホットプレートも荷物に入ってるんです。ごめんなさい。重かったでしょ？」

「確かに凄い荷物だなとは思ったよ。でも今日は実家の車借りてきたし、重いのかは全然大丈夫だけど。悪いねわざわざ。」

話題が健全なほうに向かったので、良太はホッとしていた。

「じゃ、そろそろ仕度しますね。」詩織はそう言って、ティーセットを片付け始めた。

「あ、俺が片付けるから。」ぼーっと考え事をしていた良太は、慌てて立ち上がるうとしたが、詩織の手が伸びてきて、良太の腕を押さえた。

「わたしが居る時ぐらいは、ゆっくりしてて下さい。」

「でも。」

「いいの。」

すばやく頬に口付けされて、良太はまた固まる。

「押し倒されたいの？」耳元で囁かれて、良太は小さな目をパチクリさせた。

(詩織ちゃん……キャラ変わってないか?)

詩織は勝ち誇ったようにしばらく良太を見つめてから、食器を抱えてキッチンに行ってしまった。

(俺……完全に手のひらで転がされてる?)

5歳も年下の相手に……。

畳の床に座っているのに、何故だか少しめまいを覚えた。

キッチンから、食器を洗いながら上機嫌の詩織がなにやら歌う声が聞こえてくる。

お嬢様女子高生、恐るべし……。

## まったりな週末 2

「そろそろかな・・・。」詩織が器用にお好み焼きをひっくり返すと、ジユウという音がして、表面に美味しそうな焼き色をつけたお好み焼きが出来上がった。

慣れた手つきでソースを塗る。

「良太さん、マヨネーズかけますか？」

「あ、お願いします。」

「じゃー、かけちゃいますね。」 さささとマヨネーズで線を描くようにする。

手早く鰹節と青海苔を振り掛ける。 見た目も美しく、食欲をそそる。

「はいどうぞ。」

ホットプレートの上で、4等分にしたお好み焼きの一切れを、皿に載せて、良太に差し出した。

「」ではでは、いただきます。」

2人で手をあわせて、熱々のお好み焼きを食べようとした時、ピンポンとインターフォンが鳴った。

「山田さんっ？お届けモノです。宅配便ですよ。」良太がインタ

「フォンに答える前に玄関扉がドンドンと叩かれた。

「宅急便？誰からだろう。」

「わたし、出ましようか？」

「あ、俺出るよ。詩織ちゃん座つてて。」

（あゝ。もう、何か新婚夫婦みたいだなあ。）

こみ上げるニヤニヤ笑いをかみ殺しながら、良太は玄関の扉を開けた。

玄関の外には、悪友3人組がビールのパックとスーパーの袋を提げて立っていた。（この三人、いい加減、名前付けましょうね、柴野君と、貝田君と、村沢君にします・・・。）

良太は目の前の存在を、とりあえず無かったことにしようと決める。

（ああ神様、俺の事そんなにお嫌いですか?!）

「あ、すみません、今、留守にしています。」

そう呟いて、良太はさっと玄関扉を閉めようとしたが、相手は3人だ。

ぐぐつと扉をこじ開けられて、気が付くとビールのパックを胸に押し付けられていた。

「山田く。おまつ、最近どうしたんだよ。いつもいつも忙しいって心配だから、優しい俺達がこうして来てやったぞっ。」と世話好きでおかんキャラの柴野君。

「どけどけど。暑いんだから、さっさと入らせる。」と暑がりなので冬でもTシャツ一枚の貝田君。

「んん？なんか美味そうな匂いがするぞっ！」と食いしん坊の村沢君。

3人は呆然と立ち尽くす良太を押しつけて、狭い玄関に大きな靴を脱いでどかどかと上がりこむ。

詩織のちいさなサンダルは目に入らなかったようだ。

「「「ええ」???!?!?!」」」

我に返った良太が慌てて振り向くと、凶体のでかい3人がキッチンと和室の境目でポカンと口をあけて詩織を見つめている。

元空手部副部長の柴野の手から、どさつと音を立ててスーパーの袋が落ちた。袋の中からお惣菜のパックやスナック菓子がこぼれだす。

詩織も突然の強引な訪問者達に、ただただ目を見開いて固まっている。

急に人数が増えて、狭く感じる部屋の中は異様な静けさが支配している。

音といえば、時折ソースが鉄板に垂れてジュウっと焦げる音だけ。



「山田お前……お前、これまずいよ……かなりまずいよ。  
「ごくりとつばを飲み込んで、恐る恐る柴野が口を開いた。

（せっかく良い会社に就職できたのに。ああもう山田の奴、人生棒  
に振っちゃうよ。）

「でも、今からなら間に合う……かも。と、とにかく自首しよう。  
「貝田も詩織から目を離さないままで、元空手部副部長に同意した。

（山田の趣味でエプロン付けさせてるのかなあ？それより裁判費用  
とか、どうなるんだろう……。）

「俺達もついてってやるから。なっ。」気の小さい村沢は既に半泣  
き状態である。

（真面目な山田がこんな恐ろしい犯罪にかかわってしまったなんて……  
。）

（）（どちらにしろ、山田は俺達の大事な仲間だ。最後まで支えて  
やらないと。）（）

3人は目を合わせて、お互いの気持ちを確認かめ合うように無言で頷  
きあう。

「な、何言っただよ、お前ら。」

「何って……。お前、この子、誘拐……。拉致……。」柴野  
が暗い表情で呟くと、あとの2人も「監禁。」と声をそろえた。

「なわけないだろっ！この人はなあ、この人は・・・えー、コホンっ。お、俺の彼女だよっ。」

「「「!!!っ!!!」」」

（（え？嘘だろっ！こんな可愛い子が？））

3人にとってはそっちのほうが受け入れがたい事実だったようだ。

「あの、始めまして、倉田詩織と申します。」詩織が立ち上がって、3人にぺこりと頭を下げた。

「あー突然すみません。俺達、山田の空手部の仲間です。」柴野がそう言った後、それぞれ自己紹介をするが、何だか気まずい雰囲気がある。

「・・・あの、もし良かったらお昼ご一緒しませんか？材料沢山用意してるんです。」

「し、詩織ちゃん、こいつらもうすぐに、す・ぐ・に、帰るから、気にしなくても。」良太が慌てて口を挟む。

「「「いいんすか?!」」」

「はい。是非どうぞ。」詩織がにっこりすると、空気読めオーラを発する良太を無視して、悪友3人組はいそいそとビールと持参して

きた惣菜をテーブルに並べ始めた。

ホットプレートはキッチンのテーブルに移動させて、お好み焼きが焼ける度に、次々と和室のほうに運ぶことにする。

「「「改めて、かんぱーい。「「「 人数がいきなり3人も増えて、にぎやかな昼食が始まる。

「そうすかー。詩織ちゃん、大阪から引越して来たんすかー。」

「え？まだ女子高生なんだっ。それに詩織ちゃんの行ってる高校って、滅茶苦茶お嬢様学校じゃないすかっ。」

「それより、いつから2人は付き合ってるの？」

好奇心満載の3人組から質問攻めに遭い、詩織はゆっくり食べる暇も無いほどだった。

結局、突然始まった宴会は、盛り上がりすぎておさまりが付かず、みんなで近所のカラオケボックスに繰り出すことになり、気が付いたら夜遅い時間になっていた。

「せっかく来て貰ったのに、騒がしくてごめん。あいつら図々しいから。」細川邸へと詩織を送る車の中で、良太は謝った。

「そんなこと無いですっ。凄く楽しかったです。良太さんのお友達に会えて、皆さんとっても良い人です。」詩織は助手席で首を横にふっている。

「でも、笑いすぎて腹筋が痛いです。」こんなに笑ったのって、初めてかもしれない。

「ま、詩織ちゃん楽しかったんなら良いけど……でも、今日ぐらいは俺は2人きりで過ごしたかったかな。」

「良太さん……。」普段あまり口にしない良太の本音を聞いた気がして、詩織の心は温かくなる。

「俺達は、あせらずゆっくり進んで行けば良いってことなのかも知れないな。」

自分の部屋に詩織が居て、何をするでもなく一緒に過ごしているだけで、心はすっかり満たされている。

「また、良太さんのところ、遊びに行ってもいいですか?」

「うん。明日は俺、現場行かなきゃいけない用事があった。でもまた来週にでもおいで。」

「はい。良太さん何か食べたいものあったらリクエストメール下さいね。」

「ありがとう。でも、詩織ちゃんの作ったものなら何でも喜んで食べさせてもらおうよ。」

とりとめのない会話をしているうちに、短いドライブが終わる。

良太は荷物を持って、細川家の玄関の外まで詩織を送っていった。

「今日は、ここで失礼するよ。遅くなってしまったから。番長によろしく。」

「はい。ありがとうございました。」

「じゃ。またメールするよ。」良太が帰ろうとすると、シャツの背中を掴まれた。

「良太さん、忘れ物ですつ。」

「え？」良太が振り向くと、詩織が少しムツとした顔で良太を見ている。

「おやすみなさいは？」

「あ、おやすみなさい。」

「じゃなくて。・・・今度すつとぼけたら、お仕置きですから。」

爪先立ちで手を伸ばして、良太の頭を引き寄せておやすみのキスをする。

数分後、ふらふらの良太に、どこか大人びた謎の笑みを浮かべて、  
詩織は一言。

「ふふつ。……今日はもうこれくらいにしといたるわ。」

立ち尽くす良太を残して、そっと家の中に入っていった。

## 思いがけなく 1

「じゃ、行ってくる。」日曜出勤の朝にもかかわらず、松永はすっきりした顔で支度をしている。

「ん。いつてらっしゃい。」見送る澁は、パジャマ代わりに借りた主任のＴシャツ一枚着てるだけ。

すっぴんのままで、少し乱れた髪が色つばい。

「一応鍵渡しとくけど、夕方には戻れると思うから、その後車で送ってやるから、待ってるよ。」

「うん。大丈夫ですよ。ちゃんと自分で。」もう一眠りしたら、元気出ると思うし。

「みーお？」聞き分けの無い部下をたしなめるような声色。

「・・・はい。わかりました。」

（も）。なんでこういうときだけ上司面するかな、この人は。）

主任は澁を抱き寄せて、眉間にうつすら浮かんだ皺に軽くキスをしてから、上機嫌のまま颯爽と仕事に出かけていった。

内側からガチャリと玄関の鍵をかけて、もう一度どてつとベットに寝そべる。

洗濯が終わるまで、横になっておくことにする。

金曜日、山田達と食事の後、主任は当たり前のように、少々酔っ払い気味の漣をこのマンションに連れて帰った。

それに対して、文句を言うつもりは全く無い。

漣だって主任と一緒に居たかったんだから。

主任の匂いにする布団にくるまって、漣はぼんやりと考える。

確固たる言葉も約束も交わさないままに、又ずるずるとこっぴつ関係に戻ってしまったこと、いつか後悔する日が来るのだろうか。

(それでも構わない・・・よね?)

一度はなんとか諦めたけれど、彼の腕の中で感じる温もりを、もう一度自ら手放すのは、今の漣には難しかった。

「漣が頂戴と言つまであげない。」

金曜日の夜、アンタそれ一体何キャラですかと聞きたくなるくらい、主任は頑なに漣のほうから求めさせようとした。

”お前のほうが俺に惚れてるんだろ。” そう言われてるような気がして、確かにそれは事実かもしれないけど、少しばかり悔しくも



なつた。

「元人妻を甘く見ないで下さい。」

そう言つて、酔つた勢いで、色々やらかしてしまったのを思い出して、顔が赤くなる。

最後にはどちらが勝つたとか負けたとか、そんなのどうでも良くなつてしまつたけど。

おかげで次の日の土曜日は、2人が目覚めたときは既に正午近かつた。

結局そのまま一日中、ここで主任とのんびり過ごしてしまつたのだ。

いつの間にか、うとうとしていると、ピーピーと洗濯終了の合図音が聞こえてくる。

ヨロヨロと起き上がつて、洗濯物を干すために、ベランダに出た。

主任のマンションは、ファミリータイプの間取りで、1人暮らしにはもつたないくらい広々としている。

「もしかして、以前誰かと暮らしてたんですか？」昨日、思い切つてそう尋ねてみた。それとも誰かと暮らす気でいたのかと。

「ここは親が買ったんだよ。老後は都会に住むほうが何かと便利だからって。」今は郊外の一軒屋に住んでいる主任の両親のものだと説明された。

家賃相当は、毎月親に払っていると言っていたが。

それを聞いて、漣は何だか少しホツとした。

だからと言って、ほかに付き合っている女性が居ないという証拠にはならない。

そのことをはつきり聞き出せないのは、前の結婚の失敗で、すっかり臆病になってしまっている為なのだが、漣にはその自覚は無い。

元夫の和也も、漣に触れるときはいつも優しくかつたし、それなりに情熱的だったことを思い出す。

彼のように、主任もまた、漣の事も多少は気に入ってくれてはいるが、他にも愛する人がいるのかも。

松永がどれだけ漣に惚れてるか、他人から見ればあまりにも明らかなのだが、和也の裏切りですっかり傷ついてしまっている漣の目には、あくまでも曖昧な大人の関係と映ってしまう。

そんな事をつらつら考えながら、洗濯物を干し終えたとき、漣の携帯が鳴った。

慌てて応答すると、宅配便業者からだった。

「あの、昨日の土曜日の午前中着指定の貨物、まだお預かりしていませんが・・・。」

「あー！うわっ！す、すみません！ちょっと急用で留守にしちゃった

んです。あの、今日の夕方配達とかに変更お願いできますか？」

「わかりました。では、16時以降に配達に伺います。」

「はい。・・・ほんとに申し訳ありませんでした。」見えぬ相手に頭を下げながら、通話を終えた。

ネットで見てるうちに、どうしても食べたくなって、ベーグルをクール便でお取り寄せしてたのをすっかり忘れていたのだ。

「アツチャー。やっちゃったよ。すっかり忘れてた・・・。」

透は部屋の掃除と片付けをざっとしてから、シャワーを浴びて着替えた。

主任の帰宅を待っていたら、荷物が届く16時に間に合わない。待ってるように言われていたが、やはり電車で先に帰る事にした。

”宅配便が届くので、やはり電車で先に帰ります。鍵はとりあえずお預かりしておきます。”

仕事中の主任に、メールを送っておく。よし、これで大丈夫。

主任のマンションを出ると、ぎらぎらする日差しにうんざりした。

いつの間にか、8月ももう近い。

自宅マンションに戻り、洗濯と掃除を済ませると、また汗だくなつたので、シャワーを浴びることにした。

「ふう〜。ことう暑いと、食欲無いなあ。」

アイステイーを片手に、読みかけの本を開く。

漣は海外の女流作家が書く探偵モノが好きなのだ。

今一番お気に入りには、女性のバウンティー・ハンターが主役のシリーズだ。ロマンス部分もしっかりしていて、災難気質のバツ一の可愛いヒロインが、初恋相手の幼馴染の刑事と再会して良い雰囲気になる一方、危険で謎めいたリッチな同僚にも魅かれてしまうところが読んでいて楽しい。

インターフォンが鳴った時には、頭の中はすっかり本の世界に入り込んでしまっていて、漣はろくに相手を確かめもせずに玄関の扉をあけてしまった。

だから、玄関の外に立っている人物が誰だかわかったときは、腰を抜かしそうに驚いた。

「漣、・・・久しぶり。」控えめに微笑む元夫が、漣を見つめていた。

## 思いがけなく 2

「ひつ……ど……ど、どうして？」受取証に押そうと用意していた印鑑を落つことしそうになる。

「住所調べさせてもらったんだ。」元夫の表情に悪びれた様子は全く見えない。

少し細面の上品な顔立ち。癖のある柔らかな髪の毛は短めにカットされていて、シンプルなTシャツとジーンズ姿なのに、とても洒落に見える。

それでも緊張はしているのか、落ち着かなげに両手をジーンズのポケットにつっこんで、玄関の外に立っている。

「話があるんだ。いきなりで悪いけど……。良かったら、この近くの店でお茶でもどうかな？」

らしくない遠慮がちな態度。

澁はすんなり警戒心を緩めてしまう。

「……あの、宅配便待ってるから、今外出できないの。……よかったですね。」

荷物が来るまでは、留守にするわけにもいかないの、和也を部屋に上がらせることにした。

先ほどまで、本を読みながら寝そべっていたソファに座るように

言うと、急いでキッチンでアイステイーを用意する。

ローテーブルにグラスを置いて、自分は和也とはテーブルを挟んで反対側の床に座る。

「元気そうだね。」昔と変わらない、穏やかな笑顔。

「はあ。お蔭様で……。」

確かに、今の自分は、和也と暮らしていた頃よりも、数段晴れ晴れとした顔になってると思う。

「慰謝料だけど。あれじゃ弁護士費用にも足りなかったんじゃないか? ……もっと取ればよかったのに。」ヒトゴトみたいにクスクス笑う。

「ああ、あれは……お金の問題じゃなくて、どちらが原因で……てことを示すために少しでもいいからって親に言われて。」

「そうか……。」

(うつて)。なんだか気まずいなあ……。 ( 溼はモジモジと身体を動かす。

「どうしても謝りたかった。溼に。」和也がしんみりした口調で切り出す。

「……。」

「何度も弁護士さんをお願いしたけど、最後まで会えずに離婚することになって。」

「……ごめんなさい。」

「責めてるわけじゃないよ。ただ、直接自分の口から、漣を傷つけたことをちゃんと謝りたくて。」

和也はソファから立ち上がって、漣と同じく、床に座って頭を下げた。

「悪かった。長い間、漣にはすまないことをしてしまった。俺のせいで、どれほど……。本当に申し訳なかったと思ってる。」

「もういいの。終わったことだから。」

和也を待つていくつも長い夜を過ごしたこと。時々和也の上着から他の女性の匂いがしたこと。そのたびに、悔しさと無力感で心が張り裂けそうだったこと。

長いようで短かった結婚生活の記憶が一気によみがえる。

「俺の顔なんか見たくないんだろうなって。漣のお母さんにも、もうそっとして欲しいって言われて……。でも、このままで終わりたくなかったんだ。恨まれてるのわかってて。」

「ううん。辛いことばかりじゃなかったし……。それなりに楽しいこともあったし。」

「……こんな事もう関係ないと言われるだろうけど、向こうとは別れたから。」

「え？」

「新入社員の頃、仕事の関係で知り合ったんだ。彼女、そのときには結婚してたんだけど、俺全然知らなくて。」

「はあ。」 漣は困惑して、視線を自分の膝に落とす。

「何ヶ月かして、子持ちの既婚者だってわかったときには、すっかり深みにはまってて。」

「……。」

「でも、漣と出会って。綺麗で、明るくて性格も良くて家庭的で。誰もがお嫁さんにしたがるような子になって、どうしても自分のものにしたかって思った。その後、彼女に結婚するから別れようって切り出したら、いきなり旦那と離婚してきてさ、それで俺と別れるくらいなら死ぬって。」

「えと、あの、もういいよ。和也さん。」

(こんな話、聞きたくない。聞いてどうするの?)

胃がぎゅっと痛む。耳を塞いで逃げ出したい。

「わるい、今更なのわかってるんだけど、最後まで言わせて欲しい。……あのとき漣に泣かれてから、何度か別れ話を持ちかけたんだけど、向こうもどんどんヒステリックになってきて、会社にも電



話してくるようになって。同僚からも白い眼で見られるし、ほんと、参っちゃって。」

「そうだったの……。」もしかしたら、ある意味、彼も被害者なのかもしれない。そんなことをぼんやり考える。

「そのことで、漣が悩んでるの、何となく気付いてた。それでも何も言わずに明るく接してくれてたから。だから、何があっても、漣は俺のこと好きで居てくれるんだって勘違いしてた。問題起こされないように向こうとも適当に続けて……。だから離婚切り出されて、出て行かれたときは、自業自得とはいえ、かなり落ち込んだよ。」

和也のアイスティーの氷がカランと音を立てた。

漣は、元夫の顔をじっと見つめた。漣の大好きだった、優しそうなまなざしが今は後悔と苦惱でゆがんでいる。

本当なら今頃は、この人の子どもを産んで育てていたのかも。

なのに、今は、そう。他人よりももっと遠い存在に思える。

「ごめんね。」

「え？」和也が驚いた顔で漣を見つめる。

「夫婦だったんだもん。かっこつけずに、なりふり構わずその女の人のところに乗り込むとか、暴れまくって泣き叫んで、ドン引きさ

れても和也さんを取り戻す努力をするべきだったのかな。」

「漣……………」

「でも人の気持ちや、無理矢理自分の思うようにすることは出来ないし。一度泣いてすがって、それでダメならもう後は和也さん自身に決めてもらうしかないって考えたの。……それに、和也さんを責めないことで、和也さんだけが悪者になるって頭のどこかで計算してたのかも。そうやって、すこしずつ自分の逃げ道をキープしてたのかもしれない。自分の気持ちばかりに囚われて、和也さんも辛い思いしてたなんて全然知らなかったの。ごめんなさい。」

「そんなことつ……………」和也が口を開こうとした時、インターフォンが鳴った。

今度こそ宅配便だ。漣は荷受を済ませて、箱をキッチンのテーブルに置いた。

「それ、何？」和也もキッチンにやって来た。

「ん？これ、お取り寄せしたベーグルなの。ブルーベリーとか、ハーブ入りとか色々あって。和也さんちよつともって帰る？」

「ん。じゃ、ちよつとだけ貰おうかな。」

「ほら、結構沢山はいつてるから。」箱を開けて、和也の好きそうな味を選んで、保冷剤を入れた紙袋に入れて渡す。

「冷凍庫にしまっておいて、食べる分だけ解凍して、半分に切ってトースターで軽く焼いて食べて。」

「うん……。ありがとう。」気付けば、いつのまにか2人の間の張り詰めていた空気がふっとゆるんでいる。

「和也さん……。私、和也さんを恨んでないし、今はもう、ただ単に縁が無かったんだって思ってるの。だから、和也さんももう自分を許してあげて。」

暫く沈黙が続いて、和也は何かまだ言いかけたが、頭を振って微笑んだ。

「ありがとう。漣は優しいな。俺、帰るわ……。元気そうで良かったよ。ごめんな。突然押しかけて。」靴を履いて、玄関扉を開けた。

「ありがとう……。和也さんも、元気だね。」

玄関の外、夕暮れを背に立っている和也の表情があまりにも寂しそうで、気付いたら漣はマンションの外まで送ると言っていた。

外はまだ昼間の熱気が残っていてじんわりと暑かった。少し離れた路上に、見覚えのある和也の車が停まっている。

「ベーグルありがとう。頂きます。」

「いえいえ。どうぞどうぞ。」漣も笑顔を返す。

じゃあ、と小さく手を振る。

和也は、また何か言いたそうにしているが、漣はそれには気付かないふりをして、マンションの中に戻るうとした。

「漣っ。」

「え？」振り向くと、和也は真剣な顔で漣を見つめていた。

「俺、海外転勤の内示もらった。」

「そうなの……。」和也はずっと海外支社駐在を希望していた。

「正式な辞令はまだなんだけど、フランクフルトに。決まったら最低でも5年は戻って来れない。」

「5年……。」

今でさえ、もうお互い別々の人生が始まっている。5年もあれば、さらに遠ざかるだろう。

この人に会うのもこれが最後かもしれないな。漣の心の奥がチクリと痛んだ。

和也はごくりとつばを飲み込んで、話を続けた。

「あのさ、考えてみてくれないか？」

「考える？」

「一緒に来て欲しい。フランクフルトに。」



### 思いがけなく 3

予想もしてなかった言葉に、漣は息を呑む。

「ななな、何言ってるの?!わたし達、離婚したばかりなのに。」  
驚きのあまり、声がかすれた。

「無茶苦茶なのは自分でもわかってる。でも、俺達嫌いあって別れたわけじゃない・・・だろ?それに、俺は今でも漣以外と結婚なんて考えられないし。」そう言って、右手で漣の手を握る。

手を握られても、嫌じゃない。嫌じゃないけど、今の漣には違和感しか沸かない。

主任の大きくてごつごつしてるくせに、優しくて、そして妙に器用な手。ほんの短い間に覚えこまれた温かな手のひらの感触とは違う。

「ごめんなさい。わたしもう。」慌てて和也の手から自分の手を引き抜こうとするが、和也もすんなり離そうとはしない。

「今すぐ結論出したりしないで。図々しいの承知で言ってるし・・・とにかく少しだけでも考えてみて欲しい。俺、今度こそ漣の望むような旦那になりたい。漣を幸せにしたいんだ。」和也の声がせつなく響く。

「和也さん・・・。」一緒に暮らした3年間、この人に振り向いてもらおうとどれだけ苦しんだらう。

楽しいこともあったなんて言ったけど、そんなの嘘。

本当は、少しずつ、自分の心が死んでいくような気がしてた。

夫の何気ない言動に一喜一憂する毎日。 帰りの遅い日には、嫌味を言いたくなるのを必死でこらえた。

時には我慢も限界で、負の感情が爆発しそうになったこともある。でも最後のところで、女のプライドが邪魔して、何事も無いような振る舞いを続けてた。

そして、いつしか嫉妬に狂う自分の気持ちを隠すため、心に見えない壁を張り巡らせることに専念してた。

離婚協議中、和也の直接会いたいと言う要求を拒否するたびに、心のどこかで暗い喜びを感じていたのも事実。 そうすることで、自分を裏切った和也にわずかでも復讐できたような気がした。

それほど自分の中で大きな存在だった。

私の事を綺麗だって言ってくれたけど、本当は彼のほうがよっぽど綺麗だ。

王子様みたいに、いつもキラキラしてて。

どうしようもなく、好きだった。 どんなに頑張っても彼への想いを消すことが出来なくて。

そうしてやっと、長い間苦しめられていた元夫への醜い執着から開

放されたと思えた時、こんどは彼のほうが澪を諦められないと言う。

あまりのタイミングの悪さに、底知れないむなしさを感じてしまう。

(遅すぎるよ和也さん。今の私の心には、あなたはもう居ない。)

澪の瞳が微妙に揺れるのを見て、和也は希望はまだあると感じた。

すかさず澪の頬に手を伸ばす。

「澪を連れて行きたい。もう一度チャンスをくれないか？」とっておきの笑顔を作る。これで落ちない女はいないと密かに自信を持っている。ただし、目の前の元嫁にその魅力がいまだに通じるかどうかは定かではない。

親密な触れ方に、澪は思わず後ずさりする。

(違う。この人の元には戻れない。だって私はっ。)

そのとき、背後で車が急停止して、すぐにボタンと車のドアが乱暴に閉まる音がした。

「吉井？」

その声を聞くなり、澪はびくっと飛び上がった。



## 不協和音 1

振り向くと、主任が見たことの無いような険しい顔で近づいてくる。

「しゅ、主任っ。どうしてここに？」全然悪いことなんてしてないのに、なぜか後ろめたい。

「ああ。さっき仕事終わって、・・・メール見たから。」漣に返事を  
する間も、冷たい視線は和也を捕らえたまま。

「会社の人？」和也が小声で尋ねてきたので、漣は小さく頷いた。

「とにかく、ゆっくり考えて、返事くれないか？携帯番号もメールアドレスも変えてないから。・・・連絡待ってる。」

和也は漣を熱く見つめながらそう言つと、慥然とした表情の松永には軽く頭を下げ、すぐに愛車に乗って去って行った。

漣は和也の車が見えなくなるまでぼんやりと見送った。

（はあく。どうしよう。なにやら後ろから黒いオーラが・・・。）  
心の中でため息をつく。

「行くぞ。」いきなり、ものすごい力で腕を掴まれて、そのまま玄関まで無言でぐいぐい引つ張っていかれた。まるで刑事に連行される容疑者のようだ。

澁がもたつきながらも玄関の鍵を開けると、主任がさつと扉を開けて、靴を脱ぐ間も手を放す事無く、部屋の奥に澁を連れていく。

小さなソファーに座るよう促されて、澁はしぶしぶ腰を下ろした。掴まれていた腕がズキズキする。

痛む部分をさすりながら、おそろおそろ見上げると、主任は、胸のところ腕を組んで立ったまま澁を睨みつけている。

”現場で一番怖い人なんです。”食事の時に聞いた山田の言葉が頭に浮かぶ。

部屋の温度が急に下がったような。

「どついうことだ？・・・コソコソ会ったりして。」突き刺すような声に、澁は息を呑む。

「そんなっ・・・わたし、そんなことしてませんっ。」必死で首を横に振る。

「嘘つくなよ。元旦那だろ？さつき見つめあってたのは。」

「見つめあつてなんかっ！和也さんは・・・。直接謝りたかったっ。だから・・・そんなんじゃないよ。」

「はっ！なにを今更・・・。で、まさかこの部屋で会ってたわけ？」ローテーブルにふたつ並ぶ、アイスティーのグラスを顎でしゃくってみせる。

「・・・荷物待ってたから、留守できなくて、それで。」やましいことなんて無いのに、何を言っても言い訳がましく聞こえる。

声が震えてきて、そんな自分に嫌気が差す。

「ったく。そんな格好で、未練たらたら男を部屋に入れるか？普通。」

「そんなかつこつて・・・。」自分を見下ろす。シャワーを浴びた後、肌触りの良い黒のノースリーブのカットソーワンピースを着ている。確かに露出度は大きいけど、和也は澁のこんな姿には見慣れているはずなので別段気にしていなかった。

「ここに戻った後、掃除して、シャワー浴びたから・・・。」そういう発言がますます主任の怒りをさらに煽るということは頭に無い。

「はぁーーーーー。」松永は、盛大なため息をついて、両手で顔を覆った。

少し頭を冷やさなければ。

そうじゃないと、びくついている彼女をさらに怯えさせることになってしまう。

「とりあえず、荷物纏める。帰るぞ。」ソファに座る澁の手をとって立ち上がらせようとした。

「い・・・嫌です。」 澪はぱつと手を引つ込めた。

「は？」 予期せぬ拒絶の言葉に、一瞬で松永の機嫌がMAX悪くなる。

「だって主任、怒ってるし。今日は・・・今日はここにいます。」  
「おどおどしながらも、澪はきつぱりと告げた。

何だかいろいろあつて疲れてしまって、ひとりになりたかった。

和也とよりを戻すという選択肢はありえないが、いままでのこと、これからのこと、自分の気持ちと向き合つて、ゆっくり整理したいと思つた。

自分はどんな風に生きていけばいいのか。どうしたいのか。

今日、和也が語つた話の内容についても、知らなかったことばかりで、消化しきれていないのだ。

それに、今、目の前で怖い顔をして立っている男の事も・・・。

かつて和也を愛したように、この人にのめりこんでいくのが怖い。  
また裏切られたら？ それとも、もう手遅れなの？

誰かを好きになる。深く好きになればなるほど、それだけ心が無防備になり、また傷つくリスクも増えていくのだ。

ついと床に映る人影が動いたと思ったら、ソファアの上に押し倒されていた。

「んんっ！ちよっ、主任っ。だ、ダメですっ！」 澪は両手で力いっぱい主任の肩を押し戻そうとする。

案の定びくともしない松永は、器用な手つきで澪の髪を纏めていたピンをはずしていく。

「何で嫌がるんだよ。もしかして、アイツとやったのか？」

「そんなわけ無いです！そんな、酷いですっ。」 あまりの言われように、カッとなる。そんな女だと思われているとしたら、許せない。

「じゃ、いいじゃん。」 抵抗する手を押さえつけたまま、ワンピースを脱がせて、ソファアに澪を釘付けにしたままキスをする。

強引なのはわかってる。それでも松永は自分の衝動を抑えることは出来なかった。

心に渦巻く激しい嫉妬で、すっかり抑制が効かなくなってしまっていた。

あれほど念押ししたのに、勝手にひとりで帰宅した恋人を訪ねたら、当の彼女が元旦那とウルウル見つめあっていたのだ。頭に血が上るのも当然だ。

元夫の事を忘れさせて欲しいといって泣いた澪の顔が目に見えなくて

くる。

あんな顔させたくせに、あのヤロウ。

澪の元夫が、男の自分から見ても、かなりの美男子だったのも気に入らない。

そいつが、女なら誰もがとろけてしまいそうな甘い笑顔を浮かべて、彼女の頬を撫でていた。

その後、元夫を見送る切なげな横顔を見ていたら、ぷつんと何かで自分の中で音を立てて切れてしまった。

しつこくキスを続けていると、澪が諦めたように身体の力を抜いて、松永の首に腕を絡めてきた。

「ベットのほうがいい？」髪をなでて、うなじに鼻を擦り付けるようにすると、コクリと素直に頷く。

おとなしくなった身体を抱き上げて、部屋の隅にある小さなベットにそつと横たえる。

松永が服を脱ぐ時間さえ待てないのか、じれったそうに澪が両手を伸ばしてきた。

無言のまま、ただお互いを求め合う。

乱暴にならないようにと自分に言い聞かせる。

それでも「ちゃんと目を開けて。」ひとつになるときは、思わずそう言っていた。

彼女が今、誰と抱き合っているのか、はっきりさせたかった。

澪の心の中から、元夫の姿を完全に消し去りたい。俺だけのものになって欲しい。

狭いベッドの中で、細い身体をきつく抱きしめながら、心の中で強く願う。

そのためには、こんなふうにはただ強引に身体を重ねる前に、ちゃんと自分の気持ちを言葉で伝えるべきだったのに。

まるで恋人同士のようなだった澪と元夫の姿に、かつてないほど動揺していた彼には、そんなことすらわからなくなっていた。

## 不協和音 2

いつの間にか、窓の外は真っ暗になっていた。

「漣、起きて。仕度しろ。」

眠りこけている細い肩を揺する。

「え……？なに？」

「勝手にシャワー借りたよ。漣も早く浴びて来い。腹減った。何か食べに行こう。」

漣はけだるい身体にのろのろとシーツを巻きつけて、浴室に向かい、温いシャワーを浴びた。

簡単な部屋着を身につけただけの漣に、主任は眉をひそめた。

「飯食いにいくのに、その格好か？」

「今夜はもう……出かけないから。」

「……怒ってるのか？」

「怒ってないです。」

さっきのはかなり強引だったけど、それでも不思議と嫌だとは思わなかった。



「じゃなんでだよ。」

「……お願い。今日はもう帰って。」頼りない声が返ってくる。

帰れと言われて、松永は自分の心の中の不安が現実になった気がして、愕然とする。

「まだアイツの事忘れられないってことか？」思わず両手をきつく握り締める。

「違います。……ただ、今夜はひとりになりたいの。」遷はただ力なく首を横に振るばかり。

「なんなんだよ。アイツと約束でもしてるのか？」

「和也さんとは、もう会いません。」

「返事が欲しいって、連絡待ってるって言ってたじゃないか。あのヤロウ。」

「それは……。海外転勤になるから……。一緒に行かないかって。その返事をくれって……。」

「……なるほど。」聞き取れないほどの低い声。

「え？」

「迷ってるんだろ？だから、俺のところへ行かないつつてんのか。なんだよ……。忘れたって言ってたくせに、ちよつと粉かけられた

ら、簡単になびくのか。」 皮肉な笑いを浮かべて吐き捨てるように言う。

「そんなことっ！迷ってなんか無いです。それに、あの人と海外なんか行きませんっ。」

「じゃ、何でその場ですぐに断らないんだよ。意味わかんねーよ。」

「それは……。返事しようとしたら、もう少し考えてからって……。」

（もう好きな人がいるからって説明しようとした時に、ちょうど主任が来たから。）

それでも、あのときちゃんと伝えればよかった。

自分のはっきりしないから、和也にも変な期待を持たせてしまったかも知れないし、そして今、こんなふうにな主任を猛烈に怒らせてる。

「考える必要なんか無いじゃないかっ。今すぐ電話して断れよ。俺の目の前で断れ。」

「主任……。」

「今すぐ、だ。」

なんだか眩暈がして、遷は黙って俯いたまま、ふらりとベットに座り込んだ。

すぐ傍で、主任が物凄く苛立っているのが痛いほど伝わってくる。

それでも漣は自分のタイミングで和也に電話をしたいと思った。

主任に背中を小突かれるようにして、おざなりな言葉で和也との関係を終わりにしたくはなかったのだ。

プライベートな、漣だけの空間で、恐らく最後になるであろう、和也との会話を交わしたかった。

「できません。……今、すぐには。……ごめんなさい。」

2人の空間が一気に張り詰める。

どちらも歩み寄る様子は無く、ただ冷たい沈黙だけが広がっていく。

「もういい。……勝手にしろ。海外でもどこへでも、誰とでも、行きたければ行けばいい。」

体中の血が一瞬で凍ったような気がした。

やはりまだ元夫に想いが残っているのか。

漣が、アイツと行ってしまふ。俺の腕の中をすり抜けて、いなくなってしまう。

引き止めなければと心の中では焦りまくっているくせに、口から出るのは突き放すような言葉ばかり。

「……主任？」 澪は青い顔をして、目を見開いている。

「……帰るよ。明日も早いし。考えが決まったら連絡してくれ。一応言っとくけど、俺は、誰かと女を共有する趣味は無いから。悪いが、そこまで困ってるわけじゃないし。……じゃ、鍵閉めとけよ。」

早くここを離れなければ。

情けなくも、嫉妬交じりの怒りを爆発させてしまっ前に。

傷ついた表情の彼女に、もっと辛らつな、心無い言葉をぶつけてしまっ前に。

ショックのあまり、呆然としている澪を部屋に残したまま、松永は逃げるようにして出て行った。

## 夏風邪

ふわりと額に載せられた、手のひらは、ヒンヤリしていて、柔らかくて。

良太は高熱のため朦朧としながらも、それが母の手よりも、ずいぶん小さいような気がしていた。

(誰……？ ああ、……夢か？)

俺は今、彼女の幻を見ているのか。

俺の天使。でも、時々小悪魔になることが最近判明したばかりの。

忙しい週の半ば、熱帯夜が続き、あまりの寝苦しさに、クーラーのおやすみタイマーを入れるのを忘れ、上半身裸で朝まで寝入ってしまった、次の日から関節と喉が痛くて、とうとう高熱でダウンしてしまったのだ。

こんな状態の自分には、身体の丈夫ではない詩織を近づけたくは無  
い。

心配した先輩社員に無理矢理連れて行かれた病院で点滴をしている最中に、こっそりメールを送った。週末のデートの約束は、悪いけど仕事のためキャンセルさせて下さいと。

水分補給のためのスポーツドリンクと、菓子パン、レトルトのおかゆなどを病院近くのコンビニで買って、家にたどり着くと、作業服を脱いでそのままベットにもぐりこんだ。

次の日も熱は一向に下がらず、とうとう母に電話すると、すぐに飛んできてくれて、シーツを取り替えたり、おかゆを作って、良太が子どもに戻ったようにあれこれ世話を焼いてくれた。

夕方になって、明日も来るよと言いながら母が帰宅したので、部屋でひとり、薬を飲んでおとなしく寝ていたのだ。

「こんなにお熱が。良太さん……。早く良くなってね。」ため息交じりの声まで聞こえてくる。

(詩織ちゃんの声まで聞こえてきたよ。あー、残念だなあ。せつかく週末デートだったのに。)

もうすぐ始まる夏休みは、殆ど家族と過ごさないといけないと言っていた。

毎年ハワイの別荘に滞在することになっていると。

だからこそ、今度の週末は2人の夏の思い出になるようなデートにしたかったのに。

「詩織ちゃん……。」「かすれた声で名前をそつと呟いた。

「なんですか?」

「!!!!!!」つ!!!!!!」ぱつと目を開けると、薄暗い部屋の中、

至近距離で可愛い笑顔が見つめている。

「何か飲みますか？それとも、先にお熱測りますか？」

「し、詩織ちゃんっ！！！ななな、なんでっ！」ガバツと布団から起き上がるようにする。

「ダメですっ。じっとしてて下さいっ。」「上から肩を押さえられる。

「はあはあ……。どうして、どうしてここに？」

「真琴さんが、連れてきてくれたんです。ビックリしましたよ。わたし、風邪引いてはるなんて知らなかったから。」「そういいながらも、キッチンから冷たい飲み物の入ったグラスを持ってきた。

「水分とりましょうね。はいどうぞ。」「にっこりしながらグラスを持たせてくれる。

「ああ、ありがとう。」「冷たい液体が喉に気持ちいい。

ぼんやりしているとグラスを取り上げられ、お熱を測りましょうと行って、おでこにおでこをくっ付けられた。

「詩織ちゃん、ダメだよ。風邪が移ったら大変だから。」「

「何言ってるんですかっ。だてに薬屋の娘じゃないんです。私の事は心配しないで下さい。」「

「それより……。良太さん酷いです。」「少し恨みがましい目

で睨まれる。

「んん？ごめんね。週末のデート、俺も楽しみに。」

「違うっ！違います。そんなことで怒ってるんじゃないです。体調悪いの、何で黙ってたんですか？教えてくれないなんて……。結構傷つきました。」

「詩織ちゃん……。」

「わたし、良太さんの彼女なんですよ？看病ぐらいさせてくれたっていいじゃないですか。」

「うん。ありがとう。ごめんね。」

「こほんっ。では、元気になったら、ひとつだけ、何でも言うこと聞かって約束してもらおうかな？」

「え？」

「だって……。わたし怒ってるんですよ？」

「う。何か怖いなあ……。わかった。約束するよ。」

「じゃ、早く良くなってくださいね。楽しみにしてますから……。あ、良太さん起き上がれますか？少し何か食べてからお薬飲みましょうか。」

乾いたTシャツに着替え、母が作りおきしてくれたおかゆをすすって、クスリを飲むと少し眠くなったので、良太はまたうとうとし始



めた。

次、目覚めた時は夜中をとくに過ぎていて、ベッドのかたわらには、床に座ったまま良太の布団に顔をうずめて眠っている詩織がいた。

部屋の中は暗く、キッチンの常夜灯の灯りが、ドアから隙間から薄く差し込んでくるだけ。

そつと起き上がり、身体を動かしてみる。まだ少し喉は痛い、関節の痛みは消え、熱もずいぶん下がったようだ。

「詩織ちゃん、こんなところで寝たらダメだよ。」指先で柔らかい頬を撫でてみる。

「う……ん。……あれ？良太さん？寝てないとダメですよ。」詩織は、よろよると立ち上がると、ベッドのヘッドボードに背中をもたれて座っている良太の額に手をあてた。

真剣に眉にぎゅっと力を入れて良太を見つめる、そのあと満面の笑みを浮かべた。

「熱、下がってますねっ。良かった。夏風邪はこじらせると怖いから、心配だったんです。」

「もうずいぶん楽になったよ。こんな遅くまで悪かったね。」

「いいんです。一学期ももう終わりだし。良太さんのほうが大事だから……。それより、冷蔵庫にゼリー冷やしてるんです。食べますか？」

「うん。でも、俺、もう起きれるよ。」

「良太さん、ステイっ。」短い言葉を発した後、詩織はキッチンへ小走りに去っていった。

(は????俺、い、犬扱いか????)

パチンと寝室の灯りが付いて、詩織がスプーンとゼリーの載った小さいトレイをもってくる。

その姿を見て、啞然とする。

「あわわっ。」

さっきは学校の制服姿だった詩織が、今はなんと、ピンクのナース服姿に変身しているのだ。

詩織は何食わぬ顔で、ベットに腰を掛け、スプーンで慎重にゼリーをすくうと

「はい、あーん。」驚きのあまりポカンと開いた口にスプーンを突っ込む。

「うぐぐっ。　　ししし、詩織ちゃんっ。なんでそんなカッコっ!!

「!」

「え?これ?」クスクスと可愛らしく笑っている。

「も・・しかして真琴の差し金か？」アイツこの期に及んでまだ俺をおちよくなる気か？

「違いますよう。大阪では彼氏が病気の時は、彼女は必ずナース姿で看病するんです。はい、口あけて。」すまし顔で答える。

「なるほどそうなんだ〜・・・ん、ゼリー美味しいな。もぐもぐはっ！！っなわけないでしょうが。」

「ちゃんとボケツッコミできました。えらいです。」間を置かず、スプーンを良太の口に差し入れる。

「ありがと。もぐもぐ・・・。じゃなくてっ。」

「叔父のデンタルクリニックのナース服が結構余ってるんです。可愛いのを叔母が何点かキープしてて。それ、借りたんです。」実際は、事情を知ったトキコに、持って行けと押し付けられたのだが。

「・・・。」「無言でゼリーを詩織に食べさせてもらっ良太。

「それに、真琴さんが。」

「へ？真琴が何か・・・？」

嫌な予感。このタイミングで真琴の名前が出るなんて。

「良太さん、そういうの大好物。」

「わーーーーっ。」思わず詩織の口を手で塞ぐ。

ぎゅっつとわき腹をつねられて、慌てて詩織の口から手を放す。

「痛いよっ、詩織ちゃん。」

「お黙りなさい。」なぜか詩織ちゃんと真琴が重なって見えてしま  
う。

「何も言っていないのに……。」5歳も年下の女子高生に叱られ  
てしょんぼりする。

詩織がトレイを下げに行き、蒸しタオルを手にして戻ってきた。

「さ、脱いで。身体拭きましようね。」

「あー」。コホンっ。大変ありがたい申し出ではありますが、お気持  
ちだけ頂いておきます。」

「どうして？」詩織は、まっさらな目を見開いて、きょんとんとして  
いる。

「詩織ちゃん……。」ナース姿だけで勘弁して下さい。また熱  
がぶりかえしちゃっよ。

「お風呂は体力を必要以上に消耗するから、熱が出た後は、こっや  
って身体を拭くんですよ。」

「じゃ、自分で。」

「だーめ。ほら、大阪では。」

「大阪はいいからっ。ほら、タオル頂戴。」

「嫌です。じゃ、今使います。」

「何を？」

「ひとつだけ何でも言うこと聞かなくて約束。」

「……………」

「約束したもん。」唇を尖らせて、タオルを握り締める。

良太はとうとう覚悟を決めておとなしくT・シャツを脱いだ。

良太がどこまで拭いて貰うことになったのか。

読者の皆様のご想像にゆだねましょう。

翌日、滝汗を出したおかげで、良太の夏風邪はすっかり治まっていたらしい。

こんな治療法もあります。

お試しあれ。

## 澁の涙

「おつかれー。」

「あ、おつかれさま。」

定時直後の女子更衣室はいつも混みあう。

あちらこちらから聞こえてくる楽しげなおしゃべりを背中で聞きながら、澁もぼんやりと通勤着に着替え始める。

「ネエネエ聞いてよう。先週、彼と式場巡りしてたんだけどさー。」

「あ、そっかー。ユミちゃん結婚式、来年だもんね。ふうー。羨ましいな。」

「それよか、ビックリしちゃったよ。なんと！施工部の松永主任と、設計部の安達さんがさあ……。」

「マジでっ!」

澁は思わず振り向いた。ここところ一日中澁の頭の中を占めている人の名前が聞こえたからだ。

噂話に夢中の二人は、蒼白な顔の澁に気付く事無く、ひそひそ声で話をしながら顔を寄せ合っている。

「あ、でもそれ聞いた事ある。もともと松永主任が設計部のときに……。」

「……………で、付き合ってたのか。」

「それで2人でホテルの……………ただけど。」

「すごくいい雰囲気……………のあと、で……………」

「じゃ、決まりだね。だって、前にあの2人が……………てるところ……………が見たことあるって。」

漣は、後ろの2人の会話の断片を必死で拾い集めた。

指が震えて、ブラウスを着るのに手間取ってしまった。

こめかみと背中に嫌な汗がつつたう。

肝心なところが聞き取れないまま、いつのまにか、おしゃべりをしていた2人は着替えを終え、更衣室を出て行った。

漣のマンションで、口論になった日から、主任とはお互いメールも電話もしないまま、すでに10日程が過ぎようとしていた。

主任に目の前で電話することは拒んだ漣だが、次の日には和也に電話を掛けて、転勤についていくことは出来ないとはつきり伝えた。

断られても和也は別に驚いた様子は無く、ただ、ずいぶん粘られて、これからは良い友達でいようということになった。

その後、すぐにでも主任に会いに行きたかったのだが、口論の際、嫉妬に駆られてだとは思いますが、きつい言葉を投げつけられたのを思

い出し、なんとなく気後れしてしまって、連絡するのを延ばし延ばしにして、今日に到るのだ。

それにしても、澪だけではないだろうとは思っていたが、さすがに具体的に主任と他の女性との噂話を聞いてしまうと、やはりシヨックである。澪の身体を猛烈な脱力感が襲う。

設計部の安達さん……。

澪は彼女の顔を思い浮かべる。

部署も違うし、向こうはバリバリのキャリア志向の先輩社員だ。挨拶程度しか言葉を交わしたことは無いが、いつも仕立ての良いビジネススーツに身を包み、髪をショートカットにした、勝気な感じのはつらつとした美人である。

（そうなんだ……。主任の恋人って、安達さんだったんだ。）

結婚式場を見たのなら、具体的に結婚の準備に入っているのかもしれない。ホテルを利用していただけなら、その日はデートだったのかもしれない。

どちらにしても、澪の事は一時の気まぐれだったのか。バツイチのいまだに元夫に未練を残した（と思われる）女なんて、主任からしてみれば、本気になる価値も無いのだろう。

（バカみたい……わたし。）

主任からも、何度かバカだって言われちゃったけど、ほんとにバカ。



学習能力ゼロ。

ただひとつだけ救いがあるとすれば、それは、自分から主任に電話しなかったことだろう。

これ以上ミジメなことはするまい。

ぎちりと歯を食いしばる。

元夫にはちゃんと断ったからと、主任に電話して、それからどうなるというのか。

もともと主任には本命がいたというのに。

何も知らず、何も聞こうとせず、ただ言われるがまま主任の家で、まるで恋人同士のように過ごしていた愚かな自分。

（なんだか疲れちゃった。・・・しばらくは、恋愛よりも、自分の生き方を見つめることに専念しよう。こんなコト繰り返し返したら、ますます自分を嫌いになってしまう。）

ロッカーの扉の内側についている小さな鏡を見つめると、なぜかクスクスと自嘲の笑いがこみ上げる。

ついでに涙もこみ上げてきた。

誰にも涙を見られないように、急いで更衣室を出て、エレベーターではなく階段を使ってロビーまで降りた。

カツカツと頼りない足音を立てながら、一階の吹き抜けのホールに

出て、強化ガラス張りの両開きの扉に向かう。

漣がビルの内側から、力任せに扉を押そうとしたとき、ちょうど中に入ろうとしていたカップルとかち合ってしまった。

この情けない涙の元凶である2人。

濃紺のスーツを着た松永主任と、柔らかい素材の上品なデザインのベージュのスーツを着た安達さんだ。

漣は慌てて頬を伝う涙を手の甲で拭った。

「吉井？」主任が前に立ちふさがる。主任とべったりくっついて一緒に歩いてきた安達さんも、おのずと立ち止まることになる。

安達さんは、片手でブランド物の書類カバンを抱え、もう片方の腕は、しっかりと主任の腕に絡ませて、嬉しそうに頬をピンクに染めている。

「お、お疲れ様です。」ぼそぼそと呟いて、主任を避けながら足早に扉をすり抜けようとす。

「安達、悪いが先行っててくれないか？」主任は漣の腕を捕まえて、連れにことわりを入れた。

「う……ん。わかった……。じゃ、4階の会議室で待ってる。」漣のほつをちらちらと見ながらも、素直にエレベーターホールに向かった。

漣の腕を掴んだままの主任は、一旦ビルから外に出た。以前、休憩

コーナーで、邪魔が入ったのを思い出したのだろう。

敷地の隅の、植栽に囲まれた目立たない場所に小さなベンチがある。

そこまで移動すると、松永はやっと澁の腕を放した。

澁は無言で力無く俯いている。

「座れよ。」松永が言つと、澁はゆっくりとベンチに座った。

主任は10日前と同じように澁の前に仁王立ちしている。

「何で連絡してこないんだよ。」澁のマンションで聞いた、不機嫌な時の声のままだ。

「……………」

「まだ迷ってるってことか？」

「……………もうそんなことどうでもいいじゃないですか。わたしが和也さんとよりを戻そうが戻すまいが、主任には関係無い……………ことですし。」

「……………っな……………関係ないって、どういふことだよっ。」

「ごめんなさい。わたし、これからは、もっと自分を大切にするっ  
て決めたんです。だから……………」ヨロヨロとベンチから立ち上がる。主任に頭を下げ、帰ろうとする。

「待てよ！意味わかんねーよ。要するに、元の旦那とよりを戻すってコトなのか？そうなんだろ？」 澪の両肩を掴んで、自分の方に向かせる。

この10日間、澪からの連絡をずっと待っていた。彼女がもし元夫を選ぶなら、それで良いんだと何度も自分に言い聞かせていた。この期に及んで、まだはつきりしない態度にイライラがつのつてしま

主任の真剣な目が、澪の目を見つめている。

「おい、何で泣いてるんだよ？何があった？言ってみ。」 涙に気付いた主任が心配そうに顔を覗き込む。

「……何でも無いです。……もう帰りたいんです。……それだけです。」 拭っても拭っても、後から後から涙がこみ上げてくる。

「俺か？……俺のせいか？」 肩を掴んでいた手の力が緩む。

「違います。もう……もう帰してください。」

「……わかるかった。きつい言い方して……お前が、アイツの元へ行ってしまうって、俺、滅茶苦茶焦ってて。ごめん。」

「違うんです。主任のせいとかじゃ。でも、あのもう……すみません。失礼します。」 今度こそ、主任の手を振り切って、駆け

出した。後ろから何か主任が叫んでいる声が聞こえたが、かまわず走り続けた。

わたしが和也さんの元へ行こうが行くまいが、主任が焦ったりするなんておかしいよ。

あんな素敵な彼女がいるのに。

安達さんと主任、腕を絡めて仲良さそうに笑いあっていた。お似合いすぎるほどお似合いの2人。

もういい。主任とはこれで終わり。もともと始まっても無かったかもしれないけど。とにかく終わったのよ。

もともと和也さんを忘れるために始まった関係だもの。少なくとも目的は達成できたわけだし。

それ以上、何を望むの？

もう忘れよう。忘れたら良い。

前を向いて。前だけ見つめて。

駅まで全速力で走りながら、澪は繰り返すそう自分に言い聞かせた。

## 夏のお買い物

ここは百貨店の水着売り場。夏休みを目前に控えた週末で、売り場は大勢の買い物客でこった返している。

独自の治療法（？）のおかげかどうかわからないが、驚異的な速さで夏風邪を克服した良太は、詩織とデート中である。

目下のところ2人は、詩織の水着を選んでいる真っ最中。

「ふむふむ……。どれどれ……あ、これも着てみようかな。えと、あの、良太さんはどうというのが好みなんですか？」

黒地に白のドット柄の妙に布帛の部分が少ないビキニと、エメラルドグリーンに白のストライプ柄の同じく必要最小限の大きさの生地しか使っていないビキニをラックからはずして見せながら、詩織は良太に聞いてみた。

「……………」

「良太さん？」返事が返ってこないの、良太の顔を見上げる。

良太は詩織が手に取った水着をじっと見つめたまま固まっている。

「もしもし。良太さん。」良太の目の前で手を振ってみる。

「あわわ。ご、ごめん。お、俺、もしかしたらまだ風邪治ってないのかも。」どうしてか頭がくらくらしている。

「そうなんですかつ！大変じゃないですか。ほらほら、あそこの椅子座りましょう。」詩織はラックに水着を戻すと急いで店舗の端にある待合コーナーに良太を引っ張って行った。

手のひらを良太のおでこにあててみる。

「うーん。お熱は無いみたいですけど。でも、顔は赤いですよねえ。」

「なんか詩織ちゃんがあんなちっちゃな水着を着ている姿想像したら、急に眩暈が……。」

「え？あれ、どっちも可愛いと思ったんですけど？」

「でも……あれはちょっと大胆すぎるんじゃないかな……。」

「そうですか？あんなもんですよ？だって、水着だもん。」

「詩織ちゃん、ハワイであんなの着るんだ……。」  
「どんどんテ  
ンションが下がっていく良太である。」

自分の居ないところで、彼の可愛い天使があんな大胆な水着姿を披露すると思うと意味無く周りのものを片っ端から壊したくなる。

「そんなー。ハワイ行ったら、”ぼんきゅぼん”のお姉さま達がわんさかいるから、わたしなんか、お子様ランチですよ。ホント、誰も見てないし。」

「そうかな……。」「夏休みに入ると3週間も詩織に会えない。家族と過ごすのだから仕方ないが、やはり寂しい。」

「そうですね。それに、日焼けする時は紐の跡付くの嫌がって外してる人多いし。大体、上つけてない人も結構いるんですよ。」

「はっ？上を？」

「えへへ。実はわたしも現地では……。」「ごによごによと良太の耳元で囁く。」

「なななっ！詩織ちゃんっ！！！」今度こそ頭に血が上りすぎて鼻血が出そうだ。」

「クスクスっ。冗談ですよ。さすがにそれは恥ずかしいから出来ません。」

「ダメだよ大人をからかったりしたら。」

冷房の効いた百貨店の中でただひとり汗をかきまくっている。

「んー。でも、今日は特別に、良太さんには見せちゃおうかな。いろいろと。後で良太さんのお部屋で水着姿披露する時……。」「いたずらっ子のような笑みを浮かべている。」

「詩織ちゃん……。マジ俺、倒れそうだよ。ほんと、もう許してよ。」

「だ、だって、私が居なくても、忘れて欲しくないから。そしたら離れてる間も、時々は思い出してくれるでしょう？」良太の大きな



手を取ってぎゅっと握り締める。

このところ、良太に愛されてるといふ自信を得て、どんどん綺麗になつていく詩織の上目遣いは破壊力抜群である。

「忘れるなんてありえないから。」そんな詩織があまりにも可愛くて、ため息混じりに本音を告げてしまう。

「せつかくの夏休みなのに。……一緒におられへんし。」先ほどの笑顔は引っ込んで、今度はしょんぼりした顔をしている。

「大阪のご両親も、大事な一人娘と過ごす時間を楽しみにされてるんだから、そんな顔したらだめだよ。」自分の不満は押し隠し、兄のような口調で諭す。

「んん……。そうですね。ごめんなさい。それに、良太さんのせいじゃないのに。」

「メールやチャットも出来るし、3週間なんてあっという間だから。」

「はい。毎日メールしても良いですか？」

「うん。楽しみにしてるよ。」

「じゃ、あれ、両方買ってきます。ここで待っていてくださいね。」  
元気を取り戻した詩織は小走りに水着売り場に戻っていった。

「そそそ、そうか……。」「

うーん。あれ両方買ったちゃうのかー。

後で、俺の部屋で着て見せてくれるって……。

うーん。 どうしよう。

どうしようか。

このままで充分幸せだと思っ気持ちと、全部自分のものにしてしまえという気持ちがごちゃ混ぜになって良太の頭を悩ませる。

お嬢様オーラ全開のときの顔、天真爛漫な小さな女の子のような顔、そして時々見せる大人の顔。

自分のほうが5歳も年上なのに、そんな彼女にいつも振り回されっぱなしである。

「お待たせしました。」詩織が買い物袋を提げて戻ってきた。

その声で、ぼんやりと考え事をしていた良太も椅子から立ち上がる。

「ああ。これからどうしようか。どこか行きたいところある?」

「はいっ!あります!ありまくりまくりですっ。」興奮気味に、良太の腕を引っ張る。

「どこかな?もし車で行ったほうがよければ、俺、実家で借りてくるよ。」

「あのあの……。この近くのホテルなんですけど。」

「ホテル……。この時間から？」

（あー。もー、そこまで言われたら、オニイサン頑張っちゃおうよ！しかたないなー。）

「ち、違います。そっちのほうじゃなくて。」詩織も急に顔を赤くする。

「へ？じゃなくて？」

「はい、あの、結婚式場のあるちゃんとしたほう……。」

「あー……。そそそ、そうだよね。ちゃんとしたほうだよね。あー……。びっくりした。」なんとなく力なく笑ってごまかす。

「ここに来る途中で、広告を見たんですけど、今日は、無料でウエディングドレス着て写真取れるんです。良太さんが構わなければ、この近くのKホテルに行きたいんです。」

「いいよ。じゃあ、行ってみようか。」詩織の小さな手を握る。

詩織の選んだドレスは、胸と肩の辺りが大きく開いていて、袖はパフスリーブになっている少し大人っぽいデザインのものだった。ヘアメイクもしてもらって、詩織はすっかり花嫁気分である。

良太は、恋人のウエディングドレス姿に、ただただ言葉も無く見られるばかりであった。

写真の送付先を記入する時、良太さんに持つといってもらいたいからと、詩織は何故か良太の住所を書き込んだ。良太はそれを見て少し疑問に思ったが、特に深くは考えなかった。

式場の撮影で思いのほか時間をとってしまったので、簡単に食べるものを買って良太のマンションに戻ることにする。

帰り際、ふとホテルのロビーを見ると、松永主任とどこか見覚えのある綺麗な女性がコーヒーを飲んでいた。

(こんなところで……?どうして?……主任は、吉井さんと付き合ってるんじゃないのか?)

もし、浮気なら同じ男として許せないけど、さすがに声をかけるような無粋なことは出来ないので、気付かない振りをして、詩織とともにホテルを後にした。

## 詩織の秘密

伊丹空港で詩織を出迎えたのは、いつも通り木下であった。

「お忙しいのにすみません。……お世話になります。」

これまで当たり前のよう存在した、2人間の気安さは消え去り、まるで初めて会う人のように話す。

木下が勝手に良太に接触したのを知ってからは、詩織は木下に全く心を開かなくなった。

（絶対許さへん。木下の事は二度と信じひんから。）

「詩織様……。」山田が詩織になんと叫ぶたかわからないが、木下は詩織がよそよそしい態度を示すたびに、困惑と哀しみが無い交ぜとなった複雑な気持ちになる。ただ、自分が山田良太を詩織から遠ざけようとしたことに対しては微塵も悪いとは思っていない。

気を取り直して、無表情のまま詩織の荷物を引き受け、待たせておいた車に誘導する。

「先生のほうには予約いれてありますので、今から病院へ向かいます。」心臓の状態を、子どもの頃からの主治医の先生に定期的に診て貰っているのだ。

「わかりました。」そっけなく答える。

詩織はもう、木下のほうは一切見ない。それほど傷ついていた。

子供の頃から、両親よりも信頼していた木下に裏切られたという思いは強い。

いつもの検査を受けた後、主治医の先生からは、やはり高校を卒業したらすぐにアメリカにわたって大掛りな手術をするしか方法がないというものであった。

今回の夏休みも、ハワイの別荘に行く前に、一旦シアトルに渡って、専門病院で検査入院することになっている。

「どれぐらいの傷跡が残るのでしょうか。」詩織は思い切って先生に訊いて見た。

「若いお嬢さんやから、そら気になるわな。・・・傷はかなり大きいもんになるよ。それは、覚悟しとかなあかんで。・・・でも、まずは手術の成功を第一に考えような。傷とかそういうのは、仕方ないもんやから、詩織ちゃんも、我慢せなあかんで。」

「先生、手術したら、ほんまに元気になれるんですか？」

「少なくとも、このままだと、突然危険な状態になる可能性が大きい。それに、日本とは比べ物にならないくらいの手術数こなしてる専門の医者がアメリカにおるから、先生も手術するのが一番やと思う。詩織ちゃんは、親御さんがそれだけの経済力があること、感謝しなれいよ。」

「そうですね・・・。」父親が、金に糸目はつけないからと、最高の治療を受けさせてくれるのは、本当にありがたいと思う。

でも、はつきりとはわからないが、手術の成功率はそんなに高くは無いらしい。以前、先生が父親に説明しているのが聞こえたのだ。

それでも構わないと思っていた。

神様が、詩織のことを、大人になるまでしか生かさないと決めたならそれでいいのではと、他人事のように考えていた。ただ、それならば自分は何故この世に生まれてきたのかと納得行かない部分もあることはある。

激しい運動が出来ない詩織は、小さな頃から友達遊びについていけなくて、そのためか自分の人生にそれほど執着が持てなかった。

あれはダメこれもダメ。そんな風にやりたいことを片っ端から制約されることに飽き飽きしていた。

でも今は。

今は、自分のことを愛しいと言って、抱きしめてくれる人がいる。

詩織自身も、これからもずっと良太の傍にいたい。

良太に出会って、初めてもっと長生きしたいと思った。死ぬのが怖くなった。

手術を無事成功させて、元気になって、大好きな人の元へ戻りたい。

(でも・・・、胸のところには、大きい傷が出来たら、良太さん、うちの事嫌いにならばるやろうか。)

手術が失敗に終わることよりも、大きな手術跡のせいで、良太に嫌われるのではと心配な乙女心。

彼の部屋で、水着姿を披露したときも、逆に警戒されたのか、どうやら”お兄さんスイッチ”が入ったようで、結局最後まで手を出そうとはしなかった。”どうして?”と訊いても、”大切に思っているから”と言っぱかりなのだ。

傷ひとつ無い、綺麗な体のうちに、彼のものになりたいのだ。

さすがに水着姿見せたら、ガオーってなる思たのに。なかなか手ごわい相手やわ。

(ハワイから戻ったら、早速真琴さんと作戦会議せなあかんし。)

心のメモ帳に大きく書き付ける。

次の日は、幼馴染の友達2人と梅田で遊んでしゃべり倒した。

友達の華ちゃんは、170センチ以上ある長身で、名前の通り華やかな雰囲気の子だ。お洒落が大好きで、高校を卒業したら、モデルになるための勉強をしたいと現在親を説得中だ。

妙ちゃんたえは、お父さんがゴルフ狂で小さい頃からプロゴルファーになるために練習練習の毎日を送っている。なので、髪も短いし、日



焼けて真っ黒になっている。2人とも、さっぱりした性格で、詩織と小さなときから仲良し3人組である。

話題の中心は、やはり詩織の始めての彼氏である。

「写真見せてもろたけど、ほんまに詩織のど真ん中やなあ。ええ人見つかってよかったわ〜。」華が頬杖ついて、にやりと笑う。

「でもさあ、詩織の彼氏は普通のサラリーマンなんやろ？ようあんたのお父さんとお母さんが許しはったなあ。」妙はビツクリするぐらい大きなパフェを注文して、現在着実に攻略中である。

「それはわからへんねん。木下が、うちらが付き合う前に、彼氏に変なこと言いに来たみたいやねんけどな。親がどこまで知ってるかは知らんねん。木下には、二度と陰でしようもないことせんといつて言うといてんけど。」オレンジの香りのするアイステイーをストローでかき混ぜる。

父親ならまだしも、一番怖いのは母親である。育児に全く関わらなかつたくせに、詩織の交友関係には変に口出ししてくることがあるのだ。

「ああつ。出た！木下さんつ。会いたいわ〜。ほんま好きやわ。あの男前〜。」華は昔から木下の大ファンなのだ。

「会いたかつたら会えるで。今日も帰りは迎えに来るし。」

「ホンマに？助手席座つてもええ？」華の目がキラキラ輝く。

「えーよ。」

「食べてもええ？」

「えーけど。それはお互いの自己責任で。」

プレイボーイの木下が、積極的な華ちゃんにたじたじになる場면을想像して笑ってしまう。

「あんだ、彼氏おるやん。」真面目な妙が、たしなめる。

「えーねん。若いうちに、めいっばい恋しとかな、年取ってから息子ぐらいの歳の韓流スター出迎えや言うて関空行くはめになるで。妙も、ゴルフボールばっか見てんと、イケメンゴルフアーゲットせなあかんで。」

「うちは、華みたいに綺麗ちゃうから……。」

「妙ちゃん綺麗やで。あの……常にゴルフウェア着てなかったら、もっと可愛いで。」詩織はフォローになってるかなってないか微妙なコメントをする。

「こんなんしか服持ってへんねん……。」妙は自分の服装を見下ろしてため息をつく。

「ええやん。もうじき美人プロゴルファー妙ちゃん誕生やなあ。頑張りや。」妙のパフェを横取りしながら、華も妙を励ましている。

華も詩織も妙がどれほど子供の頃から努力しているか知っている。

「うん。今はゴルフが恋人やけどな。」

「ええなあ。夢があつて。2人とも。うち羨ましいわ。」詩織がため息をつく。

「詩織はどうするん？高校卒業したら。」妙が心配そうに問いかける。詩織の心臓が、大人になるまで持つかどうかかわからないというのは、ぼんやりと知っている。

「アメリカで手術する予定やねん。その後は決まってへん。」

「……………」華も妙も、黙りこくってしまう。詩織はあまり自分の病気の事を言わない。だからこそ、手術がどれほど大きな意味を持つのか考えてしまう。

「ふふつ。そんな心配そんな顔せんといて。ごめんな。空気悪なる話して。」

「そんなことつ。でも、詩織……………。彼氏は知ってはるん？」華ちゃんが言いにくそうに聞いてくる。

「ううん。知らんねん。言うつもりも無いし。そんなん知られたら、今でさえうちの彼氏めっちゃ優しすぎるくらい優しいから、気を遣われて、さらに壊れもん扱つようにされてしまうわ。良太さんには絶対知られとうないねん。」

「でも……………」妙も眉をくもらせる。

「ただでさえ手出してくれへんのに、そんなん知られたら絶対つ。」

「え？詩織の彼氏つてば、何もしてけえへんの？」華がビックリし

た顔をする。

「そうやねん……。キスぐらいかなあ。それも、こっちから言うてやっとして感じて。」

「マジでっ。」

「困った人やねん。うちのこと、大切にしたいからって、どんなに迫っても、なっかなか堕ちひんねん。」そう言っただたため息をつく。

「そうなんやー。愛されてるといえば愛されてるわけやけど……。それにしても、えらい真面目君やねんなあ。……でも、そんな人が箍が外れたら、もー止まらへんで。覚悟しときや。」華ちゃんがしたり顔で言う。

「彼氏の……良太さんの妹さんが色々相談のつてくれてはるねん。地元ではすごい有名人で、一緒にお茶しても、ファンからサインとか握手とか写真撮られたりするすごい人気者やねんよ。」

「えらい美人さんなんやねえ……。でも、それやったらお兄ちゃんど血つながってへんの？」妙が思わず素朴な疑問を投げかける。

「どーいう意味やねんっ。酷いわ〜妙ちゃん。ま、真琴さんの写真見たらわかるわ。」そう言っただ携帯で真琴の写真を見せる。

「「いややわ。なんやこのイケメン！ 会いたいつ。会わせて〜。」  
「2人とも今日一番大きい声が出た。」

久しぶりの仲良し3人組のガールズトークはエンドレスで、待ちくたびれた木下が迎えに現れるまで延々続けられた。

むぎゅ〜っして下さい。

「吉井ちゃん、あなた、どうした？元氣無さすぎっ。ほら、飲もう飲もうー！ー！」

同期の岡本ちゃんが、ビールの入ったジョッキを遷のほうにぐいと差し出す。

岡本ちゃんは、小柄な身体にすごいパワーを秘めた、営業部の稼ぎ頭である。ベビーフェイスのぼっちゃり体型で、茶色の柔らかさうにカールさせた髪を耳の下あたりでカットしてあり、すっぴんならば高校生で通るような外見だが、一旦接客させたら百戦錬磨の営業の鬼に変貌する。少々おせっかいなところもあるが、頼もしい相手である。

今日は、会社の暑氣払いを兼ねた親睦会で、ほとんど社員全員が参加している。

百貨店の屋上の、ビヤガーデンを借り切っているのだ。

まだムツとするぐらいの熱氣は残っているが、屋上を吹き渡る風のおかげで涼しく感じる。

どうにかして、参加を免れようとしていた遷だが、元氣いっぱい岡本がわざわざ営業部から迎えに来て、そのまま連行されてしまったのだ。

パラソルのついた、白いプラスチックの円テーブルがあちこちにあり、同じ部署で集まっている人達、同期や仲良しグループで盛り上

がっている人達でにぎわっている。

漣達は、隅の目立たないテーブルにぼつんと座っていた。同期で一番仲のよい岡本も、漣が大勢で騒ぎたい気持ちではないのを察したのか、2人だけのテーブルでも文句は言わなかった。

「ただ飯なんだからさー。がつつり行こうよ。ねっ。」「ぐびぐびと喉を鳴らしてビールをあおっている。漣もお酒が好きなほうだが、岡本はかなりの酒豪である。

「そうだね……。ごめんね。岡本ちゃん。」「漣もジョッキに口をつけて、申し訳程度にビールを飲んだ。

「いーのいーの。吉井ちゃんが言いたくなった時で良いからさ、私いつでも聞くからさあ……。」「

「ありがとう……。あのね、わかりやすく、お恥ずかしい限りなんだけど、最近失恋したんだ……。」「

「それって、元の旦那さんじゃなくて？」

「うん。……。ちよつと前に好きな人ができて、でもね、その人は以前から本命がいたらしくて。ふふっ。もうさ、恋愛とか、なんだか難しくくて。」「

「言いたくなければ言わなくていいけどさ、その男は、吉井ちゃんと本命さんを二股かけてたわけ？」

「うん。その人からは、好きとか、付き合おうとか、ちゃんと言われたことなかったの。でも、時々彼のマンションでご飯作ったり

もしてて。それに・・・、まあ、やることはやってたというか・・・  
・・・ほんの短い間なんだけどね。」

「そうなの・・・。てか、なんだよその男。ふざけてんじゃねーよ。そんな、都合の良い女なんかにならなくても、吉井ちゃんだけを大事にしてくれる人いっぱいいると思うし。だから、そんな最低男なんか忘れてさ、今度一緒に合コンでもするべさ。」そう言うと、またジョッキのビールをぐいっとあおる。

「ありがとう。・・・ごめんね。寒い話で。せつかくの親睦会なのに。」

「何言ってるの！去年私が失恋した時は、吉井ちゃんにはずいぶんお世話になったじゃないの。お互い様よう。さー飲みましよう！女子会女子会！2人で女子会！」凹んでいる漣を元気付けようと、妙に威勢の良い岡本ちゃんである。

「あーれー？綺麗どころが二人、こんなところでどうしたわけ？」  
見上げると、施工部の日置と片岡がビールのジョッキを持って立っている。

「ここ、空いてる？座っていい？」片岡が漣に笑いかける。

”どうする？”岡本ちゃんが、心配げに目で漣に問いかける。

「どうぞ、空いてますよ。」漣が片岡に返事すると、2人とも嬉しそうに席についた。

「腹減ったな。日置、お前適当に料理とってきてくれよ。」漣の



隣の椅子に陣取った片岡が言うと、岡本ちゃんの隣に座っていた日置はさっと立ち上がって、料理をとりに行った。

「今日は残業は無いんですか？」 澪は何気なく聞いてみた。

あの人も、ここに来ているのだろうか。

澪の胸の奥がズキンとなる。

「うん、さすがに今日はみんな早く上がるって言ってたよ。」

「そうですね・・・。」 急に不安になる。できれば、まだあの人に会いたくない。

いかにも”失恋しました”みたいな哀しげな顔の自分を見られたくない。

でも、ここは隅っこだし、目立たないから、大丈夫。

それに、いざとなったら岡本ちゃんに断りをいれて、さっさと帰ればいいし。

日置が山盛りの料理を持って、テーブルに戻ってきた。

「・・・じゃ、改めて、かんぱーい。」「・・・」 四人でカンパイをする。岡本のジョッキには殆どビールが残ってなかったので、一番年下の日置がお代わりを取りに行った。今日の日置はフットワークが軽い。

年齢が近いせいか、仕事であまり関わりが無いせいか、4人はすぐ

にたわいない話や、それぞれの仕事の話で盛り上がった。

現場の話になったとき、漣は山田の事を聞いてみた。

「山田君は、元気で頑張ってる？」

「え？吉井さん、山田と仲良かったりするんすか？」日置は、山田ネタには敏感に反応してしまう。

「うん。毎週精算書持ってきてくれて、そのときに話をしたり・・・」  
「山田の彼女の事をどこまで言っていていいのかわからないので、その後は言葉を濁した。

「アイツっ！なにげに女子高生と付き合ってるくせに、吉井さんとも仲良くしたりして。ただの筋肉ゴリラなのに、なんでアイツだけモてるんだよっ。なんか納得行かぬーよ。」日置がブツブツ文句を言っている。

「山田君は、うっん、そうねえ、なんて言うかなー。あの、大きな身体のそばに行くとか安心感って言うのかな？なんだか、むぎゅってしてもらいたくなっちゃうって言うか。優しい目をしてて、あったかい心の持ち主っていうのがにじみ出てるというか。だから、詩織ちゃんも山田君の事が大好きなんじゃないかな。」漣は素直な意見を述べる。

「え？山田の彼女に会ったことあるんだ？」片岡が驚いた顔をする。

「うん。2度ほど・・・。山田君の彼女、すっごく可愛い子なの。見た目もだけど、性格も素直で。」

「山田の奴、いい思いしてるんだな。てか、吉井さん、むぎゅつとして欲しいんだ。なんなら俺、してあげましようか?」「ほらつと、片岡が大げさに両手を広げる。

「いえいえ……。周りには片岡さんのファンの女子社員がいつぱいいるし。彼女達の目の敵にはなりたくないなので、遠慮します。」  
「澪は笑顔を作りながらもやんわりと断る。

「気にしない気にしない」。ささ、どーぞどーぞ。「ほろ酔い加減の片岡は簡単には諦めないようだ。

「片岡さんっ！吉井ちゃん嫌がってるじゃないですか。やめてあげてくださいよ！」肩を抱かれそうになって、困っている吉井を見て、岡本ちゃんが助け舟を出す。

「じゃ、俺は？俺ならいいですか?」「日置も話に入ってくる。

「日置さんも、結構モテるって聞いてますよ」。私は社内に敵は作らない方針で……。」「澪は、この場があまり寒くならないように、当たり障り無く断ろうとする。

「日置君は私がむぎゅつしたげるわ。」「年下好きの岡本ちゃんが、いきなり椅子に座ったままぎゅつと日置を抱きしめた。日置は積極的な岡本ちゃんに、若干引き気味の様子。

「あれ、岡本ちゃん、酔ってる?」「澪はちょっと心配になる。

「ほら、ね、吉井さん、ただのハグだから。」「片岡もノリで押そうと思っているのか、かなりしつこい。

漣が困ってあたりを見回すと、ちょうど山田がそばを通りかかったのが目に入った。

とっさに、「山田君っ！」と叫ぶと、山田も漣に気付いて嬉しそうに近づいてきた。

「吉井さん！お久しぶりです。もうだいぶ飲んじゃってますか？」

「まだ、一杯目なの。山田君は？」山田の出現にほっとして、自然と笑顔になる。

「俺、今来たところなんです。あ、主任もいますよ。ちょっと待ってくださいね。呼んできますからっ。」そう言っただけで足早に去っていった。

「や、山田君っ、待ってっ！」漣は急いで呼び止めたが、大きなBGMと、周りの話し声で聞こえなかったのか、山田は立ち止まる事無く、さっさと行ってしまった。

(まづいよう。ホント、どうしよう……。)

もうすぐ、山田が松永主任を連れてきてしまう。漣の心臓とこめかみがドクドクと脈打ち始める。

漣が地味にあたふたしてる間に、山田が主任を伴って、テーブルに近づいてくるのが見えた。

主任が自分に気がついたのがわかった。彼は真っ直ぐ漣のほうに歩

いてくる。

「すみませんっ。片岡さん！やっぱり、むぎゅっってしてオオオっ。」

透は覚悟を決めて、目を閉じた。

## 別れ話？ 1

急に態度を変えた漣に、片岡は一瞬意外そうな顔をしたが、すぐにふんわりと腕の中に漣を閉じ込めた。

自分から頼んだくせに、なじみのない男の人の匂いと体温に包まれて、突然心がぐらぐらと落ち着かなくなる。

この瞬間、漣は自分の軽はずみな行動を深く後悔した。

彼の事を吹っ切った振りをするつもりだったのに、逆にもっと主任の腕の中が恋しくなるなんて。

それに、酔った勢いで軽いハグとはいえ、私だけの事情に、片岡さんを巻き込んだりして。

「吉井さん……。俺さ、吉井さんの事。」耳元で囁かれる。

その瞬間、ガタンっ！！と音がして、片岡の腕の中から、漣は引っぱり出された。

「吉井？」見上げると、主任の限りなく冷たい目。

漣は思わず身震いした。

「痛あつ。なんすかつ、一体?!」主任と漣の複雑な関係など一切知らない片岡は、抗議の声を上げる。

「そっちこそ何だよ。吉井が嫌がってるじゃないか。」

「は？なわけないでしょう？！」俺”ですよ？相手は。誰だと思つてんすか。」片岡は本音半分、冗談半分で返した。

「あの、わたしが、わたしが片岡さんをお願いして。」漣が、主任から片岡を庇うように立ち上がった。

なけなしの勇氣はそこまでで、そのあとは、どうしても主任の目を見つめることが出来なくて、しかたなくネクタイの結び目をじっと見つめる。

最後に彼から走って逃げてから、数日しか経っていない。

くたくたになるまで仕事をして、眠れないひとりの長い夜、温かだった彼の温もりを懐かしんで、枕を濡らす日が続いていた。

こんなに近くで向かい合っていたら、まだ彼に恋してる事に気付かれてしまうかも。

それが何よりイヤだった。

「は？吉井が？」漣の言葉を聞いて、主任の眉間の皺がますます深くなる。

「主任、そこ、空いてますから座って下さい。おい山田っ！ぼけっ」と突っ立ってないで、主任と自分の飲み物持って来いよっ。「松永主任の怒りのオーラを敏感にキャッチした日置が、あわてて空気を換えようとしている。

日置に促され、松永もおとなしく空いている席に座った。

すぐに良太がビールのジョッキを二つ持って戻ってきたので、改めて全員でカンパイをした。

岡本ちゃんが興味津々の目で、ちらちらと主任と澁の顔を見比べている。察しのいい彼女が、親友の吉井ちゃんの失恋の相手が誰だか気づくのも時間の問題だ。

主任は片岡の隣の席。つまり澁から見ると斜め右の席に座っていた。片岡が少しでも椅子の背に寄り掛かると、主任の姿が丸見えの位置だ。

「山田、おまえ、可愛い女子高生の彼女とラブラブなんだって？どーなってるんだよ。先輩を差し置いて、ひとりだけ幸せいっぱいか。」  
「片岡が良太をからかう。」

「携帯で彼女の写真撮ってるんだろ？ちょっと見せてくれよ。」

真っ赤になって照れている良太に、日置が半分本気で迫っている。

「いや、そんなの全然無いです。」良太は必死で拒否する。いまや詩織のお宝画像満載の自分の携帯を、女子高生アイドルオタクの日置に見せるわけにはいかない。

特に、詩織ちゃんの水着姿の写真とか、水着姿の写真とか、水着姿の写真とか、み……み……。

（あ、ナース姿の写真も欲しかったな。ま、いいや。また着てって頼んでみようかな……。）こうなると、もう、妄想が止まらない。ひとりどこかの世界に旅立ってしまったている。



夏休みになって、大阪の実家に帰った詩織とは、毎日メールなどで連絡を取り合ってはいるが、やはり寂しい。

(詩織ちゃん、今頃何してるのかな。そろそろアメリカ行くんだよな。。。。)

「おーいっ！山田君。戻ってこーい。」日置の声に、ふと我に帰る。

「わっ！俺。。。すす、すみませんっ。」

「いーから。どうせ良からぬこと考えてたんだろ？おら、携帯出せはやくっ。」酔いが回っているのか、いつもより強気な日置の態度。

「む、無理っす。」良太もこれだけは譲れない。

「ねー！え、日置くん、そんなに写真欲しいなら、遠慮しないで、好きなだけ撮っていーわよっ。」岡本ちゃんがテーブルに置いてあった日置の携帯を取り上げて、自分の写真をドアップで撮ろうとしている。

「え？い、いらなっす。」

「今なんて？」ギロっ！

「ひっ。。。ななな、何でもないっす。。。欲しいっす。岡本さんの写真。。。。」日置が力なく答える。

「でしょ？」ちゃらりらり〜ん。日置君、ぼっちゃり系酔っ払い

OLの写真一枚ゲット。

岡本ちゃんは、いそいそと、それを勝手に待ち受け画面に設定しなおしている模様。

「ね、山田君、詩織ちゃんは元気？」日置と岡本ちゃんのやり取りを見守っていた漣は、明るく山田に声をかけてみる。

山田は日置の隣の席。つまり漣とは殆ど真正面の位置に座っている。漣は無理して主任のほうを見ないようにように頑張っている。

「はい。でも、夏休みは殆ど大阪の家族と過ごすって。だから暫くこっちに居ないんです。」良太は、寂しそうに微笑む。

「そうなの……。寂しいわね。」

「ま、しかたないですよね。まだ高校生だし。彼女の親御さんも心配でしょうし。」半分自分に言い聞かせているような口ぶりだ。

「いまだき珍しいくらい清楚な感じのお嬢さんだったよな。」松永が言つと、

「え？主任も山田の彼女に会ったことあるんですか？」片岡は不思議そうに聞いてきた。

「ああ。一度だけだが。」そう呟いて、意味深な表情で漣の顔をじっと見つめた。

その声に、漣も、思わず主任のほうを見てしまった。

目が合った瞬間、4人で食事をした店での出来事、そのあと主任のマンションに泊まった事まで思い出してしまって、かあつと顔が熱くなる。

そんなふたりの様子を見守っていた岡本ちゃんは、とうとう真相を悟ってしまったらしく、ひゅつと息を呑んだ。

その直後、

「祥吾さんだったら、そんなところに隠れてたの？」高級ブランドの香水の香りをほのかに漂わせ、カーキ色の麻のスーツをかつちり着こなした安達さんがテーブルに現れた。

同じテーブルについてる他の同僚たちには、おざなりな形ばかりの笑顔と会釈だけをよこして。

「安達、今来たのか？」

「15分くらい前にやっと着いたの。もう、どこにいるのかわからなくて、探しまくっちゃったわよ。」拗ねたような口調で、主任の肩に右手を置いた。その仕草は、「彼は私のものよ」と主張しているように見えた。

「ね、部長が呼んでるわ。あっちに行きましょうよ。」主任の耳元に唇を寄せる。

「え？部長が？」主任は少し迷惑そうに眉を寄せた。

「あああ、あの、デザート見て来ますっ！」突然、椅子から立ち上がって宣言すると、漣は逃げるようにテーブルを離れた。

あまりの素早い行動に、テーブルの誰もが声をかける暇もなかった。溲はスイーツのコーナーの前で、深呼吸して、涙をこらえるために何度もまばたきを繰り返した。甘ったるい二人のやり取りを、これ以上見ていられなかった。

（もう、帰ろう。早くひとりになりたい。）

家に帰って、先日大人買いしたミステリーの新刊を片っ端から読もう。帰りにスーパーに寄って、チーズとワインも買って帰ろう。

落ち込んだ時の自分のいつもの行動パターンである。

いい加減、元気出さなきゃ。いつまでも、しつこいぞ、わたし！

気にしない気にしない。もともと主任は安達さんのものだったんだから。

でも、よく考えたら、安達さんからすると、私のほうが”彼氏にちよっかいかけてきた女”になるんだろうか。

私のほうが、”浮気相手”になるんだろうか……。

「吉井？」

振り向くと、すぐ後ろに、主任が立っていた。

「ひっ！」もの思いにふけっていた澪はとっさに声が出ないほど驚いた。

「悪いがちょっといいか？」

「申し訳ありません。私もうそろそろ帰らせていただこうかと・・・」  
「できるだけ感情を込めずに他人行儀に答える。」

「澪、お前、まだ鍵持ってるか？」

「鍵？・・・はっ！すみませんっ。お返しするの、すっかり忘れてしまっ。あの、カバンに入ってますから、すぐにっ。」

「俺、これから部長と打ち合わせがあるから、お前、ここが終わったら、俺のところで待っていてくれないか？」たたみかけるように言われる。

「え？」

「最後にちゃんと話したいんだ。俺もそんなに遅くならないし。後で家まで送って行くから。」

「でも・・・」澪の瞳が揺れた。

自分がまだ彼に魅かれていることを知られたくない。主任のマンシヨンで、二人きりになるのは、リスクが高すぎると思った。

「お願いだ。このままじゃ終われないんだ。頼む。」

”最後”といわれて胸の奥がズキンとした。

（そうか。主任は一応ちゃんと”別れ話”をするつもりなんだ。）  
もともと、付き合ってもいなかったはず。

だから、そんな必要はないと伝えたかったが、それでも主任の真剣な顔を見つめているうちに、断る気が失せた。

とつとつ遷はうなづいた。私だって、”最後”に言いたいことはある。お互いそれですっきりできるなら、そうしたほうが良い。

主任はあからさまにホツとした顔をして、「じゃあ、後で。」とささやいて、遷に背を向けて颯爽と去って行った。

## 別れ話？ 2

澁がテーブルに戻ると、案の定、主任と安達さんの姿は既に無かった。

「えと、甘いものが急に食べたくなっちゃって……。」もごもごと言い訳しながら、小さなケーキやフルーツをのせた皿を持って自分の席に戻った。

そんな澁の顔を、岡本ちゃんは心配そうに横目で見ている。

「なにげにあの二人、秒読みじゃね？」澁が戻るのを待っていたかのように、日置が話し出す。

「主任もとうとう結婚か。」片岡も訳知り顔でうなづいている。

澁も岡本ちゃんも、二人の会話に興味がないふりなんてできない。ただ黙って話の続きを待った。

「あの二人、主任が設計部にいたころから付き合ってたんだって。噂じゃ、施工部に移ってくるときに別れたって聞いたけど。でもなんか最近あちこちでツーショット見られてるらしくて。主任も来期あたり設計部に戻るんだろ？年齢的にもそろそろ落ち着くことにしたのかもね。」日置は得意になってしゃべっている。

良太も、苦々しい思いで、先日見た光景を思い出していた。

詩織とのデートの最中に見かけた綺麗な女性は確かに設計部の安達さんだった。

(じゃあ吉井さんはどうなるんだよ。)

テーブルの向かいに座って、必死に無表情を装っている彼女を見ていると、良太まで胸が苦しくなる。

「ふうん、そうなんだ。あの二人、お似合いだよな。」まるで他人事のように、作り笑顔の澁が言っていると、岡本ちゃんがテーブルの下から手を伸ばしてギョツと手を握ってくれた。

「そんなことより日置君、この後どうするんの？ね、もうちょっと落ち着いたお店で、飲みなおそうか？」岡本ちゃんが、強引に話題をかえると、日置は目をぱちくりさせて、助けを求めるように片岡を見た。

「じゃー俺、吉井さんとどっか行っちゃおうかな。」日置の視線をあっさり無視して、片岡は甘い笑顔を浮かべて澁を口説き始める。

「すみません。今日はちょっと、他の約束があつて。」

「え？今から？・・・もしかして彼氏とか？」

「違います。彼とかじゃないんですけど、ほんとに用事があるんです。ごめんなさい。」今度ばかりは、有無を言わせぬ態度できっぱりと断る。片岡も、じゃあまた今度飲みに行こうねと、わりとすんなり引き下がってくれた。

「吉井ちゃん、大丈夫？」岡本ちゃんがそつと聞いてくる。

「うん。・・・ありがとう。もうちゃんと終わりにするよ。」主任



とのことを気づいた様子の岡本ちゃんにだけ聞こえるように小さな声で告げた。

日置の話の内容は、やはり辛いものではあったが、漣にとっては良かったのかもしれない。

心のどこかで、まだ少し希望のようなものが残っていたとしても、今はもうきれいさっぱり消え失せている。誤解のしようがない現実を思い知らされて、かえってサバサバとした気持ちである。

逃げずに自分の気持ちを伝えて、それから最後に安達さんと幸せになつてねと笑つて見せよう。

だつて、好きな人には幸せになつてもらいたい。

キレイ事かもしれないけど、確かに自分は、あの時主任の優しさに救われた。それに、自分の事を好きでいてくれるのかもなんて勘違いしたのは主任のせいじゃないし。

（二人でゆっくり話をするのも今夜で最後だろうから、ちゃんと話そう。）漣は自分に言い聞かせた。

とうとう会がお開きになり、アルコールのせいで興奮冷めやらぬ人の群れをすり抜けて、駅へと急ぐ漣を、山田が追いかけてきた。

「吉井さん、待ってください。」

「山田君？どしたの？日置さんたちと一緒に、次のお店行くんじゃないの？」

「先輩達とは後で合流します。でも、あの……。」良太は、溼の事が気がりでほっとけなかった。青白い溼の顔をただじっと見つめている。

「そんな心配そんな顔しないで。私、意外と打たれ強い女なのよ。」  
「おどけた調子で言ってみせたが、山田はにこりともせず、さらに暗い顔になる。」

「吉井さん……。」

「あーもう。倉田さんがうらやましいな。山田君みたいに優しい彼氏がいてねえ。」

「俺、主任と話してみます。安達さんの事……もしかしたら、何か事情が。」仕事の面では、尊敬してやまない上司ではあるが、だからと言って吉井さんをこんなに悲しませる権利はない。

「いいのよ。山田君は何も言わないで。」

「でも。」

「お願い。これは私たちの問題だから……それにね、後で会うことになったの。主任と。」

「え？」 つい先ほど、笑顔の安達さんが主任の腕を引っ張って、設計部の連中と一緒に二次会に向かう姿をこの目で見たのだ。良太には、主任の行動がますますわからなくなる。

「大丈夫。もういい大人だし、自分の事は自分で始末つけられるから。山田君は、彼女のことだけ考えてあげて。」

「……」

「わかった？こんなことで、山田君が主任と気ましくなったりとか、絶対いやだから。」

「……わかりました。」

「でも気持ちだけでもらっとく。ありがとね。この後、楽しんできてね。倉田さんによろしく。」小さく手を振り、まだ納得行かない様子の良太を残して去って行った。

別れ話？ 2（後書き）

短いうえに・・・なかなか書けなくて、更新遅くなるかも。  
今週末なんとか頑張ろうと思います。

### 別れ話？ 3

半月ぶりぐらいに訪れる主任の部屋。

広いリビングのソファアに座って、ぼんやりと主任の帰りを待っている。

時間つぶしにと、テレビをつけてみたものの、全然集中できなくて、すぐに消してしまった。

身につけている、黒地にカーキと白い小花柄のワンピースは、気分転換にと買い物に出たときに、大人可愛いデザインが一目で気に入って買ったものだ。落ち込んでいるときは、できるだけ気合を入れてお洒落することになっている。

思いがけなく、主任と二人になる最後の機会に、せめて素敵な格好でいられて良かったと思う。

室内には他の女性、具体的に言うと安達さんの存在を匂わすようなモノが何一つ見当たらず、少し疑問に思ったが、もしかしたら彼女は彼の家で過ごすより外で会いたがるのかも知れないし、どちらにしろ、自分には関係のないことだ。

ころんとソファアに横たわり、柔らかいクッションに顔を押し付けて、目を閉じる。

ここには、主任と過ごした穏やかで、甘い時間の思い出しかなくて、溲の心は切なさでいっぱいになっていく。

もっとお酒を飲んでおけばよかったな。岡本ちゃんや山田君には強がって見せたものの、だんだんと心細くなってくる。

主任が帰宅したとき、漣はリビングのソファーにまるくなって、うつらうつらしていた。

ガチャリと玄関の音が大きく響いて、びくりと体がはねた。

「悪い。遅くなって。」壁の時計を見ると、漣がここに到着してから一時間も経っていない。

日置の話を聞いて、気持ちの整理がついたつもりでも、こうやって主任に目の前に立たれると、どうしようもなくときめいてしまう。そんな自分が悲しかった。

主任は、いつものように上着を脱いで、ソファの背もたれに放り投げ、ネクタイを緩めている。そんな何気ないしぐさだけでも胸がキュンとなる。

「いえそんな……。でも、こんなにすぐに帰って大丈夫なんですか？あの、設計部の皆さんと。」

「ああ。もともと行く気無かったし、せめて最初だけ顔出せって言われただけだから。」

「そうですか……。あ、コーヒーかなんか入れましょうか？」

「ああ……。頼む。じゃあ俺、着替えてくるわ。」

二人分のコーヒーを用意していると、Tシャツと、ジーンズに着替え終わった主任がキッチンにやって来た。ビール以外は殆んど空っぽの冷蔵庫に牛乳は入っておらず、仕方なく漣もブラックで飲むことにする。

主任は壁に寄り掛ったまま、黙って漣のことをじっと見守っている。漣は、ひたすら自分のやっていることに集中しているふりをした。

それぞれのマグカップを持ってリビングに戻る。二人がソファに座ると、沈黙を破って、とうとう主任が話し始めた。

「あれからいろいろ考えた。漣のところでも、会社でも、きついこと言ってしまったて……。申し訳なかったと思ってる。」主任は、大きな手のひらでカップを包みこむように持っている。

その手に見とれないように、漣は目をそらした。

「そんなこと……。」

「ただ、これだけはわかって欲しい。我ながら、らしくないなっと思っけど、どうしても行かせたくなくて凄く焦ってた。でも、これ以上お前が泣くのも見たくないし。それに、言っただろう？自分を大切にしたいって……。だから俺は、漣が幸せになるなら、あいつのところに戻りたいなら、それで良いかって思ったんだ。・俺のそばにいて欲しいって気持ちは今も変わらない。でも、お前の気持ちが一番大切だから。これからは、お前を困らせるようなこととはしない。……。だからもう、安心しろ。」そう言つと、少し

寂しそうに微笑んで、冷めかけのコーヒーを一口飲んだ。

「……え？」

結婚するから俺の事は忘れてくれと言われるものだと言っていたのに、どうして、この人は捨てられた子犬のような目をしてるの？

「いつから行くんだ？」コーヒーカップに目を落としたまま、主任が尋ねる。

「何がですか？」

「言っただじやないか。旦那が海外勤務になるって。」

「わたし、行きませんけど？……前にも言いましたけど。」

「は？」主任がぱつと顔をあげて、驚いたような顔をしている。

「和也さんには、あれから電話してちゃんと断りましたけど？」

「なっ！なんでだ？お前、あの時俺のところ来るのイヤだって断ったじゃないか。それに、こないだも、俺には関係ないとか、自分のこと大切にしたいとか、言っただじやないか。」

「あの時は……あの夜は、ゆっくり一人でこれからの事を考えたかったんです。和也さんに、いろいろと私の知らなかったこと聞かされて、それでちよつと混乱してて……それに、確かに自分を大切にしたいって言いましたけど、それは和也さんとまた一緒になるってことじゃなくて。」



「……じゃ、も一回聞くけど、あいつとよりを戻すことは無いんだな？」ゆつくりと、カップをテーブルに戻して、真剣な目で漣に念押しする。

「はい。でも、それは……。あの、もうそんなことは、今更なんじゃないかと。あの、関係ないんじゃないかと。……主任には。」

「はあ？こないだも思ったけど、なんでだよ？どういうことだよ？関係ないって。てか、今ちゃんと人の話聞いてたか？俺が、どれだけ。はぁー……。あーもうっ。お前っ！なんなんだよ一体！」かなり頭に来ているのか、どンドン声が大きく、尖がっている。

「ただ、だって……。」

「だってじゃねーよ。気持ちが決まったらちゃんと連絡しろって言わなかったか？俺。なんで、知らんぷりなんだよっ。」

「……ごめ。」

「謝るくらいなら、ちゃんと説明しろよっ。どんだけやきもきしたか、わかっているのか？！お前ほんつとに、どんくさいというか、何というか……。あーもうっ。こいつマジで……。」「そう言うと、さっさと手を伸ばして、漣を一気に抱き寄せて膝にのせる。

「わわっ。」「あまりの素早さに、漣は一瞬何が起こったかわからない。顔を主任の胸に押し付けられて、すごい力で抱きしめられて、息ができない。」

「そうか。断ったのか。早く言えよ。バカだな。」

少しウエーブのかかった長い髪に顔をうずめて腕に力をこめる。一旦は、漣が望むならと、身を引こうと決めしたが、今はもう二度と離すつもりはない。

「うぐっ！しゅ、主任、苦しいです。」自由になるほうの手で、背中をどんどん叩くと、主任がふつと腕の力を緩めた。漣は顔を真っ赤にして大きく息をしている。

「も、苦しいじゃないですかっ。」膝の上からおろしてくれないので、やけに顔が近い。

「お前が悪い。」

「なんで、私が。」

「関係ないとか、わけのわからないこと言うから、ややこしくなるんだ。」

「でも、ほんとにもう……。だって、主任は。」あらがってみただけれど、主任の腕の中からはどうにも抜け出せなくて。

(安達さんと結婚するくせに。この人は私をどうしたいの?)

「ああ」？まだ言うか、お前は。……俺が、なんだよ?」

「な、なんでも無いです。」

「は？はつきり言えよ。言いたいことあるんだろ？」片手でうつむいていた顎をぐっと持ち上げられて、無理やり目を合わされた。

（こ、怖い……。こっちが文句言いたいぐらいなのに、至近距離で睨まれると、プルプルと震えてしまう。

「主任、ここから、おろしてください。ちゃんと話しますから。」  
こんな親密な体勢ではまともにしゃべれない。

「……。わかった。」しぶしぶ膝からおろして、隣に座らせる。

「ほら、言ってみる。ちゃんとな。」手のかかる部下に話しかける上司のような態度である。

その言い方に、澪は思わずむっとしてしまふ。

（なによなによっ！さつきから、わたしばかり責めて。自分はちやっかり安達さんと結婚の準備進めてるくせに。）

今日だって。わたしの目の前で、二人で仲良さそうに……。

澪たちのテーブルでの主任と安達さんの様子を思い出すと、急に喉の奥が苦しくなって、涙がこみ上げてくる。

自分の気持ちを相手に伝えるのは、正直苦手だけれども、深呼吸して話し始めた。

「わ、わたしが主任に連絡しなかったのは、しなくてもいいと思っ

たからです。もう必要無いかなくて。」

「……は？」

「和也さんのことで、学んだことは沢山あります。その中で、一番骨身に沁みて感じたことは、もし今度誰かとお付き合いするとしたら、自分と同じくらい、信頼できる誠実な人と関係を築いていきたいってことなんです。……自分を大切にしたいから。どんなに相手のことが好きでも、結果的に自分を傷つけるような、あんな辛い思いをする恋愛はもうこりこりなんです。だから。」

「……だから？」

(これ以上言わせるか？この人は、もー！！！なんで、今だけ鈍いふりするわけ？)

溲の言葉に全く動じることのない、ずっずっしい主任の態度に、溲もだんだん苛立ち始める。

「あのですね、主任こそ、人の話聞いてました？ だーかーらー、しらばっくれるのも、いいかげんにしろって言ってるんです！ 私にも、目や耳はあるってことなんですっ。わかりましたか？”祥吾さん”っ！」

とぼけた態度に腹を立て、ほとんどやけになって叫んでしまった。

溲はさっと立ちあがって、床に置いていたカバンをひつつかんだ。

結局言わされてしまった。

安達さんに嫉妬している自分の気持ちを。

悔しくて、感情が高ぶりすぎて、我慢していた涙がこみ上げてくる。

「帰ります。どうぞ彼女と、お幸せに。」

あっけにとられている主任を横目に睨んで、溼はくるっと向きを変えると、玄関まで走って行った。

はいていた白のサンダルのストラップを留める時間がもどかしくて、簡単につっかけたまま玄関の扉を通り抜けて、外廊下の先のエレベーターのボタンを急いで押した。

別れ話？ 3 (後書き)

昨日のままでは漣がちょっと可哀相かなと思ってたら更新できましたわー。

こういう時に限って、エレベーターはなかなか来ない。かといって、8階から脱げかけのサンダルで階段を駆け降りる元気はない。

じりじりしながら待って、やっとエレベーターの扉が開くと思ったら、主任がやって来た。

驚いたことに、扉を抑えて、どうぞと手で促された。

「送っていたただかなくて、結構です。」振り向きもせずにエレベーターの奥のほうに入って、呟いた。

まだまだ終電にはたっぷり時間がある。主任に車で送ってもらってもりはなかった。

「送るつもりなんかないけど？」からかうように言われて、ますます頭に血が上る。

( 追いかけてきたんじゃないの？じゃ、なんでここにいるのよ。 )  
「ならいいです。」背を向けたまま、先ほどよりはきつい声で答え

た。  
クスリと笑う声が聞こえたような気がして、ぱっと振り向くと、主任がにやけ顔でこちらを見ている。

( もー我慢できない！この、ふざけた二股野郎に一発お見舞いしてやろうか ) 人を殴ったことなど一度もないけど、その時溲は本気

で頭に来ていた。

「靴、ちゃんと履けよ。危ないだろ。」漣に思いつきり睨まれても、主任は平気な様子で、いらつくクスクス笑いをやめようとしなない。

「わかってますっ!」漣はかがんで、サンダルのストラップをはめようとした。

「カバン持っててやるよ。」主任がさつと漣のカバンを取り上げた。

「……すみません。」

「やっと名前で呼んでくれたな。」

「え?」エレベーターが一階についた瞬間、主任が漣の手を握ってきた。そのまま当然のように歩き出す。

「ほら、祥吾って。」

「ああああ、あれは……。」

安達さんが、当たり前のように甘い声呼んでいた名前。

「これからは名前で呼んでくれ。」

「嫌です。」

つないでいる手を振りほどこうとして、余計きつく握られた。

「カバン、返してくださいっ。」



「なんで？」

「返してください。」

「持っててやるよ。行こう。」主任が澁を引っ張っていたのは、駅のほうじゃなくて、隣のコンビニだった。

「冷蔵庫ほとんど空だっただろ？牛乳も無かったな。澁がコーヒー飲むのにいるから。それと、明日の朝食と。」

端から見たら、仲の良い恋人のように見えるだろう。

主任は、澁の手をつないで、片方の手は器用に澁のカバンと店のかごを持ったまま店内を歩いている。

「ほら、牛乳かごに入れてよ。」

「主任！」

「祥吾だろ？」

「主任は、お買い物ものしてください。私は帰りますから……。カバンを返してください。」

「無理。俺、財布忘れたし。澁に払ってもらわないと。」しれっとした顔で言う。

主任に言われるがまま、明日の朝の食材を買い、店の外に出た。

澪が会計を済ませる時に、つないでいた手を放していた。

「それでは、失礼します。」よそよそしい態度で、別れを告げた。

見上げると、主任は真面目な顔に戻っている。

「さっきから何勘違いして怒ってるんだよっ。ほら、もう遅いから、俺のところ泊まって行けよ。」

「平気です。一人で帰れます。」

「意地をはるのもいいかげんにしろ。こうなったら、担いででも連れて帰る。」痛いほどの力で腕を掴まれて、引き寄せられた。

「どうして？どうしてこんなことするんですか？私が主任の事、どうしようもなく好きなの知ってて、意地悪してるんですか？」

コンビニの駐車場で、声を殺して泣いてる自分がみじめで余計泣けてくる。

「澪？」悲痛な表情の澪が涙を流すのを見て、さすがにたじろいでいる。

「主任は、意地悪なんですっ。安達さんの仲を見せつけられて、私がどんな気持ちになるか、わからないんですか？だいたい、あの人がいるのに、なんで私を抱いたりしたんですかっ！」

「……安達とは、何でもないよ。」

「嘘です！結婚秒読みだって、みんな言っていました。．．．そりゃあ、私が、最初は私からお願いしたから。．．．それでもやっぱり、彼女がいるなら、続けるべきじゃないです。こんなこと。」

「違うよっ。話を聞けっ。あいつとは、仕事の関係で。．．．ま、確かに、以前は付き合ってたけど。俺が施工部に移って、お互い時間が取れなくて、どんどん会わなくなってっ。．．．最後のほうは俺が振られた感じで終わったんだ。」

「でも．．．．．。」

「あいつ、大手のホテルの改装工事の設計担当になって、その件でいろいろと相談乗ってくれて頼まれたんだ。それで何度か社外で会ったり、客との打ち合わせに付き合ったり。設計部の部長からもフォローしてやってくれと言われてるから。」

「それでも二人は恋人同士に見えました。」主任が嘘を言ってるようには見えない。それでも漣は、もっと信じさせてもらえる言葉が欲しかった。

「そうか?．．．困ったな。俺、普通に接してたつもりなんだけど。」漣をひどく傷つけてしまったことにやっと気付いたのか、少し困惑気味に答える。

「少なくとも、安達さんはそんなつもりだと思いますけど。」

「考えすぎだろ?仕事の話しかしてないぞ。」

「……………」  
「澪が唇を噛んでうつむくと、腕をつかんでいた手を離して、主任が澪の手をそっと握った。」

「こんなところで、落ち着いて話できないよ。ほら、行こう。」

澪もこくりとうなずいた。

怒りや嫉妬で凍りついていた心がどんどん溶けて柔らかくなっていく。

部屋に戻ると、すぐに抱きしめられて、何度も口づけられた。

「泣かせてごめん。でも、俺は澪だけだから。」  
「澪が弱い耳元やうなじに柔らかくキスをする。」

「私もごめんなさい。噂話を信じてしまって。」  
「膝に力が入らなくなって、広い背中に手を這わせて、ギュッと抱きつく。」

「会えない間、きつかったよ。ずっとこうしたくて。」

「私も寂しかった……………」

少しでも離れていたくなかったから、初めて二人で一緒にシャワーを浴びた。

今夜は溲をとことん甘やかすつもりなのか、主任は髪まで乾かしてくれた。

「祥吾さん……。」

ベットにあおむけに寝ている彼のお腹をまたぐようにして腰を下ろす。

暗い寝室には、窓から差し込むわずかな月明かりしかなく、それが溲を大胆にする。

見つめあったまま、体に巻いていたバスタオルを外すと、主任が両手を伸ばして溲の胸を下から包み込んだ。

「きれいだよ。」

その視線と声だけで、これから彼を受け入れる場所がうずいて、思わずおへその下にぎゅうっと力が入る。

覆いかぶさるように、漣からキスを始めると、主任の大きな手は、優しく漣の脇腹や腰をなで始めた。

もう充分つながる準備はできているのを知りながら、その前にできるだけ、久しぶりの肌のぬくもりや感触を楽しみたくて、漣は手と口で、彼の全身に触れていく。

しんと静まり返った部屋の中では、時折小さなうめき声や荒い息遣いが聞こえるだけ。

（好き。どうしようもなく好き。）

言葉で伝えただばかりの気持ちだが、相手の心の中にもっとしつかり届くようにと願いながら、まだ少し湿っている彼の髪に手を差し入れて、もう一度、心をこめて、夢中でキスをする。

「もう我慢できないよ。漣の中に入れて。」

主任はいきなり体を起こすと、漣をあおむけにする。

「早く来て。」漣が囁くと、主任は漣の顔にかかる髪の毛を後ろになでつけてから、膝の間に体を落ち着かせると、ゆっくり入ってきた。

「祥吾さん……。」太腿の内側にあたる、彼の引き締まった腰は、最初はさらさらしているが、動いているうちにどんどん汗ばんでくる。

そのころになると、漣も頭の中が蕩けてしまっていて、すっかりわけがわからなくなっている。

力があまり入らなくなった手と足で、弾ける時が訪れるまで、必死に彼にしがみつけばかりである。

「漣、好きだよ。結婚しよう。」

終わった後、まだ汗でぬれている胸に顔をうずめているときにもらった、突然のプロポーズに、漣は驚いて体がびくりとはねた。

胸がいつぱいになって、声も出せないでいると、主任がイライラした様子で、せつついた。

「返事は？」

「でも……。あの、わたしで良いんですか？」

「ああ。漣がいい。とろくて、どんくさくて、勘違いヤロウで、鈍感女だけど。これも何かの縁だろう。仕方がない。俺がもらってやるよ。」

「ひどいですっ！そんな……。」

「嘘だよ。ていうか、嘘じゃないけど。そんなところも全部好きな

んだ。漣が傍にいてくれたら、何もいらぬ。だから、結婚してくれ。」

「わたしも、主任が、しょ、祥吾さんの事が好き。」彼の心臓の音を聞きながら、漣はやっとの思いで答えた。

「……それって、イエスってこと？」

「はい。……でも一つだけお願いがあります。……できればですけど。」

「なに？」片手で漣の長い髪をゆっくりなでている。

「あの、お忙しいのはわかってるんですが、私たち、その、一度もちゃんと……。」

「え？」

「デートっていうか、あの、二人で普通にどこかに出かけたりとか、そういうの。」

「確かに。」

「すみません。お仕事大変なのに。わがまま言っちゃって。」

「なんで謝るんだよ。俺だって漣とあちこち行きたかったよ。なのに、いつも誘おうと思ったら、誰かさんが勘違いして逃げたりして、それで、機会がなかったただけだから。」



「わたし？」

「そう。」

「……ごめんなさい。」

「もういいよ。それより、どこ行こう。今すぐは無理だけど、現場が落ち着いたら、有給取って、少し遠出してもいいな。」

「はい……。楽しみです。」

「じゃ、最初のデートは漣が行き先を決めて、旅行は俺が決める。それで良い？」

「んん。わかりました……。おやすみなさい。」髪をずっとなでしてくれる優しい手の感触が、あまりにも心地よくて、一気に睡魔が襲ってきた。

心も身体も満たされて、漣は甘いため息をつきながら、ゆっくりと目を閉じた。

## One place to be・(後書き)

週末は出かける予定ができたので、今日更新することになりました。しばらく間があくかも知れませんが、つぎからは、良太と詩織の話に戻る予定です。

## 婚約話再び

ハウイの別荘で10日程過ごした後、帰国した詩織は、すぐにでも恋人の元に戻りたかったが、父親がどうしても引き留めるので、まだ大阪の実家で夏休みを過ごしていた。

詩織の住む家はもともと祖父が建てたもので、大阪北部でも特に大きな屋敷が立ち並ぶ静かな住宅地にある。

そこは、伊丹空港や、新大阪駅へのアクセスが便利だけでなく、公園や緑に囲まれた環境の良い地域だ。

その中でも、高い塀に囲まれた、一際目を引く大きくて古い洋館。外壁は、どっしりしたイギリスのアンティークレンガで、フランスの手焼きの屋根瓦、白い木枠の窓、外装、内装の建具類、キッチンや床板に至るまでほとんどが先代の倉田社長が自ら選んでヨーロッパから持ち込んだものである。

今朝は、珍しく、家族3人がそろって芝生の庭に面している広いダイニングルームで朝食をとっている。

広い窓からは、朝の柔らかな日差しと、庭の木にとまっている小鳥の鳴き声が入ってくる。

「なんで、うちも着物なの？」詩織は、バターをトーストに塗ろうとしていた手を止めた。

明日の午後、父親が社長を務める会社主催の大事なパーティーに出席するように言われ、さらに着物まで用意してあると告げられた。

「明日は桐谷さんと一緒に、息子さんも来られる言うてはったわ。」  
母親は、いつもの澄まし顔でコーヒーを飲んでいる。

桐谷さんというのは、父の会社の大事な取引先の社長で、その次男である雅洋は、詩織の”元”婚約者だ。

「詩織、あのときは突然すぎて、びっくりしたんやろ？でもなあ、もいっぺんだけでも、二人でゆっくり話してみたらどないやろ。雅洋君は、来年大学卒業したらうちで働いてもらうことになってるし、ほんまに良い青年やから。パパも、これをきっかけにあんたらが仲良うなってくれたら嬉しいなど。」

父親は、読みかけの新聞をテーブルに置いて、小さな子供に言い聞かせるように話はじめた。

「……パパ？」詩織はがたと音を立てて椅子から立ち上がった。血の気がすーっと引いていくのがわかる。

「あの話は無くなったて聞いてのに、なんで？……そのために、何日もここに引き留めてたん？……明日のパーティーには出ません。今すぐトキコ姉ちゃんのところに戻りますっ！」声が震えていたものの、はつきりとそう宣言して、手つかずのトーストと飲みかけの紅茶をテーブルの残したまま、二階の自室へと急いで向かった。

「詩織っ！待ちなさいっ。」母親の叫び声が追いかけてきたが、足を止めることはなかった。

（なんやねん！パパは勝手すぎるわ。うちの気持ちなんか全然無視やんか！）

ムカムカしながら、めずらしく乱暴な仕草で旅行鞆をクローゼットから出して、帰り支度を始める。

アメリカ土産は、まとめて別のカバンに詰めているので、問題ない。

あと2・3日はこっちにおるって伝えただけど、急に今日帰れることになったって連絡したら、良太さんどうしはるやる？今メールしようか？いやいや、向こうに着く時間がわかってからのほうがええやる。それとも内緒でいきなり良太さんのお部屋に行ってみようか？どっちにしろ、今頃は仕事してはるやるし……。

あーもう待たれへん。はよ帰ろ。せつかくの夏休み、彼とゆっくり過ごしたい。

良太に会えると考えただけで、俄然気持ちが明るくなってくる。

一刻も早くと急ぐ気持ちを抑えながら、さくさくと荷物をカバンに詰めていく。

ガチャリ。

部屋の扉が開く音がして振り向くと、厳しい表情の母親が立っていた。娘である詩織の部屋に来るなんて、記憶の限りでは初めてである。

「お母さん・・・？」ポカンとした顔の娘の問いかけを無視して、母親が部屋の中に入って来た。

詩織の母は、京都の美大を卒業してすぐに倉田家の長男である詩織の父親と結婚した。

もともと地元の有名な日本画家の弟子になる予定だったが、偶然知り合った詩織の父に一目惚れされたあげく、熱烈な求婚を受け、断り切れずに半ば強引にお嫁入りさせられたという話を聞いたことがある。

そして詩織が産まれた後は、赤ん坊の世話は子守に任せきりで、家の敷地内にアトリエを作ってもらい、子育てよりも創作活動を優先したまま今に至っている。

「さっきのあれ、なんやの？」母親の、凍りつくような冷たい声。こんなに至近距離で向き合う事など、今まであっただろうか？

「さっきの？」

「その年になっても、あなたは自分のことしか考えられへんの？会社の大事なパーティーや言うたやないの。パパはどうか知らんけど、わたしが許しません。明日のパーティーには、絶対に出席しなさい。」

「・・・イヤです。」

母親が息を呑む音が聞こえ、詩織は一瞬殴られるかと思った。

「一体どこまでわがまま言ったら気が済むんや。．．．桐谷さんの息子さんかて、あんたみたいな娘には勿体無い話やのに。．．．ちよつとは感謝したらどうやの。」

「．．．．．」詩織は唇をかみしめる。母親が自分を嫌っているのではと、幼いころから感じてはいたが、こんなに憎悪むき出しの目で睨まれると、どうしていいかわからない。

「ちよつと待つてえな。なんでそんな恨みがましい顔されなあかんの？こつちのほう泣きたいくらいやわ。．．．あんたには言うてへんかったけどな、うちは、あんたを産んだ後、子供ができなくなつて。」

「え．．．．？」

「倉田家の跡継ぎを立派に産むのが最低限の義務やて、お嫁に来たのに。あんたのせいだ。」

「うちのせいだ．．．．。」

そうだったのか．．．．。子供のころから参観日にも、運動会や発表会にも、母はめつたに顔を見せてくれなかった。代わりに亡くなる以前の祖父や忙しい合間をぬって父親もしくは木下が来てくれた。

友達の華や妙は、姉妹のような友達のような温かく楽しい関係をそれぞれ自分の母親と築いている。それが昔から羨ましくてたまらなかった。

詩織には母に抱き締められたり、可愛がられた思い出は殆んど無い。子供のころは、もしかしたら本当の母親ではないのかもと考えたりもしたが、そう信じる続けるには、あまりにも顔立ちが似過ぎていた。

寂しい気持ちを抱えながらも、自分のどこが悪くて、母にうつまわれるのか、わからないまま成長していった。

それが今、はつきりとその理由を告げられて、詩織の目の前が暗くなる。

「パパや、倉田のお義父様は、気にせんでええって慰めてくれはったけど。それでも親戚の人らに陰であれこれ言われてきたし。今迄どんだけ肩身の狭い思いしてきたか。」

母の美しい顔が、涙で濡れているのを見て、はっとする。

母がこれほど感情を露わにするなんて。

思わず震える母の肩に伸ばした手を、思いっきり引っぱたかれた。

「触らんとして！そんな慰めはいらんねん。ちよつとでも悪い思ってるんやったら、態度で示したらどうやの？」

「でも……？う、うち、一体どうしたら。「叩かれた手の甲が赤くなつてじんじんする。」

「……息子が欲しかったって言うてんねん。」



「……息子?。」

「桐谷さんとこの、雅洋君と。高校卒業したら、手術の前に籍入れて。そしたら……。わかるやる?……。あんたの手術がうまいこと行かんでも、うちらには、雅洋君が残るやんか。頭もええし、真面目やし、言うことないてパパもえらい気に入っってはって。」

「手術の前に……。」「両親は詩織の手術に関して最悪の結果を覚悟しているということか。」

母が、自分の手術の成功云々よりも、倉田家の将来を気にかけていることは、詩織にとって驚きでも何でもない。それでもやはり、面と向かって言われるのはきつかった。

ショックのあまり、ぼんやりしている頭で必死に考える。

正直どうしたらいいのか、わからなくなっている。手術の事、母の悩み、父の願い……。もしかしたら本当に自分の事だけ考える場合じゃないのかもしれない。

それでもやはり詩織には好きな人がいるから。良太さん以外の人の将来は考えられないから。

「お母さんが今迄辛い思いしてはったのに、うちなんにも知らなくて、本当にごめんなさい。お母さんの言う通りにしたいって心から思うけど。……。でもうちは、今、お付き合いしてる人がいるんです。」

綺麗に整えられた、母の眉がピクリとひきつった。

「あんた何言うてんの。そんなん別れたらええことやないの。どんな人と付き合ってるか知らんし、知りたくもないけど。もう会わんとき。」

「それは、それは出来ません。」

「なんでやの？それやったらあんたはうちの事なんかどうでもええねんな？母親の頼みが聞かれへんってことやねんな。」

「お母さん……。」

突き放すような言い方をされると、母の愛を求めてやまなかった小さなころの自分が、顔を出す。

本当は、今でも母に認めてもらいたい。娘である自分にもっと関心を持ってほしい。愛してもらいたいのだ。せめて自分を嫌わないでいてほしい。

「とりあえずもう一度、会ってみてくれへんかって言うてるだけやんか。桐谷さん達をご招待するだけしといて、あんた居らんかったら、話にならんでしょうが。パパの立場もちよつとは考えたらどうやの？あんたはそうやって親の顔に泥を塗って平気な娘なんか？」

「そんなこと……。」詩織は小さく首を横に振った。

「それやったら、明日はちゃんとパーティーに出席しなさい。雅洋君にも失礼のないようにな……わかりましたか？」

「……わかりました。」

詩織の返事を受け止めると、母は冷たい表情のまま小さくうなづき、うなだれた様子の娘には目もくれず、せかせかと部屋を出て行った。

再会 1

ベットにうずくまって、ひとしきり泣いて、ぼんやりしているど、遠慮がちなノックの音。

「はい」

「詩織様、よろしいですか？」木下の声。

「なに？」

「失礼します。」木下が部屋に入ってきたので、泣きはらした顔を見られたくなくて慌てて後ろを向く。

「なんやの？」

「……奥様が。」

「お母さんが……どしたん？」

「詩織さまのお相手についていろいろ聞きに来られて。」

「ほんで？」

「私のわかる範囲でお答えしておきました。」

「そう……知りたくないって言うてたくせに。あの人……うちの事、嫌ってんねん。自分の母親に嫌われてんねん。小さい頃からなんとなくわかってんけどな。でも……やっぱり、な。」

また胸が苦しくなつて、涙があふれ出す。

気がつくと、詩織は木下の腕の中でわんわん泣いていた。木下は黙つて、どんなにスーツがドロドロになろうが気にせずじつと詩織を抱きしめていてくれた。小さい頃と同じように、静かに詩織が泣きやむまで、背中をなでながら。

「あわわ、ごめんなさい。えらいことやわ。木下の服が……。」「泣きやんでわれに返つて、木下の上等スーツが悲惨な状態であることに気づいて慌てている。」

「いえ。いいんです。……それよりもう、大丈夫ですか？」

「うん。ありがとう。だ、大丈夫やと思うわ。」詩織は、頑張つて笑顔を作つた。

全然大丈夫じゃないし、今もまだ頭の中は混乱しているけれど、木下にこれ以上心配を掛けたくなかった。

「何か飲みものでもお願いしてきましようか？」

「ええねん。もうお昼やろ？下に降りるわ。」

「わかりました。」

以前、木下が詩織に黙つて山田に脅しをかけたことがどうしても許せず、今後はずっと距離を置こうと思つていたのに、いつの間にか、かつての兄と妹のような関係に戻ってしまったようである。

二人で連れだつて、階下へ向かう途中、

「木下？あ、あの。」

「何でしょう。」

「お母さん、なんて？山田さんのこと。」ちらりと不安げな顔をのぞかせる。

「特には。」無表情のまま、かすかに首を横に振る。

実際は、どんな手を使つてでもすぐに別れさせるようにと命じられた。勿論、そのままを詩織に伝えることは出来ない。倉田夫人については、木下も常々思うことはあるにはあつたが、分をわきまえ、今までは沈黙を守つてきた。だが、それがこれからも続くかどうか、木下自身にもわからない。

「そう。」

「明日のパーティーには。」

「出る。出るから、安心して。．．．あんな、木下どう思つっ？うち  
は、そんなに自分勝手なんやろうか。」

「それは。．．．そんなことはないと思います。でも、社長が桐  
谷社長の息子さんとの婚約を望むのは。」

「うちの手術が成功せんでも、倉田家に息子が残るよじに？」

「えっ？」

「そうなんやろ？遠慮せんではつきり言ってもらったほうが気が楽やねんけど。」

「奥様が何とおっしゃったか存じませんが、社長はそんな理由でこの話を進めたいわけではないと思います。詩織様の幸せを第一にお考えになられて。」

実の娘に、いったい何を言ったのだろうか。あの女は。うっかり怒りが顔に浮かばないように気を引き締める。

「そうやるか。・・・とにかく明日はちゃんと出るし、愛想良くするから。自分の役目は果たします。」

詩織は、諦めたような顔でそう呟くと、ひとりっきりの昼食をとるためにキッチンに向かった。

\*\*\*\*\*

美容院で髪を結いあげてもらって、上品な柄の水色の振り袖を着た詩織は、父の会社主催のパーティーが始まってからずっと、両親の間に立っていた。

それは、新薬の発表、また新たに大規模な増資を行い、新分野でのさらなる開発に力を入れるという姿勢を業界にアピールするという重要なものであった。

梅田にある一流ホテルの一番広いパーティー会場で、ひっきりなし

に挨拶に訪れる客に対応する両親を傍でぼんやりと見ていた。時折父から誰それだと客を紹介されると、詩織も明るく笑顔で答えた。

「このたびは、おめでとございます。」背の高いロマンスグレーの上品な男性とその妻らしき女性、そして父親に良く似た若い男が詩織たちの目の前に現れた。

「ああ、桐谷さん。お待ちしておりました。本日は、わざわざお越しいただきまして、ありがとうございます。・・・それと、紹介させていただくのが、遅くなってしまつて申し訳ありません。これが、娘の詩織でございます。」

母に促されるまでも無く、詩織はとっさに深々とお辞儀をした。去年の婚約騒動のときには、雅洋としか会わなかつたので、彼の両親とは初対面なのだ。

「まあ、これはこれは、なんと可愛らしいお嬢さん。」

「本当に、お母様に良く似てはつて、すごく美人さんでいらつしゃる。」

「いえいえ、まだほんの子供なんですよ。おほほほ。」

二つの家族は、安物のホームドラマに出演しているかのように、作つた笑顔を交換し合った。カメラのフラッシュが眩しい。

「ほら、雅洋、詩織さんに御挨拶は？」母親が促すと、雅洋は遠慮



がちに詩織に微笑みかけた。

「お久しぶりです。お元気でしたか？」爽やか青年代表のような綺麗な笑顔。前回会ったとき、詩織にばっさりガン無視されたことなどおくびにも出さない。

「はい。おかげさまで。雅洋様も……お元気そうでなによりです。」

「ほら、詩織、あなたもずっと立ちっぱなしで疲れたでしょう？雅洋さんをお願いして、飲みものでも頂いてきたら？」母がわざとらしく詩織の背中を押す。

「いえ、あの……。」詩織は眉をひそめて、拒否しようとするが、「詩織さん、もしよければ、御一緒させて下さい。」雅洋がたたみかけるように、詩織に手を差し出した。

詩織の両親、雅洋の両親もじつと詩織を期待に満ちた目で見つめている。みな一様に、微笑んでいるようで、実は全然目が笑っていない。

「はい。では、お願いいたします。」どうにも断り切れず、詩織はおずおずと雅洋のスーツの肘のところに指をかけた。

可愛さ余って・・・という言葉が頭に浮かぶ。会場の隅にある目立たないテーブル椅子に座り、隣の席の上品な着物姿の彼女の横顔を見つめる。

相変わらず可愛い。俺の婚約者未満。

両親の前とは打って変わって、雅洋の顔には苦い表情が浮かんでいる。相手のほうも、沈黙が怖くないのか、ただ俯いている。

近づいてきたホテルのスタッフに、2人の飲み物を頼んで、雅洋は椅子の背にもたれかかり腕組みをした。

半年前に初めて会った時より、どこかしら少し大人っぽくなったような気がする。あの時は、女子校育ちのうぶなお嬢様なんか、適当に魅力をふりまけば、あつという間に言いなりになると思っていた。

それなのに、いまだに信じられないが、その後しばらくしてから、一方的に婚約話を断られたのだ。

あり得ない事態に茫然とした。食事中、彼女はろくに話もせず、俺の顔も見なかつたくせに。

断られた理由も良く分からないまま、倉田社長のわがまま娘の事など忘れようとしたが、何かの弾みに思いだしてしまうのだ。食事の後に見かけた、社長の秘書と楽しそうに話す姿を。

まあ、確かに社長秘書の木下氏は男の俺でもうっとりするくらいの男前だ。でも俺だってそれほど負けてはいないと思う。

あんな風に自分にも甘えた顔をしてほしい。笑いかけてほしいと思  
った。

親の会社のためとか、出世のためとか関係なく、なんとかして詩織  
を振り向かせたいという、今までに経験したことのない切羽詰まっ  
た気持ちを何カ月も持て余していた。

そして先日、父に連れられて行ったゴルフ場に倉田社長が居た。

倉田製薬の内定を取り消さなかったのは、父の会社の事情も絡んで  
はいたが、”社長の娘”をまだ諦めるつもりは無かったからだ。

一緒にコースをまわる父と倉田社長の会話に、詩織の名前が出てき  
た。予定通り、高校卒業後はアメリカにしばらく滞在するという。  
心臓の手術のために。

雅洋は、その場で、詩織の父親に直談判した。どうやら自分は娘さ  
んに一目ぼれしてしまったらしい。せめてもう一度、会って話をさ  
せてもらいたいと。

息子の突然の告白に、雅洋の父親は驚いた顔をしていた。婚約話が  
破談になった事など、息子は全く意に介していないようだったから  
だ。

最初は渋っていた倉田社長も、雅洋の真剣な様子にほだされ、もう  
一度娘を説得してみると約束してくれたのだ。

そして今、隣には、相変わらず自分の前では浮かない顔の彼女が居  
る。

女性につれなくされた事のない雅洋にとって、そのような態度はまさに火に油であった。

## 再会 2

詩織は腕組みした雅洋に、忌々しげに見つめられ、内心すくみあがっていた。

確かに半年前の初対面の場では、殆んど顔を見ようとせず、ろくな会話もせずに、失礼なことをしてしまったと反省している。

無駄に”今時”な彼の容姿が、詩織には完全に恋愛対象圏外であり、自覚はないものの、会った瞬間、雅洋の自惚れのようなものを感じ取り、ますます拒否反応を示したのだろう。

(えらい睨んではるわ。・・・そうやわ、ちゃんと謝らな。)

この人も婚約話を蒸し返されて腹が立っている様子やし。うちのせい違うにしても、言い出したのはパパなんやろうし。

これ以上の沈黙には耐えられそうもなく、運ばれてきたオレンジジュースを一口すすると、詩織は意を決して隣の元婚約者に向き直った。

「あの、何とお詫びすればよいか……。本当に申し訳ありません。初めてお会いしたとき、わたし、雅洋さんに失礼な態度をとってしまった。深く、深く反省しております。そしてまたしても、うちの父が無理を言いだしたようで……。とっくに終わった話を蒸し返すようなこと……。」

「悪い思てるんやったら、これ以上恥かかさんといて欲しいねんけ

ど？」

双方の両親の前で、詩織に話しかけた時の温かで、優しげだった声とは、全く正反対の皮肉交じりの冷たい声が耳に届いた。

「は、はい？」詩織は目をぱちくりさせた。

「元はと言えば、倉田社長から持ちかけられた話と違いますか？それなのに、納得のいく説明も無く一方的に断られ……。それで今日、何事も無かったような顔をしてあんたがここにノコノコ現れて……。まさかまた振られ男の役目を俺に押し付けるおつもりですか？」

「……………そそそ、それは。」蛇に睨まれた蛙のごとく、身体が強張って身動きが取れなくなる。

「俺は、頭の軽い女子高生の気まぐれに何回も付きおうてられるほど暇ちゃつし、おめでたくも無いし……。この婚約話は、お互いの両親の会社が今後より強固な関係を築くためってことも、倉田社長が俺を見こんで、経営者として育てたいって思ってくれてはることも、俺はちゃんと理解したうえで受けたつもりです。」

自分が一度しか会ったことのない詩織を忘れられなくて、倉田社長に頼みこんで再会にこぎつけたことなどおくびにも出さない。詩織の勘違いを最大限に利用しようと、思い切り強気に出ることにしたのだ。

「そんな……………」

詩織はおろおろと視線をさまよわせる。こんな展開になるなんて思

つていなかった。雅洋に真摯に謝って、彼に謝罪を受け入れてもらってそれで終われると、そんな風に考えていた。まさか、この話に彼が”本気”だとは。

「お宅の会社が、これから参入しようとしている分野には、うちの会社の技術やノウハウが欠かされへんことは御存じですか？勿論、親父も、他社との共同開発より、倉田社長が提示してきた条件が一番メリットがあると思って提携することに決めたんやとは思いますが。それでも、やっぱり、親父も人の子。大事な息子が、1度ならず2度までもこけにされたら知ったら、もしかしたら……。」

「もしかしたら？」

「お宅のライバル会社に乗り換えるかも知れませんねえ。俺としても、こんな扱い許されへんし。」

「こけになんか、してません！それに、そんなこと、無理ちがうんですか？そんな簡単に。だって、ちゃんと契約書とか。」

「確かに。でも、そんなもんどうにでもなるし。それに、こんだけ大々的に宣伝して、増資して、あげく結果出されへんかったら……。ちよつと考えたらわかると思いますけど、えらいダメージ受けますよ、お宅の会社。」

可愛らしい顔がみるみる青白くなっていくのを見て、雅洋は、詩織が自分の言葉をそのままうのみにしているのがわかった。詩織のおびえきつた様子に背中がぞくぞくする。

（やっぱり世間知らずのお嬢様や。赤子の手をひねるようなもんやな。ころつとだまされて。やり手の倉田社長がそんなドンくさいこ

とするわけないのに。」

実際は、この共同開発計画が白紙に戻れば一番困るのは雅洋の父親のほうなのだ。雅洋は知らず知らずに危ない橋を渡るうとしていた。

（ばかな娘や。純粹培養で育てられて、他人の話を疑うことも知らん。木下氏があれほどがっちりガードしてへんかったら、今頃は悪い男に騙されとったかも知れん。）

「雅洋さん、うち、謝ります。父に代わっても、何重にもお詫びします。だから、どうか許して下さい。父や、会社が困るようなことせんといて欲しいんです。」詩織は震えながら何度も頭を下げた。

「俺かてほんまはそんなことした無いですし。あーもう、どないしたんですか？そんな顔して。．．．まるで俺がいじめてるみたいやないですか。」そう言いながらも、今にも泣きそうな顔の詩織が自分にすぎるような目を向けてくることに深い満足を覚えていた。

「うち、どうしたらいいんですか？ どうしたら？」

「クスツ。どないもこないも。．．．俺らが結婚して、幸せなったらええことやないですか。．．．それから、さっき俺が言ったこと、倉田社長や木下さんに聞いても、余計揉めるだけやから。そんなことないって、否定するに決まってるし。絶対誰にも言うたらあきませんよ。」一応念のため釘をさしておく。

「はあ．．．．．」

確かに、詩織が不安になるようなことを、父や木下は絶対に言わな



いだろつ。逆に詩織を脅すようなことをした雅洋に何をするかわからない。そうなったら、会社が困ることになる。会社イコール父親が困ることになるのだ。

でも、結婚なんて。それだけは受け入れられない。

「詩織さんが高校卒業したらすぐに籍入れる。何よりも倉田社長がそれを一番それを望んでるし……これで全部丸く収まるやる？」

雅洋は詩織の手をとって、ギュツと握った。

詩織が慌てて手を引き抜こうとしても許さなかった。

「や、やめつ。」

「なんで？俺ら婚約者どうしやのに。手ぐらい繋いでもええやんか。……そしたら俺、そろそろ倉田社長に挨拶して帰るわ。行こか。」

立ちあがって、詩織を引き寄せる。

詩織もおとなしく立ちあがった。

昨日母に言われたこと、そしてたった今、雅洋から聞いた話がぐるぐると頭の中を駆け巡る。

自分の周りを取り囲む見えない壁がどんどん押し寄せてきて、閉じ込められたような気がした。

私はただ、好きな人と、一緒に過ごしたいだけ。彼のために、ご飯作ったり、洗濯したり……。

贅沢できなくてもいい。何もいらぬ。彼さえ傍にいてくれたら。

そんな平凡な日々を夢見ることさえできないのか。

良太さんに会いたい……。

なんとなく、このまま良太から引き離されそうな気がして、怖くてしかたがない。

雅洋が何か耳元でささやいているようだが、詩織は上の空だった。

（なんでこんなことになったんやろ……。うち、どうしたらええんやろ。）

こみ上げる涙を必死でこらえながら、雅洋に手をひかれるまま、両親のもとへ戻っていった。

## 籠のトリ

「詩織、パパの言った通りやる。ちょっと話しただけなのに、すっかり仲良うなってるやないか。」

雅洋に手をひかれて、両親のもとに戻った詩織は、満面の笑みを浮かべた父親に迎えられた。

「そうかそうか。雅洋君、詩織の事よろしくお願いします。これは、おほこいし、はつきりモノ言われへん、頼りないところもあるもんやから。でもこれからは、君のようなしっかり者の旦那さんに任せといたら、安心やな。」

「パパっ、ちがっ……。」

詩織は、雅洋につかまれていた手をねじってふりほどいたが、既に父は誇らしげな様子で、周りにいた会社関係者に雅洋を紹介し始めていた。

将来有望な会社のホープとして、提携先の会社の社長令息として、そして娘の婚約者として。

それを全力で否定することもできず、詩織はただただ心もとなく、その横顔を見つめていた。

故郷をしばらく離れ、気付いたことがある。

それは、いつの間にか父も年を取っていたということ。

子供のころの記憶よりも、白髪も増え、顔のしわも深くなり、背中も少しだけ丸くなったような気がする。

そして、父のこれほど嬉しそうな顔を見るのは本当に久しぶりの事で……。

『あんたのせいで……』 初めて見た母の涙を思い出す。

『これで全部丸く収まるやろ。』 雅洋の言葉を思い浮かべる。

このまま、両親の望むようにするべきなんだろうか。それが大人になるってことなんだろうか。

それでも……それでも。

その夜は一睡もできなかった。思考が堂々巡りで朝から酷い頭痛がしている。

ひとりきりの遅い朝食をとり、重い足取りで自室に戻り帰り支度をしようとして、愕然とした。

財布と携帯電話が無いのだ。

父は早朝に出勤しており、考えられるとしたら、母親のしわざだろう。

急いで母のアトリエに向かう。

「お、お母さん？うちの財布と携帯が返してっ。」陽のあたるアトリエで、のんびりと花を生けている母に訴えた。

「ああ、あれなあ。勝手にトキコさんここに帰られたら困るさかいに、木下にあずかって貰うわ。なんやへんな虫がついてるようやし？あんたが先方さんときつちり別れる決心つくまでは、こつちに居らせよて決めたんや。」振り返りもせずに母は冷ややかに言い放つ。

大きな窓に囲まれた、静かで明るい母のアトリエに、パチンパチンと花の茎を切る音だけが響く。

「そんなん酷いわ……。うち、もうほんまにトキコお姉ちゃんところに、あつちに帰りたいねん。そ、それに山田さんの事かて、別れるなんて無理。」

「そんな話聞きたないわ。まだしばらく夏休みやし、ここにおつたらよろし。雅洋さん誘って、どっか行つてき。それでちよつとは頭も冷めるやろ。なんやつたら、こつちの学校にまた戻ってきたらええやんか。手続きやつたら木下がすぐにでも。」

「嫌や！こつちには戻らへんっ。最後まで、ちゃんと卒業まで今の学校にいときたい。」

「それはあんた次第やんか。」一瞬振り返り、ちらりと詩織と目を

合わせた。

「……………お母さん。」それは、良太と会うなど言うことだろうか。詩織は唇をかみしめた。

「もう、あんたがイライラさせるから。思った通りに生けられへんかったわ。失敗失敗。はあく。うち忙しいねん。見たらわかるやろ。もうあっち行って。」そう言うと、花器を持ち上げて、窓際の飾り棚に置くために立ち上がった。

もうこれ以上の会話は望めない。母につれなくされるのは子供のころから慣れっこだ。

詩織は黙ってアトリエを後にした。

自室のベットにうずくまって、こみ上げてくる涙をこらえて必死に考える。

(良太さん……………)

携帯を取り上げられたら、良太とは簡単には連絡がとれなくなる。

このままでは、彼は絶対に心配し始めるだろう。

トキコに電話すれば、真琴経由で良太に連絡も取れるだろうが、いったい何をどう説明すればいいのか。

まさか、実家で軟禁状態でいるなんて言えない。雅洋の事も、手術の事も良太には知られたくはない。

もともと陰悪の仲のトキコと詩織の母である。詩織の境遇を案じて、倉田家の中でも怖いもの無しのトキコがどんな修羅場を繰り広げるか、考えるだけ恐ろしい。

車の音が聞こえたので、階下に降りてみると、木下が父の書斎に隣接する、専用の事務室で仕事をしていた。

「木下？あんな、うちもう帰りたいし。財布と携帯返して欲しいねんけど。」

「詩織様……。」木下は困ったように目をそらした。

「お母さんが、木下にあずかって貰ってるって言うてはったわ。お願いやから。返してっ。」

「申し訳ありませんが、今はお渡しできません。社長とも相談させて頂いたのですが、詩織さまはしばらくこちらにいらっしやるほうが良いかと。……いつかはわかって頂けると思いますが、これは、詩織さまのためでもある……。」

「違うやんっ。うちのためとか、そんなん違う。どこがうちのため？違うやろ。会社のためなんやろ？この家のためなんやろ？はつきり言ったらどうやのっ。」

詩織は自分の声が怒りと落胆で震えてかすれているのがわかった。母はまだしも、木下にまでこんな風に言われるなんて、耐えられなかった。

「……会社のため。倉田家のためと言えば、それで納得していただけるなら。……その通りです。山田さんの事は忘れて、雅洋さんとの将来を考えてください。」

木下の本音は違う。会社もこの家もどうでもいい。

ただ、詩織は山田良太ではなく、雅洋を選ぶべきだと。雅洋のほうが、将来ずっと詩織に豊かで安定した生活を与えることができると思うから。

それに二人は同じような境遇で育ってきている者同士。最初はじっくりこななくても、そのうち深くわかりあえるようになるだろう。

恋に恋している状態の今の詩織にはわからないだろうが、雅洋のほうが山田良太より、詩織にふさわしいのだ。分別ある大人なら誰でもそう考えるだろう。

心を鬼にして、詩織が納得するであろう答えを口にした。

「ほらそうやんか。ほらやっぱり。……最初からそう言うたらええねん。……わかりました。……もう疲れたので休みます。」

ぞっとするほど弱弱しい声でそう言うと、詩織は静かに自室に戻って行った。

「ふん。おかしい思ってたん。メールしても、返事ないしさあ。携帯まで取り上げるて、酷いわ。あんたの親、まじで鬼やな。」



数日後、華が詩織を訪ねてきた。約束していたアメリカのお土産を受け取りに来たのだ。

今、2人は詩織の部屋にいる。詩織は華にかいつまんで今の状況を説明した。

木下は、階下の事務室で仕事 중이다。詩織を見はっているつもりなのか、最近しよっちゆう姿を現す。

「うちやったら、さっさとトキコさんに電話して、助けてもらおうで。それにさあ、彼氏だって何日も、連絡取れへんかったら、めっちゃくちや心配してはるん違う?」

「トキコお姉ちゃんにはこれ以上、迷惑かけたくないねん。お母さんと大喧嘩になるの目に見えてるしな。……。それでも、良太さん心配してはるやろうし、どないしよう……。せめて携帯だけでも返してほしいねんけど。」

しばらく黙りこくって、考え込んでいた華が、おもむろに携帯を取り出した。妙を呼び出しているようだ。

「ふふつ。妙も、今すぐ来るって! 詩織、あんたを脱出させたるわ。携帯と財布は木下さんが持ってはるねんな?」

「そつやと思う。多分、事務室の机の引き出しやと思うわ。あそこ、鍵かかるようになってんねん。」

「うん。そうか。鍵やね。わかった。妙が来たら、すぐ作戦開始

するから、あんた帰る支度しとき。」

憔悴しきって青白い顔の詩織とは反対に、華の顔は興奮で赤らんで、目がキラキラしている。

相変わらず全身ゴルフウェアの妙が息を切らせて部屋に駆け込んできた。この二人は昔から倉田家の出入りはフリーパスなのだ。

「詩織！あんた、どないしたんっ！」家から全速力で走ってきたらしく、汗びっしょりだ。

「まーまー。落ち着いて落ち着いて。妙、今から作戦会議や。こっち来て。」華が妙と小声で話し出した。

コンコンとノックの音がしたので、木下はパソコン画面を見つめたまま「どうぞ。」と答えた。

倉田家の家政婦がお茶を持ってきたのかと思っただが、部屋に入ってきたのは、詩織の幼馴染の少女達だった。

「すみません。お仕事中……。」背の高いほうがっこりする。確か、華という名のちよつと大人びた子だ。

色の黒い、ゴルフウェアのほうは、むすつとして、木下を睨みつけている。

「いえ……。もうお帰りですか？それとも？」

「詩織の携帯と財布、返してあげて欲しいんです。」華がたたみかけるように言う。

「……。それは、申し訳ありませんが。」木下は、知らず知らずのうちに痛むこめかみをさすった。

「そうなんや。ふうん。木下さんにはがっかりやわ。」

「何と言われようと。」むっと思わず顎に力が入る。

華は、こっそりと妙に目配せした。

いよいよ行動開始である。

「そしたら、こちらが詩織をここから連れ出すしかないな。そんぐらいのお金ならあるし。」そう言って、2人は木下に背を向け、ドアのほうへ向かった。

「待ちなさいっ！」木下は慌てて2人をひきとめようとドアのほうに駆け寄った。

その瞬間、木下は、顔に痴漢撃退用のスプレーを吹き付けられた。

瞬間的に目を閉じたものの、あまりの刺激にがたんと大きな音をたててひっくり返った。

いったい何が起こったのか、わけがわからず、うめき声を上げながら、ただ床に転がっている。

「よっしや。妙、あんた足を縛って。うちは手を縛るから。」華が  
てきぱきと妙に指示を出す。

詩織の部屋から持ってきたスカーフで手足をぐるぐる巻きにして縛  
った。

そのあと、ペットボトルの水で湿らせたタオルを絞って、木下の顔  
を丁寧にぬぐってやる。

「木下さん、大丈夫ですか？」華は倒れたままの木下に声をかけた。

「……………」木下は目を閉じてじっとしている。

「ほんまごめんなさい。でも、これしか方法が……………」木下さ  
ん、引き出しの鍵、どこ？」

「知りません。そんなことより、早くひもを解きなさい。今すぐ。」  
木下は、冷静になろうと何度か深呼吸した。縛られた手も足も、び  
くとも動かない。自分がこんな小娘たちにシテヤラレタなんて、あ  
まりのショックにすぐには立ち直れない。

「あかん。鍵が先や。はよ渡してっ。」妙がイライラして、木下の  
胸倉をつかむ。

「君たち……………こんなことして、許されませんよ。」

「ほんなら”許されません” ついでに、今から身体検査させて頂きますから。鍵のありか言わへんし。うちらで勝手に見つけ出さなあかんやん。」木下の脅しには、全く動じていない様子の華は、逆に楽しそうな声をあげた。

「!!!!!!つな!!!!!!」

「妙、木下さんのカバンと机探ってくれへん? うちは”木下さん”を探らせて貰うわ。」可愛らしくクスクス笑いながら、木下のネクタイをもてあそんでいる。

「らじゃ。」妙がきびきびと机の探索を始める。

「さーさー、どこやらなあ。なんや男の人のスーツってポケットいっぱいあるなあ。アー邪魔くさいわ。こうなったら、いっそのこと脱がせたほうが早いやるか?」物騒なことを呟きながら、木下のスーツのポケットをごそごそ探り始めた。

「なななっ! やめなさい! 君たち、いい加減にしなさいっ!」さすがに木下も頭に來たのか大きな声で叫び始めた。

「木下さくん、静かにしとかな、ちゆうすんで。ほら、黙るとき。それとも何? もしかして、キスされたいん?」華が顔を近づけてきた。

「!!!!!!つわ!!!!!!」さすがの木下も、華の大胆さに全身固まっている。

「華！あつたで！カバンの中にあつたわ。」

妙が喜びの声をあげ、そのあとガチャリと音がして、引き出しが開けられた。

「目的物発見！財布と携帯ゲットですッ！隊長、そしたら、うちは詩織連れて行くわ。」

「なんや、ええとこやったのに。ま、しゃあないな。うむうむ。妙君、良くやった。くれぐれも姫を無事に駅まで届けてあげてや。あの子、だいぶ弱ってるから。」華も満足げにうなづき返した。

「了解つす！ほんなら、華も气イつけて。……あの……木下さんだいぶと怒ってはるで。」

最後のほうは心配声で、華に馬乗りになられて、仰向けのまま身動きとれなくなっている木下を横目で見ながら部屋を出て行った。

## 華の告白

「さてと……」

木下のお腹の上にまたがっているままの華は、そのままの体勢で、夕エと呼ばれていた少女が出て行ったばかりのドアをじっと見つめている。

「君、結構重いな。」さすがに嫌みの一つも言いたくなくなる。

「あ、ごめんなさい。ちょっと今、考え事……」

(何だこの小生意気なガキは……!!俺の腹の上に乗っかって考え事ができるとは、上等だ。)

「だんだん手足がしびれてきたし。お嬢さん、悪いが早く外してくれませんか?」

「嫌や。まだあかん。」

「は?」

「妙から、詩織を無事に新幹線に乗せたって連絡が来たら、すぐに解放してあげる。それまでは、木下さんはうちとここに居てもらおうわ。」

「考えが甘いな。そんなことしたって、無駄ですよ。私はいつでも詩織様を連れ戻せるのに。」

「木下さんはそんなことせえへん。だって、詩織の事、誰よりも大切に思ってるはずやから。」首を横にふりながら、華は真剣な顔で木下を見つめる。

「・・・・・・・・。」

「うちは子供のころから、ずーっと詩織が羨ましかったわ。いつでも木下さんが傍にいて、護ってくれて。仕事やからってことだけであんな風に優しくできるわけない。そうやる?」

「だからこそ、詩織様の幸せを考えて。」

「幸せ?大人はいつでもそうやって、あんたの幸せのためやって、自分の考え押し付けるけど、言ってる本人が全然幸せじゃないことのほうが多いやんか!それに、木下さんの考える幸せと、詩織が求めている幸せが同じかどうかからへんやる?」

「君たちは、まだ子供だから、世間がどれほど厳しいかわかっていないだけだ。実際社会に出て、いろんな苦労を経験したら、親御さんがおっしゃってる事が理解できるはず。」こんな体勢で説教しても、説得力はあまり無いが、一応言うべきことは言う。

「わかってる。木下さんの言いたいことは・・・・・・・・なんとなくやけど。そやけど、お願い。もうこれ以上詩織を追いつめんと欲しいねん。知ってはるやる?手術の事。不安でいっぱいのはずやのに、うちらにもなんも言わへん。そういう子やねん。いつも我慢してばかりで・・・・・・・・今度だけは、詩織の好きにさせたって。彼氏と無理やり引き裂くようなことしんとして。詩織は木下さんの事、家族より頼りにしてんねんで。その気持ちだけは、裏切ったらあかんのん違う?」



「……お嬢さん、私の上着の右ポケットに、ハンカチ入ってますから。」

「うつつ。ごめんなさい。……お借りします。」華は木下のハンカチで涙をぬぐった。

「わかりました。華さん……でしたね。詩織様を無理やり連れ戻すことはしないと約束しましょう。……それで良いですか？」

「ありがとうございます。」華はそう言って、よろよろと、木下の上からどいて、床に座り込んだ。

「じゃ、そろそろ外して。」

「まだあかん。」

「は？」

華は無言で立ち上がると、ドアに挿さったままの鍵を抜いた。ヨーロッパ仕様の木製ドアで、真鍮のドアノブと鍵がついているのだ。

その鍵をスカートのポケットにしまってから、木下の手足を自由にした。

木下はゆっくりと立ち上がった。柔らかいもので縛られていたので、手足には拘束された跡はないし、痛みも無い。

その様子を、華は木下のデスクにもたれたまま見守っていた。

「これからどうしはるんですか？」

「これから？」

「はい。ここで、お仕事続けて頂いても結構ですけど、妙から連絡が入るまでは、この部屋にいてもらいますから。」

「ちゃんと約束は守りますよ。詩織様があちらに戻られるのを邪魔するつもりはありません。」

「ふむ……。それでもやっぱり、出したげへんとくわ。」

「訳のわからないこと言わずに、さっさと鍵を渡しなさい。」まったくこの小娘にはイライラさせられる。

木下が近づいてきたので、華は素早くデスクの後ろに回った。それから、ポケットから取り出した鍵を、ブラウスの襟元から、下着の中に突っ込んだ。

「なにしてるんですか！」木下が慌てて止めようとしたが、もう遅い。

「ふふつ。木下さんその顔、めっさ怖い。」

「もともとこついう顔なんです。」

「……………もうちょっと一緒にいたかってん。」華は、指先で髪の毛をもてあそびながら、少し恥ずかしそうに俯く。

「なんか、キャラ変わってないか？」

(なんだその恋する乙女モードは。ちょっと可愛いじゃないか。)

「だって、木下さんはうちの初恋の人やから……。詩織から聞いてへん？」

「初耳ですが……。光栄です。」まだ腹立たしい気持ちが収まらないので、ちよつと棒読みなのは仕方がないか。

「お上手やねえ。そんなこと思っへんくせに。」そう言いながらも、華の頬が少しだけピンクに染まる。

「コホンっ。いえいえ、充分に魅力的なお嬢さんだと思いますよ。」うん。確かに可愛い。背が高くて、小鹿みたいに手足が細くて長い。良く見るとかなり好みかも。

「ほんまに?!。。。か、彼女にしてもええと思っくらしい?」「まだモジモジしながらも、この際言いたいことは言っつもりらしい。

「ま、まさかつ。それは無いです。詩織様のお友達に手をだすわけには。」木下は頭から全否定の構えだ。

それに、ざんねんでした。俺はロリコンじゃないぞ。

「なんで? 詩織は好きにしたらええって言ってたし。なんであかんの?」

「好きにしたらっつて! 君たち一体どんな会話してるんですかつ。」

「うち、知ってんねん。木下さんは、昔から来るもの拒まず入れ食  
い状態で、二股三股当たり前、ええ年していまだに彼女もつかえ  
ひっかえで長続きしたこと無い正真正銘の女たらしやって。」

「ななななっ……。」確かに女性との付き合いは人より多い  
かもしれない。が、詩織の友達に、ここまで言われる筋合いはない  
と思う。話を聞いてたら、まるきり最低の男じゃないか。

「でも仕方ないと思うわ。そんだけイケメンなんやったら、周りが  
黙ってへんのもわかるし。」

「ま、確かに今まで女に不自由したことは無いですね。」

「ムキーっ！なんぼほんまの事が知らんけど、その言い方、なんか  
腹立つ。」

「はあ、すみません。そんなことより、鍵を渡してください。私は  
もうしばらく仕事があるし、君はもう帰ったほうがいい。」

「ごまかす気やね。たった今、うちが一世一代の告白したのに……  
……さ、ちゃんと答えてください。」顎をツンと上げ、胸のこ  
ろで腕を組んで、ガンとしても動かない構えだ。

「答えたじゃないですか。無理です。お子様とは付き合えません。」  
木下は、バカにしたような半笑いで答えた。

「子供違っし。もう立派な大人やで！」華はムキになって叫んだ。

「……どうだか。」これ以上煽るようなことを言うのはやめと

「こうと思う前に、ぼそつと呟いていた。

「それって、うちがどれほど大人か知りたいうってことなの？」華がじっと木下を見つめる。どこか危険な雰囲気だ。

「知りたいような知りたくないような……。」勝手に口から本音が出てしまう。

（俺、今なんか言ったか？頭、おかしくなったのか？）

無言のまま華が近づいてきて、木下の首に腕をからめてきた。

「どんだけ大人が見せたるわ。」そう囁くと、つま先立ちして、唇を押し付けた。

「やや、やめ。つぶわ。」口を開いたとたん、華が木下の下唇を軽く噛んで、舌を入れてきた。振りほどこうにも、しっかりと抱きつかれてしまつて身動きが取れない。

ずいぶん時間が経つてから、やっと華が木下にしがみついていた手を離れた。

かなりのどや顔である。

「こんなキス、子供にはでけへんやる？」

「……おっしゃる通りです。」肩で息をしながら、やっとの思いで答えた。

自分の年齢の半分くらいの小娘に、不本意ながら膝がとろけるよう

な思いをさせられて、木下のプライドはずたずたである。

(すっげむかつく。このガキめ——————！)

「ほんなら、うち今から木下さんの彼女？」期待に目をキラキラさせながら訊いた。

「それは勘弁して下さい。」だいたい、それって犯罪じゃないのか？

「うちの事、嫌いなん？」

「いえいえ、充分可愛いと思います。私にはもったいないくらいの。

「キスもお上手ですし。」

「それやったら、お願い。誰よりも木下さんの事愛してあげるから。まあ、ちよつとばかし、おっさんやけど、その辺は目をつむるし。」

「おっさんで悪かったですね。」

「ふふつ。気にしてるん？……でもすごい好きやで。」

「……………はあく。わかりました。華さん、私とお付き合ひしていただけますか？」腰まで伸ばしてある華のまつすぐな髪をなでて、軽くキスをした。

(俺もそろそろ年貢の納め時か……………)

「はい。喜んで。」今度こそ華は一番の笑顔の木下に向けた。

大阪の伝説的なプレイボーイが永遠の罫に捕らわれた瞬間である。

「こんなこと、社長に知られたら、俺、クビになるかもしれないよ。  
」クスリと笑う。

なぜか、華とのデートを楽しみにしてる自分がいる。

「なったらええやん！うちが、有名モデルになって、木下さんの  
人や二人、ちゃんと食べさせたげるから。まかしといて。」

どこまでもたくましい華ちゃんであった。

## たどり着くまで

ゴロゴロゴロゴロ

妙が荷物を引っ張る音だけが、耳障りなくらい大きく、閑静な住宅街に響いている。

詩織が2階の自室でやきもきしながら待っていたら、妙が足音を忍ばせて戻ってきて、それから二人はすぐに倉田家を飛び出したのだ。

息をひそめて玄関にたどり着いたが、階段の近くにある、いつもは少しかだけ開けられている木下の仕事部屋の扉は、ぴったりと閉ざされたままだったし、誰にも見とがめられることなく脱出に成功した。

普段の妙なら、ゴロゴロと引きずっている小さなカバンを抱えて全速力で走っているはずだが、今は運動ができない詩織の事を考えて出来るだけ抑えた早足で歩いている。

この先のバス通りまで出て、タクシーを捕まえるつもりだ。

「はあはあ。……妙？華はどこなん？」詩織はずつと気になっていたことを、親友に訊いた。もう話をして大丈夫な距離まで逃げたつもり。

真夏の午後の日差しはどこまでもきつく、しばらく家に閉じこもっていた詩織の身体には大きな負担だった。

「木下さんを見はってんねん。」



「木下を？」詩織が目をぱちくりさせる。

華と妙は作戦内容を詩織に前もって伝えることはしなかった。必要以上に動揺されても困ると思ったのだ。

「鍵取り上げるために、詩織に借りたスカーフで木下さんを縛っておとなしくしてもらってんねん。」

「！！！！ツえ！！！！」木下を、し、し、縛った……。全くもって想像つかない。

「クスクスっ。大丈夫やって！そんな顔せんでも。華は木下さんの事、詩織が心配するほど酷い目には合わさんやる。……。多分やけどな。」最後に見た2人の様子を思い出し、ニヤニヤ笑いが止まらない。

「ででも……。」「細身だが、木下はそんなに小柄なほうではないのに。」

「木下さんの事、やっぱりあきらめられへんって、こないだ車で送ってもらった後、珍しく真面目な顔で言うてたし。……。彼氏とも別れたらしいで。そやから今頃木下さんは、案外、華に美味しくいただけれてるん違う？」

「ほんまにイ。」ずっとファンやとは聞いてたけど、そこまで好きやったなんて。知らんかったわ。

「とにかく、詩織が無事に新幹線に乗ったら、うち、華に連絡することになってるから。それまでは、木下さんをあの部屋から出さへんことになってんねん。」

「・・・そうやったん。ごめんな。妙にも、華にも迷惑かけてしもて。」

「何言つてんの！言うとかくけどなあ、あなたの悪いところは、親友のうちらにさえも頼らんとこうとするとこやわ。それだけがあかんとこるや。・・・そこが良いところでもあるけど、時々イラっと来るときもあんなんで。」

「そんなん、うちは妙らにずーっと頼りっぱなしやんか。・・・でも嬉しい。ほんまに、ありがとう。「叱られて、胸の中が熱くなつて、涙がこみ上げる。」

「なんやねん。ちよつ、泣きなや。「わざとぶつきらばうな言い方をするが、昔から妙は人一倍優しく、相手の気持ちに敏感なのだ。「ううん。・・・泣いてへんし。「温かい友情が嬉しくて有難くて、涙が止まらない。歩道の縁が見えなくなって、グイッと袖で目をぬぐった。」

心配性の妙は、新幹線のホームまで見送りに来てくれた。新大阪発の新幹線があと15分ほどで到着する予定だ。

「詩織のお相手つて、桐谷の次男坊やねんなあ。「新幹線の到着を待っているとき、妙が訊いてきた。」

「うん。妙、雅洋さんの事、知ってるん？」

「うちが練習させてもらってるゴルフクラブに時々来てはるわ。ええとこの子で、あんだけ男前やし、目立つからなあ。」

「そうなんや。「確かに、ファッション雑誌に出てくるような綺麗な顔してはったわ。」

「まあ、要するに詩織の趣味じゃないのはようわかるわ。……はつきり断ったらええやん。「めちゃくちやもつたない気がするけどな。」

「うん。……でもなあ、なんやうちだけの問題と違うみたいで会社の事情とか、親の事情とかが絡んでなあ。「深刻すぎて手がつけられずにいる問題は、いつでも詩織の心に重くのしかかっている。」

「お金持ちにはお金持ちの苦労があるんやろっけどなあ、無理だけはしたらあかんで。」

「わかった。ありがとう。華にもよろしゅう言うといいな。あっちに着いたら、すぐメールするし。」

「ほんなら氣イ付けて帰りや。彼氏によろしく。」

詩織は新幹線の窓から、妙の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

今日はもう、トキコの家には戻らず、良太のところへ直行するつもりである。

携帯は電源が切れたままカバンの中にしまつてある。幸い、良太の家の鍵は、彼が風邪で倒れた時に、真琴から渡されたのをそのまま持っている。

これ以上、一分一秒無駄にはしたくない。

一刻も早く、彼の腕の中に飛び込むことしか考えられない。

はやる気持ちを無理やり抑え込んで、新幹線の座席で、詩織は目を閉じたまま、ギョツと両腕で自分を抱きしめた。

良太も、ここ数日眠れない日々を過ごしていた。

毎日毎日欠かされた事の無かった、詩織からのメールや電話がぶつとりと途絶えたからだ。

家族と過ごす時間を邪魔したくないと、極力自分から連絡を取ったりはしなかったが、さすがに心配になり、何度か電話をしたりしてみたが、電源が入っていないのか、つながらないままである。

詩織の実家の電話番号を、良太は知らない。大阪の実家の住所も知らないままで。

もつとも、詩織の叔母に聞けば教えてくれるだろうが、そこまでする勇気も無かった。

（詩織ちゃん、どうしたんだろう・・・。）

ただ単に携帯が壊れたとか、無くしたとか、単純な理由である可能性が高い。

それでも会えない期間が長くなるにつれ、2人で過ごした楽しい頃の思い出が、ただの幻だったような気がしてくる。

たった数日、声が聞けないだけで、どうしてこんなに心細い気持ちになるのか。

まさか、病気になったんじゃないのか？

それとも、俺の事忘れて、やはり実家に戻ることにしたとか？

次から次へとネガティブな考えが浮かんできて、良太は思わず身震いした。

食欲も無くなり、仕事でも何度となくため息をついて、今日は主任にまで注意されてしまった。

（こんな事じゃ駄目だ。もっと気合入れて仕事しないと。）

職場では、最近なんとか、周りの期待以上の結果を出せるようになってきたと自負している。まだまだ至らないところもあるが、自分の足りない部分がわかってきただけでも、大きな進歩だと感じている。

また、以前のようにポカミスを繰り返す駄目社員にだけは、戻りたくない。

ただひたすら、目の前の事に集中するだけだ。

もうしばらく冷静に待ってみて、どうしても連絡取れない状況が続くようなら、詩織の叔母の家を訪ねてそれとなく詩織の様子を聞いてみよう。

そこまで決めてしまうと、少し気持ちが楽になり、良太は目の前の図面に集中することができた。

ふと気がつくと、定時を過ぎて、現場事務所には数名の残業組がちらほら仕事を続けていた。

「山田、お前まだ終わらないのか？」帰り支度を済ませた松永主任が声をかけてきた。

主任は吉井さんと仲直りしたのか、ここ最近すごぶる機嫌が良いのだ。仕事を切り上げるのも、以前より早い気がする。

「あ、俺……。」どうしようかな。どうせ一人の部屋に帰ってもむなしだけだし。もう少しキリの良いところまでやって行くのかな。

「それ、明日でもいいんじゃないのか？オプション販売の見積もり依頼だろ？」

「はい。じゃあ、今やってる水まわりだけ終わらせて帰ります。」

「提出は来週だから、無理するなよ。」

「わかりました。お疲れ様です。」

主任は腕時計をちらっと見て、さっさと帰って行った。

なんだかなー。幸せオーラ出ちゃってるよな、主任……。

結婚、するのかな、吉井さんと。

安達さんの事も、周りが勝手に誤解してたみたいだし。

そんなことをぼんやり考えていたら、事務所のドアが、がたんと開いて、帰ったはずの主任が戻ってきた。

「おい、山田！」

「主任？ 忘れものですか？」名前を呼ばれて、良太は慌てて振り向いた。

「いや、お届けものだ。……お前に。」

そう言って、少し得意げに、ニヤリと笑って、横に身体をずらした。

「は、い、えー………っ!？」

主任の後ろから現れたのは、夢にまで見た、良太の可愛い恋人の姿だった。



## そばに居させて

良太は、はじかれたように立ちあがり、その勢いで倒れた椅子もそのままに、詩織のもとへ駆け寄った。

「どうして？ どうしてここに？」

手を伸ばせば触れることのできる距離。それでも良太は目の前にいる詩織が現実のものだという実感が湧かないでいる。

「今日こっちに帰ってきたんです……。それで……。それで……。それで、あの。」詩織も胸がいっぱいになって、言葉が出ない。

良太のマンションに着いて、そのまま待ってしようかとも思ったが少しでも早く会いたくて、以前教えてもらっていた建築現場まで歩いて行ったのだ。体力的には殆んど限界に近かったが、とにかくじっとしていられなかった。

夕暮れの中、現場の入り口近くのガードレールにもたれて、ぼんやりと彼が仕事を終えて出てくるのを待っていた。

そんな時、早々に帰宅しようとしていた松永主任に見つかって、あつという間に現場事務所まで連れて来られてしまったのだ。

「何で連絡くれなかったの？ ……俺、ずっと心配してて。」最初の衝撃が和らいで、少しずつ良太も平常心を取り戻しつつあった。

「ごめんなさい。……事情があって携帯が使えなかったんです。

「  
やはり良太に心配させていたかと思うと、居た堪れない気持ちになる。」

「そうか。俺、もう終わるから。ちょっと待ってて。」そんな詩織とは逆に、良太はホツとした表情を浮かべた。

机の上を片づけて、いつものリュックを担いで、詩織に興味津々の同僚達に挨拶を済ませると、急いで事務所の出入り口に向かった。

「じゃ、俺はここで。」現場を出てすぐに、まだ少しぎこちない雰囲気の人を残して、主任は帰って行った。

「何時頃こっちに着いたの？」主任の背中を見送りながら、良太は詩織に尋ねた。片手で自転車を押しながら歩いている。

「1時間くらい前……かな。」

「そうなんだ……。でも、荷物は？叔母さんのところに置いたきたのか？」

「あの、ずうずしいと思ったんですけど、荷物は良太さんのところに置かせて貰ったんです……。鍵持ってるから。そのあとすぐに、良太さんの現場に向かったんです。」

「じゃあ、もしかして大阪からすぐにごこへ？」

「はい。」目を伏せた詩織の横顔は少し頬のあたりが赤い。

「……………」嬉しいのと照れくさいのとで、良太も頬のあたりが熱くなる。

「さつきはごめんなさい。お仕事中に。でも、わたし、ほんとは外で待ってるつもりで。」

「俺が最近元気無かったもんで、主任が気をまわしてくれたんだろう。正直言つと、今日はもう仕事は殆んど片付いてたんだよ。……それに俺、すごい嬉しい。まさか今日会えるなんて思ってたから。」

「私も一番最初に会いたかつたんです、良太さんに。」詩織は心からの笑顔を良太に向けた。旅の疲れも、恋人の顔を見たとなん吹っ飛んでしまっている。

「俺も会いたかつた。」自分から手を伸ばして、詩織と手をつないだ。ぐらりと詩織の身体が良太の方に引っ張られて、その瞬間、独特の甘い香りがした。

良太の喉の奥にしつこく塊のようにつかえていた不安な気持ちも跡形も無く消えていく。代わりに胸に湧き上がったのは、息が苦しくなるほどの幸福感だった。

（良かった。本当に良かった。俺が勝手にお門違いの心配を募らせ

てただけだったんだ。」

こうして今、俺の手の中には、彼女の少しヒンヤリとした小さくて柔らかな手。

妄想でも幻想でも想像でもなくて、これは間違いなく、揺るぎない、現実なんだ。

彼女は俺のもので。

俺は彼女のもの。

これからもずっと。

そう信じて良いんだ。

すぐに不安になったりして、余裕のなかった自分が少し恥ずかしかつた。

2人は、手をつないだままで、ポツリポツリとたわいのない話をしながら、良太の部屋にたどり着いた。

「おかえり。詩織ちゃん。」

玄関に入って靴を脱ぐと、まだリュックを肩にかけたままの格好で、良太は詩織を抱きしめた。

「良太さん……。」

詩織も良太の腰に腕をまわして、ギュッと抱きついた。ただ何も考えず、彼の胸に顔をうずめて目を閉じる。

突然大阪での出来事が、一気に頭の中を駆け巡り、詩織はそれを振り払うかのように、両腕にさらに力を込めた。

「……お腹すいた、ね。詩織ちゃん。」詩織の頭をなでながら、良太はようやく身体を離して詩織の顔を覗き込んだ。照れ隠しなのか、いたずらっぽく笑っている。

「ふふつ。そうですね。」潤んだ目で良太を見上げ、ふわりと微笑んだ。

夕飯は、詩織がお土産に柿の葉寿司を買ってきていたので、簡単にお味噌汁だけ作って済ませた。

「ビール、美味しいですか？」缶のまま美味しそうに飲んでいる良太に話しかける。

「うん。俺はあまりお酒強くないけど、こつやって仕事から帰って飲むビールは、美味しいよ。」

詩織が料理している間に、良太はシャワーを浴びていた。

いつもは一人でテレビを見ながら飲んでいるが、今日は隣に可愛い彼女がいる。

あんまりデレデレするのも格好悪いので、テレビを見ている振りをしているが、実のところ番組内容など殆んど頭に入っていない。

「明日もお仕事……ですよね。」

「うん。詩織ちゃんはまだ夏休みで羨ましいよ。」ちらつと隣の彼女を見る。

ソファーに並んで座っているが、もう少しで肩が触れそうな近さだ。

( やっぱり可愛い。……いろんな意味で、俺やばいかも。 )

心なしか今日はビールの酔いが早くまわっているようだ。頭がくらくらする。

「明日は大阪から宅急便で送ってもらった荷物が届くので、叔母のところに戻ろうと思います。」

「そうか。……ごめんね、送って行ってあげれなくて。あ、でも朝早くてもよければ、俺、実家の車借りてきて、現場行く前に叔母さんちに連れてってあげられるけど。」

「ううん。いいんです。一人で帰れますから。……そんなことより、お願いがあります。」

「詩織ちゃんのお願ひ。……何か怖い。」冗談めかして笑ってみる。

「怖くないですよ。でも良太さん多分駄目って言う、かな。」

「なんだろう。言ってごらん。俺、今めちゃくちゃハッピーだから大概の事は良いって言うかも。」

「えっと、明日も来て良いですか？と言うより、夏休みの間、良太さんのところに居てもいいですか？」

「それは……。それって……。」

「今日だけは特別って良太さんが思ってるのもわかってます。でも、ここで、良太さんのご飯作ったり、お掃除や洗濯したり。夏休みもあと一週間足らずですけど。……ほら、ずっと一緒に居られなかったし。」

「でも。どうだろう。やっぱり、それは。」

「足りないんです。全然時間が足りなくて、それで。」簡単には同意しそうでない良太を詩織はさえぎるように言葉を続けた。

「そりゃあ、こっちは仕事があるし、詩織ちゃんは高校生だから、週末しか会えなかったりで、俺だって寂しいよ。でもさ。」

「新学期始まつたら、叔母の家に戻ります。だからせめて夏休みの間だけでも、駄目でしょうか。」

「気持ちだけ有難く貰っておくよ。ホント嬉しい。・・・ただやっぱり、詩織ちゃんを預かっている叔母さんの事を考えたら、そんなこと出来ないよ。」

われながら説得力のないかすれ声しか出てこなかった。

良太の心の中では、理性と欲望が今までにないほど激しいせめぎ合いを続けているが、それでもなんとか自分が正しいと信じる言葉を口にした。本当は詩織にずっとここに居てもらいたい。あたりまえじゃないか。俺だって全然足りないんだ。

でも、彼女は家族から離れているからこそ、軽はずみなことをしてはいけないと思うから。（今日の事はちゃっかり棚に上げているが）

431

突然、詩織が無言のまま立ちあがった。

「し、詩織ちゃん？」

良太は急に不安になった。

まさか、気を悪くして今から帰るとか言い出すのか？

「はい？」良太を見つめる顔には怒りの色は無い。むしろ、どこか静かな決意を秘めた真面目な表情をしている。



「どうしたの？・・・ま、まさか。「帰っちゃったの？」

「帰りませんよ？・・・それより良太さん、シャワーお借りしますね。」

「そそそ、そうだよね。どうぞ、行っておいで。「彼女が怒っているわけじゃないのがわかって、ホッとする。」

「では、失礼しますね。とりあえずシャワー浴びたいんです。・・・良太さんを誘惑する前に。」

「ゆ、ゆ、ゆ、ゆーわくっ?!」「思いがけない詩織の大胆発言にぎよっとする。」

「はい。・・・だから良太さん覚悟しといたほうが良いですよ。わたし、かなり本気やし。」

首をかしげて、クスリと笑う顔が、今まで見たことのないような色っぽいもので、良太の背中に冷たい汗が流れる。

「本気って・・・。」

詩織はソファーに座ったまま固まっている良太に近づいて、覆いかぶさるようにして唇を触れ合わせる。

良太の口の中は、ほんのりビールの苦い味がした。

彼の言いたいことはわかるし、自分を守ろうとしてくれているのもわかる。

それでも、詩織は今回だけは自分のわがままを通じたかった。

何としても、彼の手ごわい”お兄さんスイッチ”をOFFにしてみせる。

なぜなら、自分達の時間はいつまで続くかわからないから。

何事も永遠ではないと思うから。

彼と離れるつもりは無くても、愚かで弱い自分は、結局は親の望むとおりになってしまうかもしれないから。

それ以上に、手術が失敗してしまえば、もう二度と良太には会えないのだ。

一日でも多くそばに居たい。一分一秒でも長く。

温かくて優しい人。

この人といえるだけで、なんだか自分も優しくなれる。ほんわか幸せな気分になる。

なによりも、自分の事を好きでいられる。

だから、そばに居させて。

ソファアの背に良太を押し付けるようにしばらくキスを続けていたが、やがてゆっくりと起きあがった。

満足げな笑みを浮かべて、身体を離す前に茫然としたままの良太の耳元でささやく。

「全力で誘惑しちゃいますから、お利口さんで待ってて下さいね。」

良太がごくりと唾を飲み込む音が聞こえた。

そばに居させて（後書き）

いつの間にか、60話超えてました（@「@・い）

書いてる本人がビックリ！

長いことお付き合いくださって、ありがとうございます。

完結まで、どうかもうしばらく見守ってやってください。

## 明かりを消して

「うわっ！やや、やめっ……。」

「や・め・ま・せ・ん。良太さん？ほら、万歳してくださいってば。ばんざーい！」

「あ、ちよっ、待って！」

シャワーを浴びた詩織は、有無を言わず良太を寢室に引っ張って行った。

そして今、良太は詩織にベットのうえでTシャツを脱がされそうになっている。

身体が大きく、人一倍力の強い良太である。詩織のやろうとしていゝる事を阻止するのは赤子の手をひねるより簡単な事だ。

なのに今の良太は、手も足も、それどころか身体全体に力が入らず、弱弱しく抵抗するばかりである。

理由はただひとつ。詩織の格好である。

アメリカで買ったらしい、セクシーな白いレースのベビードールを着ているのだ。何やら花の模様の刺繍飾りや、小さな水色の細いサテンのリボンが沢山付いていて、まったくもって目の毒以外の何物でもない。

夕飯の食器を洗っているときに、「おまたせしましたっ。」と後ろ

から声をかけられ、振り向いて詩織の姿を見たときは、思わず膝が崩折れそうになり、泡だらけの手でシンクのふちにつかまるはめになった。悩殺とはまさにこのことだと身をもって経験させられた良太である。

そのまま手を引かれ、気付いたらベットの上で向かい合わせに座らされて、詩織に服を脱がされそうになっているのだ。

「え、良太さんてば、もしかして、上を脱ぐのが、恥ずかしいんですか？そやったんですか？」

突然、詩織が手を止め、良太をじっと見つめる。

「は？」

「じゃ、先に下を脱いじやいま・・・」

細い指が良太のジャージの短パンの腰の部分を掴む。

「わわわ、駄目だよ！むしろこっちの方が普通にやばいから。」

慌てて短パンを押さえる。

「もー！良太さん！こないだ病気の時は大人しく脱いでくれたのに・・・パンツはあかんかったけど。」

「あれは、あの時は、約束したもんで、詩織ちゃんが・・・。」

「ま、そうなんですけどね・・・さあ、男の子らしく覚悟を決

めて下さい。」

「はあ。それでは、失礼いたします。」観念して、自らＴシャツを脱ぐ。

ああ、もう。じゃあ、せめて明かりを消して欲しい……。つて俺は乙女か！

「暗くしたら見えへんから、あかんし。」何故か意地悪モードの詩織が即座に却下する。

「でも俺恥ずかしいよ。」って普通、逆じゃね???

「恥ずかしいことなんか無いです。……。だって、素敵やもん。良太さんの身体。ここ、お腹割れてることか、もう全部丸ごとカッコいいんやもん。」上目づかいでそんなことを言いながら、お腹の筋肉を人差し指でなぞるので、良太はもう頭が沸騰寸前である。

「詩織ちゃん、あのさ、ちょっと落ち着こうか。とりあえず。」

良太はそう言って、ベットのうえで正座になった。

詩織も良太に向き合ったまま、それにならう。

こめかみにツツーっと汗が流れてきたので、脱いだＴシャツで、ぐしぐしと顔をぬぐった。

詩織は相変わらず、涼しげな様子で、真面目な表情のままじっと良太を見つめている。

「……無理しなくていいんだよ。焦らなくても。詩織ちゃんが  
そうしたいなら新学期が始まるまでここに居ていいから。その前に  
叔母さんと話して、わかってもらわないと駄目だけど。」

「え？ここに居てもいいんですか？」詩織の顔が嬉しそうに輝く。

「うん。俺だって本当はずっと一緒に居たいし。とにかく俺は、無  
理に急がなくてもいいってこと、理解してほしいんだ。もっとゆっ  
くりで。」かなりのやせがまん。特にこんな姿の彼女を目の前にし  
て、自分でもどうして素直に手を出さないのか不思議である。

「無理とかじゃないっ！それに、ゆっくりは嫌です。」

「詩織ちゃん？」

「それやったら、いつになったら良太さんはちゃんとしてくれるん  
ですか？」

「それは……。」自分でもよくわからない。でも、今すぐ彼女  
を奪っていいのかどうか躊躇する気持ちがまだ心の大半を占めてい  
て。

「いつなんかわからへんねやったら、今がいい。うちは、そんなに  
待たれへん。」詩織はそう言うと、膝立ちになって、良太の首に両  
腕をからませた。

「さーどーぞ、召し上がね。」いたずらっぽく微笑んで、ぎゅっつ  
と自分の胸に良太の顔を押し付けた。

（あーこれ。もう俺、幸せすぎて死んでしまいそうだ。）



良太は詩織の柔らかな胸に顔をうずめたまま、脳内のどこかにある禁断のお花畑に旅立とうとしていた。

若干息が苦しい。

でも、このままでもいい。永遠に。

ていつか、どうしよう。

もう、これ以上彼女の誘惑に抗う力も、理由もわからなくなっている。

良太は覚悟を決めた。

何故か俺なんかを好きでいてくれる、そばに居たいと言ってくれる、ありえないほど可愛い人。

俺は、これから何があっても一生大事にする。

だから。

良太は一旦ベットから離れて、部屋の明かりを消した。

すぐに戻ってきて、きよとんとしている詩織を寝かせると、自分も隣に寝そべった。相変わらず手が震えるほど緊張しているが、やるべきことをやるのみという使命感でいっばいである。

「詩織ちゃん、痛かったり、嫌だったりしたら言っしてほしい。すぐにやめるから。」詩織の頬をそつとなでる。暗くても、彼女の表情はよくわかる。彼女も緊張しているのが伝わってきて、逆に良太は冷静になる。

今までの予習(?)の成果を今日こそ発揮させてもらおう！ 勉強よりもスポーツが得意な俺。 なんとかなるだろう。・・・多分。

「嫌や。やめんといて。」

「好きだよ。詩織ちゃん。」なんか、これ脱がすの大変そうだな。詩織の身につけているものが余りにも繊細な作りなので、良太は脱がすのに手間取っている。

「わたしも、良太さんの事が大好き。」詩織はそれを楽しそうに見ているだけで手伝おうとはしない。

やっと2人が産まれたままの姿になった時には、詩織はクスクス笑いが止まらず、良太はさらに汗だくになっていた。

「詩織ちゃん、笑いすぎ。」華奢な身体をそつと抱きしめる。

「だって、良太さん、可愛過ぎ。」詩織は良太の腕の中で、まるで夢を見ているような幸せな気持ちでいっばいだった。

クスクス笑いがおさまると、どちらからともなくキスが始まる。

良太は詩織の身体の隅々をいとおしむように、ゆっくりと確かめるように優しく撫でて、キスしていった。

ようやく、2人がひとつになった時は、詩織はとうとう心臓が壊れたかと思えるほど感動で震えた。

痛くないと言えば嘘になる。

正直なところ、想像していたよりも引き攣れたような痛みがひどくて、でもそれは嬉しい痛みで、詩織はもっと痛くてもイイと思った。

もっと痛くしてほしい。

忘れないように。

この痛みとともに、生きて行きたいほど愛おしい。

自分の中に、彼がいる。

泣きたくなるほど、神聖な気持ちになる。

「……詩織ちゃん？大丈夫、か？」良太が心配そうに顔を見つめている。

「大丈夫じゃないです。幸せすぎて、死んじやいそうです。」クスンと鼻をすすって、微笑んだ。

「俺も……幸せ。……ゴメン、ゆっくりするから。」

「ううん。ゆっくりじゃなくても良いです。気持ち良くなってくれたらそれで。」

「今でもめっちゃ気持ちいい。ほんとゴメン。」

なんだか謝ってばかりの良太は、結局最後まで謝ってばかりだった。

終わった後、次は明かりをつけてさっきと同じ事をしてくれと言われて、良太は彼の恋人は、かなりの不思議ちゃんであることを、再発見したのだった。

明かりを消して（後書き）

更新遅くなって申し訳ありませんでした。

新作の方が、なんか簡単に進んでて・・・。

完結まで頑張りますので、応援よろしくお願いいたします。

## ばかつぶる

「おい山田、なんだそれ？」

どきッ！

弁当のふたを開けた時、ちょっとびっくりしたが、それと同時に早朝からエプロン姿の詩織がキッチンで奮闘していたことを思い出す。

こみあげるにやけ笑いを押し殺しつつ、心の中で彼女に「いただきます〜（詩織ちゃん、愛してるよ！）」と叫んだ瞬間、先輩社員の口置に声をかけられた。

まずい。絶対いじられる。

「何すか？……ただの弁当っすけど。」ふたをするのも、大人げないので、あくまでも平静を装うことにする。

「だ〜か〜ら〜。そのでっかいハートはなんだって聞いてるんだよっ。……はっ！その赤いのは、もしかしてたこさんウィンナーか？」

「はあ。」確かに。

そして、たこの隣には、蟹さんウィンナーもいる。甘い卵焼き、牛肉とカラーピーマンの炒め物、ほうれん草のおひたしと、海老フライ……。大食漢の良太でも、食べきれないほどである。別の入れ物には、凍らせた小さめのレアチーズケーキとフルーツの入ったデザートまで用意されている。

ご飯の上には、海苔とさくらデンプと鳥そぼろで3重のハートが可愛く描かれてあって、食べるのがもったいないくらいだ。

「お前、それ……って、例の彼女が作ったのか？ ったく、お前はっかり、まじありえねーしっ！」 先日詩織が松永主任に連れられて、現場事務所を訪れた時、まだ日置も居残っていたのだ。

”真琴の洗礼”を受けた後は、日置はずいぶん大人しくなっていたが、詩織の姿を見てからというもの、何かとやっかみ半分からんでくるが多くなってきた。

「そんな、違いますよ。えーっと、は、は……母親っすけど。」

夏休みの残りの短い間とはいえ、高校生の詩織ちゃんが俺と暮らしてるのを、社内のみんなに知られるのはやはり良くないだろう。明らかに不自然だが、しらを切りとおすしかない。

「なわけねーだろーがっ！ じゃ何か？ おめーのおふくろさんは、社会人の息子にたこさんウィンナー焼いて、ほんでもってピンクのハートのっ。」

「おい日置。」 自分の席で同じく弁当を食べていた主任が割り込んできた。詩織の”彼氏に初めて作る、めいっぱい頑張りました”弁当ではないが、明らかに誰かさんが作った愛情たっぷりのお弁当である。

良太と違って、主任本人は、大いに”彼女”の事をのろけたいのに、普段は仕事に厳しく、近寄りがたい雰囲気だからか、誰も突っ込ん

でくれないので、ちょっと寂しい今日この頃である。

「主任？」良太の弁当を覗き込んでいた日置が主任のほうに顔を向けた。

「お前も作って貰えばいいじゃないか。ほら営業の、やけに元気なネエちゃん。・・・あれ、名前なんだっけか。」

「なななな、何言ってるんすかつ。」日置の目が泳ぎだす。

「こないだの会社の飲み会の後で・・・エライ盛り上がったそうだな。そう、確か、岡本さん・・・だっけか。」

「わわわわつ。主任、どこからそんな話・・・。意味わからないっすよ！」慌てて誤魔化そうとするが、もう遅い。現場事務所にいる全員の耳にはばつちり入ってしまったている。

誰も口には出さないが、「あー、喰われちゃったんだ。」みたいな微妙な空気が流れる。

「違ったか？おかしいなあ、わりと信頼出来る筋からの情報なんだが。」

「っつ。」急に無口になった日置は、良太をいじるのをやめて大人しく自分の席に戻って行った。

良太は、初めての彼女が作ったお弁当をありがたく完食したあと、すぐに美味しかったよと詩織にごちそうさまメールをする。

すぐに返信があった。沢山のハートと一緒に、お仕事頑張ってねと



いうメッセージ。

デレデレの顔を見られないように、両手で顔を覆う。多分真っ赤になっているだろうから。

今日も早く帰れるようにと、昼食後はすぐに書類と向き合った。

現場では、小さなミスひとつでも、それを修復するのに、驚くほどの労力、費用、時間がかかってしまう。だから良太はどんなに些細なことでも、うやむやにせず、記録を残して間違いのないように確認しながら作業を進めるように気を使っている。おかげで最近はその慎重な仕事ぶりを監督からも褒められるようになってきた。現場に派遣された当時と比べれば驚くほどの成長ぶりだ。

定時で上がると、どこにも寄り道せずに急いでマンションに戻る。

リュックを肩に引つ掛けて、階段を駆け上がると、玄関の前で、マンションの大家さんと話しこんでいる詩織が見えた。

まずい……。本日二度目のピンチだ。良太のテンションが一気に下がる。

このマンションの大家は、おせっかい気味のオバサマで、一階に独りで住んでいる。

親切なので、困った時には有難いのだが、大変残念なことに、やけに住人の生活に興味を持っており、その上、やたらとセクハラ発言が多いのだ。

今までは、あんまり気にしてなかったけど……。

なんか嫌な予感がする。

「あ、おかえりなさい。」詩織が良太に気づいてにっこりしてきた。

「ただいま……。」おかえりとか言っちゃったら、まるで一緒に住んでるみたいじゃないか。(住んでるけど) 大家のオバサンに誤魔化しとかないと、と内心焦りだす。

「山田さん？」大家のオバサンもさつと良太の方を振り返った。

「えーっと、彼女は俺の親戚で、夏休みの間、大阪からこっち遊びに来てまして。」かなり苦しい言い訳だが、女子高生と一緒に住んでると思われるわけにはいかないので、適当にごまかすことにする。

「何言ってるのよう。もうすっかり聞いてちゃったわよ。いーのよいーの。付き合ってるんでしょ？あなたたちッ！」

「え？」

「良太さん……。ごめんなさい。彼女だって言っちゃいました。詩織が言いにくそうに説明する。」

夕飯の買いものから戻ってきて、玄関の戸を開けようとしたときに、声をかけられて、強引に根ほり葉ほり聞かれてしまったのだ。

「そそ、そうなんだ……。」「ばれちゃったら仕方ないし。うん。」

ここは独身寮でも無いし、別に気にしないことにすればいいや。

「せっかくイイ男なのに、誰ともお付き合いされてないみたいだったから、そっちの方はどーなんだろうつてちょっと心配してたのよ。良かったじゃないっ！こんなに可愛い彼女が来て〜。」

「はあ。」出た。始まったよセクハラ発言。

そっちの方ってなんだ？ほつといて欲しいんですけど。

「でもねー。まさか、女子高生アンアン言わせてるなんてね〜。見かけによらず、やるじゃないよ、山田さんてば。」

「なっ……。」

エンジンかかり過ぎの大家さん、アンタかなり楽しそうですが、マンションの外廊下とする会話じゃないでしょうが。

良太は、この迷惑な大家を即刻追い返す方法を考え始めた。

「失礼ですけど、アンアンなんて、言ってますん！」詩織がむつとした顔で反論した。

「「は？」」

「断じて言わされてませんからっ。」珍しく怒っているのか、買い物袋を揺さぶっている。

「あらあら、お嬢さん、ごめんなさいね〜。……そうだったの。今時ちよっと信じがたいけど、清い交際だったのねえ。私ったら、

すっかり勘違いしちゃって。山田さんは見かけによらず、紳士でいらっしやっただのねえ。おほほほほほほ〜。」

おしとやかな詩織が急に大きな声を出したので、さすがの大家も腰が引け気味になっている。

「はあ。では、失礼します。」良太は、やっとこの場面から解放されると思い、あいまいに大家に頭を下げると、玄関扉を開けた。

「詩織ちゃん？」詩織を振り返ると、まだモノ言いたげに大家のオバサンをじっと見ている。

「それから、一応お伝えしておきますけど、アンアン言ってるのは、良太さんのほうで。うぐっ。」

「わーーーーーッ!!!」啞然とした顔の大家を外廊下に残したまま、良太は詩織の口を片手でふさぐと、もう一方の手で抱きかかえるようにして部屋に引き入れた。

靴を脱いで部屋の奥に入る。もう、恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

「詩織ちゃんっ!」「このお嬢さんは、何を言い出すかと思えばっ。まったくもーーーーー!」

「なんですか？」詩織は冷蔵庫に買ってきたものを素早く納めると、良太の方にやってきた。

相変わらず、汗一つかいていない涼しげな様子である。

「なんですか？じゃないよっ。駄目だよ、あんなこと言っちゃ。恥ずかしいじゃないかッ！」

「……だつて、あのオバサマ、良太さんの事を素敵だ素敵だつて言うんだもん。」もしかして、良太さんの事狙ってるのかなつて。

「なっ。そんなの冗談に決まってるじゃん。あの人、すっごい暇持て余してっからさ、気をつけた方がいいよ。今度からは、まともに相手せずに、適当に流しときゃいいから。」

「……わかりました。ごめんなさい。」決して良太に恥ずかしい思いをさせるつもりじゃなかったのか？、とりあえず反省の態度をとる。

「俺も、怒鳴ってゴメン。」良太も、詩織がしゅんとした顔になったので、すぐに謝った。

「……ふふっ。」それなのに、へこんでるはずの詩織がクスクス笑いを始める。

「なに笑ってるの？」

「だつてっ！あの時の大家さんの顔……。ふふふっ。めっちゃビックリしてはったからっ。」

「詩織ちゃん……。大人をからかったらいけないんだよ。俺、これからどんな顔して……。」良太はため息をついた。

大家の驚いた顔が、ツボにはまったのか、詩織はまだ笑っている。

「俺、シャワー浴びてくる。」良太はとりあえず汗を流してさっぱりして、落ち着こうと思った。

「あの、背中流してあげましょうか？」

「え？」クローゼットから着替えをとりだす背中がピクリと緊張する。

「アンアン言わせて下さい。」

「なっ。」

一瞬で良太の顔が、また真っ赤に染まったが、それでも詩織が相変わらずクスクス笑っていたので、

「ったく、この人は……大人をからかわないでって今言ったところなのに……。」

いい加減、彼女の冗談に慣れるよ、俺！

一瞬本気にしちゃったじゃないか。

ぶつぶつ言いながら、笑い上戸の恋人を残して、独りで脱衣場に向かった。

「失礼しまーす。」シャワーを浴びてるところに、突然ガチャリと浴室の扉が開いて、タオルを巻いた詩織が入ってきたので、今度こそ良太はひっくり返りそうになった。

「ひっ。し、詩織ちゃんっ！」慌て過ぎて、もつどこを隠していいかも良くわからない。

「はい？」

「何してるのっ。」慌てて床に転がっていた洗面器を握りしめる。

「……からかったわけじゃないんだもん。」そう言うと、持参のフランス製のポディーソープをピンクのスポンジにたらし、泡立てる。浴室に甘い香りが一気に広がる。

「そそそ、そうみたいだね……。」ほんつとに、わかりにくいんだから……この人の冗談と本気は。

俺、毎度こんなじゃ神経持ちそうにないし。

「わたしはいつでも本気なんです。」はい、背中こっちに向けてくださいな。

「詩織ちゃん……。」バラの甘い香りにむせかえりそうになりながら大人しく詩織に背中を向ける。

泡だらけの小さな手のひらと柔らかいスポンジの感触。

良太は思わず目を閉じた。

さて、アンアン言ったのは、どっちでしょうか。

今回ばかりは、良太も頑張ったんじゃないか。

作者はそんな気がします。はい。



## お赤飯

「だからさ、先にこっちだけ計算してから、この公式にあてはめるんじゃない。」

「なるほど。なんとなくわかってきたかも。」

「これができたら、次の問題も簡単に解けるよ。」

仕事に出かける良太を見送って、家事を済ませた後、まだしぶとく残っている数学の宿題に取り掛かっていると、真琴が訪ねてきた。

真琴の説明は、学校で教わるよりも丁寧でわかりやすかったので、詩織は、これからも勉強を教えて欲しいと頼んでみることにした。

「なんで？兄貴に頼めば良いじゃん。」

真琴に正式に家庭教師になってほしいと伝えると、そんな返事が帰ってきた。

「良太さんに？」

「うん。アイツは顔に似合わず、アタシより勉強出来るんだよ。詩織ちゃんにだったら喜んで勉強おしえてくれるんじゃない？・・・それにさ、堂々と2人の時間を増やせるじゃん。」

「そうだったんですか。」勿論2人の時間が増えることに異論はない。

「アタシも受験のときとかには、しょっちゅう兄貴に勉強教わってたんだよ。だから何となく、兄貴は将来は教師になるのかなって思ってたんだけどさ。」

確かに彼は、底抜けに優しいし、真面目だし、面倒見が良いし、考えてみれば、教師に向いていると詩織は思った。

あんな先生がいたら、毎日学校行くのが楽しいだろうな。

あばたまえくぼ、夢喰う虫も好き好き……。

誰が何と言おうと、とにかく詩織にとっては、良太は誰よりも素敵なヒーローなのだ。

詩織が幸せな妄想に浸っていると、真琴が珍しいものでも見るような目をして言った。

「あの……さ。詩織ちゃんって、どうなんだろう。昔っから、あーというのが好きなわけ？」

「へ？なにがですか？」

「だって、兄貴の事を素敵だなんて、今までそんな女の子ひとりも現れなかったし。まあ、うちのボーカルの曜子ちゃんもかなりの天然変わり種だから、今の旦那がいなければ、うちの兄貴を好きになつてたかもっていつか言ってたけど。でもやっぱり、ちょっと変わった趣味だよな。」

「曜子さんって、鞠子さんの娘さんですよ？」

「そうそう。すごい美人だよ。確かクォーターなんだけど。背はあんまり高くないけど、すごいスタイルも良くて、街を歩いてたら男どもがみんな振り返るくらいなんだ。」まあ、番犬というか狂犬というか、いつもべたべたと旦那がくっついてるから、誰も手を出せないんだけどさ。

「そうなんですか。・・・狂犬が。」詩織が曜子の旦那さんは一体どんな人だろうと想像し始めた時、真琴が伸びをして、宿題を済ませたらお昼は外に食べに行こうかと言った。

ふたりで散歩がてら遠出して、美味しい中華屋さんでお昼を食べて新しくOPENした雑貨屋さんを覗いたり、カフェで休憩したりした。

夕飯の買い物をして家に帰れば、そろそろ良太の帰ってくる時間が近づいていた。

良太のマンションに戻るとすぐに、洗濯ものを取り込んで、夕飯の支度をする。

「アイツ、超お嬢様の詩織ちゃんにパンツ洗わせてんのか。」真琴が眉間にしわを寄せるが、詩織は良太さんの身の回りの事をするのが夢だったからと嬉しそうに笑った。

真琴と二人で、コロツケを作って、あとは揚げるだけの状態にしてから、サラダとお味噌汁が出来たころに、ちょうど良太が帰宅した。

「おかえりなさい」

「ただいま。んん？なんだこの靴……ま、真琴？」あからさまにぎよつとした顔をする。

「何だよその顔。可愛い妹がわざわざ来てやったのに、もっと嬉しそうに顔しろよ。」

「うっ。てか、なんでここに居るんだよ？詩織ちゃんも、真琴が来てるんなら教えてくれてもいいのに。俺が、お昼のごちそうさまメールした時とかにさ。」

「ごめんなさい。あの。」

「アタシが言わなくて良いって言ったんだよ。抜き打ちの方がおもしろーじゃん。」

「おもしろーって……。俺を何だと思ってるんだよ。」

「まーまー、そう言うなって。夕飯食べたらずぐ帰るからさ。」

「え……。お前、夕飯喰っていくのか？」

「ああ”？！おめ、今一瞬嫌そうな顔したな？もしかして幸せボケか？なかなかイイ根性してるじゃねーか。」

真琴のこめかみにピクリと青筋が……。

「ち、ちがつ。」

「良太さんっ！お風呂できてますから、先に汗流して下さい。真琴さん、コロッケ揚げちゃいませうか。」

いち早く恋人の生命の危機を察知した詩織が間に入ってくれたおかげで、良太は真琴の愛の鉄拳を受けずに済んだ。

「……では、かんぱーい。」「……良太と真琴はビールを、詩織はお茶で乾杯をした。

揚げたてのコロッケとサラダとお味噌汁、そして、テーブルの真ん中には、折詰に入ったお赤飯が置いてある。

（ん？なんで赤飯？）

近所でお祝い事でもあったのかな？

詩織が茶碗に赤飯をよそって渡してくれたので、一口食べてみる。

うん、これ絶対うちの母親が作ったお赤飯だ。

「おい真琴、何で赤飯？」

「さあな。」「真琴はそう言って、詩織をちらっと横目で見た。

詩織を見ると、真っ赤になってうつむいている。

「詩織ちゃん？」

「わ、私は何も言ってますんからっ。」

「へ？」

「母さんが、”おめでとう！とうとうあんたも一人前になったのね、母さん嬉しい！”だってさ。」

「んぐつ。」コロッケをのどに詰まらせそうになる。

なんかちよつと恥ずかしい気もするが、まあ、微妙に嬉しいかな。でも見て見ぬふりしてほしかったな、やっぱり。

「あの、コロッケどうですか？まだいっぱいあるんで、言っておさいなね。」

「ありがとう。すごく美味しいよ。」

でもまあいいか。こんなに幸せなんだし。良太は最近小さいことはどうでもよくなっている。

なんでもいいや。詩織ちゃんさえ傍に居てくれたらそれで。

「ふーん。2人はこんな感じなんだ。兄貴、こんな幸せで大丈夫か？ちゃんと仕事行ってるか？」

「仕事はちゃんと頑張ってるから。」

「そうだな。頑張ってる稼がないと、詩織ちゃんはそのじょそこのお嬢様とは格が違うんだから、嫁に来てもらえないぞ。」

「ななつ。真琴、お前は何を急に言い出すんだ！」

もー、プロポーズはちゃんと計画立てて、最高の場面で言いたいの。真琴の奴！

「は？じゃ、兄貴は詩織ちゃんをどうするつもりで、あんなことやこんなことしちゃったわけ？」

「ああああ、あんなことってっ。ななな何でお前が知ってるんだよ？」持ってた箸がポロリと手から落ちた。

「うるせ、このどスケベ。動揺しすぎなんだよ。そうやってすぐに引つかかるから、どこに行っても、いじられキャラにされんだよ。」

「詩織ちゃん、ごめんね。真琴の言うことは聞かなくていいから。」

「でも……。それじゃ良太さんは、私との結婚とかは考えてないんですか？」詩織は、箸をテーブルに置き、手を膝に揃えて、真剣な顔で良太を見つめている。

「詩織ちゃんまで。一体どうしちゃったんだよ。考えてるに決まってるじゃないか。でも……。」

（真琴の前で、晩ご飯食べながらプロポーズなんて嫌だなあ。俺の乙女心が許さない。はあ、どうしてこんな話題になったんだろう。）

「でも」、なんですか？まさか、あんなことまでしといて、今さら他の人に心変わりとかっ。」

「さっきからさあ、2人とも、あんなことって、何だよ？」

「んー。いっぱいあるけど、例えばほら、昨日お風呂場で。んぐっ。」

「わーーーーーっ！！！！」良太は慌てて詩織の口を手で覆った。

何か俺、毎日こんなことしてるような気がするんですが。

この人の爆弾発言は心臓に悪すぎるので全力で阻止。

小さな指で、手の甲をぎゅっつとつねられて、慌てて離れた。結構痛い。

「も、良太さん、苦しいです。」

「ゴメン。でも、真琴に一生いじられるから絶対駄目だよ。変なこと言ったら。」

「私、良太さんが困るようなこと絶対に言いませんから。」

「…そうだといいな。」はははと力無く笑う。

「えっですね。あの時は、なんだかすっごく気持ち良くなっちゃって、それで気が付いたらお布団に寝かされてたってお話ただけですよ。」

「兄貴の事めちやくちや褒めてたよ、詩織ちゃんは。」フォローのつもりか、真琴もすかさず口をはさんでくる。



フォローになってないし。

妹に聞かれたくないし、そんな話。

「ね、大丈夫でしょ？」なぜか、どや顔の詩織である。

いや、全然大丈夫じゃなかったし。

小さなテーブルには、嬉しそうな詩織と、ニヤニヤと黒過ぎる笑顔の真琴と、恥ずかしすぎて無表情になってしまった良太。

「さすが兄貴。恐るべき身体能力。」さらに真琴がボソリと追い打ちをかける。

だから、フォローになってないって！

はあ。でも、まあいいか。

ちよっとずれてる彼女も、それはそれで可愛いし。

真琴にいじられるくらい、我慢するとしよう。

詩織ちゃんが傍に居るなら、なんでもいいや。

結局無理やりプロポーズの言葉を言わされることも無く、良太は詩織の手料理と母の作ったお赤飯を有難く味わうことが出来た。

なんてことない幸せな日常。

それがいかに尊く、そして脆いものだったか、後々2人は嫌というほど思い知ることになるのだった。

## お赤飯（後書き）

いつもありがとうございます。

また来年、更新頑張りますので、引き続き温かく見守ってやってください。

皆さま、どうぞ良いお年を！

## 優しい彼

「良太さん、ぎゅっとして。もっと、いっぱいぎゅっとして。」

肩に置かれた詩織の指に力がこもって、爪がちくつと刺さる。

普段の清楚なお嬢様の顔でも無く、小悪魔キャラの時のお茶目な顔でも無い。

こんな時の詩織は、まさに女の顔をしていて、良太はいまだに不思議な、そして同時に敬虔な気持ちになる。

俺しか知らない、彼女の姿。

俺だけに見せる、彼女のすべて。

少しだけ動きを激しくすると、ベットがギシギシ軋む音がした。

「ん、詩織ちゃん、大好きだよ。」

彼女が良くなるまでとなんとか我慢してたけど、良太もそろそろ限界だった。

何度か大きく身体を震わせると、良太は詩織の肩に顔をうずめたまま、しばらく息が整うまでじっとしていた。

愛し合った後、静まり返った部屋の中で、お互いの鼓動だけを感じている。

「ゴメン、重かったね。」良太が詩織の上から離れようとすると、詩織はまだ行かないでと言った。

もう少しだけこのままできて欲しいと。

体重をかけないように気遣ってくれていても、身体の大きな良太が覆いかぶさっていたら、確かに重い。その上、普段はすることのない体勢なので、股関節がちよつと痛い。

それでも、良太の温もりと重さだけが、一時でも詩織の心配ごとや悩みを忘れさせてくれるから。

最近、手術や、実家の事を考え出すとあまり眠れない。

人知れず、孤独なベッドの中でぶるぶる震えて泣いている。

だからこうして、2人のときは、できるだけ長く良太の存在をじかに感じていたいのだ。

良太が詩織のおでこにそつとキスをした。生え際にも。こめかみにも。

良太はいつでも詩織を壊れもののように扱う。

甘やかされ過ぎだと、華や妙に笑われるほど。

詩織は、そんな優しい彼の事が愛しくてたまらない。

これからもずっと一緒に、傍に居たいと強く願う。

彼の幸せを強く願う。

親不孝なことをしでかそうとしている自分が、はたして彼にふさわしい人間かどうかは、できるだけ頭の隅に追いやることにする。

いつか罰が当たるとしたら、それは私にだけにしてくださいね。

初詣のときに、何度も神様に念押ししたから大丈夫。

きつと、大丈夫。

「ホントに重くない？平気？」 そのままの格好で、うとうとして  
いると、良太がまた聞いてきた。

「うーん……。平気です。……。良太さん？」

「なに？」

「気持ち良かった？」

「はい、おかげさまで。」

「ふふつ。私もこのまま眠っちゃいたいくらい気持ち良かったです。」

詩織は微笑んで、それからおやすみなさいと目を閉じた。

「……駄目だよ、詩織ちゃん、何か着ないと風邪引くよ。」良太はあわてて身体を起こして、ベッドの脇に落ちていた詩織のパジャマを拾った。

2人寝るには少し小さいベッドの中で、あっという間に眠りに落ちた詩織は静かな寝息を立てている。

「無理させちゃったかな……。」

良太は眠ったままの詩織にパジャマを着せてやる。

詩織はむにゃむにゃと呟いて、ころんと良太の腕の中におさまった。

あどけない寝顔をじっと見つめる。

詩織の身体があまり丈夫でないことは、最初から何となくわかっている。

それでも詩織は、もうすっかり元気になったと言うし、叔母であるトキコにさりげなく聞いても何も教えてくれない。

今のところ、良太としては、せめて詩織が無理しないように、疲れ過ぎないようにと気を配ることしかできないでいる。

詩織の体調を気にする良太が、時に”そういうこと”をするのを控えようとしても、詩織は”なんであかんの？”と言って、さっさと良太のＴシャツを脱がせてしまう。

誰だって、あの可愛い誘惑には抵抗できないだろう。

少なくとも、良太には無理である。

良太はそつと溜息をつく。

時がたつのは早いものだ。

2人で過ごした夏の終わりは一瞬の夢のよう。

2学期が始まると、約束通り詩織は叔母の家に戻った。

そして今、新しい年が明けて、季節はもう冬本番である。

ふとカーテンを開けたままの窓ガラスを見ると、びっしりと結露でおおわれていた。

良太は詩織を起こさないようにベットから抜け出し、素早くＴシャツとジャージを身につけると、古いタオルで窓を拭いて、静かにカーテンを閉めた。

自分ひとりなら暖房にそれほど気を使わなかっただろうが、ほぼ週末ごとに泊まりに来る詩織のために、良太はオイルヒーターと加湿器を買った。

エアコンの暖房よりも、その方がずっと快適だし、身体にもやさし



いと新聞で読んで、その日のうちに電器店に買いに行ったのだ。

詩織は冬休みの間、一度も大阪の実家に戻らなかった。

意外なことに、年末年始もずっとこっちにいた。

その代り、冬休みの前半は、大阪から詩織の友達が遊びに来ていた。華も妙も、真琴に会うのが主な目的だったのか、詩織も入れて4人で散々遊びまわっていたようだ。

良太のほうは、年末は仕事が忙しく、土日関係なく働いていたので、詩織に寂しい思いをさせなくて済んでほっとした。

詩織たちは高校三年の冬休みなので、受験で遊ぶどころじゃないのではと思ったが、華はそのままエスカレーター式に系列の短大に進学することになっていて、妙の方はゴルフに専念することになっているらしい。

詩織の進路については、本人に何度か聞いてみたが、”まだちゃんと決まってない”と、これもまたあいまいな返事しか貰えず、良太はいまだに詩織がどうしたいのかわからない。

時々頼まれて、勉強を教えたりもするが、本気で進学するつもりには見えないし。

卒業後の話になると、それまでどんなに楽しそうにしているても、詩

織は急に寂しそうな、どこか後ろめたいような表情になる。そして2人の間に気づまりな空気が流れる。

はつきりしない詩織の態度に、まさか大阪に戻ってしまうのではないかと不安になったりもする。

その考えは、良太を芯から縮みあがらせる。

良太も直接詩織に確認すればいいのだが、怖くて聞けないのだ。

そんな大事なことを確かめることが出来ないまま鬱々としている。

とにかく詩織の居ない生活なんて、今の良太には耐えられそうに無いのは確かだ。

生きてる意味すら分からなくなってしまいそうだ。

良太はどんどんと負の方向へ行きそうになる思考を、頭を振って無理矢理に中断した。

目を閉じて、気持ちを切り替え、代わりに初詣の時の詩織の着物姿を思い出すことに成功する。

元旦の朝、良太の実家まで、トキコの夫に車で連れてきてもらった振袖姿の詩織は、まばゆいほどの美しさだった。

良太の母は、感激のあまり、朝っぱらから仲の良いご近所の方々を

呼びに走り出してしまったくらいだ。

着物に詳しいわけではないが、詩織の着物や帯は、明らかに芸術作品レベルの豪華なもので。

いつもはジーンズにフリース、その上にダウンジャケットを羽織る程度で初詣に行っていた山田家の面々だが、さすがに今年は空気を読んで、それぞれ持っている服で一番かしまった服装に着替えた。

それから近所の神社まで、そろそろと5人で歩いた。

顔見知りやかつての同級生たちと会うたびに、詩織の事を彼女だと紹介するのが少し照れくさくもあり、嬉しくもあった。

(あのとときの詩織ちゃん、本当に綺麗だったなあ……)

お参りの後、ずいぶんと長い間、神様にお祈りしていたが、いったい何をそんなにお願したのかと、良太は後で聞いてみたけど、詩織は目をふせて”それは秘密やから。”と首を横に振った。

「俺は、家族みんなの一年の健康と、それからずっと詩織ちゃんと仲良しでいられるようにとお願いしたよ。」良太がそう告げると、詩織は嬉しそうな顔をして、何度もうなづきながら、”私も同じです。”と答えた。

そのあとは、みんなでおみくじを引いたり、出店で甘酒を買って飲んだりした。

家に戻ってからは、母が作った山田家のおせち料理を食べて、人生ゲームをしたり、トランプで遊んだりした。

良太の父は、詩織のお酌に飲み過ぎたのか、酔っ払ってしまい早々にリタイヤした。

午後になると、良太の母に手伝ってもらって着物を脱がせて貰い、洋服に着替えた詩織は、そのまま良太の実家に泊まっていった。詩織はすっかり良太の母に懐いて、良太が嫉妬してしまうほど、2人はべったりくっついていた。

「あんたそろそろ詩織ちゃんのご両親にご挨拶に伺った方がいいんじゃない？」その夜、詩織が客間に引き取ったあと、真面目な顔で母に言われて、確かにそうだと思った。

俺の存在は、木下さんを通じて詩織の両親に知られているのだろうか。

それならば、大事な一人娘の彼氏の事を一体どう思っているのだろうか。

何の連絡が無いところから判断すると、もしかしたら木下さんの判断で、しばらく様子を見ることにしたのだろうか。

どちらにしろ、詩織の高校卒業までには先方に挨拶に行くべきだろう。

正直なところ、少しばかり怖気づいてはいる。

お正月の詩織の着物だけでも、良太が今、建設に携わっている新築マンションのペン트ハウスくらいは、軽く買えそうだった。

めちゃくちゃ敷居高そうだし。

俺、緊張しまくって、へんなこと口走りそうだし。

それに、ほぼ確実に、交際を反対されそう。

結婚とか口走ったとたん、最悪の場合、大阪湾に浮かぶことになったりして。

それでも、彼女の事をちゃんと考えるなら、避けては通れない。

ああ、俺もそろそろ寝よう。

あれこれ考えているうちに、睡魔が襲ってきた。

詩織の肩を、毛布でしっかりとくるんでから、その小さな身体を腕に抱いたまま、良太は眠りについた。

優しい彼（後書き）

今年もどうぞよろしくお願いします。  
（＾・＾）

## 夢から醒めて

彼女に出会ったところは、まさか自分が恋人になれるなんて想像すらしなかった。

それ以前に自分に彼女が出来ることすらほぼ諦めてたし。

それなのに、今は彼女の存在無しには自分の立ち位置すら分からな  
い。

一緒にいるのが当たり前の感覚。

いつの間にか、2人単位で物事を考えるのが普通になっていること  
に気づく。

そんなある日、良太は社長室に呼ばれた。

大企業とまでは言わないが、良太の勤める会社でも、ただの一新入  
社員が、社長に直接会う機会など殆んど無い。

だから総務から電話を受け取った時、良太は人違いではないかとい  
度も確認したくらいだ。

先輩社員に訊いてみたが、皆一様に”ありえない”という顔をした。  
逆に、良太が何かしでかしたのだろうとからかわれた。考えてみた  
が、そんな心当たりなど無い。ただ毎日ひたすら真面目に仕事に取  
り組んでいるだけなのに。

緊張と不安を抱えたまま、良太は社長室の扉を開けた。

今日は一張羅のスーツを着こんでいる。

「失礼します。」

初めて訪れた社長室。

「ああ、来たか。山田君。」

黒い革張りのソファから立ちあがったのは、入社式でしか見たことのない社長本人。

そして部屋の中にはもう一人、着物姿の女性がいた。

鶯色の着物に錦糸を織り込んだ黒い帯。

黒目がちの綺麗な瞳がじつとこちらを見ている。

良太はその顔を見て、声を上げそうになった。

なぜなら、自分の恋人に余りにも似ていたから。

「山田君、こちら、倉田さんだ。今日、大阪からこちらに来られたそうだ。君は、倉田さんのお嬢さんを良く知ってるそうじゃないか。」

「はい。詩織さん、いえ、あの、倉田さんのお嬢さんの事は存じております。妹も仲良くさせていただいています。」

「はじめまして、倉田でございます。」

膝に行儀よく揃えた白い手に、きらめく大きな宝石が光っている。



「は、はじめまして。山田と申します。」良太は深々と頭を下げた。何故ここに、詩織の母親がいるのか。

「お忙しいのに、急にすみませんね。うちの娘が、えらいお世話になってるみたいで。もっと早うにお会いしてお礼せなあかんおもてたんですけど。」

「いえ、そんな……。」

社長に促されて、良太は詩織の母親の向かいの席に座った。

「大阪で仲良うさせてもろてる建設会社の社長さんに、こちらの社長さんを紹介して頂いて……無理言うて今日、山田さんに会わせて頂いたんですよ。娘も木下もうちに何も教えてくれへんもんやから。」

「はぁ……。」

やはり詩織ちゃんも、ご両親に俺の事を秘密にしているのだろうか。そして木下さんも？

「山田君、せっかくだから倉田さんにこの街を案内して差し上げなさい。」

しばらく3人で当たり障りのない談笑を繰り返した後、社長はおもむろに良太にそう言った。

「はい？」

「さつきも社長さんとお話してたんですけど、わたし、この街は初めてで……。娘はまだ学校ですので、それまで山田さんにお付き合い頂けたら、助かります。」

「下に車を準備させてあるから。くれぐれも粗相の無いように。わかったね、山田君。今日はもう仕事はいいから。」

「は、はい。かしこまりました。」

詩織の母親を会社の外で待たせてある車に案内する間、良太はなんとか落ち着こうと自分に言い聞かせていた。詩織の母は終始穏やかな表情で、この突然の訪問に裏があるようには見えないが、どうも気になる。

良く考えたら、詩織から両親の話聞いたことはめったに無かった。良太に訊かれたら、ポツリポツリと言葉少なに答えるくらいで、自分からは一切話題にはしなかった。良太も詩織の気持ちを思いやって、なるべく口に出さないようにしていたのだ。

「あの、どこか行ってみたいところはございますか？」

運転席から、後ろの座席に座る詩織の母親に問いかけた。

曲がりなりにも自分の彼女の母親なのだ。もう少し親しい感じでも良いのかも知れないが、相手からもそんな雰囲気は全く伝わってこない。良太はあくまでも丁寧な言葉で話をしていった。

「特には無いんです。ただ……。ゆっくりお話できるところにして頂けますか？」

さっきまでとは打って変わった冷たい口調に、良太の背筋が凍りつく。

「わかりました。」

この時点で良太は、はっきりと理解した。

詩織の母親がのんきな観光でこの街を訪れたわけではないことを。

「単刀直入に申し上げます。時間もつたいないし。」

「はい。」

ここは、駅前のホテルのティーラウンジ。

1月の終わりにしては、ポカポカと暖かい。詩織の母は銀色の毛皮のシヨールを隣の席にそつと置いた。

平日の午前中で、客もまばらだ。

夏休みに、ここで詩織のウエディングドレスの写真を撮ったことを思い出す。

そしてあの写真は良太の宝物になっている。

上品なしぐさで、運ばれてきた紅茶を一口飲むと、詩織の母親が口を開いた。

「詩織とは別れてもらいます。」

「……………」

「夏休みに戻ってきて、何言いだす思ったら、彼氏が出来たやなんてすぐに主人に相談して、別れるように言っただんやけど。…………そのあと木下からも、特に問題無いて報告受けてたし、こっちはすっかり安心してたんです。」

「そう、なんですか。」

彼女はちゃんと俺の事両親に報告して…………、そして別れるように言われてたんだ。

俺、知らなかった。

彼女は何も言わなかったから。

2人の事をご両親に反対されてたなんて。

そんなこと一言も。

何となく予想してたことではあるが、彼女の母親から直接言われると、やはりショックだ。

「お正月に戻ってこないから、どうもおかしいと思って、人を雇って調べたんです。・・・そしたらまあ、別れるどころか、うちの子、お宅に泊まったりしてるそうじゃないですかっ。」

詩織の母親が咎めるような口調になる。

「そ、それは・・・。」

確かに。

言い訳できない。

冷や汗がにじんできてる。

一方的に責められるのはいたしかたない。

甘んじてお叱りを受けようと、良太は覚悟した。

「詩織は、まだ高校生なんですよ？あなた、何考えてるんですかっ。」

「も、申し訳ありませんっ！」

良太は椅子に座ったまま、テーブルに押し付ける勢いで頭を下げた。

「ま、あの子の事やから、勝手に押しかけたんかも知れへんけど。」

「いえつ。違います。詩織さんは、悪くないんです。俺が、俺がどうしても一緒に居たくて、それで。」

「もう済んだことをここで責めても仕方ありませんし。ただ、今後一切うちの子とは関わらんと欲しい。わかりましたね？」

「……それは、それだけは。俺は、詩織さんと真剣にお付き合ひさせていただいてます。本当はもっと早くに、そちらにご挨拶に伺うべきでした。こんな形でお会いすることになって、申し訳ありません。ですが、お願いです。彼女との交際を認めて欲しいんです。」

「そんなもん認めるくらいなら、わざわざうちがこんなところまで来るわけ無いでしょうが。あなた、それくらいわかりなさいよ。」

「お願いです。俺、絶対に彼女の事大切にします。何より大事に思っています。だから。」

「うちの子の事を大切に思ってくれてはるんやったら、尚更お別れしてもらわなあきませんわ。ほら、これ見てみなさい。」

詩織の母は、カバンから、経済誌を取り出し、付箋を付けたページを広げて良太の前に差し出した。

「こ、これは……。」

「うちの会社の新薬発表パーティーの時の記事ですわ。この写真、詩織の隣が、婚約者の桐谷君。」

「じ、ん、や、く……?」

良太の頭の中が真っ白になる。

写真の中の詩織は、淡い色の着物を着て、微笑んでいる。

その隣には、今時のお洒落なスーツを着こなした、ハンサムな若い男が立っている。

「何回見ても、お似合いやわあ。山田さんも、そう思いはるでしょう?今回業務提携させて頂いた会社の息子さんなんですよ。」

「でも、婚約してるなんて、俺……。」

「ちゃんと話を聞きなさい。この通り、詩織には決まった人が居るんです。嘘やない。それに桐谷君は4月から、うちの会社で頑張る言つて張り切ってくれてはるし……。うちの主人なんか、もうすっかり自慢の息子や言つて、あちこちに連れて歩いてるんですよ。ずーっと息子が欲しかったもんやから、喜んで喜んで……。」

「でもそんな話、俺全然聞いてなくて。」

詩織の母親の一言一言が、ぐさぐさと良太の胸を串刺しにしていく。

見えない血がとめどなく流れて、身体から熱を奪っていく。

「一旦は詩織のわがままであかんくなっただんですよ、そやけど先方さんがどうしても言つてくれはって……。身体もあんなやし、本人もこんな良縁二度と望まれへんてわかつたん違うかしら。あの子ども最後には、それでええ言つて、ちゃんと納得してくれて。やっ

ぱり親元離れて苦労させたんが良かったんかしらねえ。」

顔面蒼白の良太とは反対に、詩織の母はのんびりした手つきでカップを持ち上げ紅茶を飲んでいる。

「納得・・・詩織さんが。」

「ご存知やるけど、詩織には今までお金のやりくりなんてさせた事も無いし、もともとあの子は普通のサラリーマンの奥さんできるようには育てられてないんです。今は2人でままごととして楽しいかわかりませんが、一生の事となると、どうやる・・・あの子もそれをわかってるから、桐谷君との結婚を受け入れたん違うやろか。それなら自分が育ってきた生活レベルを下げる必要はないですし・・・残酷な話のようやけど、女ってこんなもんなんです。実際結婚となると、少しでも安定したほうを選んでしまう。それは仕方のないことなんです。そやから山田さん、詩織を責めんといってくださいね。」

「・・・・・・・・・・。」

良太は何も言えなかった。

ただ頭に浮かんだのは、詩織がかたくなに卒業後の進路について語るうとしなかったこと。

その理由が今、やっとはつきりわかった。

卒業までは俺と遊んで、そのあとはこのカッコいい婚約者と幸せな



結婚をするつもりだったんだ。

そのあとは、またものようなセレブの生活が続けるつもりだったんだ。

なんだ、そうだったんだ。やっぱりそうだったんだ。

ストーンと合点がいつて、ある意味すっきりする。

あんなに可愛くて、性格が良くて、お嬢様の彼女が自分のモノになるなんて、それこそあり得ない。

いつもどこか違和感と言うか、現実的じゃないと思っている自分がいた。

詩織を抱きしめてる最中でも、あまりにも幸せすぎて、逆に落ち着かなかった。

こうなることは、そもそも最初から心のどこかで覚悟してたのかもしれない。

だって俺はいつまでたっても俺で。

それ以上でもそれ以下でもなくて。

初めから無理な設定だったのだ。

こんな組み合わせ、ありえなかったんだ。

腹の底から乾いた笑いがこみあげてきた。

滑稽で。

まぬけな俺。

あまりにも、おかしくて。

笑えてくる。

「わかって頂けたようやね。……ほな、そろそろ帰らせて置きますわ。駅まで送って頂けますか？」

詩織の母が、立ちあがり、優雅な仕草でシヨールを肩に巻いた。

「わかりました。」

結局、注文したコーヒーには一度も手をつけないままで、良太は席を立った。

お茶代を清算して、詩織の母を最寄りの新幹線の停車駅まで送って行った。

車内ではお互い無言で、あれほど饒舌だった詩織の母も静かに車窓

の風景を眺めていた。

「お気をつけて。」

駅のホームで、良太は詩織の母を見送った。

「山田さんも、お元気で。何回も言うようやけど、あの子のことほんまに想ってくれてはるんやったら、きっぱり忘れてやってくださいね。」

詩織の母は最後に満足げな笑顔を見せて、グリーン車に乗り込んだ。

良太は新幹線が出発するまでホームで見送っていたが、詩織の母はそんな良太の方をちらりとも見ようとはしなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8857u/>

---

臆病者も恋をする

2012年1月14日13時47分発行